

伊丹市埋蔵文化財調査報告書

震災復旧・復興事業に伴う発掘調査

2002年3月

伊丹市教育委員会

序

平成7年1月に発生しました阪神・淡路大震災から7年、被災地域の復興も進み、新たなまちづくりが各地で展開されています。本市におきましても駅舎が倒壊した阪急伊丹駅が一昨年に建替えられ、伊丹の玄関としてオープンいたしました。また、文化財につきましても、全面解体修理を余儀なくされた重要文化財旧岡田家住宅が4年の歳月を経て平成11年に修理を完了し、隣接地に移築しました県指定文化財旧石橋家住宅と併せ、市立伊丹郷町館として昨年6月にオープンいたしております。現在では、清酒発祥の地を全国にアピールするとともに、伊丹酒の歴史を伝える施設として好評を得ており、多数の来館をいただいております。

伊丹は古くからの酒どころとして知られ、江戸時代には將軍家の御膳酒になるなど、全国に名声を博しておりました。そうした銘醸地の面影も、震災などにより姿を変貌しつつありますが、今でも町の随所に残っております。

本書は、そうした江戸時代以来の酒造りの中心地であり、旧伊丹郷町地域での震災復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。旧伊丹郷町は、鎌倉時代に始まる有岡城(伊丹城)の城下町から発展した在郷町で、有岡城の本丸などは昭和54年に国史跡に指定され、それ以外の地域も有岡城跡・伊丹郷町遺跡として文化財保護の対象となっております。震災によりましてこの地の多くの建物が建替えられることになりましたが、教育委員会では、兵庫県の復興支援を受けまして発掘調査を実施してまいりました。

本書所収の調査成果の多くは、全国の都道府県や政令指定都市から派遣されました専門職員の支援により発掘調査が行われたものであります。本書が震災復興の証として、或いは学術資料として広く活用されること期待いたしますとともに、発掘調査から本書が刊行されるまでの間、ご協力いただきました多くの方々に感謝を申し上げまして、巻頭の挨拶といたします。

平成14年3月

伊丹市教育委員会
教育長 脇本 芳夫

例 言

- 1 本書は、平成7年1月17日に発生した「阪神・淡路大震災」の震災復旧・復興事業に伴う緊急調査として実施した埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2 本書に収めた調査成果及び調査期間は下記のとおりである。

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第152次調査	平成7年7月3日～9月8日
〳 第169次調査	平成8年8月29日～10月23日
〳 第171次調査	平成8年5月7日～7月12日
〳 第173次調査	平成8年3月27日～3月30日
〳 第176次調査	平成8年5月13日～5月31日
〳 第181次調査	平成8年7月25日～8月27日
〳 第184次調査	平成9年1月20日～3月19日
〳 第186次調査	平成8年12月3日～12月20日
〳 第189次調査	平成9年3月13日～3月31日
〳 第194次調査	平成9年6月18日～7月25日
〳 第195次調査	平成9年6月24日～6月30日
〳 第197次調査	平成9年8月29日～11月5日
〳 第206次調査	平成10年4月30日～6月18日
〳 第207次調査	平成10年4月30日～5月30日

- 3 発掘調査及び整理作業は伊丹市教育委員会生涯学習部で行った。組織は次のとおりである。

発掘調査（平成7～10年度）		整理作業（平成13年度）	
生涯学習部長	高木 正捷	生涯学習部長	富田五十一
次長	宮崎 泰樹（7年度）	次長	加藤 哲三
主幹	滝内 和之	副主幹	福井 収
主査	片岡 隆	主査	小長谷 正治
主査	小長谷正治		佐藤 友治
	大野 智子（7年度）		中畔明日香
	中田 正仁（8～10年度）	嘱託	細川 佳子
	上村（中畔）明日香（10年度）	嘱託	瀬川 眞美子
嘱託	細川 佳子		

調査補助員

赤松由美子、石井美子、上谷浩司、岡野理奈、岡村富美江、吉川敬子、木村雅之
瀬川眞美子、高須賀由美、竹内恵美、竹内利枝、中村明日香、難波紀子、林優子
船越美香、村下佳子、山田敬文、渡部友紀

- 4 第152次・第169次・第171次・第176次・第181次・第184次・第194次・第197次調査については「阪神・淡路大震災に関わる埋蔵文化財発掘調査の支援に関する協定」に基づき、兵庫県教育委員会より埋蔵文化財職員の派遣を得て実施した。県派遣職員は、他府県の教育委員会からの支援職員を主体に構成されている。

- ・第152次調査 横田 明 (兵庫県教育委員会・大阪府派遣)
廣岡 孝信 (兵庫県教育委員会・奈良県派遣)
- ・第169次調査 山田 晃弘 (兵庫県教育委員会・宮城県派遣)
目次 謙一 (兵庫県教育委員会・島根県派遣)
神野 信 (兵庫県教育委員会・千葉県派遣)
- ・第171次調査 兼康 保明 (兵庫県教育委員会・滋賀県派遣)
工藤 忍 (兵庫県教育委員会・青森県派遣)
- ・第176次調査 伊藤 敏行 (兵庫県教育委員会・東京都派遣)
河合 修 (兵庫県教育委員会・静岡県派遣)
- ・第181次調査 今村 道雄 (兵庫県教育委員会・大阪府派遣)
川口 洋平 (兵庫県教育委員会・長崎県派遣)
- ・第184次調査 藤原 直人 (兵庫県教育委員会・長野県派遣)
岩田 明弘 (兵庫県教育委員会・埼玉県派遣)
- ・第194次調査 深谷 憲二 (兵庫県教育委員会・茨城県派遣)
渋谷 格 (兵庫県教育委員会・佐賀県派遣)
- ・第197次調査 岡本 敏行 (兵庫県教育委員会・大阪府派遣)
奈良 康正 (兵庫県教育委員会・京都府派遣)

- 5 整理作業は、発掘調査担当者のもと、伊丹市埋蔵文化財臨時職員が遺物の実測・トレースなどを行なった。ただし、遺物実測は瀬川眞美子、三輪隆子、吉川敬子、岩田朱美、中村明日香、遺物・遺構のトレースは丸岡タカミ、三輪隆子、瀬川眞美子、高須賀由美、岩田朱美、出土遺物観察表は岡野理奈、吉川敬子、写真図版の作成は小長谷正治、瀬川眞美子、吉川敬子が行った。
- 6 報告書の執筆は各々の発掘担当者が分担して行った。執筆者の氏名は文末に記した。
- 7 本書の編集作業は、小長谷正治が行った。
- 8 出土遺物及び発掘調査資料は伊丹市教育委員会にて保管している。

凡 例

- 1 遺構実測図は、国土座標第V系を使用した。水準高は第152次・第181次・第184次・第186次・第194次・第197次・第206次・第207次調査は東京湾平均海水値（T.P.）を用い、第169次・第171次・第176次・第189次調査は大阪湾平均海水値（O.P.）を用いている。
- 2 現地の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修の「新版標準土色帖」準拠した。
- 3 遺物の挿図番号は、写真図版番号と一致させている。
- 4 土器実測図において中心線を一点破線で示しているものは、反転復元していることを表す。

遺物観察表参考文献

- 稲原昭嘉 「明石播鉢の編年について」『近世の実年代資料』 関西近世考古学研究会 2000年
- 江戸遺跡研究会編 『図説 江戸考古学研究事典』 柏書房 2001年
- 大橋康二 『肥前陶磁』 考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社 1993年
- 大橋康二他 『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会 2000年
- 大橋康二他 『国内出土の肥前陶磁—東日本の流通をさぐる—』 九州近世陶磁学会 2001年
- 大平茂 「近世丹波焼播鉢の型式分類とその編年」『下相野窯址』 兵庫県教育委員会 1992年
- 岡崎正雄 「丹波焼について」『中尾城跡』 兵庫県教育委員会 1989年
- 小野正敏 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No2 貿易陶磁研究会 1982年
- 尾崎葉子・村上伸之・野上建紀 『赤絵町』 有田町教育委員会 1990年
- 川口宏海 「江戸時代の土師質土器の製作技法」『大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院 研究集録第15号』 大手前女子学園 1995年
- 川口宏海 「胞衣壺考」『大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院 研究集録第9号』 大手前女子学園 1989年
- 川口宏海 「有岡城跡・伊丹郷町遺跡出土の近世丹波焼製品」『植崎彰一先生古希記念論文集』 1998年
関西近世考古学研究会・考古フォーラムとくしま 『99徳島城下町研究会発表要旨 京焼—消費地出土の様相—』 1999年
- 関西陶磁史研究会 『近世信楽焼をめぐる』 研究集会資料集 2001年
- 古代の土器研究会編 古代の土器1『都城の土器集成I』 古代の土器研究会 1992年
- 佐藤攻・石崎俊哉・小島正裕他 『汐留遺跡I』 東京都埋蔵文化財センター 1997年
- 田口昭二 『美濃焼』 考古学ライブラリー17 ニューサイエンス社 1983年
- 田中賢人 『三田焼の研究 三田市志手原・小西家寄贈土型資料調査報告書』ふるさと三田第18集 三田市教育委員会 1996年
- 中島由美 『古伊万里 蕎麦猪口・酒器1000』 講談社 2001年
- 永峯光一・古泉弘・今野春樹他 『千駄ヶ谷五丁目遺跡 2次調査報告書』 千駄ヶ谷五丁目遺跡調査会 1998年
- 中村浩他 『陶邑Ⅲ』 大阪府文化財調査報告書第30輯 大阪府教育委員会 1978年
- 難波洋三 「徳川氏大坂城期の炮烙」『難波宮址の研究 第九』 大阪市文化財協会 1992年
- 日本貨幣商協同組合 『日本貨幣カタログ』1996年版
- 乗岡実 「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』 中近世備前焼研究会 2000年
- 乗岡実 「備前焼大甕編年レクチャー資料」『関西近世考古学研究Ⅸ』 関西近世考古学研究会 2001年
- 藤井直正・藤本史子他 『大阪城三の丸跡の調査Ⅲ』 大手前女子学園 1988年
- 藤澤良祐他 『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅴ』 瀬戸市歴史民俗資料館 1986年
- 藤澤良祐他 『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅵ』 瀬戸市歴史民俗資料館 1987年
- 小林克他 『真砂遺跡』 真砂遺跡調査会 1987年
- 中世土器研究会編 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社 1995年
- 森田克行 『撰津 高槻城』 本丸跡発掘調査報告書 高槻市教育委員会 1984年
- 山崎敏昭・石神由貴他 『三田焼の研究 三輪明神窯跡出土土型①』 ふるさと三田第21集 三田市教育委員会 1999年

目次

序文
例言
凡例

第1章 調査の概要	1
第1節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡の歴史	1
第2節 震災復旧・復興事業に伴う発掘調査の概要	2
第3節 調査地点の概要	4
第2章 発掘調査の成果	5
第1節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第152次調査	5
第2節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第169次調査	22
第3節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第171次調査	34
第4節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第173次調査	46
第5節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第176次調査	52
第6節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第181次調査	62
第7節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第184次調査	82
第8節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第186次調査	97
第9節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第189次調査	103
第10節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第194次調査	108
第11節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第195次調査	117
第12節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第197次調査	122
第13節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第206次調査	135
第14節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡第207次調査	148

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2	第12図 第169次調査調査区設定図	22
第2図 調査箇所位置図	3	第13図 〃 全体図	23
第3図 第152次調査調査区位置図	5	第14図 〃 出土遺物実測図(1)	28
第4図 〃 調査区設定図	5	第15図 〃 出土遺物実測図(2)	29
第5図 〃 上層全体図	7	第16図 〃 出土遺物実測図(3)	30
第6図 〃 下層全体図	9	第17図 第171次調査調査区位置図	34
第7図 〃 土層断面図	13	第18図 〃 調査区設定図	34
第8図 〃 出土遺物実測図(1)	14	第19図 〃 全体図	35
第9図 〃 出土遺物実測図(2)	15	第20図 〃 土層断面図	37
第10図 〃 出土遺物実測図(3)	16	第21図 〃 出土遺物実測図(1)	40
第11図 第169次調査調査区位置図	22	第22図 〃 出土遺物実測図(2)	41

第23図	第171次調査出土遺物実測図 (3) … 42	第61図	第189次調査調査区位置図 ……103
第24図	第173次調査調査区位置図 …… 46	第62図	ゝ 調査区設定図 ……103
第25図	ゝ 調査区設定 …… 46	第63図	ゝ 全体図 ……104
第26図	ゝ 全体図 …… 47	第64図	ゝ 土層断面図 ……104
第27図	ゝ 土層断面図 …… 47	第65図	ゝ 出土遺物実測図 ……106
第28図	ゝ 出土遺物実測図 …… 50	第66図	第194次調査調査区位置図 ……108
第29図	第176次調査調査区位置図 …… 52	第67図	ゝ 調査区設定図 ……108
第30図	ゝ 調査区設定図 …… 52	第68図	ゝ 全体図 ……109
第31図	ゝ 全体図 …… 53	第69図	ゝ 土層断面図 ……109
第32図	ゝ 土層断面図 …… 54	第70図	ゝ 出土遺物実測図 (1) …113
第33図	ゝ 出土遺物実測図 (1) … 55	第71図	ゝ 出土遺物実測図 (2) …114
第34図	ゝ 出土遺物実測図 (2) … 56	第72図	第195次調査調査区位置図……117
第35図	ゝ 出土遺物実測図 (3) … 57	第73図	ゝ 調査区設定図 ……117
第36図	第181次調査調査区位置図 …… 62	第74図	ゝ 全体図 ……118
第37図	ゝ 調査区設定図 …… 62	第75図	ゝ 土層断面図 ……118
第38図	ゝ 全体図 …… 63	第76図	ゝ 出土遺物実測図 ……121
第39図	ゝ 土層断面図 …… 65	第77図	第197次調査調査区位置図……122
第40図	ゝ 出土遺物実測図 (1) … 68	第78図	ゝ 調査区設定図 ……122
第41図	ゝ 出土遺物実測図 (2) … 69	第79図	ゝ 全体図 ……123
第42図	ゝ 出土遺物実測図 (3) … 70	第80図	ゝ 土層断面図 ……125
第43図	ゝ 出土遺物実測図 (4) … 71	第81図	ゝ 出土遺物実測図 (1) …128
第44図	ゝ 出土遺物実測図 (5) … 72	第82図	ゝ 出土遺物実測図 (2) …129
第45図	ゝ 出土遺物実測図 (6) … 73	第83図	ゝ 出土遺物実測図 (3) …130
第46図	第184次調査調査区位置図…… 82	第84図	第206次調査調査区位置図……135
第47図	ゝ 調査区設定図 …… 82	第85図	ゝ 調査区設定図 ……135
第48図	ゝ 全体図 …… 83	第86図	ゝ 第1遺構面全体図 ……136
第49図	ゝ 土層断面図 …… 85	第87図	ゝ 第2遺構面全体図 ……137
第50図	ゝ 奈良時代の遺構平面図 … 85	第88図	ゝ 土層断面図 ……138
第51図	ゝ 出土遺物実測図 (1) … 88	第89図	ゝ 出土遺物実測図 (1) …142
第52図	ゝ 出土遺物実測図 (2) … 89	第90図	ゝ 出土遺物実測図 (2) …143
第53図	ゝ 出土遺物実測図 (3) … 90	第91図	ゝ 出土遺物実測図 (3) …144
第54図	ゝ 出土遺物実測図 (4) … 91	第92図	第207次調査調査区位置図……148
第55図	第186次調査調査区位置図 …… 97	第93図	ゝ 調査区設定図 ……148
第56図	ゝ 調査区設定図 …… 97	第94図	ゝ 全体図 ……149
第57図	ゝ 全体図 …… 98	第95図	ゝ 土層断面図 ……149
第58図	ゝ 土層断面図 …… 98	第96図	ゝ 出土遺物実測図 (1) …151
第59図	ゝ 出土遺物実測図 (1) …100	第97図	ゝ 出土遺物実測図 (2) …152
第60図	ゝ 出土遺物実測図 (2) …101		

図 版 目 次

図版 1 - 1	第152次調査第 1 遺構面全景	図版20 - 3	第176次調査SK 3 全景
図版 1 - 2	〃 第 2 遺構面全景	図版20 - 4	〃 SK 4 遺物出土状況
図版 2 - 3	〃 SX127	図版20 - 5	〃 SK 4
図版 2 - 4	〃 SK53	図版20 - 6	〃 SE 1 ・ 2
図版 2 - 5	〃 SK73	図版20 - 7	〃 SK135
図版 2 - 6	〃 SK139	図版21	〃 出土遺物 (1)
図版 2 - 7	〃 SK164 ・ 165 ・ 166	図版22	〃 出土遺物 (2)
図版 3	〃 出土遺物 (1)	図版23	〃 出土遺物 (3)
図版 4	〃 出土遺物 (2)	図版24 - 1	第181次調査調査区全景
図版 5	〃 出土遺物 (3)	図版24 - 2	〃 SK 3 断面
図版 6	〃 出土遺物 (4)	図版24 - 3	〃 SK 6 遺物出土状況
図版 7 - 1	第169次調査調査区東側全景	図版24 - 4	〃 SK13
図版 7 - 2	〃 調査区西側全景	図版24 - 5	〃 SK18
図版 8 - 3	〃 竪穴状遺構 1	図版25 - 6	〃 堀全景
図版 8 - 4	〃 竪穴状遺構 3	図版25 - 7	〃 堀西壁断面
図版 9 - 5	〃 竈 2 ・ 3 ・ 4	図版25 - 8	〃 SK 4 全景
図版 9 - 6	〃 竪穴状遺構 2	図版25 - 9	〃 SK 5 全景
図版 9 - 7	〃 SK84	図版25 - 10	〃 SK10全景
図版 9 - 8	〃 P73	図版26	〃 出土遺物 (1)
図版 9 - 9	〃 P125	図版27	〃 出土遺物 (2)
図版10	〃 出土遺物 (1)	図版28	〃 出土遺物 (3)
図版11	〃 出土遺物 (2)	図版29	〃 出土遺物 (4)
図版12	〃 出土遺物 (3)	図版30	〃 出土遺物 (5)
図版13 - 1	第171次調査調査区全景	図版31	〃 出土遺物 (6)
図版13 - 2	〃 石組溝 ・ SK40 ・ 42 ・ 85	図版32 - 1	第184次調査調査区東側全景
図版14 - 3	〃 SK42	図版32 - 2	〃 調査区西側全景
図版14 - 4	〃 石組溝	図版33 - 3	〃 防空壕
図版14 - 5	〃 SK 7	図版33 - 4	〃 SK41遺物出土状況
図版15	〃 出土遺物 (1)	図版33 - 5	〃 SK64遺物出土状況
図版16	〃 出土遺物 (2)	図版33 - 6	〃 SK115
図版17 - 1	第173次調査調査区全景	図版33 - 7	〃 SK160
図版17 - 2	〃 SE 1	図版34 - 8	〃 SK53桶底残存状況
図版17 - 3	〃 胞衣壺	図版34 - 9	〃 SK73遺物出土状況
図版17 - 4	〃 埋桶 1 ・ 2	図版34 - 10	〃 SK113桶底残存状況
図版17 - 5	〃 焼土土坑	図版34 - 11	〃 SE 1
図版18	〃 出土遺物	図版34 - 12	〃 P16遺物出土状況
図版19 - 1	第176次調査調査区南側全景	図版34 - 13	〃 P21遺物出土状況
図版19 - 2	〃 調査区北側全景	図版34 - 14	〃 P26

図版34-15	第184次調査竪穴住居跡	図版48-3	第197次調査礎石建物跡
図版35	ゝ 出土遺物(1)	図版48-4	ゝ SK2 桶底残存状況
図版36	ゝ 出土遺物(2)	図版48-5	ゝ SK3 断面
図版37	ゝ 出土遺物(3)	図版48-6	ゝ SK18断面
図版38	ゝ 出土遺物(4)	図版48-7	ゝ SK38遺物出土状況
図版39-1	第186次調査調査区全景	図版49-8	ゝ SK34 a・b (竈) 全景
図版39-2	ゝ SK2 半掘状況	図版49-9	ゝ SK34 a 断面
図版39-3	ゝ SK3 半掘状況	図版49-10	ゝ SK34 b 断面
図版40-4	ゝ SK5・6	図版49-11	ゝ SK51断面
図版40-5	ゝ SK8	図版49-12	ゝ SK57出土状況
図版40-6	ゝ 埋桶1	図版49-13	ゝ SK61遺物出土状況
図版40-7	ゝ 水琴窟1 出土状況	図版49-14	ゝ SK65根石検出状況
図版40-8	ゝ 水琴窟2 出土状況	図版49-15	ゝ SE31
図版41	ゝ 出土遺物	図版50	ゝ 出土遺物(1)
図版42-1	第189次調査調査区全景	図版51	ゝ 出土遺物(2)
図版42-2	ゝ SK5	図版52-1	第206次調査第1遺構面北側全景
図版42-3	ゝ SD1・SK8	図版52-2	ゝ 第1遺構面東側全景
図版42-4	ゝ P3・4	図版53-3	ゝ 第2遺構面北側全景
図版42-5	ゝ P13	図版53-4	ゝ 第2遺構面東側全景
図版43-1	第194次調査調査区西側全景	図版54-5	ゝ SK34・35
図版43-2	ゝ 調査区東側全景	図版54-6	ゝ SK40
図版44-3	ゝ SK1 断面	図版54-7	ゝ SK42
図版44-4	ゝ SK2 断面	図版54-8	ゝ SK46
図版44-5	ゝ SK3	図版54-9	ゝ SK49遺物検出状況
図版44-6	ゝ SK10・11断面	図版54-10	ゝ SE2
図版44-7	ゝ SK6 桶底残存状況	図版54-11	ゝ SK75
図版44-8	ゝ SK7 出土状況	図版54-12	ゝ SK79断面
図版44-9	ゝ SK9 遺物出土状況	図版55	ゝ 出土遺物(1)
図版44-10	ゝ SE1 断面	図版56	ゝ 出土遺物(2)
図版45	ゝ 出土遺物	図版57-1	第207次調査調査区北側全景
図版46-1	第195次調査調査区全景	図版57-2	ゝ 調査区南側全景
図版46-2	ゝ SK1 断面	図版58-3	ゝ 水琴窟2 検出状況
図版46-3	ゝ SK1・2・3	図版58-4	ゝ 水琴窟1 検出状況
図版46-4	ゝ SK10・11	図版58-5	ゝ SK17・23・32
図版46-5	ゝ SK11	図版58-6	ゝ SK1
図版47-1	第197次調査調査区北側全景	図版58-7	ゝ SK33
図版47-2	ゝ 調査区南側全景	図版59	ゝ 出土遺物

表 目 次

表 1	第152次調查遺物觀察表 (1)	17	表26	第184次調查主要遺構觀察表	87
表 2	第152次調查遺物觀察表 (2)	18	表27	第184次調查遺物觀察表 (1)	92
表 3	第152次調查遺物觀察表 (3)	19	表28	第184次調查遺物觀察表 (2)	93
表 4	第152次調查遺物觀察表 (4)	20	表29	第184次調查遺物觀察表 (3)	94
表 5	第152次調查遺物觀察表 (5)	21	表30	第184次調查遺物觀察表 (4)	95
表 6	第169次調查遺物觀察表 (1)	31	表31	第184次調查遺物觀察表 (5)	96
表 7	第169次調查遺物觀察表 (2)	32	表32	第186次調查遺物觀察表 (1)	99
表 8	第169次調查遺物觀察表 (3)	33	表33	第186次調查遺物觀察表 (2)	101
表 9	第171次調查遺物觀察表 (1)	43	表34	第186次調查遺物觀察表 (3)	102
表10	第171次調查遺物觀察表 (2)	44	表35	第189次調查遺物觀察表	107
表11	第171次調查遺物觀察表 (3)	45	表36	第194次調查遺物觀察表 (1)	115
表12	第173次調查遺物觀察表	51	表37	第194次調查遺物觀察表 (2)	116
表13	第176次調查遺物觀察表 (1)	58	表38	第195次調查遺物觀察表	121
表14	第176次調查遺物觀察表 (2)	59	表39	第197次調查遺物觀察表 (1)	131
表15	第176次調查遺物觀察表 (3)	60	表40	第197次調查遺物觀察表 (2)	132
表16	第176次調查遺物觀察表 (4)	61	表41	第197次調查遺物觀察表 (3)	133
表17	第181次調查主要遺構觀察表	67	表42	第206次調查遺物觀察表 (1)	145
表18	第181次調查遺物觀察表 (1)	74	表43	第206次調查遺物觀察表 (2)	146
表19	第181次調查遺物觀察表 (2)	75	表44	第206次調查遺物觀察表 (3)	147
表20	第181次調查遺物觀察表 (3)	76	表45	第207次調查遺物觀察表 (1)	153
表21	第181次調查遺物觀察表 (4)	77	表46	第207次調查遺物觀察表 (2)	154
表22	第181次調查遺物觀察表 (5)	78	表47	第207次調查遺物觀察表 (3)	155
表23	第181次調查遺物觀察表 (6)	79			
表24	第181次調查遺物觀察表 (7)	80			
表25	第181次調查遺物觀察表 (8)	81			

第1章 調査の概要

第1節 有岡城跡・伊丹郷町遺跡の歴史

有岡城は、元は伊丹城と呼ばれ摂津のこの地域を領した伊丹氏の居城である。伊丹氏は鎌倉幕府創設当初からの御家人で、初めは加藤姓を名乗っていた。「森本系図」(北河原森本文書所収森本文書、水戸彰考館所蔵)によれば、初代は加藤右馬允親俊で、二代後の親元から伊丹姓を名乗っている。親元の二代後の親盛は、六波羅探題の命で守護御代官と共に守護使として兵庫の関などを検分しているが、当時の守護使の職責からみて、親盛の地位は国中の御家人の中でも相当なものであったことがわかる。おそらく、親盛が活躍した鎌倉時代末には有岡城(当時は伊丹城と呼称)が築かれていたと推定される。南北朝以降、伊丹氏に目だった動きはないが、応仁の乱後は、細川家の内紛に巻き込まれ度々攻撃の的となり、有岡城をめぐる攻防戦が繰り返されている。永禄11年(1568)、信長が足利義昭を奉じて入京すると、伊丹氏はかねてよりの将軍家との関係から信長方につき、芥川城の和田惟政、池田城の池田勝正と共に「摂津の三守護」として摂津の支配を任されている。しかし、この体制は長く続かず、元亀4年(1573)、信長が義昭を追放し幕府が崩壊すると、摂津では池田勝正の家臣である荒木村重が頭角を現し、主君勝正を高野山に追放し和田惟政を敗死させるなど、三守護を次々と打ち破っていった。天正2年(1574)、最後に残った伊丹親興を攻め破って有岡城に入城する。

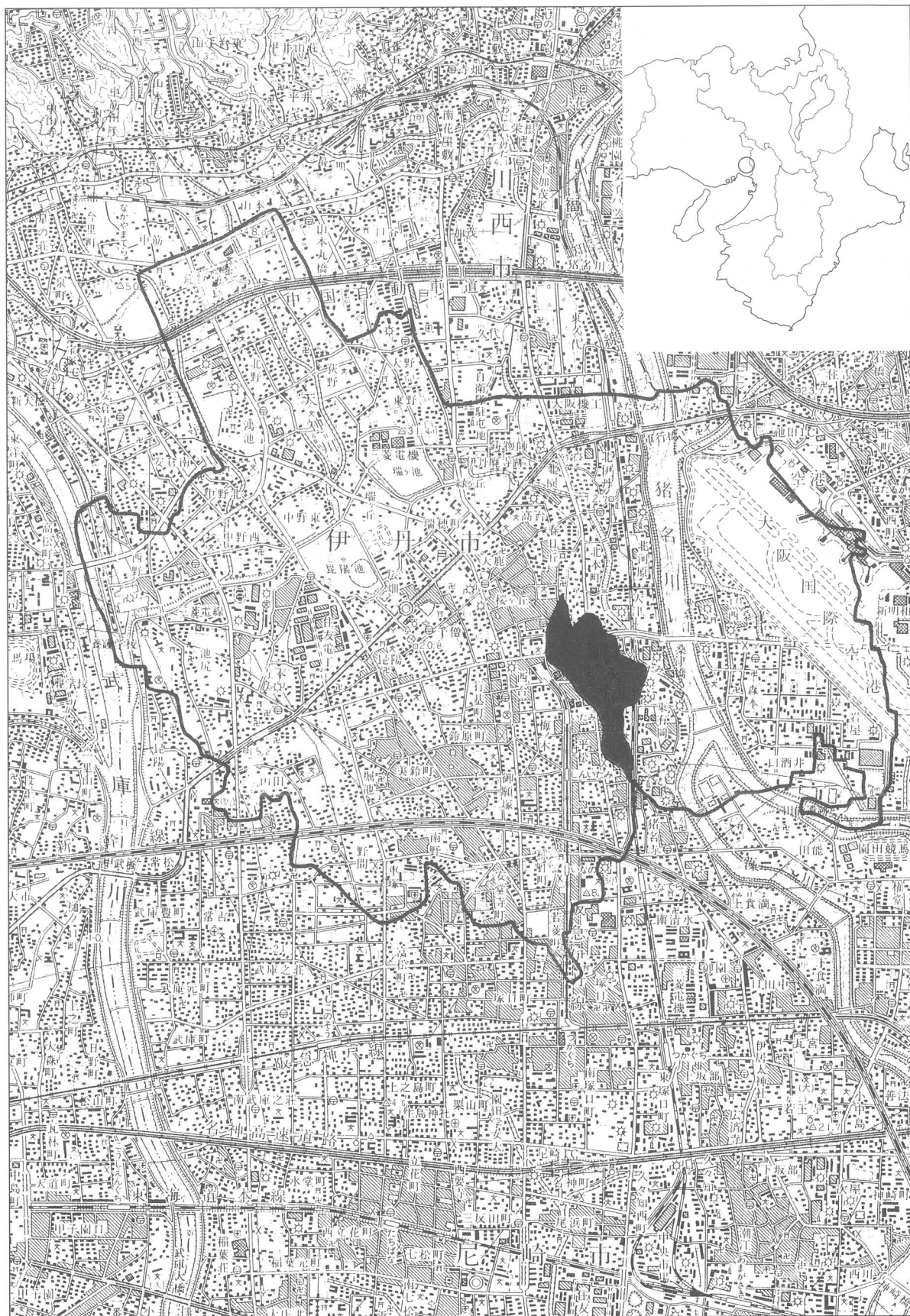
村重の入城後、有岡城は城内の改造を行い、「惣構え」という構造を取り入れ、町の外を土塁と堀で固めている。最近の調査で、伊丹氏時代の堀跡と荒木氏時代の堀跡では方向が全く異なることがわかってきている。村重は、信長に従い各地を転戦するが、天正6年になり突如信長に反旗を翻している。結果、信長の有岡城攻めが行われることとなり、1年余りの籠城の末落城する。落城後は、池田信輝の嫡子之助に与えられ城主となるが、本能寺の変後の天正11年(1583)、之助が美濃国岐阜城に転封となり廃城となった。

江戸時代の伊丹郷町は、伊丹村を中心に十五ヵ村が一続きになった在郷町で、はじめは幕府領、寛文元年(1661)には町の大半が近衛家領となり、酒造業を主産業に発展した。

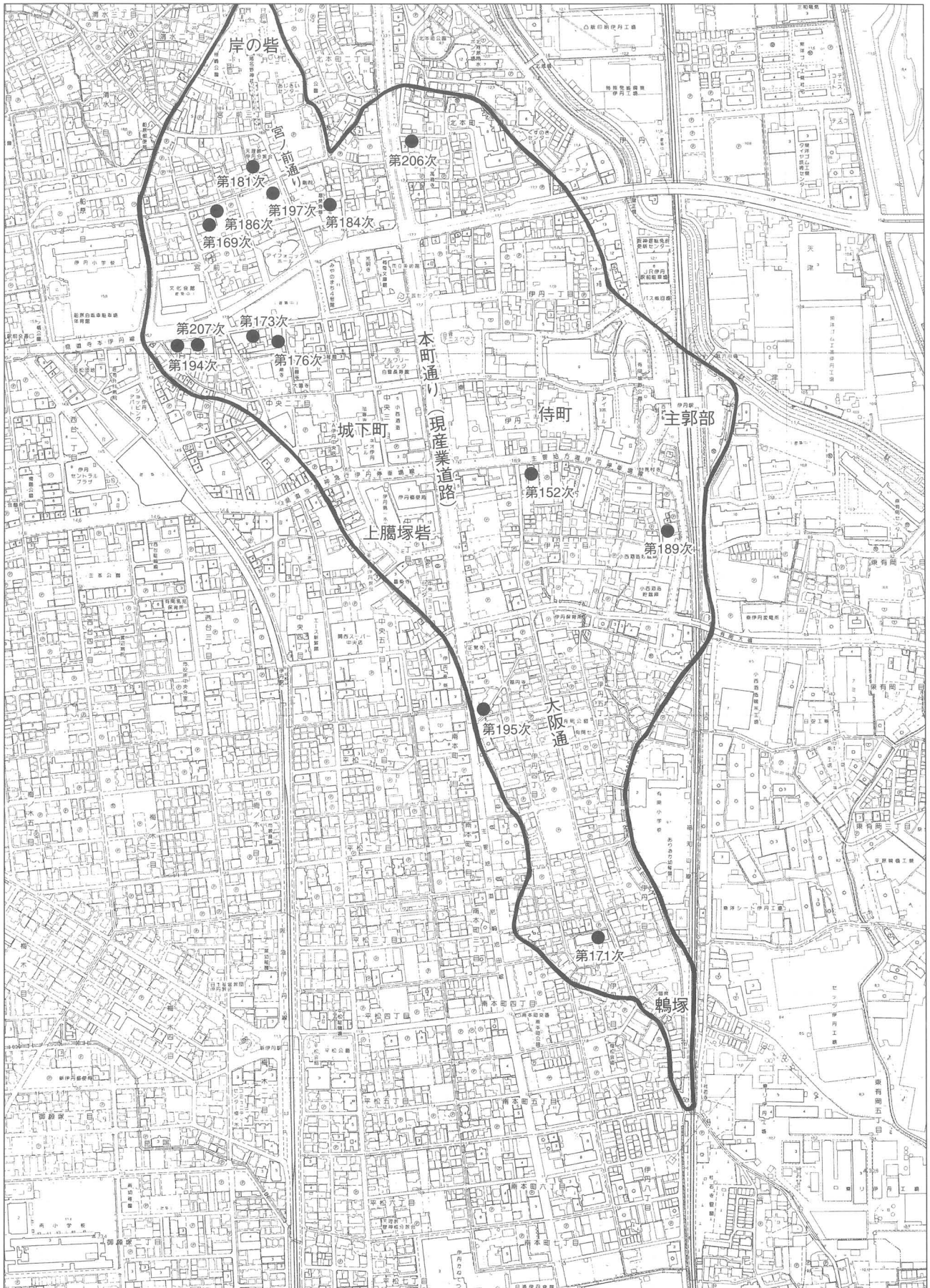
第2節 震災復旧・復興事業に伴う発掘調査の概要

本書は、平成7年に発生した阪神・淡路大震災により被災した住宅などの建物の復興、および被災住民に住宅を供給する共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査の成果を収載したものである。伊丹市での震災関連の発掘調査は、平成7年度から発生し、平成7年度は10件、8年度17件、9年度7件、10年度8件という推移をたどっている。当初から震災関連の発掘調査の急増が予想されたため、市町支援として、全国の都道府県および政令指定都市などから派遣された埋蔵文化財専門職員をさらに県内市町に派遣する方法が採られた。伊丹市では、本書掲載の有岡城跡・伊丹郷町遺跡第152次調査を最初として平成7年度から9年度までの3ヵ年で、計23箇所の調査において、支援職員の派遣を得て、現地での発掘調査に従事していただいた。

本書には、その内、平成7年度以降の有岡城跡・伊丹郷町遺跡で実施した発掘調査の成果を収載している。有岡城跡・伊丹郷町遺跡は、市内の中心市街地であり、また江戸時代以来の酒蔵などの古建築が軒を並べる場所でもある。震災では、こうした古い建物に大きな被害が生じ、結果、建替えや共同住宅の新築が活発に実施された。調査の原因としては、公衆浴場の建替え、店舗付き住宅などがあ



第1図 遺跡の位置図 (1/50,000「大阪北西部」)



第2図 調査箇所位置図 (1/7,500)

るが、共同住宅建設が最も多い。

整理作業については、発掘調査と平行して出土遺物の水洗い・注記などを行ったが、遺物の復元・実測などについては、調査終了後に始めた。しかし、震災関連の発掘調査を優先するため、整理作業は進まず、他府県からの職員の派遣期間中には整理作業が完了しなかった。そのため整理作業に調査担当者の参加はほとんど得られず、伊丹市教育委員会が中心となって進めることになった。本書の原稿については、派遣職員の実績報告書の原稿をもとにしたが、不足する分については担当者の了解を得て、市教委にて若干の加筆を行った。

第3節 調査地点の概要

本書は、有岡城跡・伊丹郷町遺跡の調査成果のみを収載した。本遺跡の発掘調査は、震災関連の発掘調査の中で最も件数が多く、報告書刊行に当たって、なるべく一つの遺跡でまとめたほうが良いとの判断に基づいたものである。本書には14箇所の調査成果をまとめている。本項では、それぞれの調査の位置関係及びその成果について整理しておきたい。

先述したように、本遺跡は、中世の有岡城の段階と廃城後の伊丹郷町の段階に大きく分けることが出来る。また、有岡城の段階では、主郭部、侍町、城下町（町家）に分けることが出来る。そうした分類に従って、各調査を概観しておきたい。

侍町での発掘調査は、第152次調査と第189次調査である。152次調査地点は、当時の大手道に推定される東西の道に面した場所で、周辺部のこれまでの発掘調査においても、有岡城段階の堀跡や建物跡などが検出されている。調査の結果、明確な建物跡は検出できていないが、16世紀代の備前焼・丹波焼などの国内産の陶磁器に混じって、中国製の陶磁器が出土している。また、屋敷跡に関連すると推定される池跡(庭園跡)の発見は注目される。第189次調査は、主郭部の南側に当たり、当時の侍町に相当する地域である。調査区が狭小であるため遺構に目立ったものがないが、遺物では16世紀代の土師皿などの出土があった。

調査件数で最も多かったのが、旧城下町の地域での発掘調査であるが、有岡城惣構えの中で、主郭部、侍町、砦を除いた範囲が必ずしも城下町に該当しないことが最近の発掘調査で明らかになってきている。つまり、城下町(町家)の範囲はかなり限定されることである。廃城後の江戸時代前期の伊丹郷町絵図を見ても、旧城下町の地域にはかなり空地が目立ち、当時から畑地などの農地が惣構えの中に取り込まれていることが推測される。また、現在までの発掘調査の結果においても、有岡城段階の遺構や遺物が検出されない場所が相当範囲に広がっていることがわかってきている。今回報告するのは城下町地域の調査成果を見てもその傾向が顕著である。有岡城段階の遺構や遺物を検出した場所は、時期は不明確ながら有岡城関係の堀跡を検出した第181次調査のみであり、丹波焼播鉢が出土した第197次調査SK38も、天正7年の落城後の可能性があり、また、鎌倉時代前期の瓦器碗などを出土した第206次調査SK75・SX3などは、有岡城築城以前と考えられる。

その他の城下町地域での発掘調査では、江戸前期から始まる場所、江戸中期から始まる場所に分けることが出来る。江戸前期から始まる所は、171次、176次、184次、197次、206次で、江戸中期以降に始まる所は、169次、173次、186次、194次、195次、207次である。また、侍町に属する152次と189次については、江戸前期の遺構・遺物を欠いており、江戸時代は中期以降に建物が建てられるようになったことがわかった。この結果から、江戸時代の早い段階では、伊丹郷町を南北に通る本町通り(現産業道路)とそれに続く大阪道沿い、猪名野神社門前の宮の前通りに町が開け、それより西側や旧侍町については遅れて江戸中期以降に町化されていったことが明らかとなった。

第2章 発掘調査の成果

第1節 第152次調査

所在地 伊丹市伊丹3丁目533他

調査面積 263㎡

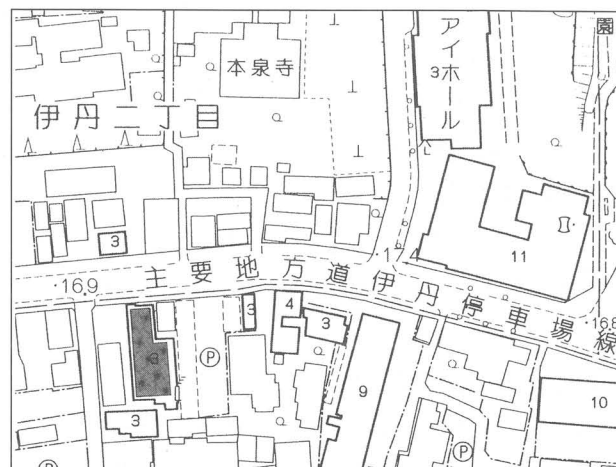
調査期間 平成7年7月3日～9月8日

担当者 横田明・廣岡孝信

1. 遺跡の概要

有岡城跡・伊丹郷町遺跡は、鎌倉時代以降に伊丹氏によって築かれ、荒木村重によって改築された伊丹城（有岡城）と、廃城後、江戸時代に酒造業で栄えた伊丹郷町との複合遺跡である。両遺跡はほぼ同範囲である。遺跡の規模は南北1.7km、東西800mである。調査地は有岡城の侍町内に位置することが、現存する諸絵図や周辺の既往調査成果から明らかにされていた。調査区の前面の道路は、有岡城当時から続く道の一つ、城内に至る大手道と考えられるものである。

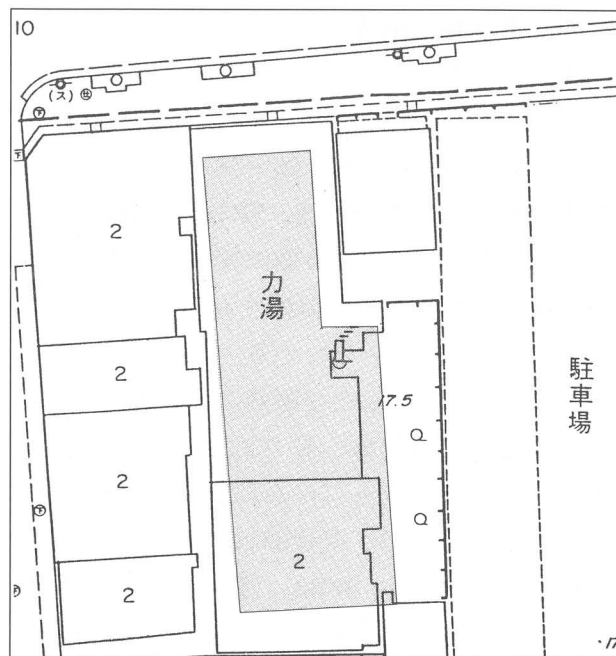
（横田・廣岡）



第3図 第152次調査調査区位置図 (1/2,500)

2. 調査の概要

阪神・淡路大震災の結果、被災した公衆浴場の建設が計画されたため、これに先立って全面調査を実施した。調査の結果、下層に有岡城時代、上層に江戸時代中頃以降の2面にわたって遺構を確認した。下層で検出したものには、溝4条と備前焼大甕の据え付け土坑4基がある。溝は南北・東西に対して約20度傾いて各2条が平行する。確認はできなかったものの、各2条は調査区東辺近くで90度に屈曲する本来2条の溝である可能性が高い。うち2条は西側に広がる池状の落ち込みにつづく。4基の大甕は、これらに囲まれた位置で南北溝に並列する状態で検出した。上層からは、調査地での江戸時代後期の酒造りを裏付ける男柱の据え付け土坑を2基確認した。いずれも長辺3m×短辺1.2m前後の長方形を呈し、中央部をさらに一段深くしたものである。内部から男柱の固定に用いたと考



第4図 第152次調査調査区設定図 (1/500)

えられる人頭大の石材が数点出土した。またこの土坑に付随すると考えられる甕の据え付け穴もそれぞれに近接して検出した。この他に検出した遺構として、南北にのびる江戸時代後期の地境の石列、幕末の池状の落ち込み、井戸、埋甕（丹波焼大甕）、埋桶、性格不明の土坑（底部に薄い炭層を含む浅い土坑）などがある。（横田・廣岡）

3. 調査成果

発掘調査の結果、遺構面が2枚確認され、江戸時代中期の屋敷地と酒蔵、有岡城時代の池状遺構を検出した。

上層遺構面（江戸時代中期以降）

溝、土坑、柱穴、石列などを検出した。17世紀末から19世紀前半にわたる遺構群である。調査区中央部で南北方向の石列を検出、石列を挟んで東西で遺構の状況が異なる。石列西側は不定形土坑や柱穴、埋甕遺構が主体で、屋敷とそれに付随する裏庭といった雰囲気である。これに対して東側は酒造りの搾り場遺構の男柱跡（SX127、SX129）や井戸があり、酒蔵があったことは明白である。

SE11（第8図）

調査区の南側に位置し、男柱遺構（SX127）を切っている。規模は、1.1m×1.3mの楕円形で、深さ82cmまで調査した。遺物には、灯明皿（1）、紅皿（3）、伊賀・信楽焼の碗（5）などが出土している。

SK53（第8図、図版2・3）

調査区の中央、西壁際に位置する埋桶である。埋桶の底板が腐らずに遺存していた。規模は、直径65cm、深さ26cmを測る。遺物は、灯明皿（14・15）、肥前染付磁器碗（16・17）などが出土した。

SK71・73（第8図、図版3）

調査区の北側に位置する不定形の土坑である。別々の遺構名称としたが、同一遺構の可能性が高い。規模は、長さ2.85m、幅は最大97cm、深さ14.6cmを測る。浅い土坑の底から、焙烙（19）、丹波焼壺（18）などが出土した。

SK88（第8図、図版3・4）

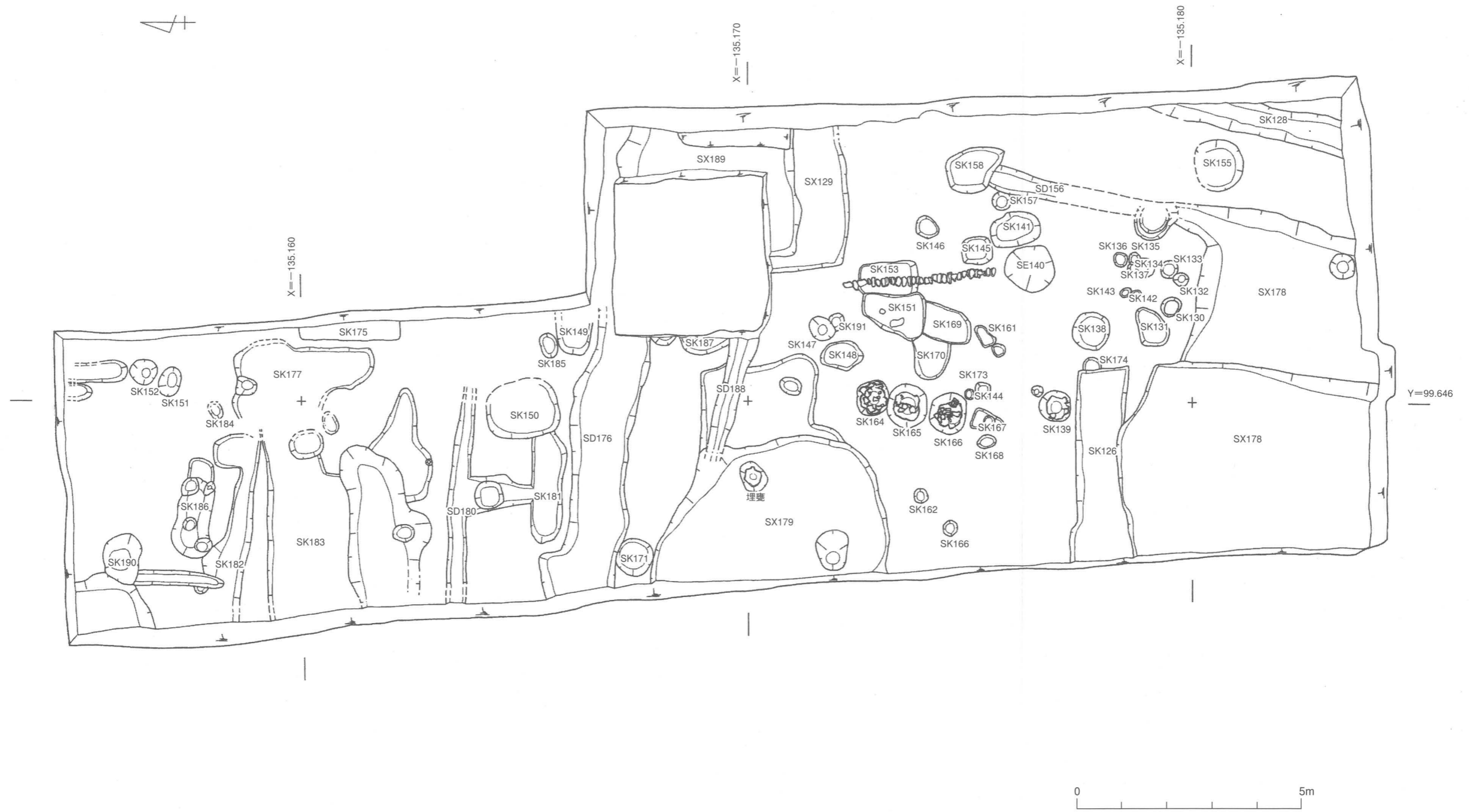
調査区の北側、西壁際に位置する。遺構の西側は遺構外に延びている。遺構の形状は円形で、南北方向の長さは70cm、深さ33cmを測る。遺物は、灯明皿（22・23）、焙烙（24）、伊賀・信楽焼の碗（29）、肥前染付磁器碗（26～28）などが出土した。

男柱遺構（SX127・SK15・SK16）（図版2）

調査区南側に位置する酒の搾り工程の遺構である。SX127は男柱を埋め込んだ掘り方で、搾った酒を一時的に貯める垂壺の掘り方がSK15・16である。SX127は、南北方向に長い長方形の土坑で、中央部が一段低く掘られている。この場所に男柱を埋め込み、男柱の下部に通した横木（貫）を大きな石で固定する場所がその両側に長く続いている。男柱や大半の石は取り除かれていたが、一部の石が残っていた。規模は、長さ3.2m、幅1.32m、深さは中央部で1.42mを測る。垂壺跡であるSK15とSK16は、男柱を中心に左右に並んでおり、2基の酒槽を男柱の両側に並べた「二槽さし」型の一例である。SK15・16は、直径95cm～1m、深さは42～45cmを測る。

男柱遺構（SX129・SK33）（第8図、図版3）

SX127の北側に位置し、主軸を東西方向にもつ酒搾りの遺構である。SX129が男柱の掘り方、SK33が垂壺の掘り方である。SX129の構造はSX127と同様で、中央部が一段深く掘り下げられてい



第6図 第152次調査下層全体図 (1/100)

る。遺構の東側が調査区外に延びており長さは不明、検出した長さは2.85mである。中央部の深さは1.12mである。SX127と異なり、垂壺は1基（SK33）が伴う「一槽さし」型である。両者に新旧の関係は認められなかった。SK33は、90cm×1mの楕円形で、深さは56.5cmを測る。遺物は、唐津焼刷毛目碗（7）、肥前染付磁器碗（9～12）などが出土した。

下層遺構面（有岡城時代）

この時期の遺構と確認できるのは、埋甕4基（SK139・164・165・166）と溝2条（SD180・188）、落ち込み（SX178）である。埋甕遺構は、備前焼の大甕の底部のみ埋め込んで据え付けられている。甕の上部は破碎しており、破片が内に落ち込んだ状況で検出された。甕の埋土には多量の焼土・炭が混入していた。甕の用途は不明であるが、火災の際の焼土が流入した可能性がある。SD180・188は調査区中央部で確認された東西方向の溝である。この2条の溝は、ほぼ同じ向きに並んでおり、通路の側溝と推測される。SX178は、調査区の南端にある方形の落ち込みで、北東の隅から溝状遺構が北の方向に派生する。埋土は2層に別れ、上層は近世遺物を含む礫混じりの粘質土で、下層は近世遺物を含まない砂質土である。北に延びる溝状遺構は導水施設ではないかと考えられる。

下層遺構面には江戸初期の遺構も検出された。柱穴、溝、不定形土坑などが主体で、おおむね17世紀前半代と考えられる。明確な建物跡は検出されず、はっきりした遺構も少なかった。ゴミ捨て場などの空地だったと推測される。

SK139（図版2・6）

調査区の南側から検出された埋甕遺構の一つ。直径70cmの円形の土坑に備前焼の大甕が据えられていた。遺存するのは底部のみである。甕の内部に胴部や口縁部の破片が落ち込んでいた。備前焼甕の肩部には窯印が描かれている。

SK160（第10図、図版5）

調査区の南側から検出された小規模な土坑の一つ。規模は、33cm×37cm、深さ28cmを測る。遺物は、ヘソ皿（60・61）が出土した。

SK164・165・166（第10図、図版2・5・6）

SK139の北側に、3基の埋甕が並んで検出された。この3基は近接して並び、ともに備前焼の大甕が据えられ、内部に口縁部や胴部の破片が堆積していた。掘り方の規模は、SK164が直径70～75cm、SK165が直径90cm、SK166が84～90cmである。用途は明らかではないが、甕の全体を埋め込んだものではなく、底部付近までを埋め込んで固定しているところに特徴があり、甕を口縁部付近まで埋め込む酒搾り遺構の垂壺との違いが顕著である。遺物は、SK164から中国製の青花の皿（62）と碗（63）、SK165からも青花の皿（64）が出土している。62と64は接合しないが、同一個体の可能性が高い。またSK166からは瀬戸・美濃焼の天目碗（65）が出土した。

SK183（第10図、図版5）

調査区北側に位置する不整形の土坑である。全体の形状は明らかではないが、深さ10cm～14cm程度の浅い土坑の内部から、唐津焼碗（68）、丹波焼播鉢（73）などが出土している。

SE140（第9図、図版4）

調査区の南側から検出した井戸跡である。規模は1m×1.1mの不整円形を呈す。埋土から土師皿（53～55）、青花碗（57）、青花皿（58）、白磁皿（59）などが出土した。

SD176・180・188（第9図、図版4）

調査区中央部を東西に延びる溝である。SD176の規模は、幅が1.2～1.7m、深さ23～31cmを測る。

北側のSD180と南側にあるSD188と同じ方向性をもつ。SD180は、幅が30～45cm、深さ8～13cm、SD188は、幅20～30cm、深さ15～25cm程度の小規模な溝である。SD176から、備前焼播鉢（40）、ヘソ皿などの土師皿（33～39）が出土している。

SX178（第9図、図版4）

調査区の南側から検出された規模の大きな遺構で、庭園（池）遺構と推測される。遺構の南側と側が調査区外となっており、全体形は明らかではない。検出した範囲は、東西方向が6.1m、南北方向が4.8mである。深さは南壁沿いで50～60cmを測る。遺物は下層から、丹波焼播鉢（43・44）、備前焼播鉢（42）、唐津焼胎土目の皿（46）、瀬戸・美濃焼灰釉皿（48）などが出土している。

（横田・廣岡・小長谷）

4. まとめ

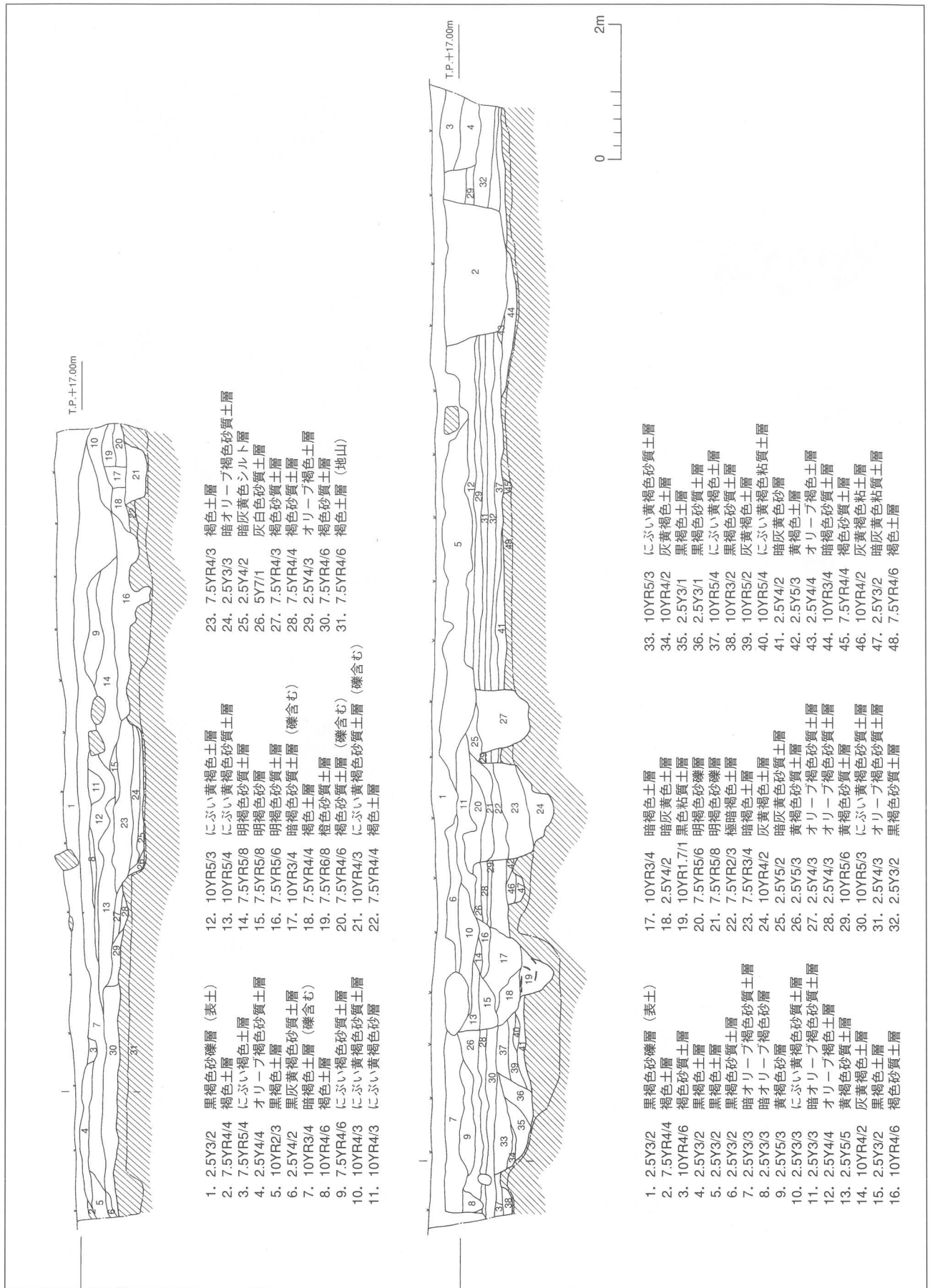
調査区北半に期待された伊丹郷町期の屋敷遺構は認められなかった。しかし有岡城期の遺構と江戸時代の遺構とでは、その方位を異にすること、諸絵図の該当地に示されていない酒造り遺構を確認したこと、江戸時代後期の地割り石列の東西では遺構数・性格に相違が認められること、これらと同時期の陶磁器には比較的良質の例が含まれることなど諸成果を得た。

また、この場所の土地利用に関して次のような変遷が辿れることが明らかになった。

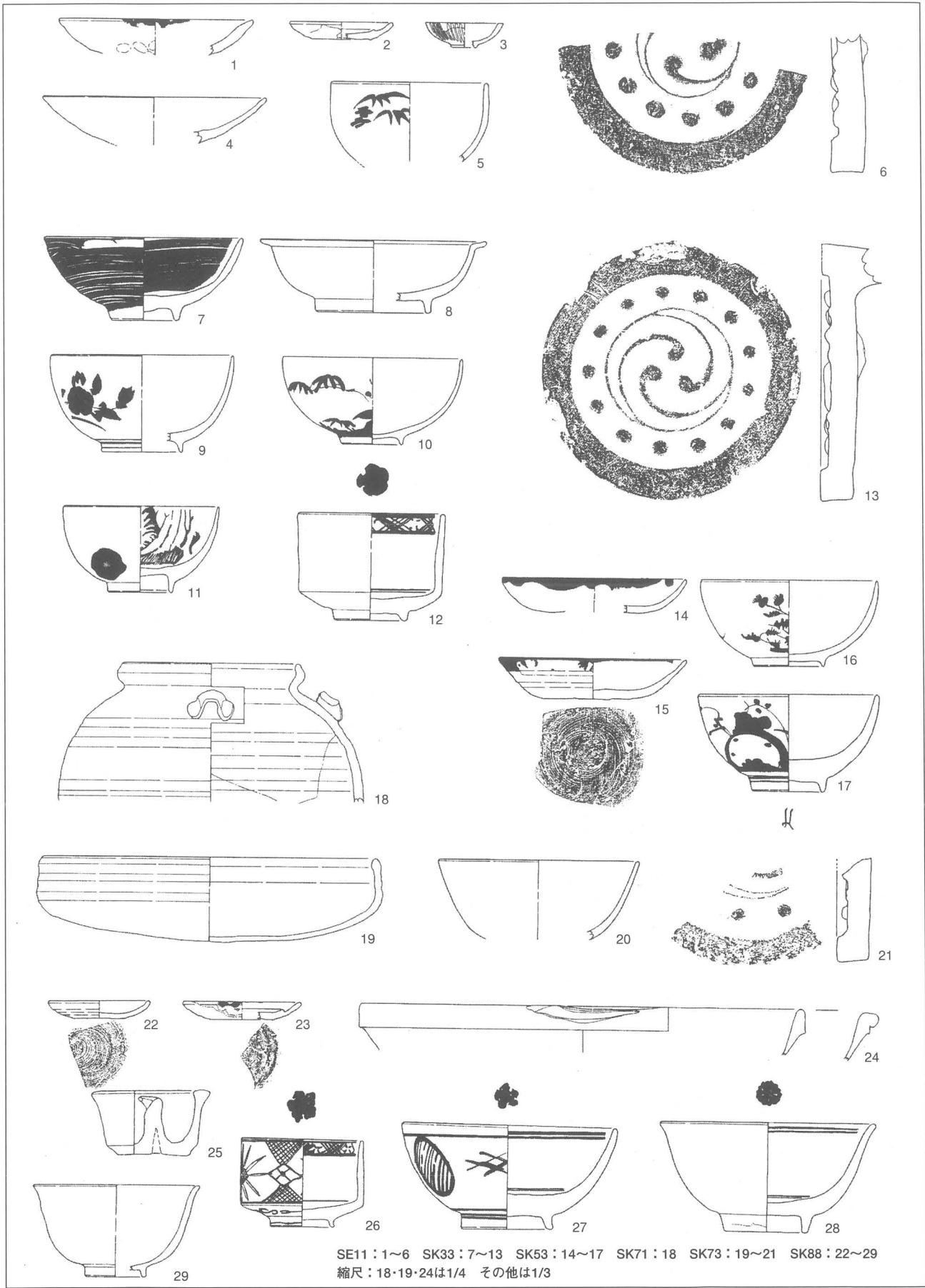
有岡城期	－池（庭園）－	SX178
	↓	
江戸初期	－空地、ゴミ捨て場－	
	↓	
江戸中期以降	－酒蔵、屋敷跡－	SX127、SX129

この場所は、有岡城の侍町地域にあたり、本丸とは至近の所にある。また、大手という地名からも、本丸に通じる要の部分だったようだ。しかし、有岡城廃城（天正7年：1579）後は長らく空地として放置され、18世紀以降に酒蔵、屋敷地として利用されたようである。

（横田・廣岡）

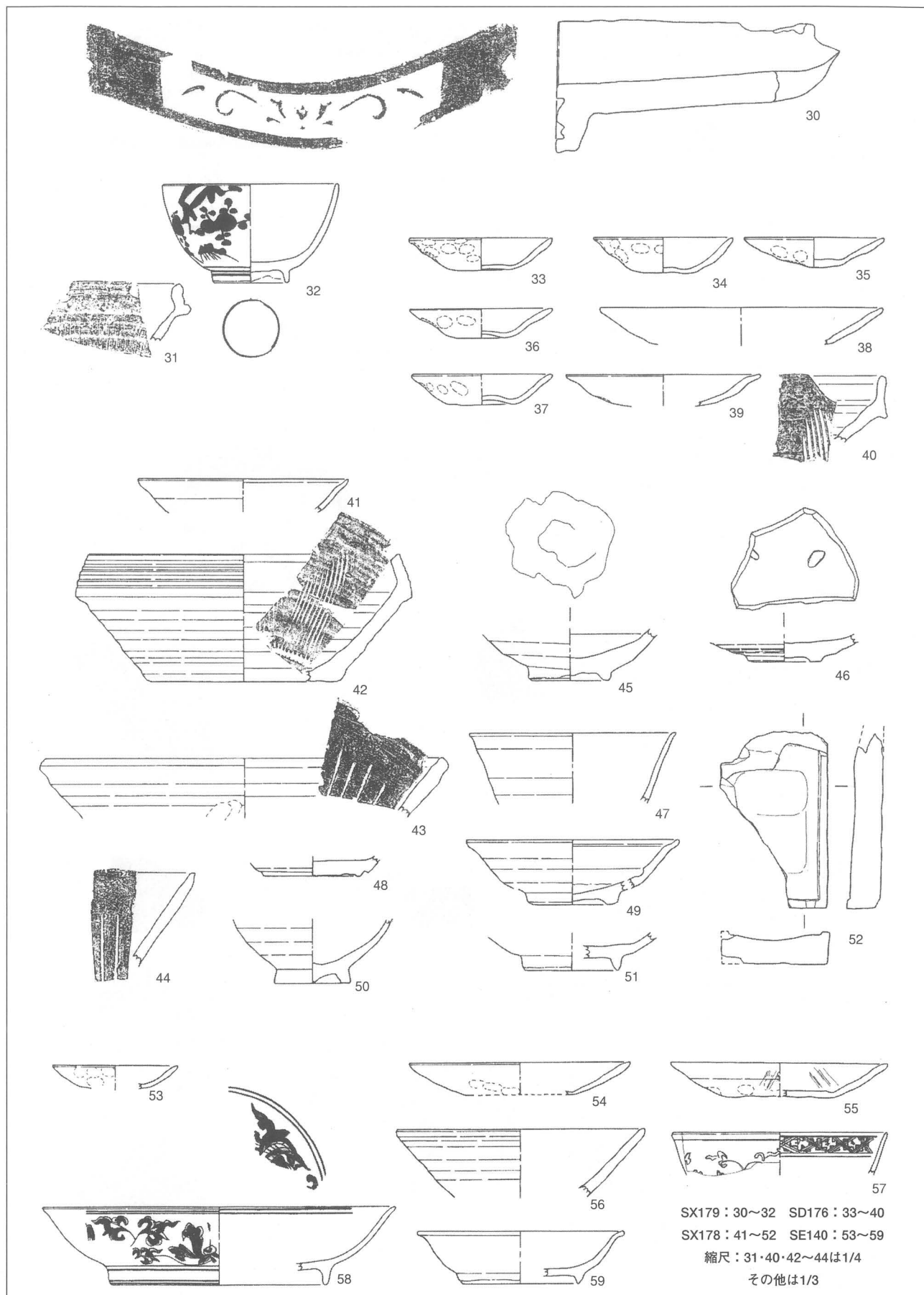


第7図 第152次調査土層断面図 (東壁) (1/80)

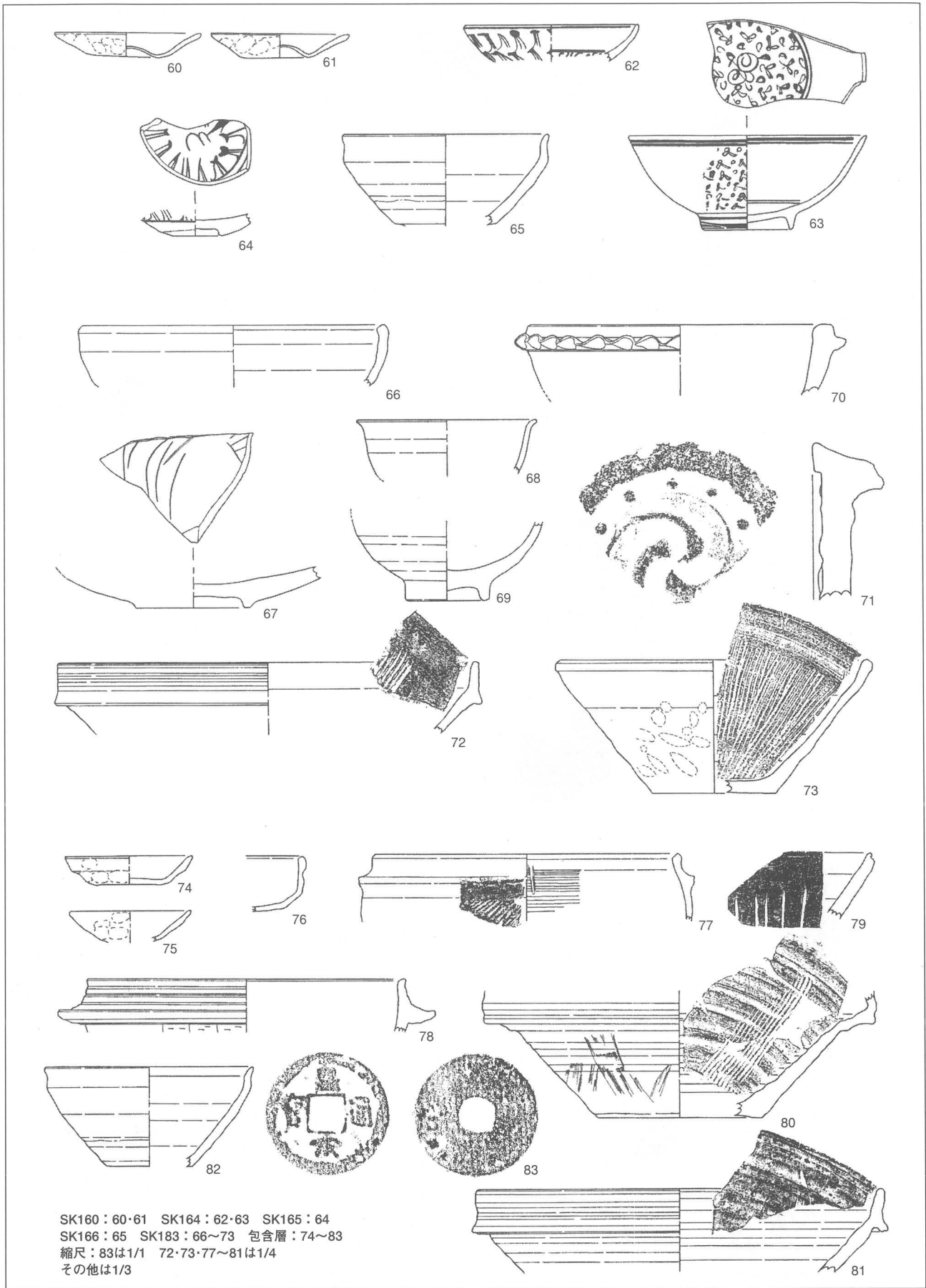


SE11 : 1~6 SK33 : 7~13 SK53 : 14~17 SK71 : 18 SK73 : 19~21 SK88 : 22~29
 縮尺 : 18・19・24は1/4 その他は1/3

第8図 第152次調査出土遺物実測図(1)



第9図 第152次調査出土遺物実測図(2)



第10図 第152次調査出土遺物実測図 (3)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代	
SE11	第8図-1	土師皿	素焼き	口径 (11.0) cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内外面口縁部ヨコナデ 内面ナデ	在地 20% 口縁煤付着	
	第8図-2	受皿	軟質施釉陶器	口径 (5.8) cm 器高 1.0 cm 底径 3.2 cm	柿釉 ロクロ成形 外面口縁より下露胎 底部糸切り痕有り	在地 25% 口縁煤付着	
	第8図-3	紅皿	白磁	口径 (4.4) cm 器高 1.4 cm 高台径 1.4 cm	型押し成形 外面口縁より下露胎	肥前 40% 19c前半	
	第8図-4	皿	白磁	口径 (12.6) cm	見込み蛇の目釉剥ぎ	肥前 30% 18c	
	第8図-5	碗	陶器	口径 (12.8) cm	外面鉄絵による笹文	伊賀・信楽 30% 18c前半	
	第8図-6	軒丸瓦	瓦	径 7.2 cm 周縁厚 1.9 cm 瓦当厚 1.5 cm	左巻き三つ巴文 巴の尾部つながる 珠文有り 瓦当面に雲母粉付着	瓦当のみ50%	
SK33	第8図-7 図版3-7	碗	陶器	口径 11.1 cm 器高 4.7 cm 高台径 3.6 cm	内外面及び高台内巻刷毛目 見込み蛇の目釉剥ぎ 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 70% 18c前半	
	第8図-8	鉢	陶器	口径 (12.6) cm 器高 4.1 cm 高台径 6.2 cm	鉄釉 高台量付露胎	30%	
	第8図-9	染付碗	白磁	口径 (10.3) cm 器高 5.5 cm 高台径 4.5 cm	外面体部花文 高台量付露胎	肥前 30% 18c前半	
	第8図-10 図版3-10	染付碗	白磁	口径 (10.1) cm 器高 4.9 cm 高台径 3.3 cm	外面体部竹梅文 高台量付露胎	肥前 30% 18c前半	
	第8図-11 図版3-11	碗	陶器	口径 (8.8) cm 器高 4.9 cm 高台径 3.6 cm	外面蛭手文 内面打刷毛目文 高台量付露胎	肥前(現川焼) 45% 17c末~18c前	
	第8図-12 図版3-12	染付碗	青磁	口径 (8.1) cm 器高 6.1 cm 高台径 3.8 cm	筒形 外面青磁 内面、高台内白磁 内面口縁部四方禪文 見込みコンニャク印判五弁花と二重圏線 高台量付露胎 アルミ砂塗布	肥前 45% 外面二次焼成受ける 18c後半	
	第8図-13 図版3-13	軒丸瓦	瓦	径 14.5 cm 周縁厚 1.7 cm 瓦当厚 1.5 cm	左巻き三つ巴文 巴の尾部がつながる 珠文13個 瓦当面に離れ砂付着 丸瓦部に内タキ有り	瓦当部100% 丸瓦部 10%	
	SK53	第8図-14	土師皿	素焼き	口径 (10.4) cm	ロクロ成形 底部糸切り痕有り	在地 40% 口縁煤付着
		第8図-15	皿	軟質施釉陶器	口径 (10.5) cm 器高 2.3 cm 底径 4.9 cm	柿釉 ロクロ成形 外面口縁より下露胎 底部糸切り痕有り(左巻き)	在地 40% 口縁煤付着
第8図-16 図版3-16		染付碗	白磁	口径 9.9 cm 器高 4.9 cm 高台径 4.0 cm	外面体部薊(アザミ)文 高台量付露胎	肥前 45% 18c前半	
第8図-17 図版3-17		染付碗	白磁	口径 10.0 cm 器高 5.5 cm 高台径 4.0 cm	外面体部雪輪梅花文 高台内銘有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 95% 17c末~18c	
SK71	第8図-18 図版3-18	壺	陶器	口径 13.0 cm	粘土紐巻き上げ成形 耳1ヶ所残存(二耳壺か) 内面に刷毛で灰釉を掛ける	15% 灰被り	
SK73	第8図-19 図版3-19	焙烙	素焼き	口径 (25.0) cm 器高 6.4 cm	底部外型成形 内外面口縁部ヨコナデ	在地 50% 内面と外面体部に煤付着	
	第8図-20	碗	白磁	口径 (11.2) cm		肥前 15% 貫入	

表1 第152次調査遺物観察表(1)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK73	第8図-21	軒丸瓦	瓦	径 (14.0) cm 周縁厚 1.8 cm 瓦当厚 1.3 cm	左巻き三つ巴文 巴の尾部がつながる 珠文有り	瓦当部10%
SK88	第8図-22	土師皿	素焼き	口径 (5.7) cm 器高 1.0 cm 底径 2.8 cm	ロクロ成形 底部に糸切り痕有り(左巻き)	在地 45%
	第8図-23	受皿	軟質施釉陶器	口径 (6.6) cm 器高 1.0 cm 底径 3.4 cm	柿釉 ロクロ成形 外面口縁より下露胎	在地 40% 口縁煤付着
	第8図-24	焙烙	素焼き	口径 (34.4) cm	底部外型成形 口縁から体部ヨコナデ	在地 15% 内面煤付着
	第8図-25 図版3-25	秉燭	陶器	口径 6.7 cm 器高 3.7 cm 高台径 4.0 cm	内外面に鉄軸掛かる	瀬戸・美濃 95%
	第8図-26 図版3-26	染付碗	白磁	口径 6.7 cm 器高 5.0 cm 高台径 3.4 cm	筒形 外面花文と幾何学文 内面口縁部に四方襷文 見込みコンニャク印判五弁花と圏線有り 高台量付露胎	肥前 100% 二次焼成受ける 18c後半
	第8図-27 図版4-27	染付碗	白磁	口径 11.9 cm 器高 5.9 cm 高台径 5.1 cm	外面体部に丸文 見込みコンニャク印判五弁花と二重圏線有り 蛇の目釉剥ぎ アルミナ塗布 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 90% 19c前半
	第8図-28 図版4-28	染付碗	青磁	口径 11.9 cm 器高 6.2 cm 高台径 4.6 cm	外面青磁 内面と高台内白磁 内面口縁部に二重圏線有り 見込みにコンニャク印判菊文と二重圏線有り 高台量付露胎	肥前 70% 19c前半
	第8図-29 図版4-29	碗	陶器	口径 (9.3) cm 器高 5.2 cm 高台径 3.3 cm	口縁端反り 高台周辺露胎	伊賀・信楽 40% 19c前半
	SK139	図版6-84・85	甕	陶器	底径 40.0 cm	
SX179	第9図-30 図版4-30	軒平瓦	瓦	上弦幅 24.6 cm 瓦当高 3.9 cm 周縁厚 1.4 cm	均整唐草文	40% 瓦当部に雲母粉付着
	第9図-31	播鉢	陶器		クシ目一単位7本	丹波 5% 外面灰被り 18c前半
	第9図-32 図版4-32	染付碗	白磁	口径 (9.8) cm 器高 5.6 cm 高台厚 4.2 cm	外面体部に梅笹文 高台内圏線有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 45% 17c末～18c前
SD176	第9図-33 図版4-33	土師皿	素焼き	口径 8.0 cm 器高 1.8 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ヨコナデ	在地 70%
	第9図-34	土師皿	素焼き	口径 7.8 cm 器高 2c m	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 70%
	第9図-35	土師皿	素焼き	口径 7.8 cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 60%
	第9図-36 図版4-36	土師皿	素焼き	口径 7.9 cm 器高 1.6 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ヨコナデ	在地 70%
	第9図-37	土師皿	素焼き	口径 (7.7) cm 器高 1.7 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ヨコナデ	在地 40%
	第9図-38	土師皿	素焼き	口径 (15.8) cm	ロクロ成形	在地 10%
	第9図-39	土師皿	素焼き	口径 (11.0) cm	ロクロ成形	在地 15% 内外面5Y7/1灰白色 胎土N4/灰色

表2 第152次調査遺物観察表(2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SD176	第9図-40	播鉢	陶器		クシ目単位不明	備前 5%以下 15c後半
SX178 (下層)	第9図-41	皿	素焼き	口径 11.8 cm	手捏ね成形 内外面ナデ	在地 10%
	第9図-42 図版4-42	播鉢	陶器	口径 (23.2) cm 器高 9.6 cm 底径 14.6 cm	クシ目一単位10本	備前 20%
SX178 (上層)	第9図-43 図版4-43	播鉢	陶器	口径 (30.0) cm	播目ヘラ描き	丹波 5% 16c後半
	第9図-44	播鉢	陶器		播目ヘラ描き	丹波 5% 16c後半
	第9図-45 図版4-45	碗	陶器	高台径 4.2 cm	長石釉 見込みに砂目を環状に施す 高台量付露胎	唐津 25% 二次焼成受ける 17c前半
	第9図-46 図版4-46	皿	陶器	高台径 4.2 cm	灰釉 見込み胎土目2ヶ所残存 高台周辺露胎	唐津 25% 16c末～17c初
	第9図-47	碗	陶器	口径 (11.6) cm	口縁部若干端反り 灰釉	唐津 5%
	第9図-48 図版4-48	小鉢	陶器	高台径 5.5 cm	灰釉 高台周辺露胎	瀬戸・美濃 25% 15c前半
	第9図-49	皿	陶器	口径 (11.9) cm 器高 3.7 cm 高台径 (5.0) cm	口縁部折れ縁状 灰釉 見込み円形状に露胎 高台周辺露胎	唐津 10% 二次焼成受ける 17c前半
	第9図-50	碗	陶器	高台径 4.2 cm	灰釉 高台内及び量付露胎	唐津 20%
	第9図-51 図版4-51	碗	白磁	高台径 5.2 cm	高台内及び量付露胎	中国製 15%
	第9図-52 図版4-52	硯	石	幅 6.1 cm 高さ 1.9 cm	粘板岩	50%
SE140	第9図-53	土師皿	素焼き	口径 7.0 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 20%
	第9図-54 図版4-54	土師皿	素焼き	口径 12.4 cm	手捏ね成形 内外面ヨコナデ	在地 25%
	第9図-55 図版4-55	土師皿	素焼き	口径 12.2 cm 器高 1.9 cm	手捏ね成形 外面口縁部から内面体部ヨコナデ	在地 20% 胎土 2.5Y3/1黒褐色
	第9図-56 図版4-56	鉢	素焼き	口径 13.9 cm	口口成形	在地 25% 二次焼成受ける
	第9図-57 図版4-57	青花碗	白磁	口径 (12.0) cm	外面口縁部圏線有り 体部に唐草文(陰刻) 内面口縁部四方禪文	中国製 5% 16c後半
	第9図-58 図版4-58	青花皿	白磁	口径 (19.8) cm 器高 4.4 cm 高台径 12.0 cm	口縁部若干端反り 外面体部唐草文 内面口縁部二重圏線 見込み花文と二重圏線有り 高台量付露胎	中国製 15% 16c後半
	第9図-59 図版4-59	皿	白磁	口径 (11.5) cm 器高 3.0 cm 高台径 (6.5) cm	口縁部端反り 高台量付露胎 離れ砂付着	中国製 25% 二次焼成受ける 16c

表3 第152次調査遺物観察表(3)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK160	第10図-60 図版5-60	皿	素焼き	口径 8.3 cm 器高 1.4 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面指頭圧調整の後ナデ 内面ヨコナデ	在地 45%
	第10図-61 図版5-61	皿	素焼き	口径 7.8 cm 器高 1.6 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面指頭圧調整の後ナデ 内面ヨコナデ	在地 45%
SK164	第10図-62 図版5-62	青花皿	白磁	口径 (9.8) cm	外面体部に梵字文 内面口縁部圏線有り	中国製 25% 二次焼成受ける 15c後~16c中頃
	第10図-63 図版5-63	青花碗	白磁	口径 (13.3) cm 器高 5.4 cm 高台径 4.8 cm	外面体部唐草文 内面口縁部二重圏線 見込み 唐草文と二重圏線有り 高台量付露胎	中国製 25% 15c後~16c中頃
	図版6-86 ~88	甕	陶器	口径 64.0 cm 底径 42.5 cm	窯印有り	備前 25% 16c前半
SK165	第10図-64 図版5-64	青花皿	白磁	高台径 2.8 cm	碁笥底 内外面文様有り 高台量付露胎	中国製 20% 二次焼成受ける 15c後~16c中頃
	図版6-89 ~91	甕	陶器	底径 42.5 cm	窯印有り	備前 20% 16c前半
SK166	第10図-65 図版5-65	天目碗	陶器	口径 11.6 cm	内面から外面上半部にかけて鉄釉掛かる 外面下半部錆釉	瀬戸・美濃 30% 16c前半 二次焼成受ける
	図版6-92 ~95	甕	陶器	口径 64.6 cm 底径 39.0 cm		備前 25% 口縁から肩にかけて自然釉掛かる 16c中頃
SK183	第10図-66 図版5-66	焙烙	素焼き	口径 (23.0) cm	内面口縁部直下に沈線有り	5%
	第10図-67 図版5-67	皿	青磁	高台径 6.4 cm	内面線刻文有り	肥前 10%
	第10図-68	碗	陶器	口径 10.0 cm	口縁部端反り 灰釉	唐津 5%
	第10図-69 図版5-69	碗	青磁	高台径 4.2 cm	高台量付露胎 離れ砂付着(砂粒大)	肥前 25% 17c中頃
	第10図-70 図版5-70	浅鉢	瓦質	口径 (17.0) cm	外面口縁部直下にヒダ状の粘土紐を貼り付ける 内外面ヨコナデ	5% 内面煤けている
	第10図-71	軒丸瓦	瓦	径 14.0 cm 瓦当厚 1.6 cm	左巻き三つ巴文	25% 二次焼成受ける
	第10図-72 図版5-72	播鉢	陶器	口径 (31.8) cm	クシ目有り 単位不明	備前 胎土に砂粒含む 5% 15c後半
	第10図-73 図版5-73	播鉢	陶器	口径 (23.0) cm 器高 10.1 cm 底径 9.4 cm	クシ目一単位6本 体部下半に指頭圧痕有り	丹波 20% 17c中頃
包含層	第10図-74	土師皿	素焼き	口径 (7.2) cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 外面口縁部から内面ヨコナデ 外面体部から底部指頭圧痕有り	在地 20%
	第10図-75	土師皿	素焼き	口径 (6.8) cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕有り 内面ヨコナデ	在地 15%
	第10図-76	焙烙	素焼き		外面口縁部から体部ヨコナデ	5%

表4 第152次調査遺物観察表(4)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
包含層	第10図-77 図版5-77	埴	素焼き	口 径 (22.8) cm	外面口縁部ナデ 体部右上がりのタタキ痕有り 内面口縁端部ナデ 体部横方向のハケメ	5%
	第10図-78 図版5-78	羽釜	瓦質	口 径 (24.0) cm	外面口縁部ナデ 罫下強いナデ 体部横方向の ケズリ	5%
	第10図-79	播鉢	陶器		播目へら描き 口縁端部に段を形成する	丹波 5% 16c後半
	第10図-80 図版5-80	播鉢	陶器	底 径 12.4 cm	クシ目一単位10本	備前 15% 17c前半
	第10図-81 図版5-81	播鉢	陶器	口 径 (30.4) cm	クシ目単位不明 縁帯下端に黄ゴマ掛かる 口縁 下端に重ね焼き痕有り	備前 5% 15c後半
	第10図-82 図版5-82	天目碗	陶器	口 径 (11.7) cm	高台周辺サビ釉を施す	瀬戸・美濃 20% 二 次焼成受ける 16c前 半
	第10図-83	銭	銅	径 2.3 cm 厚み 0.1 cm	皇宋通宝(真書体)	北宋 宝元2年(1039) 初鑄

表5 第152次調査遺物観察表(5)

第2節 第169次調査

所在地 伊丹市宮ノ前1丁目84-3他
調査面積 371㎡
調査期間 平成8年8月29日～10月23日
担当者 山田晃弘・神野 信・目次謙一

1. 遺跡の概要

有岡城跡・伊丹郷町遺跡は、武庫川や猪名川に挟まれた伊丹台地の南東部（標高15～20m）に立地し、縄文時代中期から近世・近代に至る複合遺跡である。南北朝期の史料では伊丹城の存在が確認され、在地領主層の地域支配拠点の一つとして重要な役割を果たしたと思われる。戦国時代末に荒木村重は伊丹城を有岡城と改め、台地地形を巧みに活用したいわゆる惣構えを持つ城として整備した。天正11年（1583）年に有岡城が廃城された後、惣構え内の町は伊丹郷町として、酒造業を中心に近世を通じて繁栄した。

昭和50年、有岡城の城郭部分を対象に実施された調査を始めとして、現在に至るまで188次（平成9年1月現在）にわたり調査が実施されている。今次調査地点は「岸の砦」に比定される猪名野神社の南、遺跡の北西部に位置する。伊丹郷町を描いた数点の絵図によれば、今次調査地点は、「戎町」として近世後期に初めて町屋敷の存在が確かめられ、それまでは耕作地であったようである。また調査地点周辺では、これらの絵図に見える近世の町割が、現在もそのまま残っている。

2. 調査の概要

調査による掘削で生じる排土は、敷地内の非掘削部分に仮置しておく都合上、調査区の西側部分から調査を開始した。しかし、西側部分では既存建築物によりほとんどの遺構が破壊されていた。このため、西側部分の調査を先に終了させた後、排土の仮置きに活用する方針に切替え、以後東側部分を中心に調査を進めた。

確認調査の結果より、盛土層と基盤となる伊丹礫層の間にほとんど遺物包含層が存在しないことが判明していた。そのため、重機により盛土層を一括除去した後、人力により遺構の掘削、精査を行うこととした。

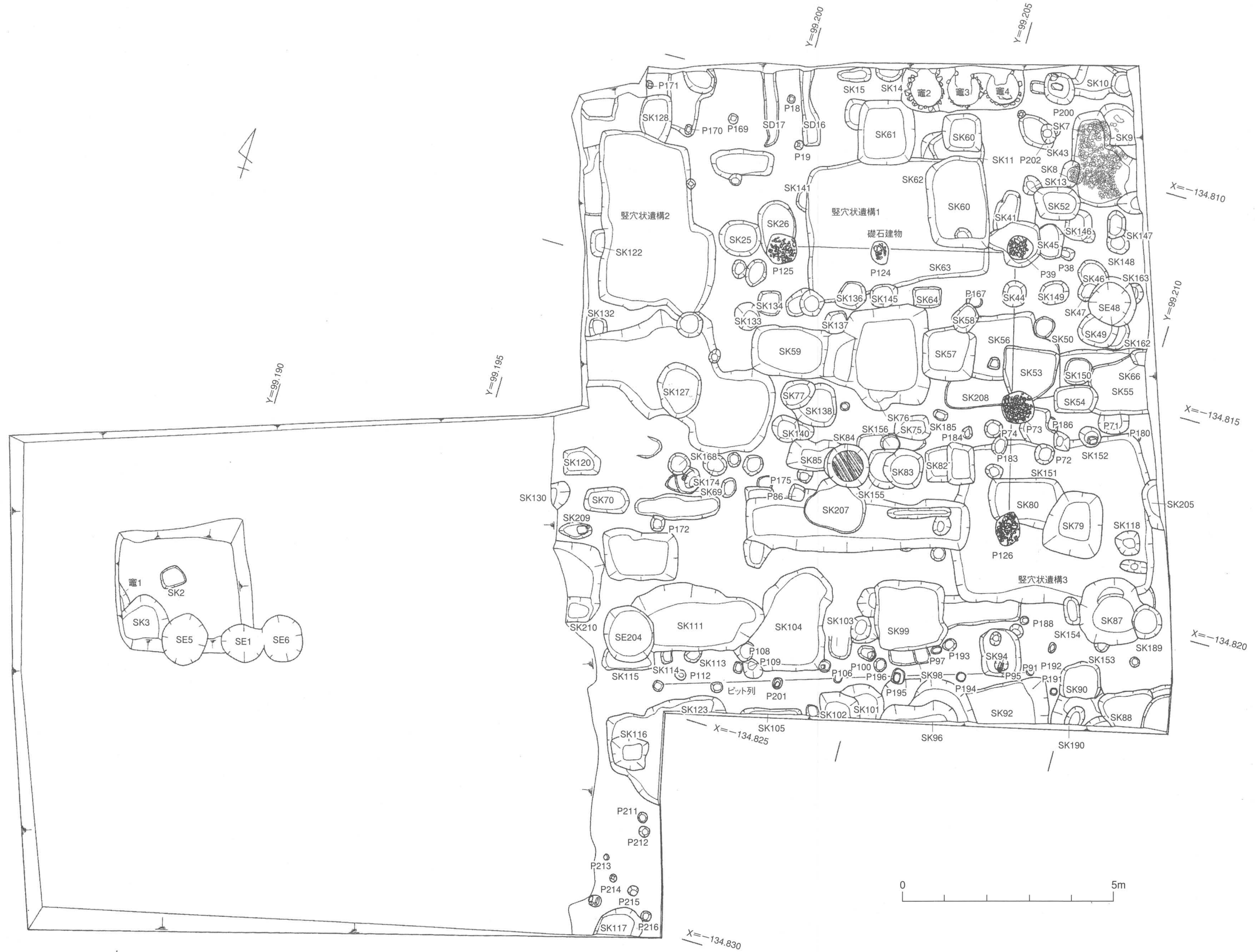
遺構の実測については、1/100平板測量と1/20



第11図 第169次調査調査区位置図（1/2,500）



第12図 第169次調査調査区設定図（1/1,000）



第13図 第169次調査全体図 (1/100)

手書き図面を併用した。基準点の設置は、測量会社へ委託し、調査区内に5m方眼の木杭を設けた。水準点も同時に設置した。

記録写真には、35mmのモノクローム、リバーサル、ネガカラーの3種類のフィルムを随時使用した。

基本層序

基本層序については、現代の盛土層の直下に赤褐色の伊丹礫層がある。現代の盛土層の厚さは40～60cmであり、調査区西側がやや薄くなっている。調査区の内、部分的に淡褐色の薄い遺物包含層が伊丹礫層と盛土層の間に存在する。しかし、遺構を観察してみると、盛土による整地が行われた際に、基盤となる伊丹礫層が削られている可能性が高い。したがって遺物包含層も自然堆積によるものではないと思われる。以上の基本層序把握に基づき、今次調査では、伊丹礫層上面で遺構面を1面検出した。

3. 調査成果

検出した遺構は、礎石建物跡1棟・ピット列1条・井戸5基・竈4基・埋桶1基・土坑多数などである。

礎石建物（P39・73・124・125・126）（第14図、図版9・10）

調査区東側中央で、近世以降の時期に属すると考えられる建物跡を1棟検出した。多数のピットの中には礫が集中するものがあり、礎石そのものは既に失われているものの、建物の柱の礎石を据えていたと考えられる。その配置から、東西2間・南北2間以上の礎石建物の存在を想定した。建物の規模は、検出した範囲で東西11m、南北6.8mである。主軸の方向は、近世以来の町割りのそれと一致する。柱穴の間隔は等しくなく、ばらつきが見られる。遺物の多くは、礫と混交した状態で出土した。P125からは土師皿（2）と伊賀・信楽焼碗（5）が、P126からは糸切り底の土師皿（1）、肥前染付磁器皿（4）などが出土した。

ピット列（P91・P194・P195・P201ほか）

調査区東側南端に、ピット列を1条検出した。敷地の方向に沿って、東西方向に7基のピットが並ぶ。各ピットの間隔は約1.5～1.6mで、全体の長さは8.9mとなる。ピット列の南北両側に沿って、廃棄目的と思われる土坑が複数存在する。このことから、ピット列は敷地の境界を意図した柵である可能性が考えられる。

井戸（SE1・SE5・SE6・SE48・SE204）（第14図、図版10）

調査区東側に2基、西側に3基検出した。いずれも基盤層を深く掘り込んだだけの素掘りの井戸であり、作業上の安全確保のため、途中で掘削を止めている。このため正確な深さはわからない。

東側2基の内、SE48は出土遺物より近現代に埋められたものと推測される。1.7m程度掘り下げたが、底は検出できなかった。SE204については、近世後期以降の遺物を伴う土坑の底面で検出したことから、少なくともそれ以前に掘られたものであろう。検出面での直径は約80cmで、埋土には遺物を含まなかった。

西側の3基は、東西方向に東よりSE6、SE1、SE5の順に並ぶ。SE6は、多量の円礫を含む単一の砂で埋められていた。恐らく掘り上げた土砂で時間をおかずそのまま埋め戻されたと考えられる。

SE1、SE5は共に直径約1mを測り、SE6はSE1を切って作られているが、SE6とSE1では下層の埋土が同一になるため、埋められた時期は近いと思われる。しかし、SE1上層には多量の遺物や炭化物が含まれることから、2時期に分けて埋められたと考えられる。遺物では、陶磁器類が出土

した。また、SE1上層から、アワビ・赤貝・シジミ・サザエといった多くの貝類が出土した。

竈（竈1～4）（第15図、図版9・10・11）

調査区東側に3基（竈2～4）、西側に1基（竈1）検出した。竈1については、焼土部分を僅かに確認したのみであり、また土坑によって大きく切られているため、全体の規模・形状などは不明である。ただ、地山が8cmの厚さで被熱していることから、一時的な燃焼に止まるものではなく、ゆえに竈であったと考えておく。

東側の3基は、調査区北端にて東西方向に3基並んだ状態で検出した。以下、西より順に竈2・竈3・竈4とする。3基とも規模はほぼ同じであり、竈内側の直径は76cm前後、検出面からの深さは30cm程度である。他の調査例より判断すると、家庭用としては大きすぎるため商業用として築かれたものであろう。また焚き口は北側に向いていたが、調査範囲外となるため、周囲の状況などは詳しく確認できなかった。

構築の順序をみると、まず東西2.9m、南北1m、深さ60cm以上の長方形の土坑を掘り、その内側に灰白色の粘土を貼り付ける。竈の壁は、瓦と粘土を10～15cmの厚さで交互に積み上げて作る。竈3・竈4間の壁では、スサ入り粘土を煉瓦状のブロックの間に挟む格好で作っていることが観察された。また、調査区東側北壁の断面観察から、竈の袖を構築する際には石が用いられたことがわかる。

竈3・竈4では竈の壁のみならず、掘り方底面の地山も被熱していたが、竈2のみ熱を受けた様子が認められない。内壁が補修されたことも考えられるが、掘り方底面の地山にも被熱した様子は無いため、構築されたものの使用されなかったと見られる。

竈3・竈4ともに底にスサ入り粘土を貼り付け、さらに竈4では内壁にも同様の作業を行っているなど、補修した痕跡が認められた。これは、使用した後に灰の掻き出しを行い、それに伴って内壁・底が削り取られたためと考えられる。3基とも主に黒褐色の細砂で埋まっており、ほぼ同時に埋められたものであろう。竈2・竈3の埋土には、礫や瓦が多く見られる。

出土遺物は、竈2から伊賀・信楽焼灯明受け台（16）、明石焼播鉢（18）、丹波焼播鉢（19）、肥前染付磁器碗（22）、青花碗（20）などがあり、竈3から肥前染付磁器鉢（24）、三田青磁皿（25）などがある。

土坑（SK26・43ほか）

検出した土坑はそれぞれ規模、形状が様々である。大半は遺物を多く含むことから廃棄目的のものと考えられ、調査区東側に多く存在する。

埋桶（SK84）（第15図、図版9・11）

埋桶は、調査区東側中央に位置し、直径約1m、深さ約60cmのほぼ正円形の土坑である。底には埋桶の底板が残存していた。底板は5枚の板で作られ、厚さ3cm程度である。土坑内側には、埋桶の板の痕跡は認められなかった。他の同様な調査例により、便槽として使用されていたものと見られる。伊丹郷町では、便所は19世紀初頭以降、木桶を1基埋めたものから、2基一組の大小便分離型へ徐々に変化するとされている。この土坑周辺に同規模の土坑が認められないことから、便槽として単体で使用されていたと考えられる。出土遺物には、京焼系陶器碗（27・28）、肥前染付磁器の広東碗（30・31）などがある。

竪穴状遺構1～3（第16図、図版8・11・12）

調査区東側に3基検出された。それぞれ竪穴状遺構1～3とする。

竪穴状遺構1（SK62・63）は東西4.3m、東側辺長2.8m、西側辺長3.1mの台形の土坑である。深さは10cm程度で浅い。他の2基も同様だが、切り合い関係によりこの土坑が周辺の遺構より先に掘られ

たと判断される。また、遺構の向きは3基とも敷地のそれに一致する。埋土はオリーブ褐色のシルト混じり細砂で、礫・炭片を含む。遺物は少ないが、唐津焼鉢(39)、肥前紅皿(40)などが出土した。

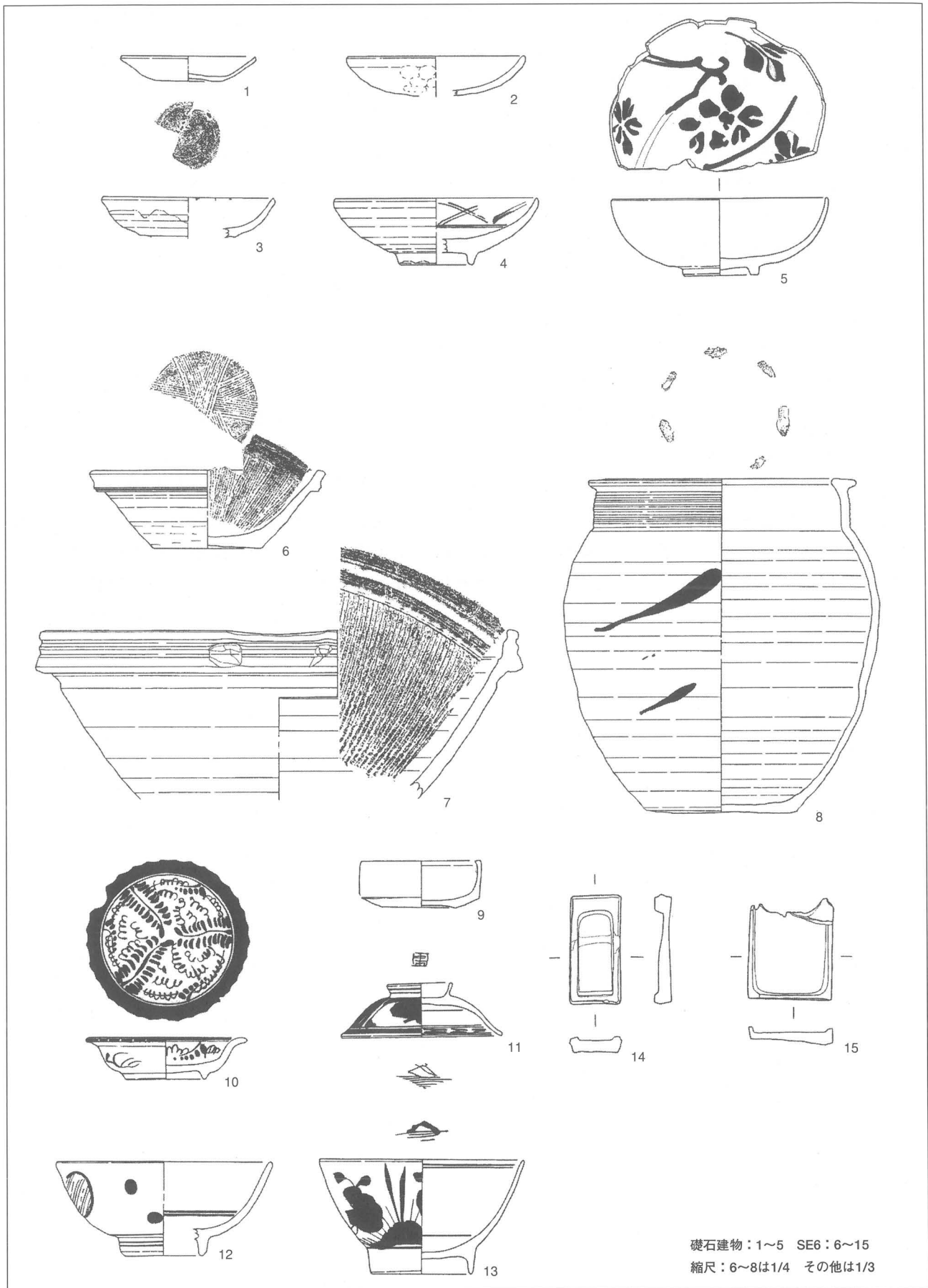
堅穴状遺構2(SK176・177)は東西4.8m、南北3.9mの方形土坑である。深さは10~15cmと浅い。埋土の質や遺物が少ないことなど、堅穴状遺構1と類似点が多い。時期もほぼ同じと見なして良いと思われる。出土遺物には、肥前染付磁器碗(43・44)肥前陶胎染付碗(45)がある。

堅穴状遺構3(SK81)は、東西2.2m、南北4.3mの方形の土坑で、深さ20~28cm程である。埋土は灰黄褐色砂質土と褐色砂質土であり、遺物は少ない。堅穴状遺構1・2と同様の遺構であろう。出土遺物には、唐津焼陶器皿(48)、肥前陶胎染付鉢(47)、肥前染付碗(49・50)などがある。

4. まとめ

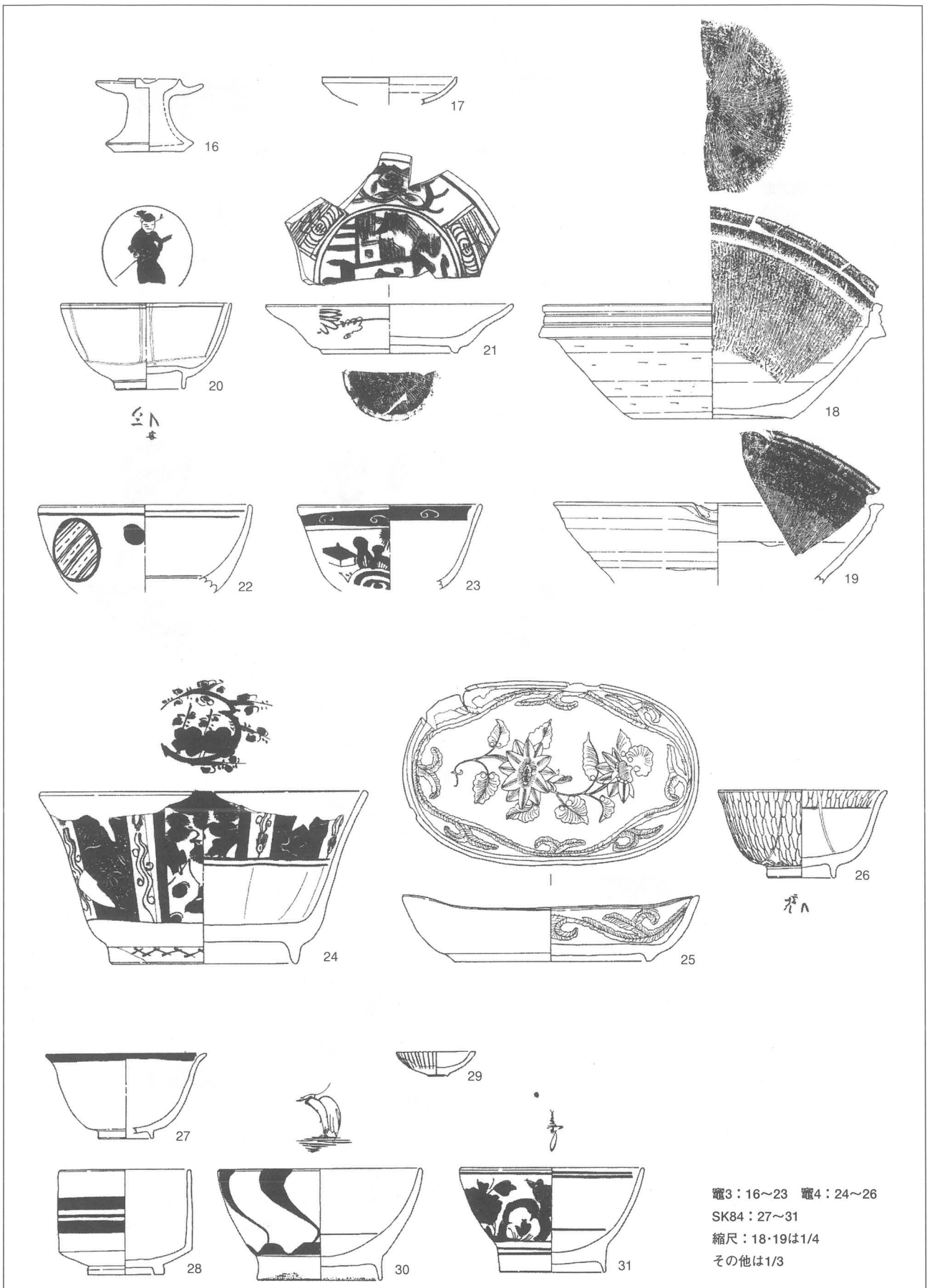
今次調査地点では、18世紀後半を中心とする礎石建物跡1棟・ピット列1条・井戸跡5基・竈4基・埋桶1基・土坑多数といった遺構を検出した。絵図では町屋敷の存在が近世後期にはじめて確認されるのだが、調査結果は絵図の記載に一致するものであろう。中世末期、有岡城が諸史料に登場する時期の遺構・遺物は確認されなかった。

調査区西側では、既存建築物の影響で僅かな面積しか遺構が残存していなかったものの、本来は東側と同様近世の遺構・遺物が存在していたと考えられる。調査区東側で注目されるのは、商業用と推定される竈3基の存在や、肥前白磁染付大皿、焼塩壺の出土など、いわゆる都市一般住民の住まいとは異なる様相が見受けられる点であろう。今次調査により、当遺跡についてまた新たな知見が得られたものとする。(山田・神野・目次)

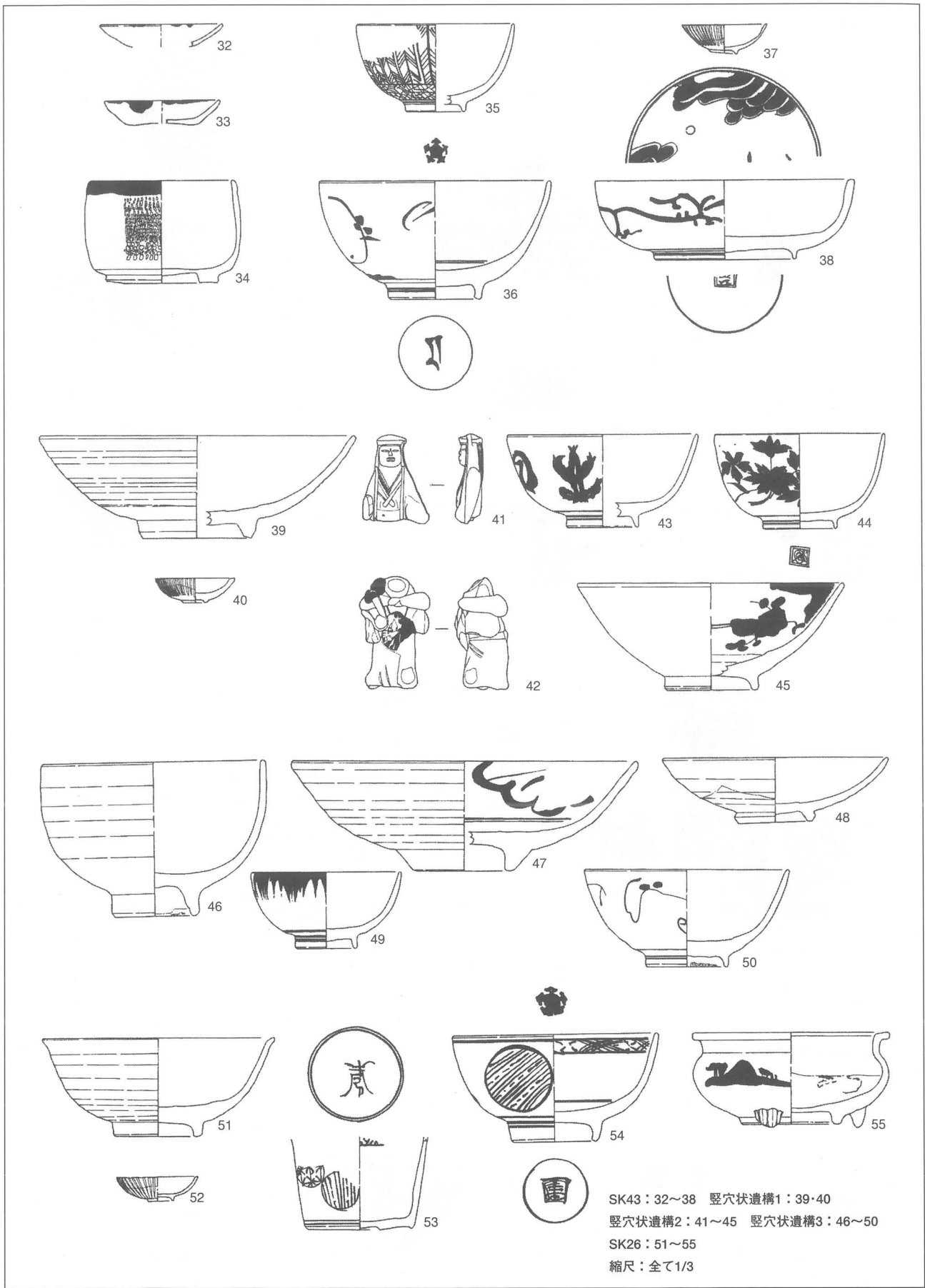


礎石建物：1~5 SE6：6~15
縮尺：6~8は1/4 その他は1/3

第14図 第169次調査出土遺物実測図（1）



第15図 第169次調査出土遺物実測図（2）



第16図 第169次調査出土遺物実測図 (3)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代	
礎石建物	第14図-1	土師皿	素焼き	口径 7.6 cm 器高 1.4 cm	ロク口成形 底部糸切り痕有り(左巻き)	在地 50%	
	第14図-2	土師皿	素焼き	口径 (10.0) cm	手捏ね成形 外面体部指頭圧痕 外面口縁部から内面口縁部ヨコナデ 内面ナデ	在地 30%	
	第14図-3	皿	陶器	口径 9.7 cm 器高 2.3 cm	ロク口成形 外面口縁部周辺から内面にかけて鉄釉 外面下半部露胎	40% 口縁煤付着	
	第14図-4	染付皿	白磁	口径 11.4 cm 器高 3.8 cm 高台径 4.0 cm	内面体部二重格子文 見込み二重圏線有り 見込みに蛇の目釉剥ぎ、アルミナ塗布 高台量付露胎、離れ砂付着	肥前 40% 18c後半	
	第14図-5 図版10-5	色絵皿	陶器	口径 12.2 cm 器高 4.4 cm 高台径 4.2 cm	内面に色絵の文(上絵は赤のみ残存) 高台部露胎	伊賀・信楽系 70% 18c中頃	
SE6	第14図-6	播鉢	陶器	口径 (16.7) cm 器高 5.9 cm 高台径 8.2 cm	クシ目一単位9本 内面底部放射状の播目 クシ目一単位9本	40%	
	第14図-7	播鉢	陶器	口径 34.8 cm	クシ目一単位10本	塚・明石 30% 18c後半	
	第14図-8 図版10-8	甕	陶器	口径 (16.7) cm 器高 25.3 cm 底径 11.3 cm	内外面に鉄釉 外面体部に黒色釉による文様有り 底部周縁釉剥離 内面底部砂目有り	丹波 60%	
	第14図-9 図版10-9	合子	陶器	口径 6.8 cm 器高 2.7 cm 底径 4.2 cm	外面体部と内面に灰釉を施す 口縁部と底部露胎	伊賀・信楽 50% 内面に付着物有り 19c	
	第14図-10 図版10-10	染付皿	白磁	口径 9.5 cm 器高 2.4 cm 高台径 4.4 cm	口縁部輪花 外面文様有り 内面全体に藤文様 高台量付露胎	瀬戸 95% 19c	
	第14図-11 図版10-11	染付碗蓋	白磁	口径 (9.0) cm 器高 6.0 cm つまみ径 3.6 cm	外面体部に分割して文様有り 内面口縁部文様有り 見込み岩波文と圏線有り つまみ内銘有り 量付露胎	肥前 70% 19c前半	
	第14図-12	染付碗	白磁	口径 (12.0) cm 器高 5.3 cm 高台径 4.4 cm	外面丸文 見込み二重圏線有り 蛇の目釉剥ぎ アルミナ塗布 高台量付露胎	肥前 25% 19c前半	
	第14図-13 図版10-13	染付碗	白磁	口径 (11.5) cm 器高 6.5 cm 高台径 5.6 cm	広東形 外面草花文 見込み岩波文と圏線有り 高台量付露胎	肥前 70% 18c末～ 19c前	
	第14図-14 図版10-14	ミチュア製品	素焼き	長さ 6.2 cm 幅 2.9 cm 高さ 0.9 cm	硯 表面に雲母粉付着	在地 100%	
	第14図-15 図版10-15	硯	石	長さ (5.7) cm 幅 4.8 cm 高さ 0.9 cm	粘板岩	40%	
	竈3	第15図-16 図版10-16	受台	陶器	口径 6.0 cm 器高 4.2 cm 底径 4.0 cm	灰釉 内面と外面底部露胎	伊賀・信楽 80% 19c
		第15図-17	皿	陶器	口径 (7.7) cm	ロク口成形	25%
		第15図-18 図版10-18	播鉢	陶器	口径 (24.9) cm 器高 8.7 cm 底径 12.0 cm	クシ目一単位11本 見込みに放射状の播目有り一単位10本 内面底部焼き台跡有り 外面底部砂付着	明石 40% 18c後～ 19c前
第15図-19		播鉢	陶器	口径 (24.8) cm	クシ目一単位10本 内外面に鉄釉を施す 片口有り	丹波 15% 19c前～ 中	
第15図-20 図版10-20		青花碗	白磁	口径 (9.6) cm 器高 4.9 cm 高台径 3.8 cm	内外面口縁部圏線有り 見込み人物文と圏線有り 高台量付露胎	中国製 60% 焼き継ぎ有り 高台内朱書き有り	

表6 第169次調査遺物観察表(1)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
竈3	第15図-21 図版10-21	色絵皿	白磁	口径 (13.9) cm 器高 2.8 cm 高台径 7.6 cm	内面体部を分割し宝珠文の色絵と赤絵を交互に配す 見込み色絵で椀閣文 色絵は黒で縁取り 外面体部蔓草文 高台露胎	三田 40% 19c前～後
	第15図-22	染付碗	白磁	口径 (11.8) cm	外面丸文 見込みに二重圏線有り	肥前 35% 18c後半
	第15図-23	染付碗	白磁	口径 (10.3) cm	外面風景文 内外面口縁部墨弾きの如意頭文	瀬戸・美濃 20% 19c
竈4	第15図-24 図版10-24	染付鉢	白磁	口径 (18.2) cm 器高 9.8 cm 高台径 10.4 cm	型打ち成形 八角形 芙蓉手風 内外面体部に松と墨弾きの竹文を交互に配す 見込みに梅樹文 高台量付露胎	肥前 70% 焼き継ぎ有り 18c末～19c前
	第15図-25 図版11-25	皿	青磁	長径 16.8 cm 器高 3.8 cm 高台径 11.1 cm	型押し成形 内面体部唐草文 見込み花文 高台量付露胎	三田 95% 19c前半
	第15図-26 図版11-26	赤絵碗	白磁	口径 9.4 cm 器高 5.0 cm 高台径 3.8 cm	外面網目文 内面口縁部網目文 高台量付露胎	80% 焼き継ぎ有り 高台内朱書き有り 19c前半
SK84	第15図-27 図版11-27	碗	陶器	口径 (9.0) cm 器高 4.8 cm 高台径 3.1 cm	口縁端反り 内外面体部透明釉 口縁に赤褐色釉が掛かる 高台周辺露胎	伊賀・信楽 50% 19c前半
	第15図-28 図版11-28	碗	陶器	口径 7.3 cm 器高 6.0 cm 高台径 4.4 cm	筒形 外面横縞文 高台部露胎	伊賀・信楽 95% 19c前半
	第15図-29 図版11-29	紅皿	白磁	口径 4.5 cm 器高 1.4 cm 高台径 1.1 cm	型押し成形 外面口縁より下露胎	肥前 100% 19c前半
	第15図-30 図版11-30	染付碗	白磁	口径 11.4 cm 器高 6.4 cm 高台径 6.9 cm	広東形 外面捻花文 見込み鷲文と圏線有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 80% 18c末～19c前
	第15図-31 図版11-31	染付碗	白磁	口径 (10.3) cm 器高 6.0 cm 高台径 5.9 cm	広東形 外面草花文 見込み寿字文と圏線有り 高台量付露胎	肥前 80% 18c末～19c前
SK43	第16図-32	土師皿	素焼き	口径 (6.8) cm	口ク口成形	在地 25% 口縁煤付着
	第16図-33	土師皿	素焼き	口径 6.4 cm 器高 1.4 cm	口ク口成形 底部糸切り痕有り	在地 25% 口縁煤付着
	第16図-34 図版11-34	碗	陶器	口径 (8.0) cm 器高 5.8 cm 高台径 4.3 cm	鍔手風 外面口縁と内面鉄釉 外面体部鉛釉 高台量付露胎	伊賀・信楽 40%
	第16図-35	染付碗	白磁	口径 (8.8) cm 器高 5.2 cm 高台径 3.2 cm	外面矢羽根文 高台量付露胎	肥前 25% 18c前半
	第16図-36 図版11-36	染付碗	白磁	口径 (13.0) cm 器高 6.7 cm 高台径 5.0 cm	外面草花文 見込みコンチャク印判五弁花高台内銘と二重圏線有り 量付露胎	肥前 50% 外面釉が虫食い状に剥けている 18c中～後
	第16図-37 図版11-37	紅皿	白磁	口径 4.9 cm 器高 1.7 cm 高台径 1.4 cm	型押し成形 外面下半部露胎	肥前 65% 内外面貫入 18c中頃
	第16図-38 図版11-38	染付皿	青磁	口径 (14.4) cm 器高 4.5 cm 高台径 7.8 cm	内面体部青磁 見込みと外面白磁 外面体部唐草文 見込み波文と二重圏線有り 高台内銘と圏線有り、量付露胎	肥前 50% 外面貫入 18c前半
竪穴状遺構1	第16図-39 図版11-39	皿	陶器	口径 (17.8) cm 器高 5.7 cm 高台径 6.2 cm	灰釉 見込み蛇の目釉剥ぎ 高台周辺露胎	唐津 40% 17c後半
	第16図-40 図版12-40	紅皿	白磁	口径 4.5 cm 器高 1.4 cm 高台径 1.2 cm	型押し成形 外面口縁より下露胎	肥前 100% 19c

表7 第169次調査遺物観察表(2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
竪穴状 遺構2	第16図-41 図版12-41	ミチュア製品	素焼き	幅 3.8 cm 厚み 1.5 cm	人形(尼僧) 型押し成形 表面に着色された跡有り	60%
	第16図-42 図版12-42	ミチュア製品	素焼き	幅 4.0 cm 厚み 2.9 cm	人形(男子立像) 手捏ね成形 白色と赤色の粘土を使い分ける	90% 18c
	第16図-43	染付碗	白磁	口径 (10.7) cm 器高 5.3 cm 高台径 4.0 cm	外面体部コンニャク印判鶴文と若松文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 30% 内外面貫入 18c前半
	第16図-44 図版12-44	染付碗	白磁	口径 (9.5) cm 器高 5.5 cm 高台径 4.0 cm	外面花文 高台内二重方形枠渦福有り 高台量付露胎	肥前 45% 内外面に貫入 17c末~18c前
	第16図-45 図版12-45	染付碗	陶胎	口径 (15.0) cm 器高 6.1 cm 高台径 5.0 cm	内面体部梅樹文 見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ塗布 離れ砂付着 高台量付露胎	肥前 35% 内外面貫入 18c
竪穴状 遺構3	第16図-46 図版12-46	碗	陶器	口径 (12.4) cm 器高 8.7 cm 高台径 4.6 cm	呉器手 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 35% 内外面貫入 二次焼成受ける 17c中頃
	第16図-47 図版12-47	染付皿	陶胎	口径 (19.5) cm 器高 6.7 cm 高台径 3.2 cm	内面花文様 内面見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ塗布 高台量付露胎	肥前 40% 18c後半
	第16図-48 図版12-48	皿	陶器	口径 12.6 cm 器高 3.7 cm 高台径 4.2 cm	見込み蛇の目釉剥ぎ 外面下半部と高台露胎	唐津 50% 17c後半
	第16図-49	染付碗	白磁	口径 (8.4) cm 器高 5.4 cm 高台径 3.3 cm	外面雨降り文 高台量付露胎	肥前 40% 内外面貫入 18c
	第16図-50	染付碗	白磁	口径 (11.5) cm 器高 5.6 cm 高台径 4.5 cm	外面草花文 見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ塗布 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 40% 18c中頃
SK26	第16図-51 図版12-51	染付碗	白磁	口径 13.0 cm 器高 5.6 cm 高台径 4.9 cm	口縁端反り 見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ塗布 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 70% 19c前半
	第16図-52	紅皿	白磁	口径 (4.6) cm 器高 1.4 cm 高台径 1.5 cm	型押し成形 外面口縁より下露胎	肥前 25% 19c
	第16図-53 図版12-53	染付蕎麦猪口	白磁	高台径 7.8 cm	外面丸文 見込み寿字文と二重圏線有り 蛇の目凹型高台	肥前 60% 18c後半
	第16図-54 図版12-54	染付碗	白磁	口径 (11.4) cm 器高 6.1 cm 高台径 4.6 cm	外面丸文 内面口縁部四方禪文 見込みコンニャク印判五弁花と二重圏線 高台内渦福と圏線量付露胎 離れ砂付着	肥前 60% 18c中~後
	第16図-55 図版12-55	染付香炉	白磁	口径 (11.0) cm 器高 5.4 cm 高台径 5.5 cm	外面体部風景文 内面下半部露胎 砂付着 高台量付露胎 三足	肥前 50% 外面貫入 18c後半

表8 第169次調査遺物観察表(3)

第3節 第171次調査

所在地 伊丹市伊丹6丁目765番地

調査面積 423㎡

調査期間 平成8年5月7日～7月12日

担当者 兼康保明・工藤忍

1. 遺跡の概要

当調査地は有岡城跡・伊丹郷町遺跡のほぼ南端に位置し、東側は大坂道（旧街道）に面している。当地100m南東には有岡城鴨塚砦が所在する。最近の調査報告によりこの砦が古墳を利用し建設されていたことが推定されている。当地は伊丹郷町期には植松村に属する。『天保七年写文禄伊丹之図』を見ると、すでに道筋に沿って家並みが描かれており、同村には藁屋根と思われる家が並んでいる。後の『寛文九年伊丹郷町絵図』では板葺きか瓦屋根と思われる家並みに変わっている。

近隣の調査事例を見ると、当地西側の調査（第179次）において、18世紀中頃～後半の遺物が出土しており、この一帯にかけて江戸時代後半には町屋が建てられていたことが、明らかになっている。

（中略）

2. 調査の概要

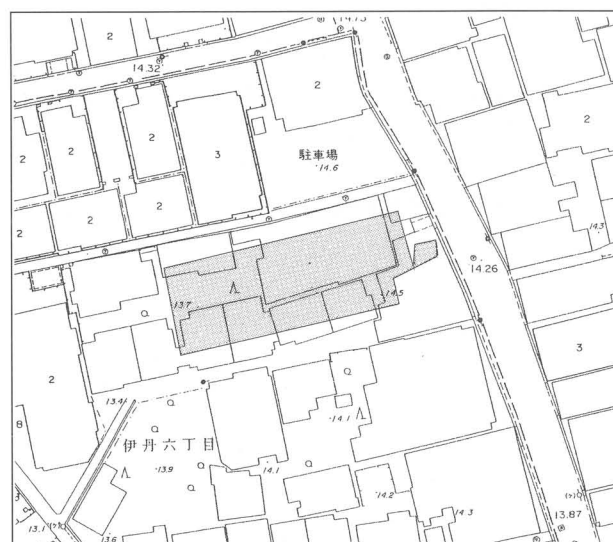
今回の調査は、震災復興・復旧事業としての共同住宅建設に伴うものである。伊丹市教育委員会が確認調査を行った結果、遺構・遺物が出土し、当地に伊丹郷町期の町屋が存在することが明らかになったため、工事によって破壊される範囲における全面調査を、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班の支援職員の派遣を得て実施した。

調査は、まず重機によって表土を除去し、その後、人力によって遺構の検出を行った。なお、調査は地山面のみ的一面で行った。適宜、記録作成・写真撮影を行った。

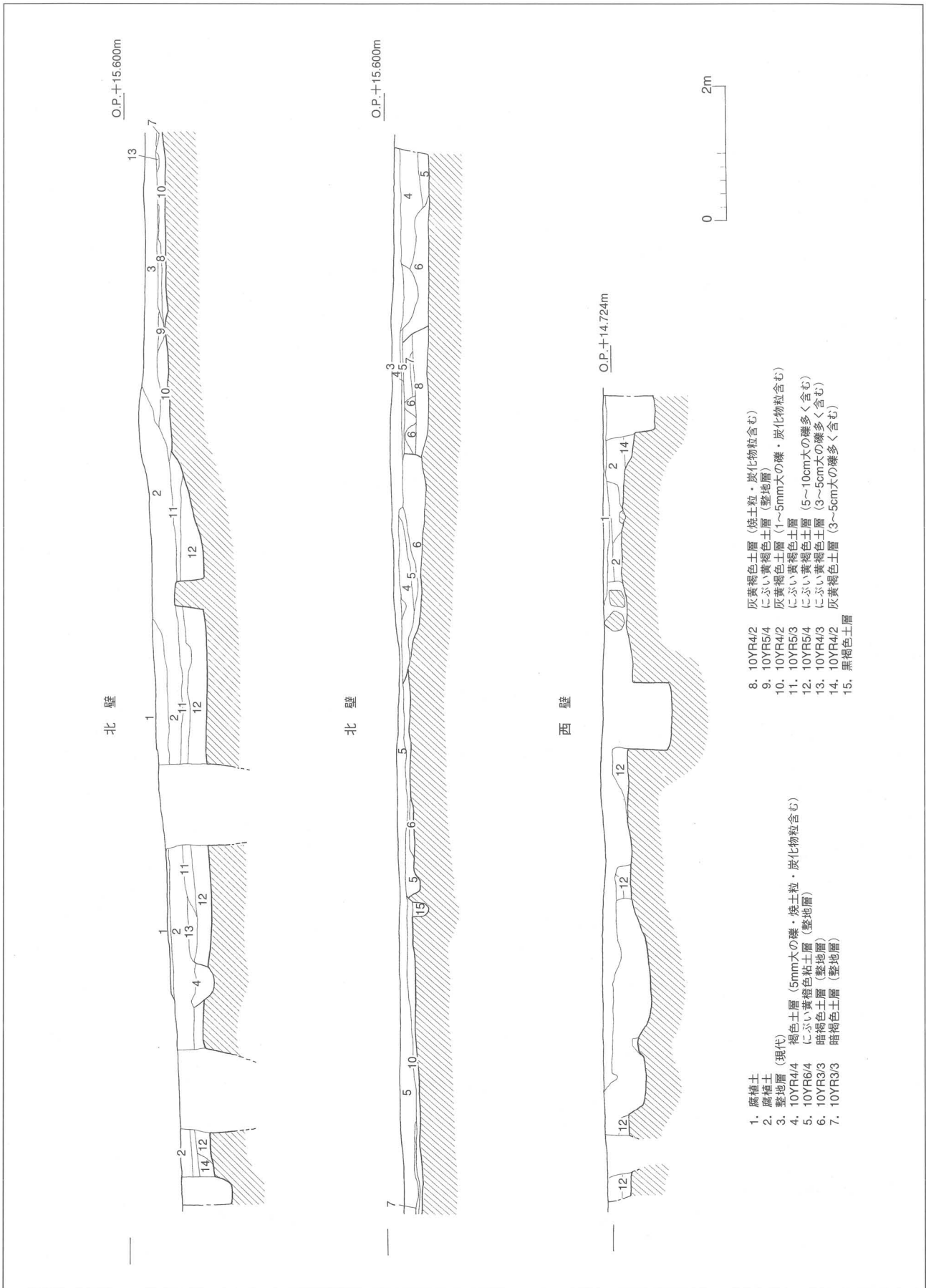
調査の結果、現地表面から地山面までは、調査区西側で60cm、東側で30cmとなっており、旧地形が西にいくに従ってゆるやかに下がっていくのがわかる。当地点が有岡城跡・伊丹郷町遺跡の南西端に位置し、有岡城外堀に向かって傾斜するのが明確になっ



第17図 第171次調査区位置図（1/2,500）



第18図 第171次調査区設定図（1/1,000）



第20図 第171次調査土層断面図 (北壁・西壁) (1/80)

た。(中畔)

3. 調査成果

今回の調査において検出された遺構は、溝状遺構5条(石組溝1条を含む)、土坑48基、井戸3基、ピット93基、性格不明遺構8基を検出した。ここでは主な遺構を取り上げ説明しておきたい。

溝状遺構

石組溝(第21図、図版13・15)

調査区の中央に位置し、東西方向の敷地境の溝である。その延長が既存建物の敷地境に対応する。検出全長5m、幅1m、内法幅20cmを測る。深さは5cmとごく浅く、底面には全域にわたって礫が敷かれていた。兩岸に川原石を並べ、一部に2段積みの箇所が見られる。

埋土から、土師皿(1)、肥前陶器皿(2)、肥前染付碗(3・4)・色絵碗・仏飯具が出土した。

SD33

調査区のほぼ中央に位置する。西側を石組溝に切られているが、方向を同じくする敷地境の溝である。検出全長5m、幅30cm、最深10cmを測る。東側は攪乱をうけている。

埋土から、土師皿、瀬戸・美濃焼天目碗、備前焼甕、堺焼播鉢、肥前白磁碗などが出土した。

SD15

調査区の中央、東壁際に位置する。SD33の延長方向にあることから同一遺構かと思われる。検出全長1.7m、幅50cm、最深20cmを測る。SK10・SK11・SK16に切られている。

出土遺物はなかった。

SD100(第23図、図版16)

調査区北東隅に位置する。南北方向の溝で、ゆるやかに弧を描く。北側は調査区外へ続いている。全長4.2m、幅40cm、最深20cmを測る。埋土は、5~10cm大の礫・炭化物を含む10YR 4/4 褐色土である。

埋土から、土師皿(39)・焙烙(41・42)、湊焼焼塩壺(40)、肥前陶器碗(43・44)、丹波焼火入れ(45)、肥前染付碗(46・47)が出土した。

井戸

SE97(第22図)

調査区の北東隅に位置する。北側を攪乱されている。検出面での平面は径1.3m、内径90cmの円形である。検出面から上層は人力にて掘削し、調査区埋め戻し時に重機にて断ち割り、底面を確認した。深さは2.7mを測る。素掘りの井戸で、断面形は筒形を呈す。

埋土上層から、焙烙(35)、丹波焼火入れ(36)、肥前染付皿(37)、丸瓦(38)、キセルの吸い口などが出土している。

SE129

調査区のほぼ中央、石組溝の北に位置する。平面は径90cmの円形である。井戸上部は攪乱されており、検出面から約1.5m掘り下げたが完掘していない。

埋土から、土師皿、肥前染付碗・合子蓋・徳利・青磁碗が出土している。

SE132(第23図、図版16)

調査区中央西寄りに位置する。平面は径1mの円形を呈す。検出面から80cm掘り下げたが完掘していない。

埋土から、肥前染付蓋物蓋(48)・染付皿(49・50)・染付碗(51)・青磁染付碗(52)などが出土している。

埋桶**SK40 (図版31)**

調査区ほぼ中央、石組溝の南に位置する。掘り方の平面は長径1.4m、短径1.3mの楕円形を呈し、深さは50cmを測る。底面は平坦で、径80cmの底板と底から15cmの壁板をもつ木桶が残存する。底板上には砂が10cm堆積していた。

埋土から、焙烙、丹波焼播鉢、唐津焼鉢、肥前染付碗・青磁皿、陶器碗などが出土している。

SK42 (第22図、図版13・14・16)

調査区ほぼ中央、SK40の西に位置する。掘り方の平面は長径2m、短径1.4mの楕円形を呈し、深さは60cmを測る。底面は平坦で、径1mの底板と底から25cmの壁板をもつ木桶が残存する。底板上には砂が20cm堆積していた。

埋土から、丹波焼播鉢 (27)、瓦質浅鉢 (28)、肥前染付碗 (29・30) ・染付鉢 (31)、貝類などが出土している。

土坑**SK7 (第21図、図版14・15)**

調査区北東に位置する。平面は径1.8mの円形を呈し、深さは70cmを測る。底面は平坦で、径90cmの円形で、砂が5cm堆積する。壁面西側はほぼ垂直に立ちあがり、東側はゆるやかに外傾する。

埋土から、土師皿 (5・6・7) ・焙烙 (8・9)、肥前陶器碗 (13)、肥前白磁皿 (10) ・染付皿 (11) ・色絵皿 (12) ・染付碗 (14・16・17・18・20・21) ・小碗 (19) ・赤絵紅猪口 (15) ・白磁蕎麦猪口 (22)、伊賀・信楽焼碗、播鉢など多くの遺物が出土している。

SK11 (第21図、図版15)

調査区東壁際に位置し、SD15を切っている。平面は径80cmの円形を呈し、深さは70cmを測る。

埋土から、丹波焼火入れ (23) ・播鉢 (24)、肥前陶器皿 (25)、肥前染付碗 (26) が出土している。

SK68 (第22図)

調査区東壁際に位置し、東側は調査区外にあり、南側は攪乱されている。平面は隅丸方形で現存一辺1.6m、深さ20cmを測る。

埋土から、丹波焼播鉢 (32) が出土している。

SK79 (第22図、図版16)

調査区北東に位置する。平面は長径80cm、短径70cmの楕円形を呈す。深さは25cmを測る。底面はU字状である。

埋土から、焙烙 (33) ・肥前染付碗 (34) が出土している。

SK83

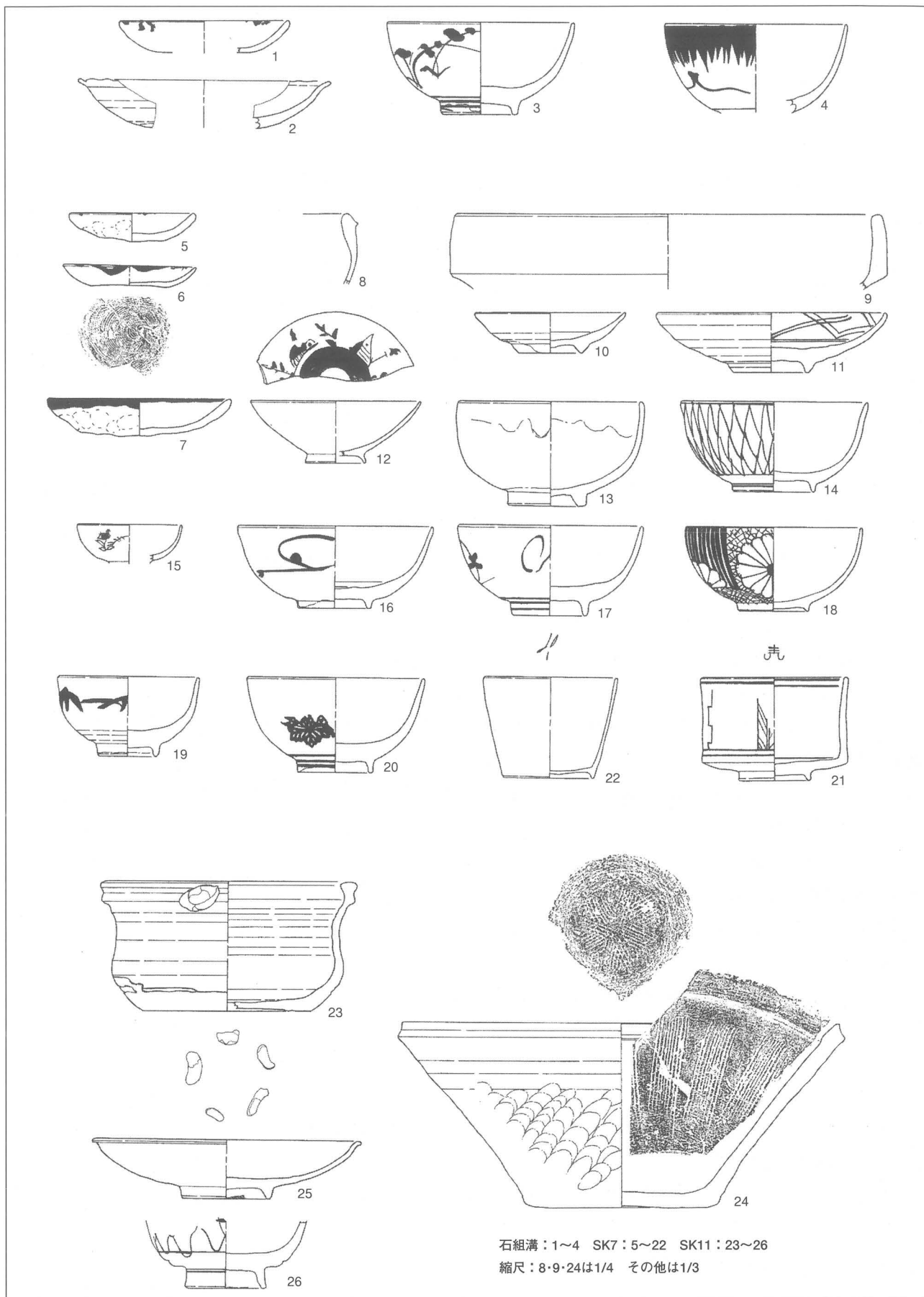
調査区中央北よりに位置する。平面は径1.1mの円形を呈す。深さは40cmを測る。底面は平坦で、断面は垂直に立ち上がる。

埋土より、肥前白磁皿・染付広東碗・染付碗、瀬戸・美濃焼磁器碗、銭などが出土している。

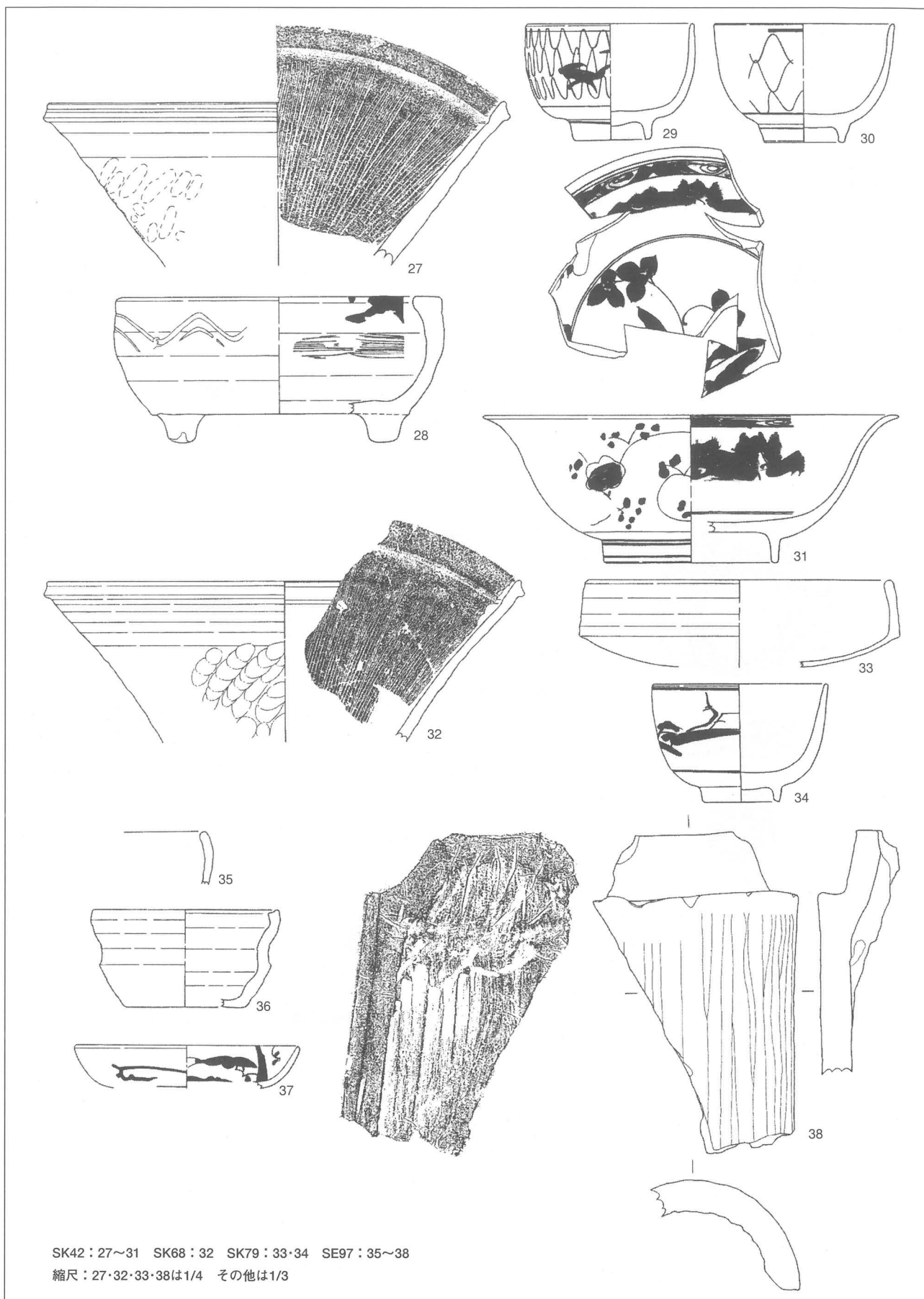
SK133 (第23図、図版16)

調査区のほぼ中央に位置し、北側を既存の井戸とSE132に切られている。平面は一辺2.2mの隅丸方形と推定される。深さは10cmを測る。

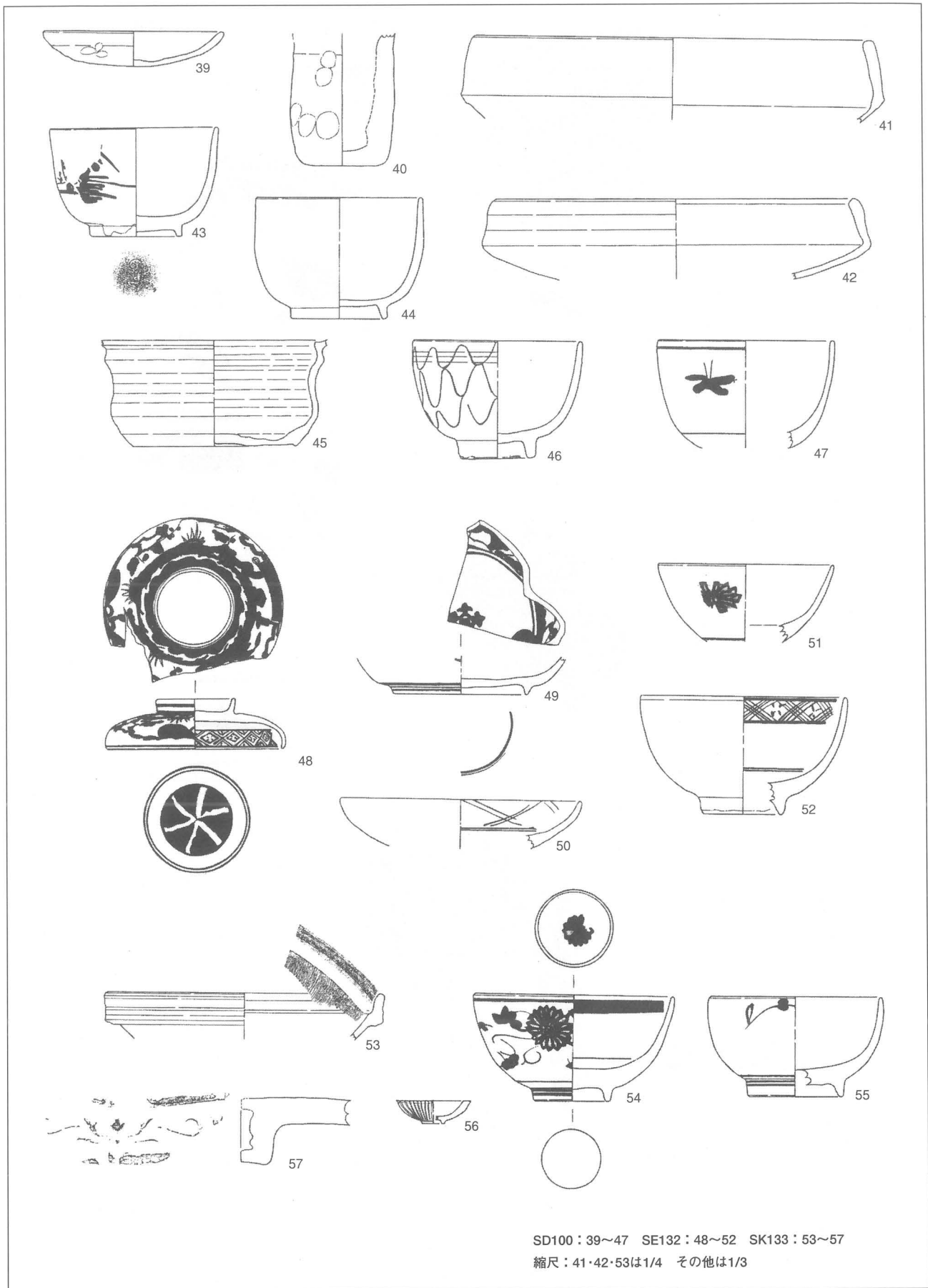
埋土から、堺・明石焼播鉢 (53)、肥前染付碗 (54・55) ・白磁紅皿 (56)、軒平瓦 (57) などが出土している。
(兼康・工藤・中畔)



第21図 第171次調査出土遺物実測図（1）



第22図 第171次調査出土遺物実測図(2)



第23図 第171次調査出土遺物実測図(3)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
石組溝	第21図-1	土師皿	素焼き	口径 (9.4) cm	手捏ね成形 内面ヨコナデ	在地 30% 口縁煤付着
	第21図-2	皿	陶器	口径 (13.9) cm	口縁部輪花 飴釉 見込み蛇の目釉剥ぎ 高台周辺露胎	肥前(内野山窯) 35% 17c後半
	第21図-3 図版15-3	染付碗	白磁	口径 10.4 cm 器高 5.2 cm 高台径 4.1 cm	外面体部草花文 見込み蛇の目釉剥ぎ 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 75% 18c前半
	第21図-4	染付碗	白磁	口径 (10.2) cm	外面口縁雨降り文 見込み蛇の目釉剥ぎ	肥前 30% 18c前半
SK7	第21図-5 図版15-5	土師皿	素焼き	口径 6.9 cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 100% 口縁煤付着
	第21図-6	土師皿	素焼き	口径 (7.4) cm 器高 1.2 cm	口口成形 底部糸切り痕有り	在地 50% 口縁煤付着
	第21図-7	土師皿	素焼き	口径 10.2 cm 器高 2.1 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ 口縁ヨコナデ	在地 80% 口縁煤付着
	第21図-8	焙烙	素焼き		底部外型成形 内外面口縁部から体部にかけてヨコナデ	口縁部のみ5%
	第21図-9	焙烙	素焼き	口径 (31.8) cm	底部外型成形 内外面口縁部から体部にかけてヨコナデ 外面底部に離れ砂付着	口縁部のみ20% 全体に煤けている
	第21図-10 図版15-10	小皿	白磁	口径 (8.4) cm 器高 2.3 cm 高台径 3.6 cm	見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ砂塗布 高台露胎	肥前 50% 18c後～19c中
	第21図-11	染付皿	白磁	口径 (12.8) cm 器高 3.5 cm 高台径 4.3 cm	内面二重格子文 見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ塗布 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 60% 18c後半
	第21図-12 図版15-12	色絵小皿	白磁	口径 (9.5) cm 器高 3.5 cm 高台径 3.4 cm	内面体部鳥文と舟文 見込み蛇の目釉剥ぎ 釉剥ぎの上にな絵付けで波文を描く 高台量付露胎	肥前 50%
	第21図-13 図版15-13	碗	陶器	口径 (10.2) cm 器高 5.9 cm 高台径 4.3 cm	灰釉 見込み目跡3ヶ所有り 高台内円刻有り 高台周辺露胎	60% 二次焼成受ける
	第21図-14 図版15-14	染付碗	白磁	口径 (10.4) cm 器高 5.1 cm 高台径 4.5 cm	外面網目文 高台量付露胎	肥前 45% 二次焼成受ける 18c前半
	第21図-15	赤絵紅猪口	白磁	口径 (5.8) cm	外面体部花蝶文	肥前 30%
	第21図-16	染付碗	白磁	口径 (10.8) cm 器高 4.7 cm 高台径 4.0 cm	外面草花文 見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ砂塗布 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 50% 18c
	第21図-17 図版15-17	染付碗	白磁	口径 (10.3) cm 器高 5.1 cm 高台径 4.0 cm	外面草花文 高台内銘有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 40% 内外面貫入 18c前半
	第21図-18 図版15-18	染付碗	白磁	口径 9.8 cm 器高 4.8 cm 高台径 4.8 cm	外面窓絵と氷裂菊花文 高台量付露胎	肥前 50% 18c前半
	第21図-19	染付小碗	白磁	口径 (7.8) cm 器高 4.5 cm 高台径 3.2 cm	外面体部笹文 高台量付露胎	肥前 30% 18c
	第21図-20	染付碗	白磁	口径 (9.8) cm 器高 5.4 cm 高台径 4.2 cm	外面体部コンニャク印判桐文 高台量付露胎	肥前 35% 18c前半

表9 第171次調査遺物観察表(1)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK7	第21図-21	染付碗	白磁	口径 (8.0) cm 器高 4.8 cm 高台径 4.0 cm	筒形 外面一部に矢羽文 見込み銘有り 高台 量付露胎 離れ砂付着	肥前 50% 18c後～ 19c初
	第21図-22 図版15-22	蕎麦猪口	白磁	口径 (7.4) cm 器高 5.2 cm 高台径 5.0 cm	高台量付露胎	肥前 70% 内外面貫 入する 18c中頃
SK11	第21図-23 図版15-23	火入れ	陶器	口径 (13.4) cm 器高 7.3 cm 底径 9.4 cm	把手1ヶ所残存	丹波 40% 口縁部に 敲打痕有り 内面灰被 り
	第21図-24	播鉢	陶器	口径 (32.8) cm 器高 18.8 cm 底径 11.2 cm	クシ目一単位9本 見込み一単位9本 外面体部 にナデアゲ痕残る	丹波 25% 見込み周 辺の播目磨耗する 17c前半
	第21図-25	皿	陶器	口径 (14.6) cm 器高 3.3 cm 高台径 4.9 cm	口縁部端反り 灰釉 見込み砂目5ヶ所有り 高台量付露胎 砂目跡5ヶ所有り	肥前 30% 17c
	第21図-26	染付碗	白磁	高台径 4.2 cm	外面に網目文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 30% 高台焼き 歪み有り 17c中頃
SK42	第22図-27	播鉢	陶器	口径 (34.3) cm	クシ目一単位7本 体部上部から下位にかけて ナデアゲ痕残る 口縁部から体部ヨコナデ	丹波 30% 17c中頃
	第22図-28	浅鉢	瓦質	口径 (13.2) cm 器高 8.2 cm	外面体部に2条の波状文を描く 口縁部から体 部ヨコナデ 脚1ヶ所残存 内外面に雲母粉付 着	20% 内面口縁部煤付 着
	第22図-29 図版16-29	染付碗	白磁	口径 (9.8) cm 器高 6.5 cm 高台径 4.3 cm	外面網目文(捕魚) 高台量付露胎 離れ砂付	肥前 70% 17c中頃
	第22図-30	染付碗	白磁	口径 (10.0) cm 器高 6.7 cm 高台径 4.7 cm	外面網目文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 20% 17c中頃
	第22図-31 図版16-31	染付鉢	白磁	口径 (23.1) cm 器高 8.3 cm 高台径 9.3 cm	外面花唐草文 内面山水文 見込み花文	肥前 35%
SK68	第22図-32	播鉢	陶器	口径 (35.4) cm	クシ目一単位8本 外面体部下半にナデアゲ痕 有り 口縁部から体部ヨコナデ	丹波 10% 17c中頃
SK79	第22図-33	焙烙	素焼き	口径 (22.6) cm	底部外型成形 底部内外面に金雲母付着 内外 面口縁部から体部にかけてヨコナデ	20% 外面全体煤ける
	第22図-34 図版16-34	染付碗	白磁	口径 9.7 cm 器高 6.7 cm 高台径 4.1 cm	外面体部山水文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 80% 全体に貫 入 17c中頃
SE97	第22図-35	焙烙	素焼き		内外面口縁部から体部ヨコナデ	5% 部分的に煤けて いる
	第22図-36	火入れ	陶器	口径 (10.4) cm 器高 5.5 cm 底径 6.6 cm	外面底部に灰釉掛かる	丹波 20%
	第22図-37	染付皿	白磁	口径 (12.4) cm	内面体部蔓草文	肥前 15%
	第22図-38	丸瓦	瓦質	厚み 2.3 cm	凸面は縦方向のヘラナデ 凹面は内タタキ痕 吊紐痕と布袋痕有り	60%
SD100	第23図-39	土師皿	素焼き	口径 10.1 cm 器高 2.0 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内外面口縁部ヨコ ナデ 内面ナデ	在地 45%
	第23図-40	焼き塩壺	素焼き	底径 3.6 cm	内面口縁部ヨコナデ 体部と底部に布目痕有り 外面体部縦方向のケズリ指押さえの後ヨコナ デ 口縁部ヨコナデ	90% 17c中頃

表10 第171次調査遺物観察表(2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SD100	第23図-41	焙烙	素焼き	口径 (29.8) cm	底部外型成形 内外面口縁から体部ヨコナデ	10% 底部煤けている
	第23図-42	焙烙	素焼き	口径 (27.2) cm	底部外型成形 内外面口縁から体部ヨコナデ	20% 内外面底部煤けている
	第23図-43 図版16-43	碗	陶器	口径 9.4 cm 器高 6.2 cm 高台径 5.2 cm	外面体部呉須による楼閣山水文 高台内に「清水」の刻印有り 高台周辺露胎	肥前(京焼風) 80% 17c後半
	第23図-44 図版16-44	碗	陶器	口径 (9.2) cm 器高 6.9 cm 高台径 5.2 cm	高台量付露胎	肥前 45%
	第23図-45 図版16-45	火入れ	陶器	口径 (12.8) cm 器高 6.2 cm 底径 (9.2) cm	ロク口成形	丹波 35% 口縁部に 敲打痕有り
	第23図-46 図版16-46	染付碗	白磁	口径 (9.4) cm 器高 6.7 cm 高台径 3.7 cm	外面網目文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 70% 17c中頃
	第23図-47	染付碗	白磁	口径 (9.8) cm	外面体部蝶文	肥前 35% 17c中頃
SE132	第23図-48 図版16-48	染付碗蓋	白磁	口径 9.8 cm 器高 2.9 cm つまみ径 4.5 cm	外面体部梅樹文 内面口縁部四方禪文 見込み羊歯文と二重圏線有り つまみ量付露胎	肥前 90% 18c後半
	第23図-49	染付皿	白磁	高台径 (7.5) cm	内面文様有り 見込みコンニャク印判五弁花と二重圏線有り 高台内圏線有り 高台量付露胎	肥前 25% 18c前半
	第23図-50	染付皿	白磁	口径 (13.6) cm	内面体部二重格子文 見込み二重圏線有り	肥前 15% 18c後半
	第23図-51	染付碗	白磁	口径 (9.8) cm	外面体部コンニャク印判熨斗文	肥前 20% 18c前半
	第23図-52	染付碗	青磁	口径 (11.6) cm 器高 6.7 cm 高台径 4.4 cm	外面青磁 内面と高台内白磁 内面口縁部四方禪文 高台量付露胎	肥前 40% 18c後半
SK133	第23図-53	播鉢	陶器	口径 (20.6) cm	クシ目一単位14本	堺・明石 2%
	第23図-54 図版16-54	染付碗	白磁	口径 11.2 cm 器高 6.3 cm 高台径 4.0 cm	外面コンニャク印判菊文と染付唐草文を併用 内面口縁丸文 見込みコンニャク印判菊文と二重圏線 高台内圏線有り 高台量付露胎	肥前 75% 17c末～ 18c前
	第23図-55	染付碗	白磁	口径 (9.6) cm 器高 5.7 cm 高台径 5.2 cm	外面草花文 高台銘有り 高台量付露胎	肥前 15% 18c前半
	第23図-56	紅皿	白磁	口径 (4.2) cm 器高 1.3 cm 高台径 1.2 cm	型押し成形 外面体部から高台露胎	肥前 25% 19c前半
	第23図-57 図版16-57	軒平瓦	瓦	上弦幅 11.5 cm 瓦当高 3.8 cm 周縁厚 1.9 cm	均整唐草文 瓦当面に雲母粉付着	10%

表11 第171次調査遺物観察表(3)

4. まとめ

溝状遺構は複数検出されたが、調査区東半分の中央部分で旧街道に直交するように連続して検出された溝状遺構は、現在の地割に合致することから、屋敷境の排水路のような性格が考えられる。また、溝状遺構と軸を平行して桶を埋めた土坑2基が検出された。当該地は旧街道に面しているため、旧街道の側溝の存在を確認するために、本調査終了後、調査区外の東側で調査をおこなったが、旧街道の側溝と思われる遺構は確認されなかった。

(兼康・工藤)

第4節 第173次調査

所在地 伊丹市中央2丁目428-4

調査面積 16㎡

調査期間 平成8年3月27日～3月30日

担当者 小長谷正治・細川佳子

1. 遺跡の概要

本調査地点は、有岡城期には惣構えの西側、町家側（城下町側）に位置し、江戸時代の伊丹郷町では昆陽口村にあたる。昆陽口村は有岡城の廃城後、文禄年間（1592～96）にはすでに成立していた。当地点の北側は伊丹郷町から西に向かう昆陽口通り（東西道路）に面している。

江戸時代の伊丹郷町が描かれた絵図のうち、『寛文九年伊丹郷町絵図』（註1）をみると、当地点に家並は描かれていないが、『延宝五年伊丹郷町地味委細絵図』（註2）をみると当地点に家並が描かれている。寛文九年（1669）と延宝五年（1677）ではわずか8年の違いである。また、『元禄七年柳沢吉保領伊丹郷町絵図』（註3）によると、当地点は市兵衛の屋敷地であり、住人は「古手ウリ太郎兵衛」であることがわかる。

これまでの周辺の調査は、当地点から東へ30mの第145次調査地点では、有岡城期と考えられる溝が発見された。この溝は北側の昆陽口通りに平行して東西に走る。第145次調査以外では江戸時代前期に遡る遺構の検出例は少なく、江戸時代中期以降の遺跡が中心となっている。また、道路を挟んで北側の第51次A-1・A-4地区（註4）、第78次A-5地区（註5）等では、17世紀後半から19世紀代の時期の遺物・遺構が発見された。

2. 調査の概要

今回の調査は、阪神・淡路大震災の個人被災者自らが使用する住宅の再建に伴う発掘調査であるため、震災復旧・復興事業の適用を受け国庫補助事業として実施した。

敷地内の中央、北側の道路から1mの距離をおいたところに東西2m、南北8mの調査区を設定した。表土から地山までを重機により取り除き、すべての遺構は地山面上で検出した。

3. 調査成果

基本的な層序は、地山の上に、暗褐色土層（第

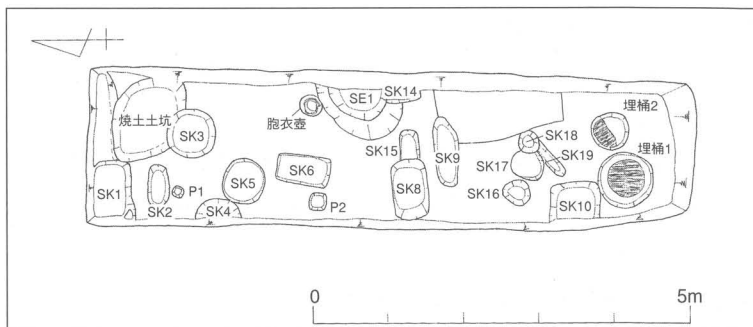


第24図 第173次調査調査区位置図（1/2,500）



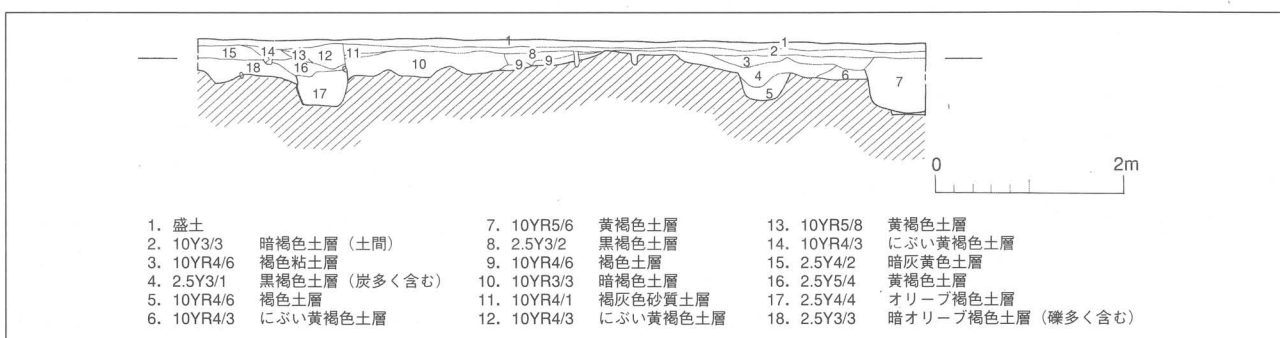
第25図 第173次調査調査区設定図（1/500）

10層)が20~25cm程度堆積し、その上に解体された前の建物の土間(第2層)が約5cm、その上に盛土(第1層)が5~10cm程度堆積している。表土から地山までは30~40cmを測る。東壁の方の土層をみると、調査区の北半部からは焼土・炭を含む焼土層の厚い堆積が認められた。



第26図 第173次調査全体図(1/100)

地山面のみでの1面で調査を実施し、検出した遺構は井戸跡1基、埋桶跡2基、胎衣壺1基、焼土土坑1基、土坑15基、小穴2基である。検出した遺構の時期は概ね江戸時代中期から後期にかけてのもので、江戸時代前期、それ以前に遡るものはない。出土遺物は遺物整理箱に1箱である。



第27図 第173次調査土層断面図(西壁)(1/80)

SE1 (第28図、図版17・18)

調査区の東壁際に位置し、半円形で検出された素掘りの井戸である。井戸の掘り方の壁面は黄褐色砂礫層の地山である。径は1.2m、検出面から下に25cm程のところ、径が80cmとなり狭くなる。深さは検出面から約60cm掘り下げたところで調査の安全を考慮して完掘しなかった。埋土の上層部は焼土層となっていて、焼けた瓦・壁土・炭などが多く含まれていた。

出土遺物には、土師皿(1)、瀬戸・美濃焼皿(2)、丹波焼播鉢(3)などがある。3はクシ目が6本単位で口縁端部は直立し、縁帯をつくる特徴がある。また、図示していない遺物では唐津系青緑釉陶器碗等がある。出土遺物から遺構の年代は17世紀後半と考えられる。

胎衣壺(第28図、図版17)

SE1の北側から検出された。上部が破損しているため壺の底部と、その内部に落ち込んだ蓋が逆の状態の内側を上にして検出された。掘り方の径28cm、深さ15cmを測る。壺と掘り方の間には川砂が充填されている。胎衣壺は出産時の胎盤等を収め、これを床下に埋めたものである。

出土した胎衣壺は、蓋(12)と身(13)で、素焼きである。蓋のつまみは上部がへこみ、その中央部がわずかに突出する。身は底部のみ残っている。

埋桶1(SK11)(図版17)

調査区の南側、敷地の奥側に位置し、埋桶2の西側である。円形を呈し、掘り方の径は73cm、深さ23cmを測る。平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がる。底板のみが残っていて、側板は残っていない。底板の径は50cmを測る。堺・明石焼播鉢、伊賀・信楽焼土瓶・灯明皿、柿釉小皿等の小片が出土し、19世紀代の遺構であると考えられる。

埋桶 2 (SK12) (図版17)

調査区の南側、敷地の奥側に位置し、埋桶 1 の東側である。円形を呈し、掘り方の径は50cm、深さ12cmを測る。平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がる。底板のみが残っていて、側板は残っていない。底板の径は40cmを測る。埋桶 1 と並んで検出され、埋桶 1 の方が大きく、大小セットとなり便所遺構と考えられる。肥前白磁染付碗、伊賀・信楽焼土瓶の注口等の出土遺物から、埋桶 1 と同じ時期で19世紀代の遺構であると考えられる。

焼土土坑 (第28図、図版17・18)

調査区の北側、敷地の表側に位置する。南側をSK 3 に切られている。ほぼ方形を呈し、東西1.05m、南北1.05m、深さ26cmを測る。平坦な底面から緩やかに外傾しながら立ち上がる。埋土は焼土層で、焼けた壁土・炭・焼土などを含み、瓦は含んでいない。

出土遺物は丹波焼播鉢 (4)、備前焼匣鉢 (5)、肥前白磁染付碗 (6・7) 等である。4 は口縁部のみで二次焼成を受けている。6 は外面にコンニャク印判で松文、高台内には圏線の中に「大明年製くずし」が施されている。7 は小碗で外面に唐草文、二次焼成を受けている。他に肥前陶器呉器手碗の底部等が出土し、17世紀後半の遺構と考えられる。

調査区の北半部で検出された焼土・炭を含む焼土層の厚い堆積層からは、唐津焼砂目積皿や肥前白磁染付碗等の遺物が出土している。

SK 1

調査区の北側、敷地の表側に位置する。平面形は方形と考えられる。東西検出長80cm、南北検出長55cm、深さ37cmを測る。西壁を見ると第 2 層の下の遺構であることがわかり、深さ57cmである。層序関係から見て新しい時期の遺構であると考えられる。平坦な底面から外傾して立ち上がる。埋土は黄色土層である。

出土遺物は備前焼德利頸部、柿釉鬚たらい、焙烙、土師皿、肥前白磁染付等の小片である。

SK 2

調査区の北側、敷地の表側に位置する。東西55cm、南北30cm、東西に長辺をもち、東西の両端が円形になる長円形の土坑である。深さ16cmを測る。出土遺物は陶器の小片である。

SK 3

調査区の北側、敷地の表側に位置する。北側は焼土土坑を切っており、焼土土坑よりも新しいことがわかる。円形を呈し、径64cm、深さ24cmを測る。平坦な底面から外傾しながら立ち上がる。出土遺物は丹波焼甕や焙烙等の小片である。

SK 4

調査区の北側、敷地の表側に位置し、平面形は円形であると考えられる。径60cm、深さ27cmを測る。平坦な底面から外傾しながら立ち上がる。埋土は褐色土層である。

SK 5

調査区の北側、敷地の表側に位置する。円形を呈し、径55cm前後、深さ 8 cmを測る。平坦な底面からほぼ垂直に近い状態で立ち上がる。出土遺物は土師質土器や備前焼等の小片である。

SK 6

SK 5 の南側に位置する。南北方向に長辺をもつ長方形で、東西40cm、南北70cm、深さ10cmを測り、平坦な底部からほぼ垂直に近い状態で立ち上がる。出土遺物は瓦質土器片がある。

SK 8

調査区の中央に位置し、東側はSK15を切っている。東西方向に長辺をもつ長方形である。東西80cm、南北46cm、深さ30cmを測る。平坦な底部から東西は緩やかに外傾しながら立ち上がり、南北はほぼ垂

直に立ち上がる。出土遺物は伊賀・信楽焼行平、肥前白磁染付碗、柿釉灯明皿等があり、19世紀代の遺構と考えられる。

SK9 (第28図、図版18)

調査区の中央、SK8の南側に位置する。東西97cm、南北33cm、東西に長辺をもち、東西の端が円形になる長円形の土坑である。深さ24cmである。

出土遺物は丹波焼甕(8)の口縁部、堺・明石焼播鉢(9)、肥前白磁染付碗蓋(10)、肥前白磁染付皿(11)などである。10は外面に寿字文、内面口縁部に四方襷文が帯状に施され、焼継ぎが施されている。11は型押し成形で口縁部が輪花、端部が口鋳である。19世紀前半の遺構と考えられる。

SK10

調査区の南側、敷地の奥側に位置し、平面形は方形と考えられる。東西検出長50cm、南北66cm、深さ30cmを測る。平坦な底面から南側は外傾して、北側は内傾気味に立ち上がる。埋土は黄褐色土層である。遺物は肥前白磁染付碗・端反の猪口、伊賀・信楽焼土瓶等の小片が出土し、19世紀代の遺構と考えられる。

SK14 (第28図、図版18)

SE1の南側に位置し、調査区の東壁際で検出された。北側はSE1の掘り方を切っている。形状は不明である。東西検出長20cm、南北検出長44cm、深さ17cmを測る。埋土は炭を多く含む焼土層である。

出土遺物は、焙烙(14)、肥前白磁染付皿(15)、肥前白磁染付碗(16)などである。14は難波洋三氏による分類(註6)のD類にあたる。15は粗製のくらわんか手で、内面に斜格子文が施され、見込みは蛇の目釉ハギである。16は底部のみで、見込みは蛇の目釉ハギである。18世紀後半の遺構と考えられる。

SK15

調査区の中央に位置する。西側はSK8に切られているため、明確にはわからないが方形であると考えられる。東西検出長40cm、南北25cm、深さ8cmである。

SK16

調査区の南側、敷地の奥側、SK10の北側に位置する。ほぼ円形を呈し、径35cm、深さ12cmを測る。

SK17

調査区の南側、敷地の奥側に位置し、東側をSK18に切られている。円形を呈し、径43cm、深さ5cmを測る。

SK18

調査区の南側、敷地の奥側、SK17の東側に位置する。円形を呈し、径30cm、深さ6cmを測る。

SK19

調査区の南側、敷地の奥側に位置し、北東側をSK18に切られている。北東から南西へ延びる溝状遺構である。検出長50cm、幅15cm、深さ12cmを測る。

4. まとめ

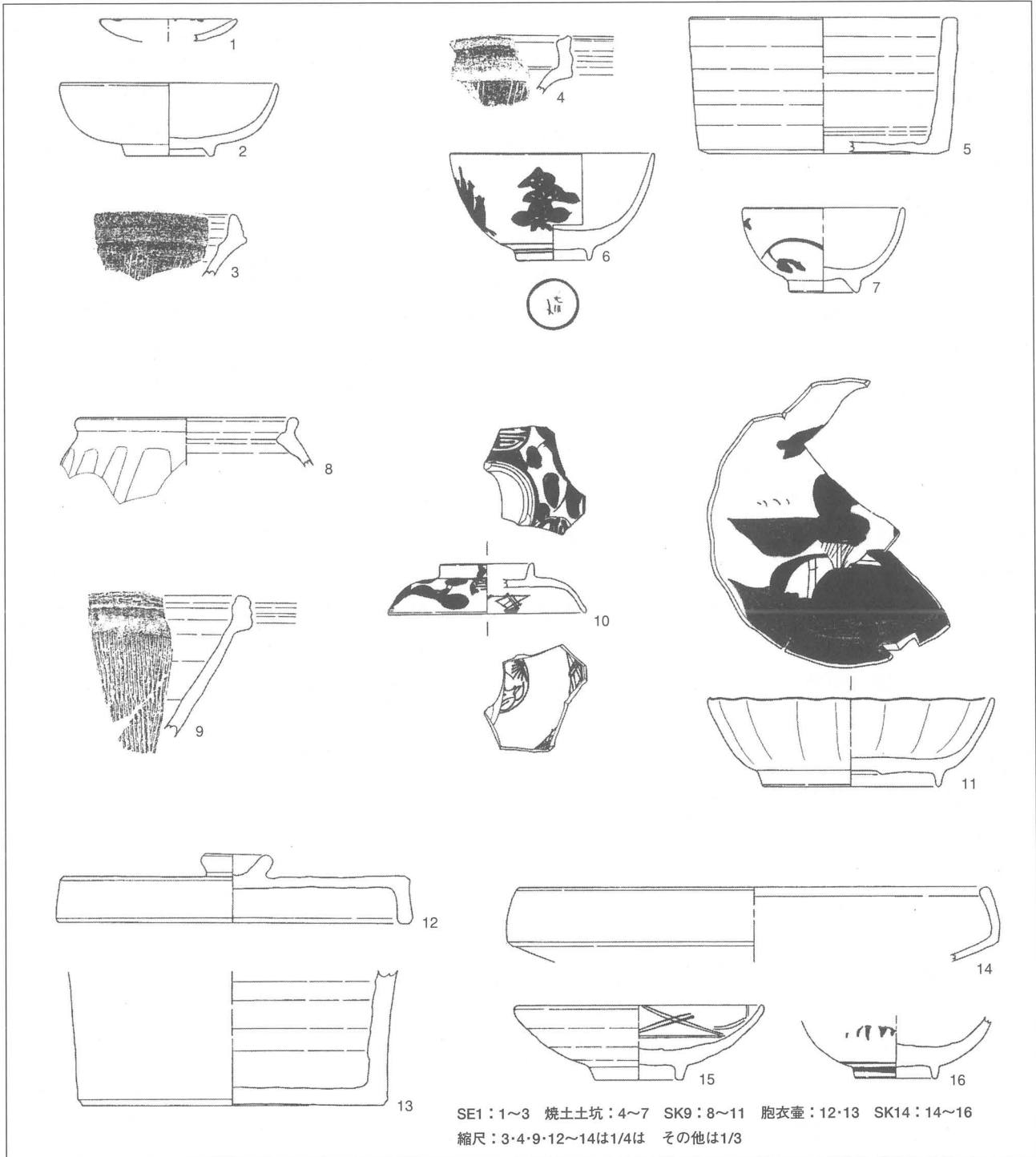
今回発見した最も古い時期の遺構は、SE1と焼土土坑で、17世紀後半と考えられる。焼土土坑は、焼土処理土坑のことで、火災の後、残滓を処理するために掘られた土坑で、このような土坑は伊丹郷町各所で発見されている。伊丹郷町では記録(註7)によると元禄年間(1688～1704)に3度大火があった。元禄元年(1688)井筒町より出火し160軒焼け、同12年の火事は天王町から出火して札幌の辻まで飛火し下市場まで焼け、同15年の火事は中少路村より出火し北之口町まで439軒焼けている。今回検出した焼土処理土坑がどの火事に該当するかは難しいが、火事の方向性等からみると元禄12年と考

えられる。これは遺構の時期とも一致する。

その他、SK14は18世紀後半、埋桶やその他の遺構は19世紀代のものである。

『元禄七年柳沢吉保領伊丹郷町絵図』(註8)によると、当地点は市兵衛の屋敷地で、住人は「古手ウリ太郎兵衛」であり、元禄7年(1694)には当地点に家が建っていたことがわかる。この建物はおそらく、元禄年間の大火により焼失し、その遺構が焼土土坑と考えられる。

今回発見した遺構の時期は概ね江戸時代中期から後期にかけてのもので、江戸時代前期以前に遡るものはなかった。おそらく、当地点は江戸時代中期以降になって町家に組み込まれていったと考えられる。(細川)



第28図 第173次調査出土遺物実測図

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SE1	第28図-1	土師皿	素焼き	口径 (6.8) cm	手捏ね成形 内外面ナデ	在地 10% 口縁煤付着
	第28図-2 図版18-2	皿	陶器	口径 10.8 cm 器高 3.7 cm 高台径 4.4 cm	灰釉 見込みに具須で梅文か 高台内輪トチン跡有り 高台量付露胎	瀬戸焼 90% 18c後半
	第28図-3	播鉢	陶器		クシ目一単位6本 口縁部から体部ヨコナデ	丹波 5% 17c後半
焼土土坑	第28図-4	播鉢	陶器		クシ目単位不明	丹波 1% 外面体部二次焼成受ける 18c前半
	第28図-5 図版18-5	匣鉢	陶器	口径 (13.2) cm 器高 6.9 cm 底径 11.6 cm	口縁から体部ヨコナデ 底部周辺ヘラケズリ 底部に重ね焼き痕有り	備前 30%
	第28図-6 図版18-6	染付碗	白磁	口径 10.2 cm 器高 5.5 cm 高台径 3.6 cm	外面コンニャク印判松文(二種類) 高台内簡略化した「大明年製」銘と圏線有り 高台量付露胎	肥前 80% 18c前半
	第28図-7 図版18-7	染付小碗	白磁	口径 (8.0) cm 器高 4.3 cm 高台径 3.4 cm	外面唐草文 高台量付露胎	肥前 35% 二次焼成受ける 18c
SK9	第28図-8	甕	陶器	口径 10.8 cm	外面鉄釉 肩部から灰釉を流し掛け 内面鉄釉	丹波 25%
	第28図-9	播鉢	陶器		クシ目一単位12本 外面体部横方向のケズリ	堺・明石 20%
	第28図-10	染付碗蓋	白磁	口径 (10.0) cm 器高 2.5 cm つまみ径 4.6 cm	外面に寿字の丸文・雲文を描く 内面口縁部四方禪文 見込みに文様有り つまみ量付露胎	肥前 25% 焼き継ぎ痕有り つまみ内に朱文字有り
	第28図-11 図版18-11	染付皿	白磁	口径 (14.4) cm 器高 4.5 cm 高台径 8.8 cm	型打ち成形 口縁部輪花 口錆 内面山水文 蛇の目凹型高台 高台内蛇の目部釉剥ぎ	肥前 50% 19c前半
袍衣壺	第28図-12	蓋	素焼き	口径 23.7 cm 器高 4.6 cm つまみ径 4.2 cm	内面回転ナデ 外面口縁部回転ナデ 外面天井部離れ砂付着	80%
	第28図-13	壺	素焼き	底径 20.4 cm	内面体部から底部及び外面体部回転ナデ 外面底部離れ砂付着	35%
SK14	第28図-14	焙烙	素焼き	口径 (31.6) cm	底部外型成形 内外面口縁から体部ヨコナデ	5% 底部煤付着
	第28図-15 図版18-15	染付皿	白磁	口径 (12.2) cm 器高 3.8 cm 高台径 4.4 cm	内面二重格子文 見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ塗布 高台量付露胎	肥前 45% 18c後半
	第28図-16	染付碗	白磁	高台径 4.1 cm	外面に文様有り 見込み蛇の目釉剥ぎ 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 35% 18c前半

表12 第173次調査遺物観察表

- 註1 八木哲浩編『伊丹古絵図集成』伊丹資料叢書6 伊丹市立博物館 1982年
 註2 前掲註1
 註3 前掲註1
 註4 伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所『有岡城跡・伊丹郷町V』1997年
 註5 伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所『有岡城跡・伊丹郷町IV』1995年
 註6 難波洋三「徳川氏大坂城期出土の炮烙」『難波宮址の研究第九』(財)大阪市文化財協会 1992年
 註7 古野将盈『有岡庄年代秘記』伊丹市史第4巻所収 伊丹市役所 1968年
 註8 前掲註1

第5節 第176次調査

所在地 伊丹市中央2丁目425-3

調査期間 平成8年5月13日～5月31日

調査面積 115㎡

担当者 伊藤敏行・河合修

1. 遺跡の概要

当地域は中世の伊丹城、戦国期の有岡城、近世の酒造りを中心とした伊丹郷町が重複して営まれる。現在、かつての有岡城の城域に相当する地域がひとつの遺跡として捉えられており、昭和50年から伊丹市教育委員会や大手前女子大学（現・大手前大学）などにより綿密な調査が行われている。今回の調査は土地所有者による住宅建設工事に伴う事前調査である。伊丹市教育委員会では北側に隣接する地域で検出された遺構が継続するものと判断し、試掘調査は行わずに、本調査を行うことに決定した。



第29図 第176次調査調査区位置図 (1/2,500)

2. 調査の概要

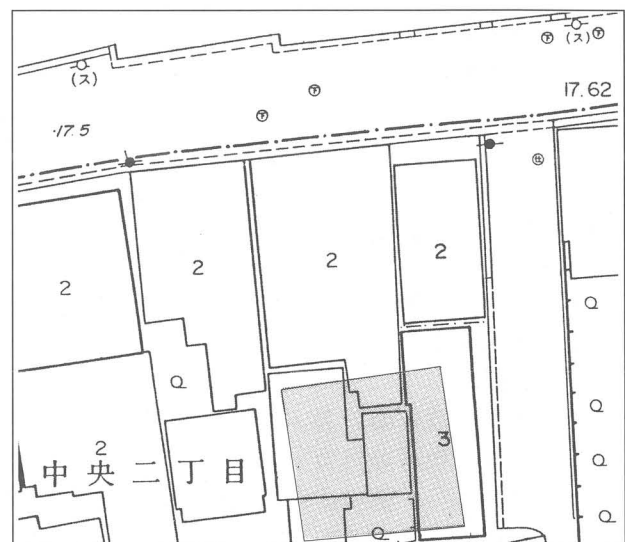
本調査では、隣接地の成果により近世の屋敷地が検出されると予測していた。遺構は現地表下約1.6mの地山（橙色礫混じり粘質土）面上で精査を行った結果、江戸時代中期から末にかけての土坑4基、井戸1基、戦国期のものと思われる井戸1基が検出された。これらの土坑からは肥前系の陶磁器のほかに焙烙、焜炉などが出土している。井戸は何れも人の背丈以上の深さになると考えられたため、安全を考慮して完掘することは出来なかった。肥前系の陶磁器を出土した黒褐色の覆土の井戸に対し、出土遺物はなかったが橙灰色を呈する覆土の井戸を戦国期の井戸と考えた。

一方で、これらの遺構が検出されるとともに、震災前まで営業していた風呂屋の構造物などにより大きく破壊され、検出面の随所に攪乱が及んでいることも判明した。攪乱層中からも大量の近世陶磁器が出土しており、かつては濃密な遺構が存在していたことが推測される。

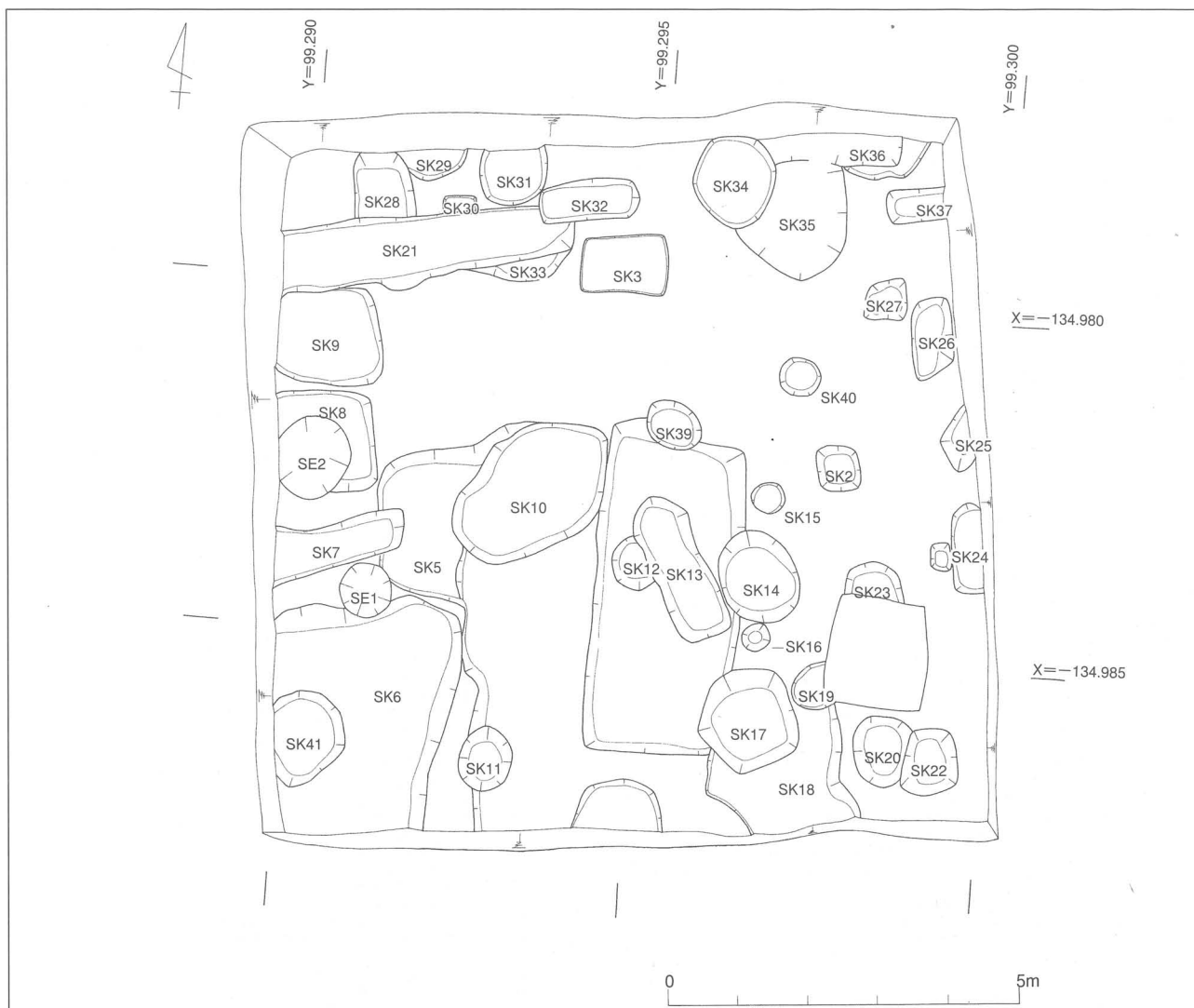
3. 調査成果

SK 2 (第33図、図版21)

長軸65cmの方形の土坑で、深さ26cmを測る。出土遺物には、糸切り底の柿釉灯明皿（1・2）、伊賀・信楽焼灯明受皿（3・4）、青花碗（7）



第30図 第176次調査調査区設定図 (1/500)



第31図 第176次調査全体図 (1/100)

などがある。

SK 3 (第33図、図版20・21)

長軸1.2m、短軸75cm、深さ24cmの長方形の土坑で、底面及び側面に約2cmの灰色の粘土を貼っている。その上に、焜炉と破損した石臼が置かれたように検出された。出土遺物には、柿釉灯明皿(8)、焙烙(9)、伊賀・信楽焼土瓶(12)などがある。

SK 4 (図版20)

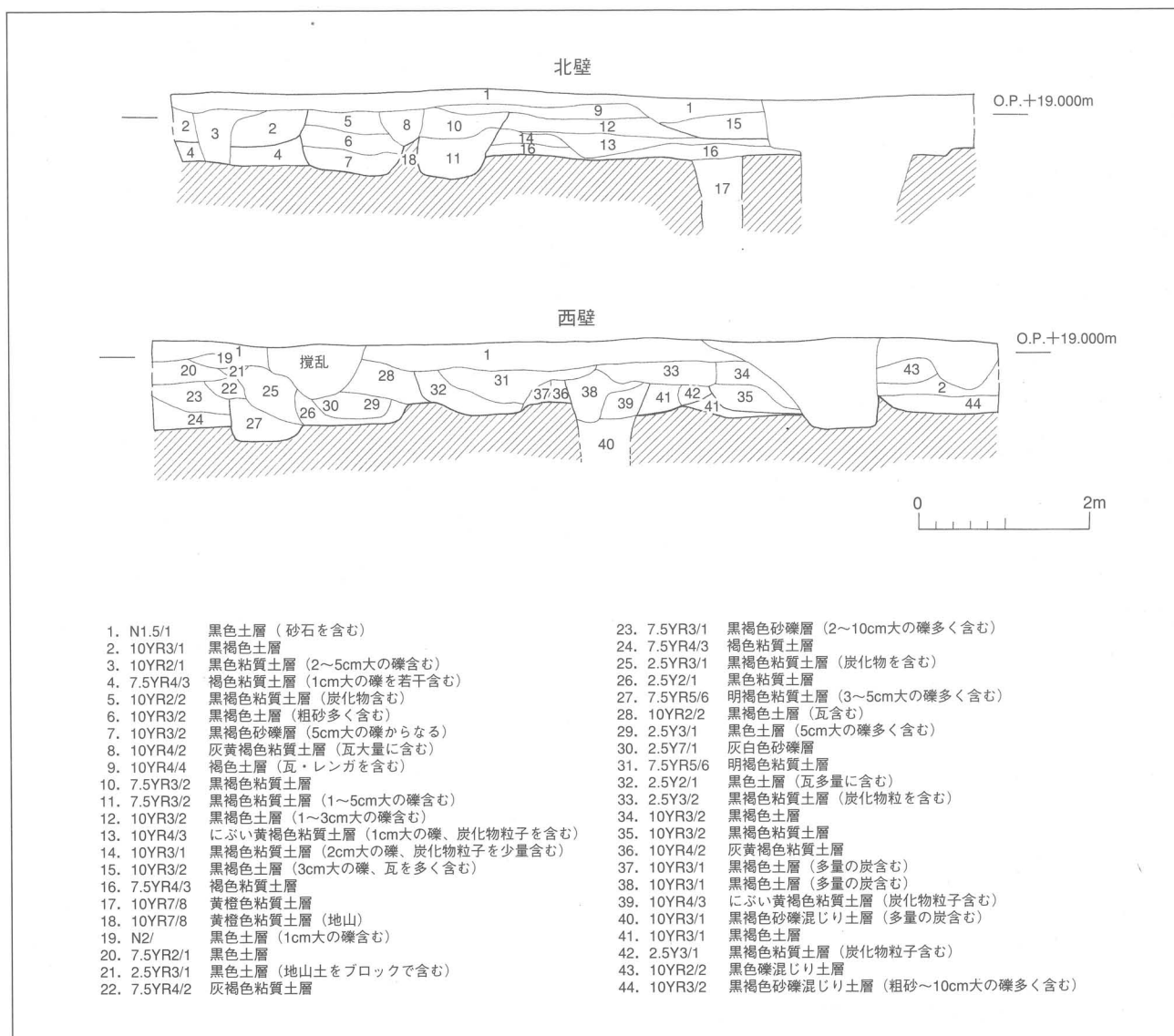
長軸4.5m、短軸2.05m、深さ14cmの浅い長方形の土坑である。覆土に拳大の礫が多く含まれ、その中に焙烙、天目碗などが混入して出土している。

SK 5

長軸5.5m以上、短軸1.8m以上、深さ11cmの長方形の土坑で、北西隅に長軸2.05m、短軸1.2mの土坑状の張出しを有する。本来別の遺構であった可能性もある。遺構確認段階では、SK 4との間に部分的に約10cm程度の間隔が把握できたが、調査結果では塵取り状になり連続している。出土遺物にはやや幅があるが、SK 4と平行し形状も近似することから、SK 4と同様の時期の遺構と考えられる。

SK 7 (第33図、図版21)

西壁にかかり、遺構の東側が調査区外に延びている。検出長1.4m、短軸55cm、深さ23cmの長方形



第32図 第176次調査土層断面図 (北壁・西壁) (1/80)

の土坑である。肥前染付磁器碗 (18)、染付磁器蓋 (16)、瀬戸・美濃焼染付磁器碗 (17・19) などが出土した。

SK10 (第34図、図版21)

長軸2.54m、短軸1.64m、深さ28cmの楕円形の土坑である。出土遺物には、柿釉灯明皿 (21)、伊賀・信楽焼の碗 (24)、肥前染付磁器鉢 (28) などがある。

SK13 (第34図、図版21)

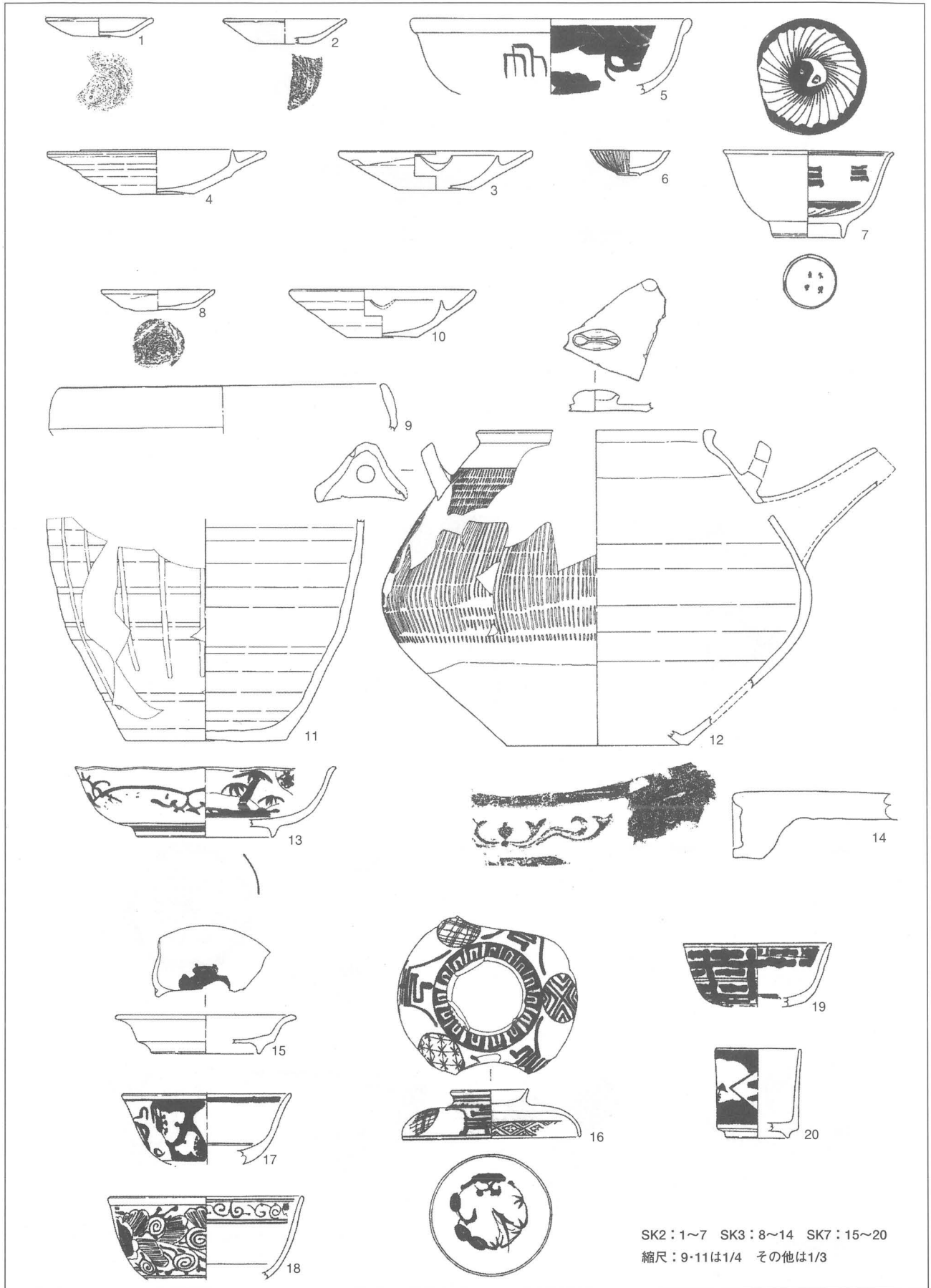
長軸2.1m、短軸75cmの浅い土坑である。出土遺物には、土師皿 (29)、焙烙 (30)、肥前染付磁器網目文碗 (35)、丹波焼火入れ (33) などがあり、17世紀中頃から後半の時期と考えられる。

SK28 (第34図、図版22)

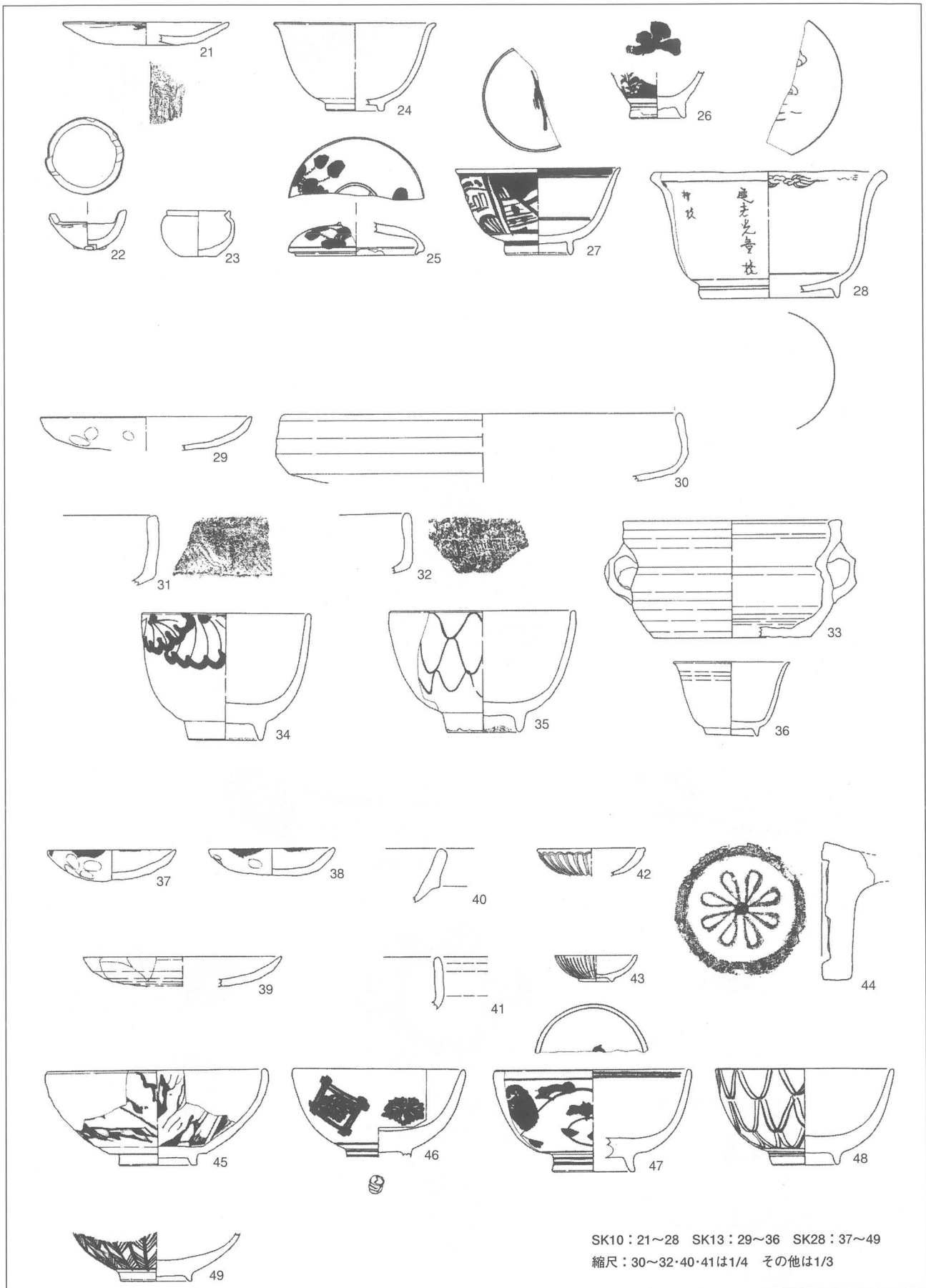
長軸1.5m以上、短軸88cm、深さ34cmの方形の土坑である。出土遺物は多く、土師皿 (37・38)、紅皿 (42・43)、肥前染付磁器碗 (46~49) がある。

SK35 (第35図、図版20・22・23)

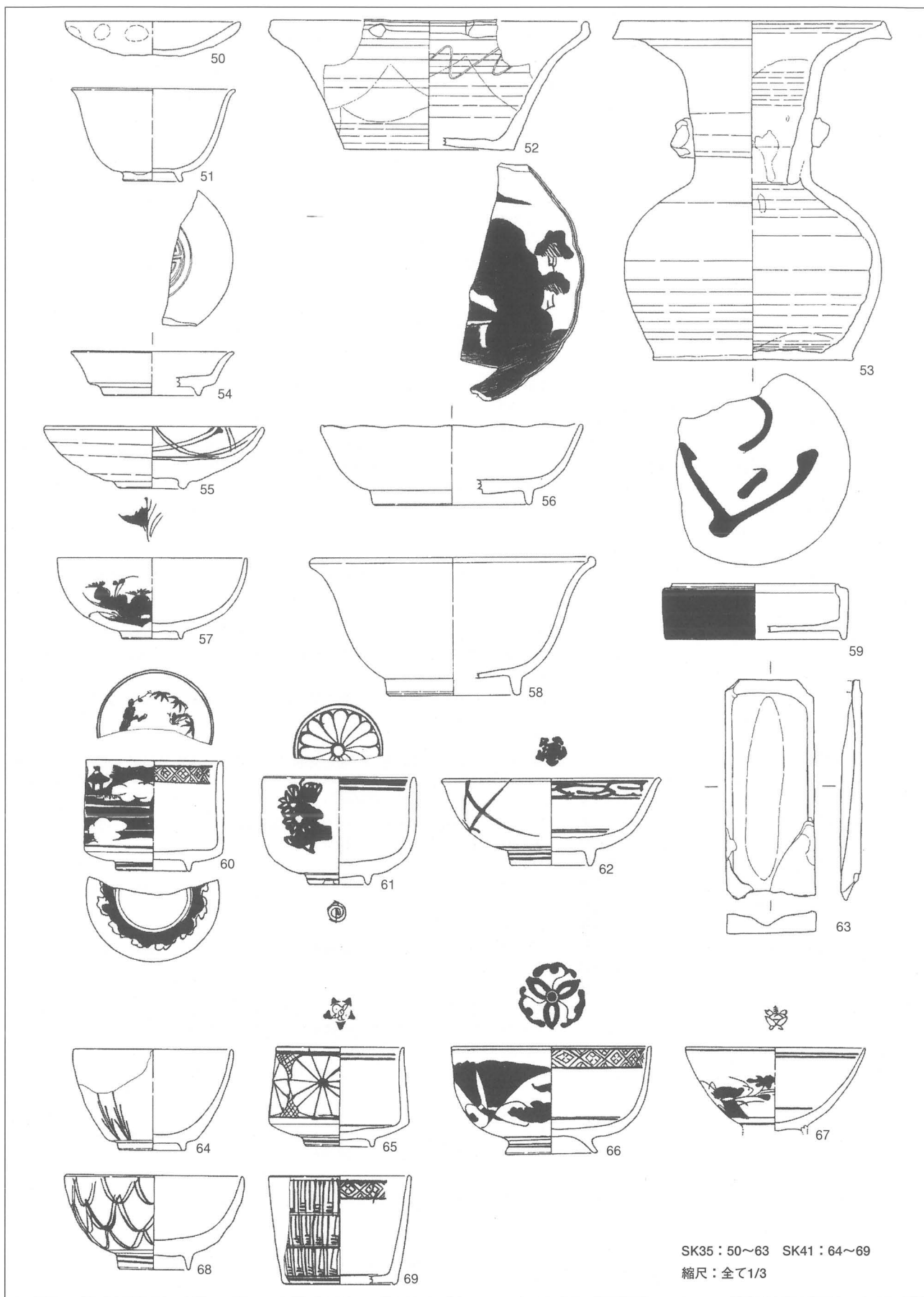
南北1.7m、東西1.6m以上の不整形の土坑である。出土遺物は多く、肥前染付磁器碗 (57・60~62)、同皿 (55・56)、丹波焼鉢 (52)、瀬戸・美濃焼花瓶 (53) などがある。



第33図 第176次調査出土遺物実測図(1)



第34図 第176次調査出土遺物実測図(2)



第35図 第176次調査出土遺物実測図 (3)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK2	第33図-1 図版21-1	皿	軟質施釉 陶器	口径 6.0 cm 器高 1.1 cm 底径 2.9 cm	柿釉 ロク口成形 底部糸切り痕有り(左巻き) 外面露胎(あるいは剥離か)	60% 口縁煤付着
	第33図-2	皿	軟質施釉 陶器	口径 (6.7) cm 器高 1.4 cm 底径 (2.8) cm	柿釉 ロク口成形 底部糸切り痕有り 外面露胎	25%
	第33図-3 図版21-3	受皿	陶器	口径 10.8 cm 器高 2.2 cm 底径 4.2 cm	灰釉 受け部に1ヶ所切り込み有り 外面露胎	伊賀・信楽 75% 19c前半
	第33図-4	受皿	陶器	口径 (12.3) cm 器高 2.5 cm 底径 4.2 cm	透明釉 外面露胎	50% 19c前半
	第33図-5	染付皿	白磁	口径 (15.6) cm	口縁部玉縁状 外面源氏香文 内面墨弾きの文様有り	肥前 15% 19c前半
	第33図-6	紅皿	白磁	口径 (4.6) cm 器高 1.4 cm 高台径 1.2 cm	型押し成形 外面下半部露胎	肥前 30% 19c前半
	第33図-7 図版21-7	碗	青磁	口径 9.5 cm 器高 4.9 cm 高台径 3.9 cm	口縁端反り 外面青磁 内面と高台内白磁 見込み対極文 内面体部算木文 高台内変形文字と二重圏線有り 高台畳付露胎	中国製 75% 18c後半
SK3	第33図-8	皿	土器	口径 (6.4) cm 器高 1.4 cm 底径 (2.4) cm	柿釉 ロク口成形 底部糸切り痕有り 底部周辺露胎	50% 口縁煤付着
	第33図-9	焙烙	素焼き	口径 (24.5) cm	内外面口縁部から体部ヨコナデ	5% 外面煤付着
	第33図-10	受皿	陶器	口径 (10.2) cm 器高 2.7 cm 底径 (4.0) cm	外面口縁から内面施釉 受部に1ヶ所切り込み有り 受け端部と外面体部から底部露胎	伊賀・信楽 25% 19c前半
	第33図-11	甕	陶器	底径 12.1 cm	外面鉄釉の上から灰釉を流し掛け 内面灰釉 底部砂目有り	丹波 25%
	第33図-12 図版21-12	土瓶	陶器	口径 (13.2) cm 器高 17.8 cm 底径 10.3 cm	灰釉 口縁端部と内面と外面下半部露胎 外面上半部にトビガンナを施す 土瓶蓋：灰釉 底部露胎 つまみ有り	伊賀・信楽 50% 外面下半部煤ける 19c前半
	第33図-13	染付皿	白磁	口径 (14.5) cm 器高 4.0 cm 高台径 (7.6) cm	口縁輪花 内面体部竹文 外面唐草文 高台内圏線有り 高台畳付露胎	肥前 15% 18c前半
	第33図-14	軒平瓦	瓦	上弦幅 (24.0) cm 瓦当高 3.6 cm 周縁厚 1.7 cm	均整唐草文	20%
SK7	第33図-15	皿	白磁	口径 (9.6) cm 器高 2.4 cm 高台径 (6.0) cm	見込み陰刻文 高台畳付露胎	瀬戸 40% 19c後半
	第33図-16 図版21-16	染付碗蓋	白磁	口径 9.9 cm 器高 2.8 cm つまみ径 4.3 cm	外面丸文と寿字文 内面口縁四方禪文 見込み環状松竹梅文と二重圏線有り つまみ畳付露胎	肥前 80% 18c後半
	第33図-17	染付碗	白磁	口径 (8.4) cm	口縁若干端反り 外面体部花文 見込み二重圏線有り	瀬戸 25% 19c前半
	第33図-18	染付碗	白磁	口径 (10.8) cm	口縁若干端反り 外面体部花文と唐草文 内面口縁唐草文 見込み圏線有り	肥前 25% 19c前半
	第33図-19	染付碗	白磁	口径 (8.2) cm	口縁若干端反り 内外面格子文 見込み文様有り	瀬戸 25% 19c前半
	第33図-20	染付猪口	白磁	口径 (4.7) cm 器高 5.1 cm 高台径 (3.4) cm	筒形 外面窓に山水文 高台畳付露胎	50%

表13 第176次調査遺物観察表(1)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK10	第34図-21	皿	軟質施釉陶器	口径 (9.4) cm 器高 1.3 cm 底径 (3.8) cm	柿釉 ロク口成形 底部糸切り痕有り 外面口縁より下露胎	20% 口縁煤付着
	第34図-22 図版21-22	ミニチュア製品	素焼き	口径 4.4 cm 器高 2.2 cm	渦型押し成形 内外面雲母粉付着 底部に脚3つ有り	100%
	第34図-23 図版21-23	ミニチュア製品	陶器	口径 3.6 cm 器高 2.6 cm 底径 2.0 cm	甕 ロク口成形 鉄釉 内面口縁より下露胎	95%
	第34図-24 図版21-24	碗	陶器	口径 (9.1) cm 器高 5.0 cm 高台径 3.2 cm	口縁部端反り 灰釉 高台周辺露胎	伊賀・信楽 50% 19c前半
	第34図-25	染付蓋物蓋	白磁	口径 (6.8) cm	外面体部草花文 口縁部露胎	肥前 45%
	第34図-26	染付小杯	白磁	高台径 3.0 cm	外面体部草花文 見込み文様有り 高台露胎 削り出し痕顕著	50%
	第34図-27 図版21-27	染付碗	白磁	口径 (9.2) cm 器高 4.9 cm 高台径 3.6 cm	外面体部扇子の中に海浜文 見込み文様と二重圏線有り 高台量付露胎	瀬戸 40% 19c前半
	第34図-28 図版21-28	染付鉢	白磁	口径 (12.8) cm 器高 7.2 cm 高台径 7.8 cm	口縁輪花 外面体部漢詩文 内面口縁雲流文 見込み文様と圏線有り 高台内圏線有り 高台量付露胎	肥前 30% 18c末～ 19c前
SK13	第34図-29	皿	素焼き	口径 (11.9) cm	手握ね成形 外面ナデ 内面丁寧なヨコナデ	25%
	第34図-30	焙烙	素焼き	口径 (30.0) cm	底部外型成形 内外面口縁部から体部ヨコナデ	15% 内外面底部煤付着
	第34図-31	焙烙	素焼き		底部外型成形 内面口縁部から体部ヨコナデ 外面体部掻き上げ痕有り(左上がり)	10% 胎土に雲母粉含む
	第34図-32	焙烙	素焼き		底部外型成形 内面口縁部から体部ヨコナデ 外面体部掻き上げ痕有り(左上がり)	10% 外面底部煤付着 胎土に雲母粉含む
	第34図-33 図版21-33	火入れ	陶器	口径 (12.1) cm 器高 6.6 cm 底径 9.0 cm	口縁部周辺に塗り土を施す 体部に耳1ヶ所残存	丹波 40%
	第34図-34 図版21-34	染付碗	白磁	口径 (9.4) cm 器高 7.2 cm 高台径 4.0 cm	外面菊花文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 45% 17c中頃
	第34図-35	染付碗	白磁	口径 (10.3) cm 器高 6.9 cm 高台径 4.0 cm	外面網目文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 25% 17c中頃
	第34図-36	小杯	白磁	口径 6.5 cm 器高 4.0 cm 高台径 3.0 cm	口縁部端反り 高台量付露胎	肥前 50% 17c中～ 後
SK28	第34図-37 図版22-37	皿	素焼き	口径 7.2 cm 器高 1.8 cm	手握ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	98% 口縁煤付着
	第34図-38 図版22-38	皿	素焼き	口径 7.0 cm 器高 1.5 cm	手握ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	98% 口縁煤付着
	第34図-39	皿	軟質施釉陶器	口径 (11.2) cm 器高 1.7 cm 底径 4.0 cm	柿釉 ロク口成形 底部ヘラケズリ 外面体部から底部露胎	10%
	第34図-40	焙烙	素焼き		底部外型成形 内外面口縁部から体部ヨコナデ 外面底部雲母粉付着	5%

表14 第176次調査遺物観察表(2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK28	第34図-41	焙烙	素焼き		内外面口縁部から体部ヨコナデ	5%
	第34図-42	皿	軟質施釉陶器	口径 (6.0) cm	柿釉 型押し成形	20%
	第34図-43	紅皿	白磁	口径 (4.7) cm 器高 1.5 cm 高台径 2.0 cm	型押し成形 外面下半部露胎	肥前 30% 18c中頃
	第34図-44 図版22-44	棟込め瓦	瓦	径 8.8 cm 周縁厚 1.7 cm 瓦当厚 1.4 cm	瓦当菊文(花卉数8枚) 瓦当面に布目痕有り	70%
	第34図-45 図版22-45	碗	陶器	口径 (12.4) cm 器高 5.4 cm 高台径 4.4 cm	内外面打刷毛目文 高台周辺露胎	瀬戸 30% 18c後
	第34図-46	染付碗	白磁	口径 (9.6) cm	外面コンニャク印判桐文 高台内渦福有り	肥前 40% 18c前半
	第34図-47 図版22-47	染付碗	白磁	口径 (10.8) cm 器高 5.8 cm 高台径 4.4 cm	外面コンニャク印判菊花文と唐草文 見込み文様と二重圏線有り 高台量付露胎	肥前 40% 18c前半
	第34図-48 図版22-48	染付碗	白磁	口径 9.9 cm 器高 5.5 cm 高台径 3.7 cm	外面二重網目文 高台量付露胎	肥前 50% 18c後半
	第34図-49	染付碗	白磁	高台径 3.9 cm	外面矢羽根文 高台量付露胎	肥前 20%
	SK35	第35図-50	皿	素焼き	口径 9.8 cm 器高 1.9 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 口縁ヨコナデ 内面ナデ
第35図-51		碗	陶器	口径 (9.1) cm 器高 5.2 cm 高台径 3.3 cm	口縁端反り 灰釉 高台露胎	伊賀・信楽 25% 内外面貫入 19c前半
第35図-52		鉢	陶器	口径 (17.6) cm 器高 7.3 cm 底径 9.6 cm	口縁部輪花 灰釉 外面体部下半の一部露胎 内面体部に沈線による波状文有り	丹波 25%
第35図-53 図版22-53		花瓶	陶器	口径 (14.6) cm 器高 14.2 cm 底径 11.2 cm	鉄釉 内面体部と外面底部露胎 頸部に2ヶ所耳有り	伊賀・信楽 60% 底部に墨書有り
第35図-54		皿	白磁	口径 (9.0) cm 器高 2.5 cm 高台径 (5.4) cm	木型打ち込み成形 見込み寿字の陰刻文 高台量付露胎	美濃 35% 19c中頃
第35図-55 図版22-55		染付皿	白磁	口径 12.3 cm 器高 3.6 cm 高台径 3.6 cm	内面二重格子文 見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ砂塗布 高台量付露胎	肥前 95% 18c後半
第35図-56 図版22-56		染付皿	白磁	口径 (14.8) cm 器高 4.6 cm 高台径 8.8 cm	型打ち成形 口縁部輪花、口鏤 内面山水文 蛇の目凹型高台 蛇の目部露胎	肥前 40% 19c前半
第35図-57 図版22-57		染付碗	白磁	口径 (10.6) cm 器高 4.6 cm 高台径 3.2 cm	外面薊と蝶文 見込み花文 高台量付露胎	肥前 45% 内外面貫入 18c前半
第35図-58 図版22-58		鉢	白磁	口径 (15.6) cm 器高 7.8 cm 高台径 7.2 cm	口縁折れ縁 高台量付露胎	肥前 30% 18c末～19c前
第35図-59		蓋物	白磁	口径 9.4 cm 器高 3.2 cm 高台径 10.0 cm	外面瑠璃釉 口縁部と高台内周縁露胎	肥前 60%
第35図-60 図版23-60		染付碗	白磁	口径 7.5 cm 器高 6.2 cm 高台径 4.0 cm	筒形 外面体部風景文 内面口縁部四方禪文 見込み環状松竹梅文と二重圏線有り 高台付近波文 高台量付露胎	肥前 40% 18c中～後

表15 第176次調査遺物観察表(3)

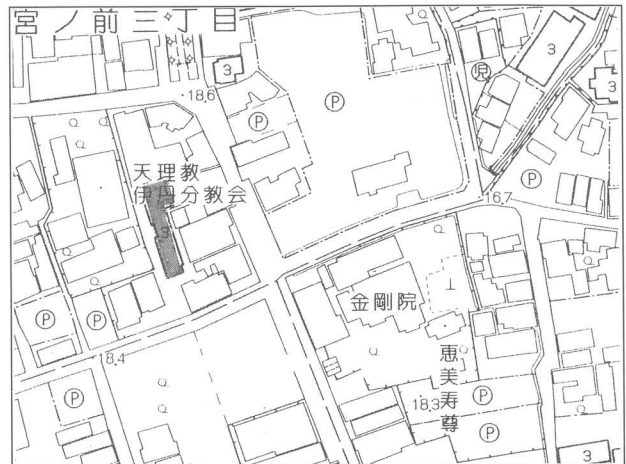
第6節 第181次調査

所在地 伊丹市宮ノ前3丁目他
調査期間 平成8年7月25日～8月27日
調査面積 190㎡
担当者 今村道雄・川口洋平

1. 遺跡の概要

有岡城跡・伊丹郷町遺跡はJR伊丹駅と阪急伊丹駅との間の市街地に位置し、その範囲は東西800m、南北1.7kmに広がる。遺跡は、標高16m～18mの猪名川右岸の台地上に立地し、平地との比高差は1.5～5m位である。

有岡城は、荒木村重が軍事的観点から段丘の比高差の大きい場所を選び築城した城である。現在本丸は、JR伊丹駅と道路に大きく挟られ旧状を失っている。有岡城が落城した後、城郭のほとんどは取り壊され、軍事都市としての機能を喪失した。江戸時代に至ると、伊丹は近衛家の領地になるとともに酒造業が栄え、伊丹の町は商人と酒蔵等で働く職人を中心に隆盛したことが知られている。

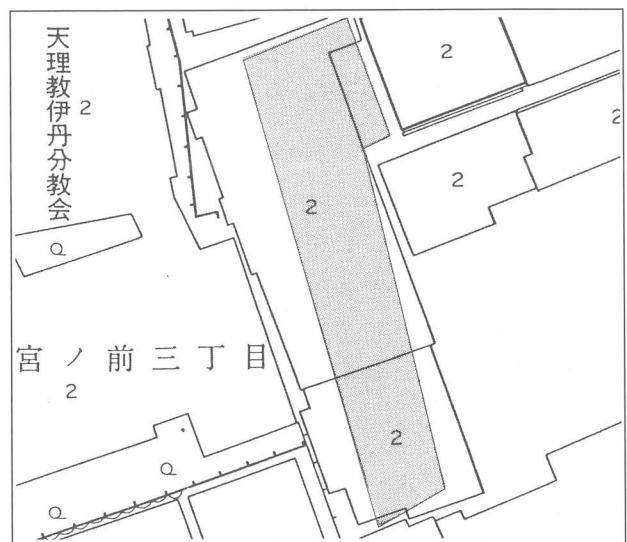


第36図 第181次調査調査区位置図 (1/2,500)

2. 調査の概要

本調査区は、標高T.P.+18mを測る平坦な段丘の西側寄りにある。段丘の比高は東側で約6mと高く、西側で約1.5mと低い。付近には猪名野神社が鎮座する。関連する江戸時代の絵図・文献によれば、東や南の通りに面して武家屋敷と大小の町家が立ち並んでいたようである。ただ、16・17世紀と江戸時代初期は、猪名野神社が立地していた以外は文献の記載も少なく、不明な点が多い。調査の結果、現地表40～60cm下から2面の遺構を検出した。上層の遺構は江戸時代中・後期を中心とするものであり、下層の遺構は江戸時代以前の有岡城段階とみられる。

上層遺構では1ヶ所の泉池とともに、18～19世紀代の火災整地を目的とした大型の方形土坑4基と、地割りの溝が中心的な遺構となる。この方形土坑内からは、18世紀代の肥前梅樹文碗・唐津刷毛目碗・現川碗、19世紀代の肥前広東碗・清朝風磁器・くらわんか・唐津刷毛目碗等が出土しており、地割り溝内からは、18世紀後半～19世紀代に属する肥前梅樹文碗・清朝風



第37図 第181次調査調査区設定図 (1/500)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK35	第35図-61 図版23-61	染付碗	白磁	口径 (8.4) cm 器高 6.1 cm 高台径 3.3 cm	外面コンニャク印判草花文 見込み菊文と二重 圏線有り 高台内渦福有り 高台畳付露胎	肥前 49% 17c末～ 18c前
	第35図-62 図版23-62	染付碗	白磁	口径 12.1 cm 器高 4.9 cm 高台径 4.6 cm	口縁若干端反り 外面折れ松葉文 内面口縁部連 弧文帯 見込みコンニャク印判五弁花と二重圏 線、蛇の目釉剥ぎ アルミナ塗布 高台畳付露胎	肥前 90% 18c後～ 19c初
	第35図-63	硯	石	幅 5.0 cm 高さ 1.2 cm	粘板岩	70%
SK41	第35図-64	碗	陶器	口径 8.8 cm 器高 5.7 cm 高台径 3.7 cm	外面体部に鉄絵の若松文 高台周辺露胎	伊賀・信楽 50% 19c 前半
	第35図-65 図版23-65	染付碗	白磁	口径 (7.0) cm 器高 5.6 cm 高台径 3.7 cm	筒形 外面菊花文 見込み手描き五弁花と二重 圏線有り 高台畳付露胎 離れ砂付着	肥前 20% 18c後半
	第35図-66 図版23-66	染付碗	白磁	口径 11.0 cm 器高 6.1 cm 高台径 5.0 cm	外面体部銀杏文 内面口縁部四方禪文 見込み 三菱文と二重圏線有り 高台畳付露胎	肥前 70% 18c後半
	第35図-67	染付碗	白磁	口径 10.0 cm	外面花芝垣文 見込み昆虫文と圏線有り	肥前 70% 内外面貫 入する 黒く変色して いる 18c後半
	第35図-68 図版23-68	染付碗	白磁	口径 9.9 cm 器高 5.3 cm 高台径 3.9 cm	外面二重網目文 高台畳付露胎	肥前 70% 18c後半
	第35図-69	染付蕎麦猪口	白磁	口径 (7.8) cm 器高 6.1 cm 高台径 6.0 cm	外面唇文 内面口縁部四方禪文 見込み二重圏 線有り 蛇ノ目凹型高台か	肥前 20% 18c末～ 19c前

表16 第176次調査遺物観察表(4)

SK41 (第35図、図版23)

長軸1.38m、短軸1m以上、深さ16cmの円形土坑である。出土遺物は、肥前染付磁器碗(65～69)などが出土している。

SE1 (図版20)

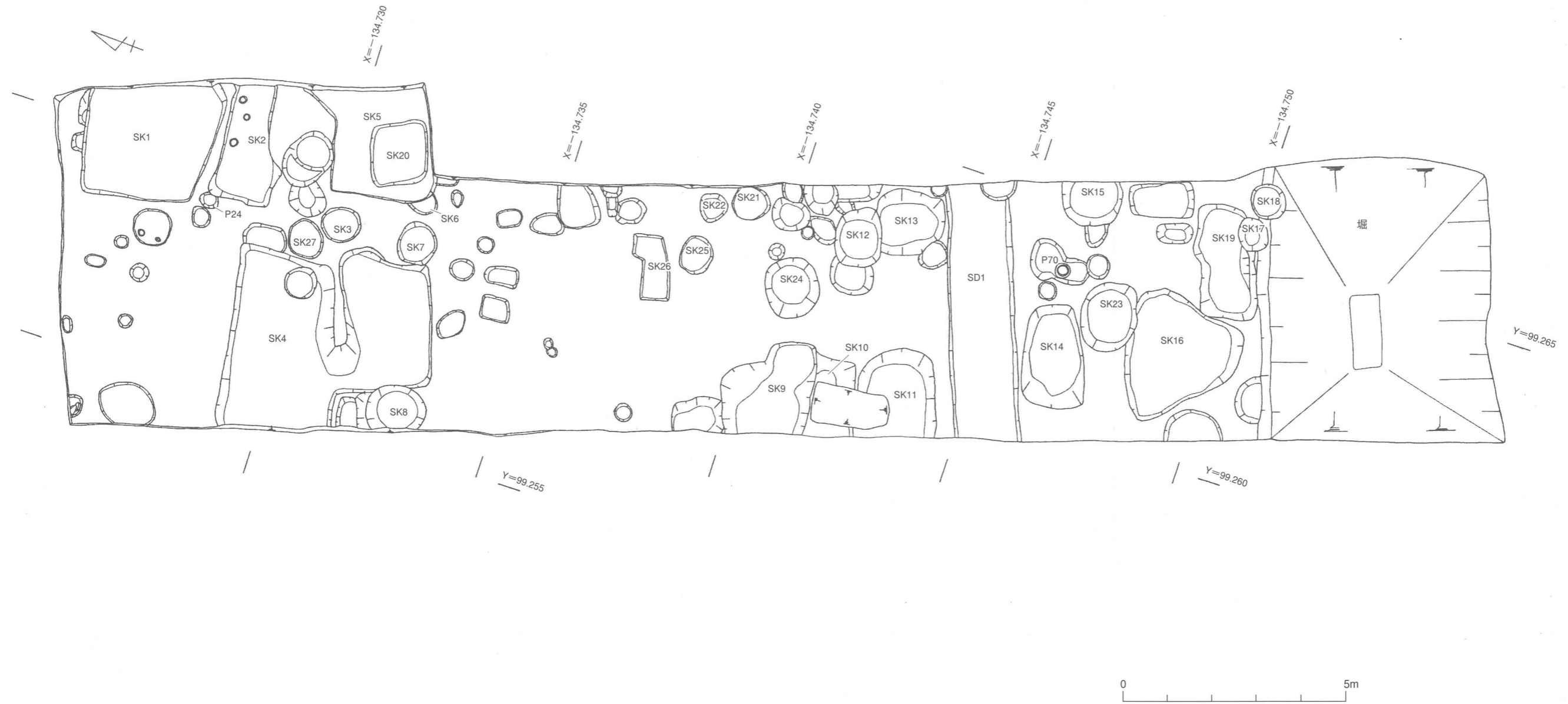
直径約80cmの円形の井戸で、掘り抜いていないので深さは不明。覆土は明褐色で混ざりの少ない土。遺物が全く出土していないことから、明確な時期は不明であるが、近世の他の遺構と覆土の色調が違うことや、遺物の出土状況の相違があることから、中世に遡る可能性もある。

SE2 (図版20)

直径約1.1mのやや歪んだ井戸である。遺跡全体のセクション面の堆積状況から、近・現代の時期の井戸である。

5.まとめ

調査面積が狭小であったことや攪乱が多かったことから、遺跡の性格を把握することができるような遺構は検出されなかった。しかし、上述の遺構や攪乱から検出した相当数の遺物から、近世伊丹郷町の土地利用の一端が判明したものと考えられる。(伊藤・河合)



第38図 第181次調査全体図 (1/100)



第39図 第181次調査土層断面図 (西壁) (1/80)

磁器などが出土している。

下層遺構面には幅約5m、深さ約3mの東西に走るV字形の堀がある。有岡城の時期に属するものと思われる。遺物は、堀の埋土の礫層から1点の瓦片が出土している。

旧住宅地の盛土と旧耕土等は重機・ダンプカーにより掘削・場外搬出した後、それより下層については人力掘削した。調査区は住宅建設予定地の東西6m余、南北30mの190㎡に設定した。調査の掘削深度は、基礎杭の打ち込みや地中梁の設置、ケミカルコンクリートによる地盤改良工事が予定されているため検出遺構の全てを掘削、調査した。

3. 調査成果

当調査区の遺構面は、約10cmの包含層を取り除いた地山上面で検出できる。地山の深さは現地表下40～60cmである。遺構面は、基本的に1面であるが、局部的に下層に遺構が認められる箇所もある。本調査では、上層が近世の伊丹郷町に関する土坑や溝、ピット、下層が有岡城に関連すると考えられている堀の遺構である。

①上層遺構

別表(表17)のように28基の土坑のうち6基が火災整理土坑である。江戸時代の文献に記載されている伊丹郷町の火災記事と対応するものも含まれているであろう。出土遺物からみた土坑の時期は、18世紀代が3基、18・19世紀代が3基である。

中央部を東西に走る浅い溝は、出土遺物から江戸時代の遺構で、当時の町の地割りの方向が、現在の市街地の区画の方向と一致していることを示す。

②下層遺構

調査区の南側から検出した一条の溝である。規模は上幅約5m、下幅約90cm、深さ約3m、断面はV字形で、東西に走る。溝の北肩部には、幅約80cmの犬走り状の段が東西方向に認められたが、南肩には認められなかった。溝の傾斜は、南側が約55度、北側が約65度で若干の違いはあるが、急勾配である。

堀の埋土は、比較的きれいな赤褐色の砂質土・粘質土と褐色礫層等が南から北へ投入されたように交互に堆積している。特に、礫層は土を一切含まず、埋土は軟弱で堀の埋め戻しが人為的に一気に行われたため、後世には窪みになり黒褐色土層(7)で埋めなおされたものと考えられる。下層の土は、堀に水を入れていた様子は窺えない。

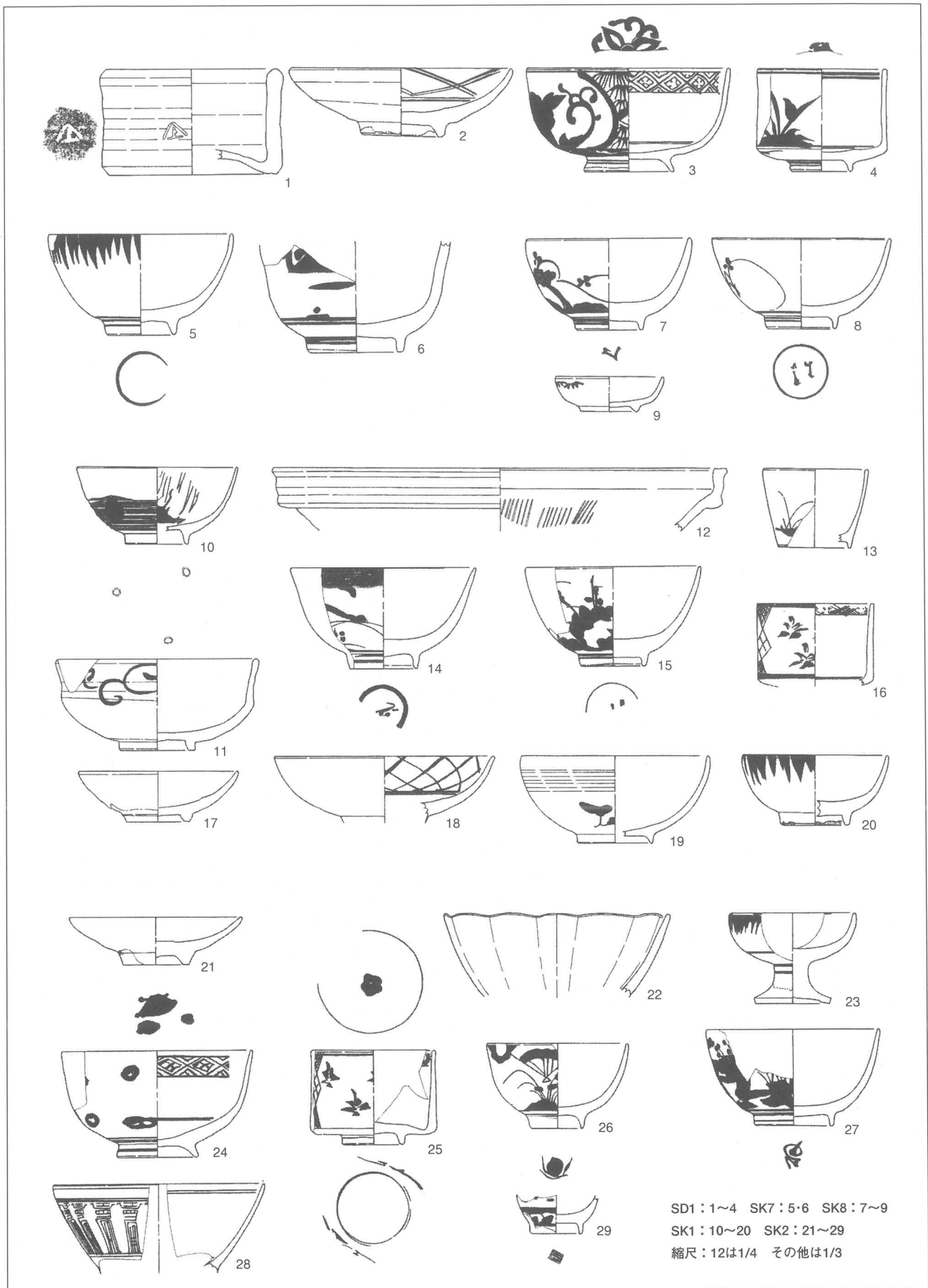
遺物は、褐色礫層(14)から1点の瓦片が出土しただけである。

4. まとめ

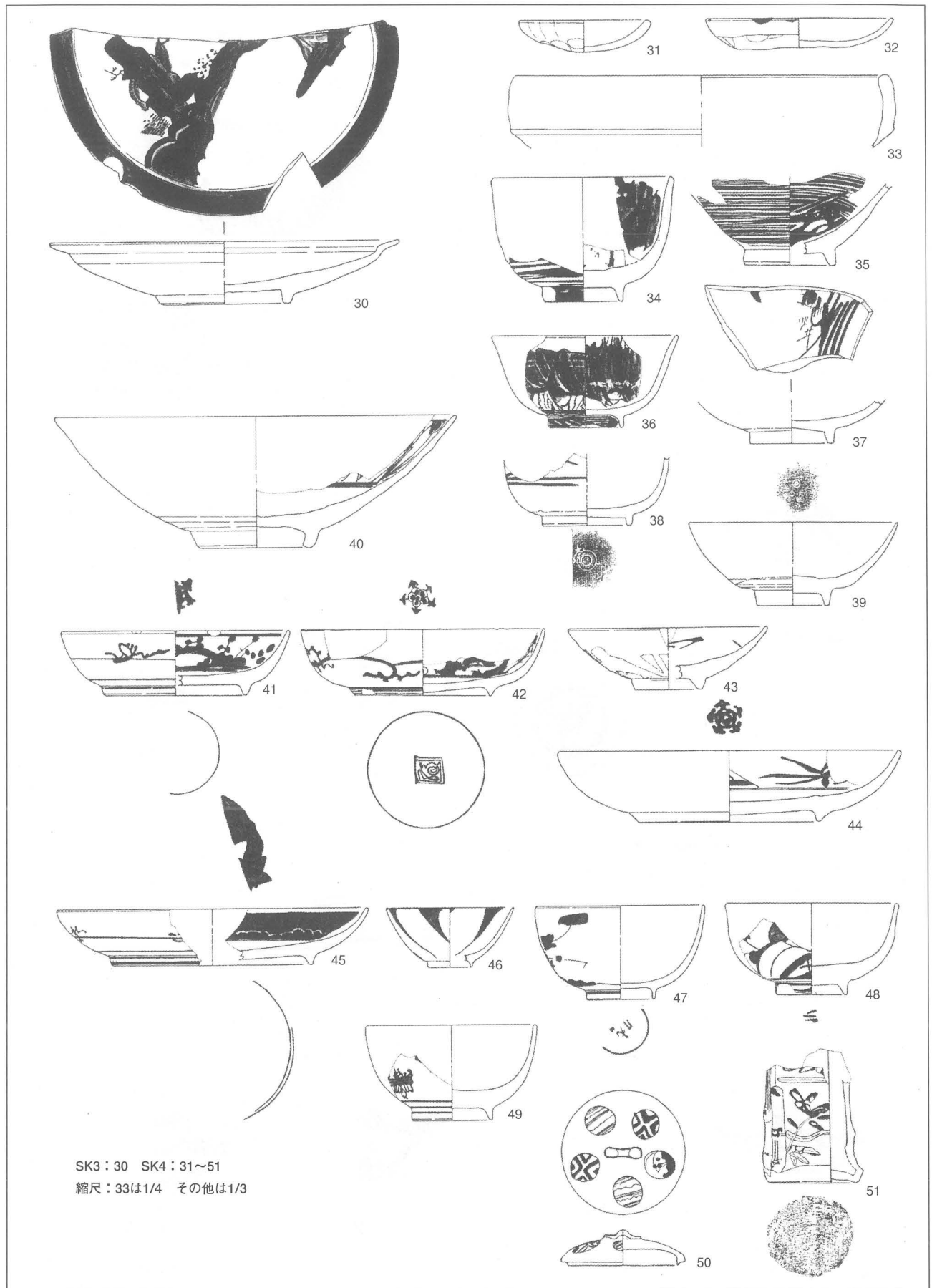
今回の調査で得た成果のうち最も大きなものは、有岡城の頃の堀を発見した事である。城郭の内部を知る新しい資料を加えることができ、今後、このような資料を積み重ねていけば有岡城築城当時の姿を復元することができるであろう。(今村・川口)

遺構名	挿入番号	遺構の性格	遺構の規模			主な出土遺物	年代
			東西	南北	最深		
SK1	第40図 10~20	火災整理	2.5 以上	2.5~3.1	0.5	肥前(現川)陶器甕手碗 伊賀・信楽焼碗 丹波焼 播鉢 肥前白磁染付碗・皿・蕎麦猪口	18c
SK2	第40図 21~29	火災整理	2.5 以上	1.0~1.4	0.4	肥前白磁染付碗・皿・小杯・仏飯具 三田青磁鉢 中国製青花甕手小杯	18c後半
SK3	第41図 30	埋桶	0.8	0.9	0.2	肥前白磁染付皿 伊賀・信楽焼受皿	19c前半
SK4	第41・42図 31~54	火災整理	4 以上	4.7 最大	0.5	土師皿 焙烙 唐津焼鉢 肥前(京焼風)陶器碗・ 皿 肥前白磁染付碗・皿・小杯・合子蓋他	18c前半
SK5	第42図 55~60	火災整理	2.4 以上	2.3 以上	0.5	焙烙 伊賀・信楽焼受皿 肥前白磁染付碗・碗蓋	18c末~19c前半
SK6	第42図 61~68	埋桶	0.5	0.6	0.2	土師皿 焙烙 丹波焼火入れ 唐津焼刷毛目碗 肥前白磁染付碗	18c前半
SK7	第40図 5・6	井戸	0.95	0.85		肥前陶胎染付碗 肥前白磁染付碗	18c前半
SK8	第40図 7~9	井戸	1 以上	1.3		肥前白磁染付碗・紅皿	18c前半
SK9		廃棄	2 以上	2	0.45	土師皿 焙烙 唐津焼刷毛目碗 肥前白磁染付 碗	18c
SK10	第43図 69~75	火災整理	1.75 以上	0.9 以上	0.3	土師皿 丹波焼匣鉢 肥前白磁染付碗・小杯 肥前白磁皿 十能	18c前半
SK11		火災整理	2 以上	1.8	0.25	土師皿 焙烙 唐津焼刷毛目片口鉢 肥前白磁 染付碗	18c
SK12		廃棄	1.4	1.1	0.8		
SK13	第43図 77~85	井戸	1.5	1.4 以上		土師皿 焙烙 丹波焼甕 伊賀・信楽焼色絵碗 肥前白磁染付碗・仏飯具・紅皿他	18c前半
SK14		廃棄	2.3	1.4	0.15	土師皿 柿釉皿 焙烙 肥前白磁染付碗	18c~19c
SK15	第43図 86~95 第44図 96~117	井戸	1 以上	1.35		土師皿 焙烙 柿釉皿 伊賀・信楽焼碗・土瓶 瀬戸・美濃焼水注 肥前白磁染付碗・皿他	19c前半
SK16		廃棄	2.9 最大	2.6	0.25	丹波焼火入れ・播鉢 瀬戸・美濃焼天目碗 肥前 白磁染付皿	17c後半
SK17		廃棄	0.75	0.75	0.4	土師皿 丹波焼鉢 肥前白磁染付碗	18c
SK18	第45図 118~128	便所	0.8	0.8	0.5	柿釉皿 伊賀・信楽焼碗 丹波焼德利 肥前白 磁染付碗・皿・碗蓋	19c前半
SK19		廃棄	2.6	1.4	0.25	焙烙 肥前陶器皿	19c
SK20		井戸	1.4	1.3		伊賀・信楽焼土瓶蓋・行平鍋蓋 肥前白磁染付碗	19c
SK21	第45図 129~132	井戸	0.75	0.85		柿釉皿 伊賀・信楽焼灯明皿 肥前白磁染付小 杯	19c前半
SK22	第45図 133~140	廃棄	0.7	0.65	0.4	土師皿 焙烙 丹波焼片口鉢 肥前白磁染付碗	18c後半
SK23		廃棄	1.55	1.3	0.5	焙烙 丹波焼播鉢 肥前白磁染付碗	18c中~19c
SK24		廃棄	1.4	1.3	0.7	土師皿 丹波焼火入れ 肥前白磁染付碗	18c
SK25	第45図 141・142	廃棄	0.85	0.7	0.5	肥前陶器色絵皿 肥前白磁染付皿	18c前半
SK26		廃棄	1.45	0.7	0.2	丹波焼播鉢 唐津焼刷毛目碗 肥前陶胎染付碗	18c
SK27		廃棄	0.85	0.8	0.3	丹波焼播鉢 肥前陶器皿 肥前白磁染付碗	18c
SD1	第40図 1~4	地割溝	5.7 以上	1.5	0.26	備前焼匣鉢 肥前白磁染付碗・皿	18c後半
SD2		堀	6.8 以上	4.7	2.7	瓦片	有岡城以前

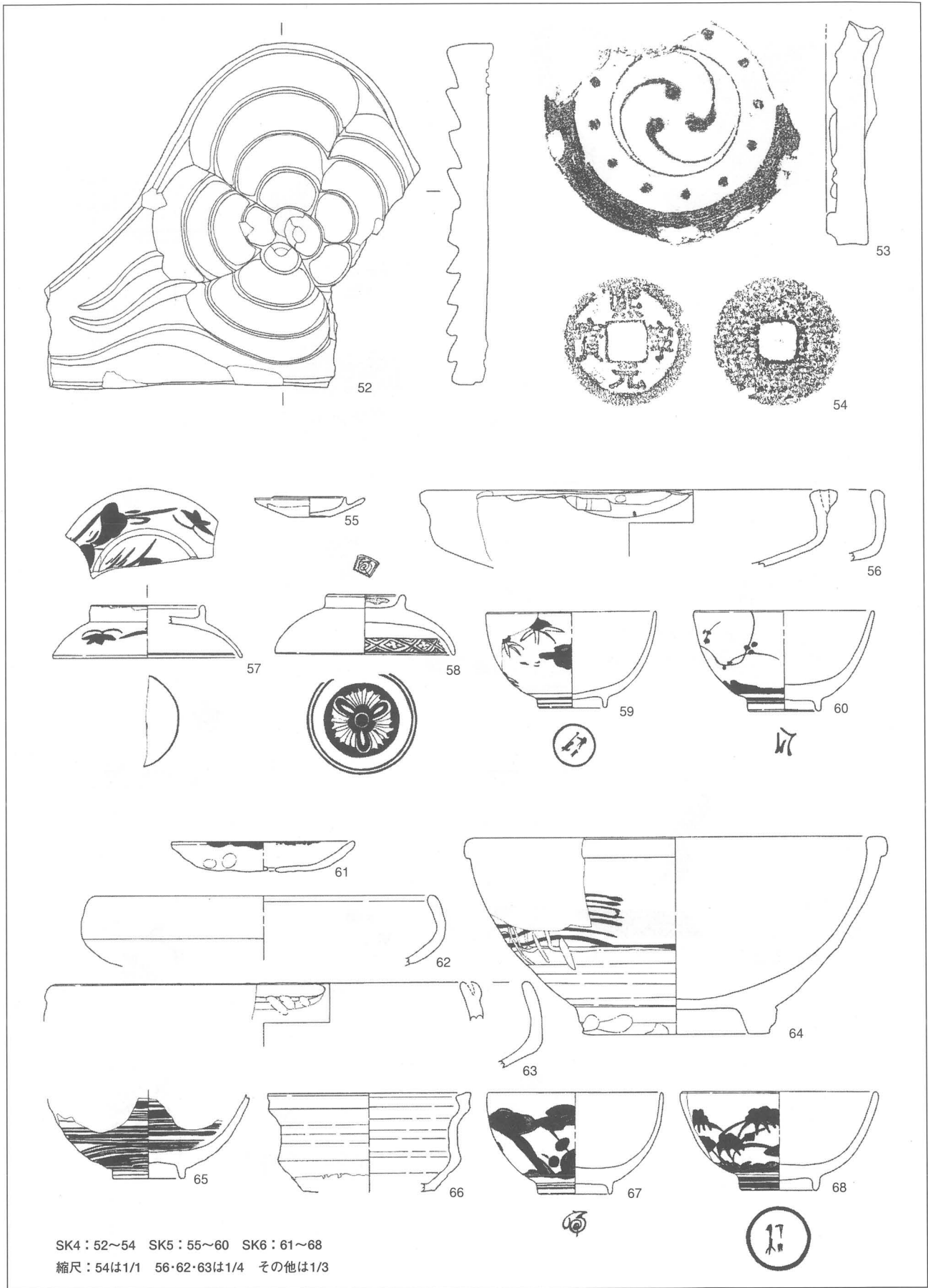
表17 第181次調査主要遺構観察表



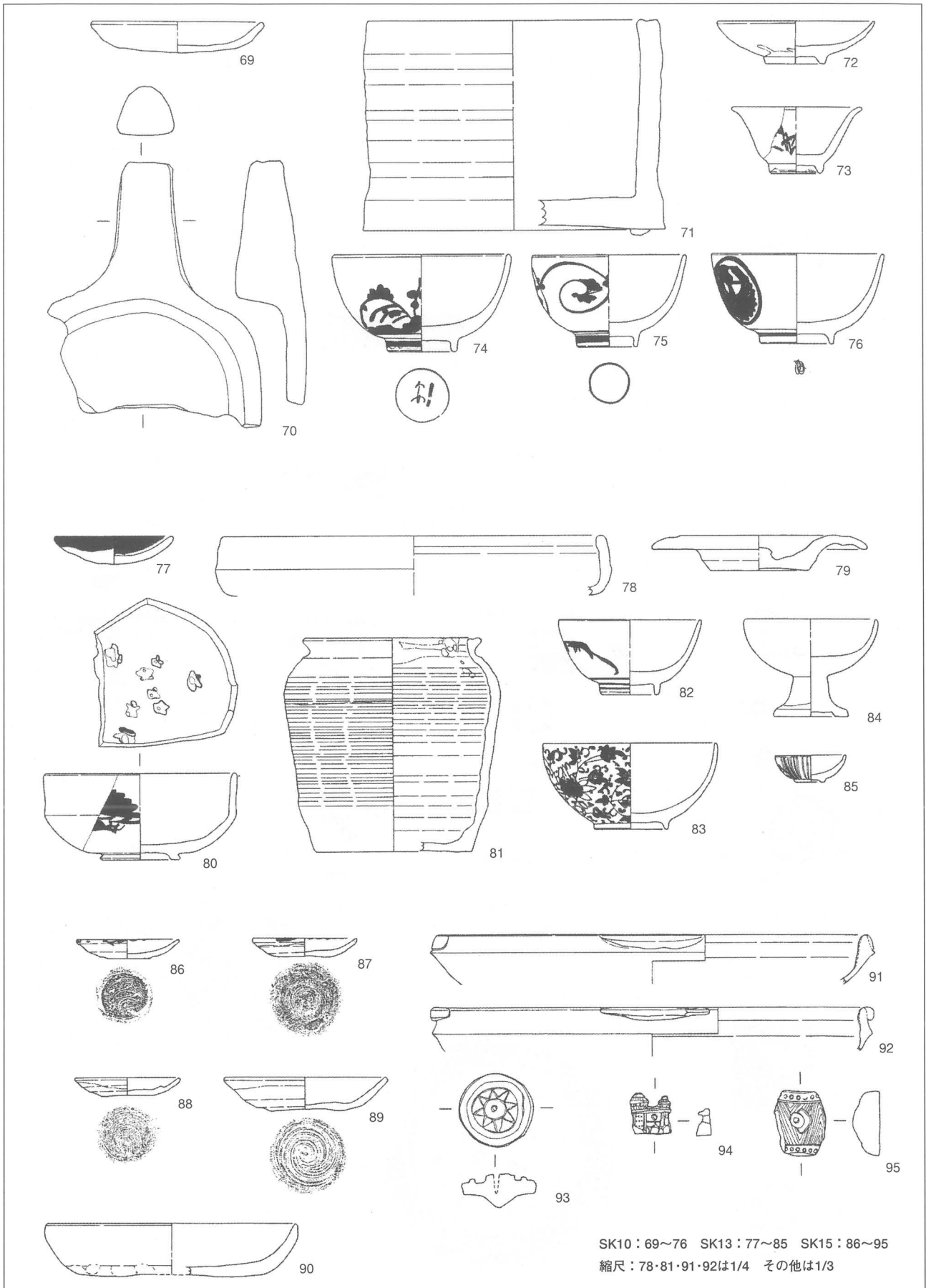
第40図 第181次調査出土遺物実測図 (1)



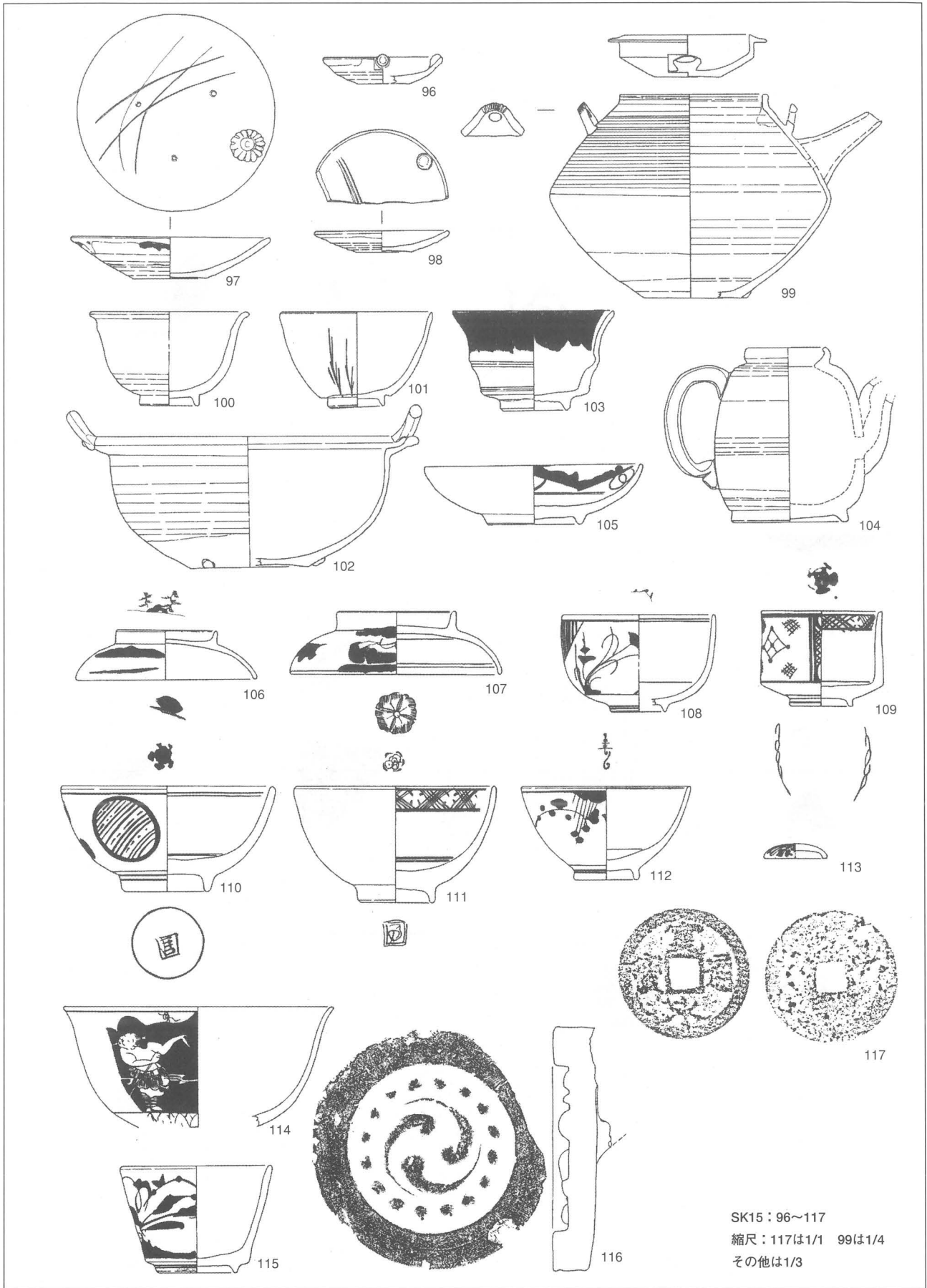
第41図 第181次調査出土遺物実測図(2)



第42図 第181次調査出土遺物実測図 (3)

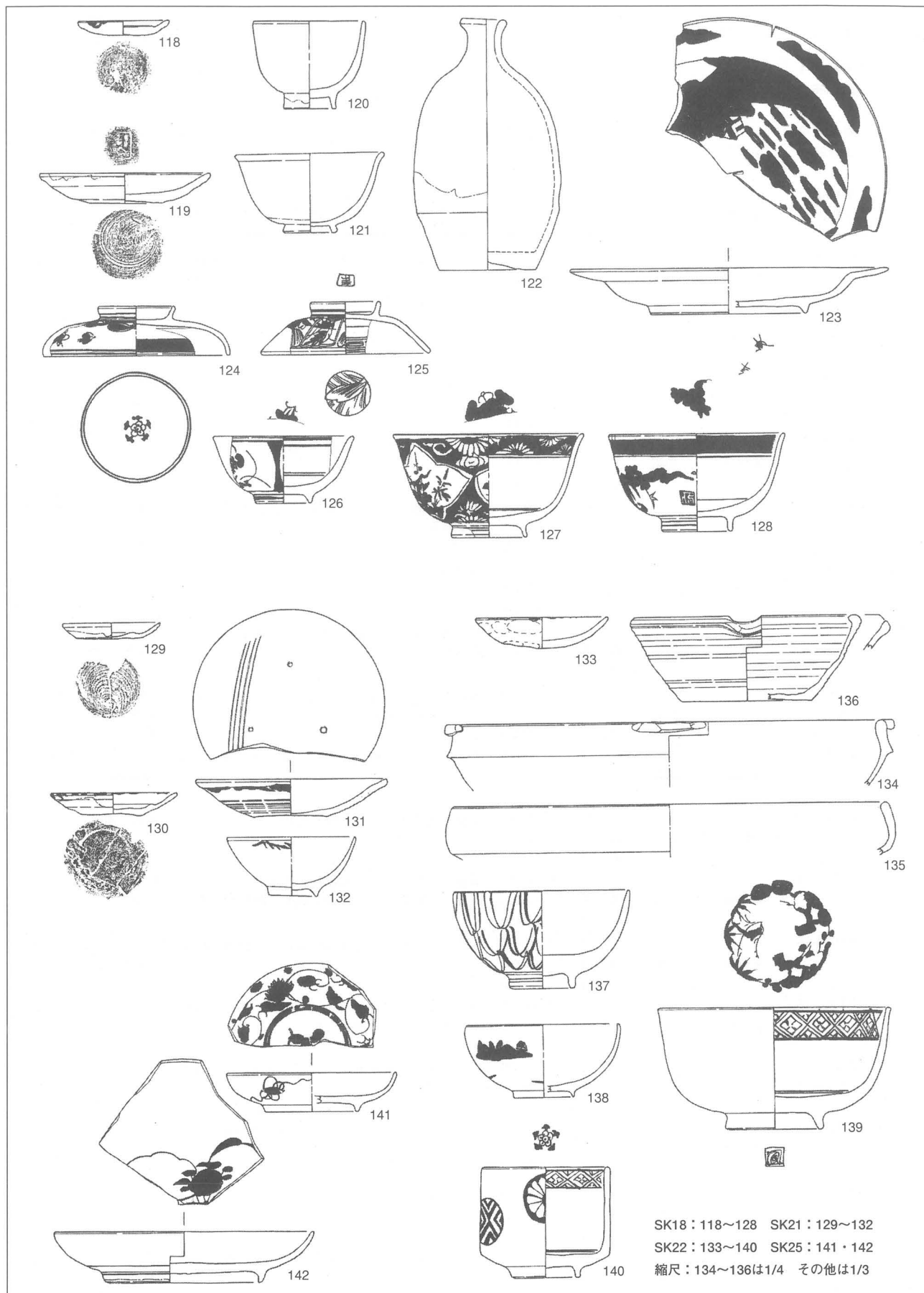


第43図 第181次調査出土遺物実測図(4)



SK15 : 96~117
 縮尺 : 117は1/1 99は1/4
 その他は1/3

第44図 第181次調査出土遺物実測図 (5)



第45図 第181次調査出土遺物実測図 (6)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SD1	第40図-1 図版26-1	匣鉢	陶器	口径 (9.6) cm 器高 6.0 cm 底径 9.5 cm	ロクロ成形 体部下半に「企」刻印有り 外面体部の一部に黄胡麻掛かる	備前 30%
	第40図-2 図版26-2	染付皿	白磁	口径 12.5 cm 器高 3.9 cm 高台径 4.4 cm	内面体部斜格子文 見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ塗布 重ね焼き痕有り 高台量付露胎	肥前 50% 18c中～19c初
	第40図-3 図版26-3	染付碗	白磁	口径 11.4 cm 器高 5.9 cm 高台径 5.0 cm	外面2カ所に窓絵 窓絵の中に牡丹文 窓絵の外に笹文と花文 内面口縁部四方襷文 見込み三菱文と二重圏線内面 高台量付露胎	肥前 45% 18c後半
	第40図-4	染付碗	白磁	口径 7.2 cm 器高 5.9 cm 高台径 3.3 cm	筒形 外面体部草花文 内面口縁部二重圏線有り 見込みコンニャク印判五弁花と二重圏線有り 高台量付露胎	肥前 30% 18c後半
SK7	第40図-5 図版26-5	染付碗	白磁	口径 (10.6) cm 器高 5.8 cm 高台径 3.7 cm	外面口縁部雨降り文 高台内圏線と円刻有り	肥前 50% 18c前半
	第40図-6	染付碗	陶胎	高台径 5.0 cm	外面体部文様有り 高台量付露胎	肥前 60% 17c末～18c前
SK8	第40図-7 図版26-7	染付碗	白磁	口径 (9.2) cm 器高 5.2 cm 高台径 3.6 cm	外面体部雪輪梅樹文 高台内銘有り 高台量付露胎	肥前 60% 18c前半
	第40図-8 図版26-8	染付碗	白磁	口径 (10.0) cm 器高 5.2 cm 高台径 3.8 cm	外面体部蘭文 高台内簡略化した「大明年製」銘と圏線有り	肥前 80% 18c前半
	第40図-9 図版26-9	染付紅皿	白磁	口径 (6.0) cm 器高 2.0 cm 高台径 3.2 cm	外面体部笹文	肥前 45%
SK1	第40図-10	碗	陶器	口径 (9.1) cm 器高 4.4 cm 高台径 3.6 cm	外面体部蛭手 内面打刷毛目 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前(現川焼) 30% 17c末～18c中
	第40図-11 図版26-11	碗	陶器	口径 (11.2) cm 器高 5.2 cm 高台径 4.2 cm	外面体部上半に唐草文 見込みに3ヶ所目痕有り 高台周辺露胎	伊賀・信楽 60% 二次焼成受ける 18c前半
	第40図-12	播鉢	陶器	口径 (34.4) cm	クシ目一単位7本 内外面口縁部から体部ヨコナデ	丹波 5% 灰被り 18c前半
	第40図-13	染付蕎麦猪口	白磁	口径 (5.8) cm 器高 4.5 cm 高台径 4.1 cm	外面体部草花文 高台量付露胎	肥前 40%
	第40図-14	染付碗	白磁	口径 (10.4) cm 器高 5.7 cm 高台径 3.8 cm	外面体部草花文 口縁端部に呉須を施す 高台内銘と圏線有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 20% 17c末～18c中
	第40図-15	染付碗	白磁	口径 (9.8) cm 器高 5.6 cm 高台径 3.5 cm	外面雪輪梅樹文 高台内銘有り 高台量付露胎	肥前 35% 17c末～18c中
	第40図-16	染付碗	白磁	口径 (6.6) cm	筒形 外面体部若草文と幾何学文 内面口縁部四方襷文 見込み圏線有り	肥前 20% 18c後半
	第40図-17 図版26-17	皿	白磁	口径 9.0 cm 器高 2.9 cm 高台径 3.6 cm	見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ砂塗布 高台周辺露胎	肥前 85% 二次焼成受ける 見込みに重ね焼きの痕有り
	第40図-18	染付皿	白磁	口径 (12.3) cm	外面体部斜格子文 見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ塗布	肥前 20% 17c末～18c前
	第40図-19	染付碗	白磁	口径 (10.5) cm 器高 5.0 cm 高台径 4.2 cm	外面体部草花文 高台量付露胎	肥前 35% 内外面貫入
第40図-20	染付碗	白磁	口径 (8.2) cm 器高 4.0 cm 高台径 3.6 cm	外面口縁部雨降り文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 45% 17c末～18c前	

表18 第181次調査遺物観察表(1)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK2	第40図-21	皿	白磁	口径 (9.6) cm 器高 2.7 cm 高台径 3.0 cm	見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ砂塗布 高台周辺露胎	肥前 60% 18c後～19c中
	第40図-22	鉢	青磁	口径 12.5 cm	型打ち成形 口縁部輪花	三田 25%
	第40図-23 図版26-23	染付仏飯具	白磁	口径 (7.0) cm 器高 5.1 cm 高台径 4.2 cm	外面口縁部雨降り文 高台周辺露胎	肥前 50% 17c末～18c後
	第40図-24 図版26-24	染付碗	白磁	口径 (10.7) cm 器高 6.0 cm 高台径 4.3 cm	外面体部山水文 内面口縁部四方禪文 見込み二重圏線と岩波文か 高台量付露胎	肥前 50% 18c後半
	第40図-25 図版26-25	染付碗	白磁	口径 (6.8) cm 器高 5.3 cm 高台径 3.3 cm	筒形 外面体部若草文と幾何学文 内面口縁部四方禪文 見込みコンニャク印判五弁花と圏線有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 50% 18c後半
	第40図-26	染付小碗	白磁	口径 (7.9) cm 器高 4.8 cm 高台径 2.7 cm	外面体部扇草花文 高台内円刻有り 高台量付露胎	肥前 50% 内外面粗い貫入
	第40図-27	染付碗	白磁	口径 9.7 cm 器高 5.5 cm 高台径 4.3 cm	外面体部流水文 高台内渦福有り 高台量付露胎	肥前 70% 18c前半
	第40図-28	染付碗	白磁	口径 (11.9) cm	外面体部寿字文 内面口縁部二重圏線有り 見込み圏線有り	肥前 25% 19c初頭
	第40図-29	染付小杯	白磁	高台径 2.8 cm	蛸手 外面下半文様有り 見込み文様有り 高台内銘有り 高台量付露胎	中国製 30% 18c後～19c前
SK3	第41図-30 図版27-30	染付皿	白磁	口径 19.8 cm 器高 3.6 cm 高台径 7.4 cm	内面口縁端部折れ縁 内面体部山水文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 50% 二次焼成受ける 17c前～中
SK4	第41図-31 図版27-31	土師皿	素焼き	口径 7.2 cm 器高 1.8 cm	手握ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 98% 7.5YR7/3にぶい橙色
	第41図-32 図版27-32	土師皿	素焼き	口径 10.4 cm 器高 1.7 cm	手握ね成形 外面指頭圧痕 内外面口縁部から体部ヨコナデ	在地 90% 口縁煤付着 10YR7/3にぶい黄橙色
	第41図-33	焙烙	素焼き	口径 (28.2) cm	底部外型成形 内外面口縁部から体部ヨコナデ	15% 口縁部外面と底部煤付着
	第41図-34 図版27-34	碗	陶器	口径 (10.0) cm 器高 7.1 cm 高台径 4.4 cm	外面巻刷毛目 内面打刷毛目 高台量付露胎	唐津 35% 17c中～17c末 胎土は10YR4/1 褐灰色
	第41図-35	碗	陶器	高台径 5.0 cm	内外面巻刷毛目 見込み蛇の目釉剥ぎ 離れ砂付着 高台量付露胎 離れ砂付着	唐津 40% 17c後半
	第41図-36	碗	陶器	口径 (10.5) cm 器高 5.2 cm 高台径 4.1 cm	内外面打刷毛目 高台周辺巻刷毛目 高台量付露胎 離れ砂付着	唐津 30% 17c後半
	第41図-37	皿	陶器	高台径 4.6 cm	見込み山水文 高台内「富永」の押印と円刻有り 高台周辺露胎	肥前(京焼風) 10% 二次焼成受ける 17c後半
	第41図-38	碗	陶器	高台径 5.0 cm	外面山水文 高台内「木下弥」の押印と円刻有り 高台周辺露胎	肥前(京焼風) 30% 二次焼成受ける 17c後半
	第41図-39	皿	陶器	口径 (11.7) cm 器高 4.7 cm 高台径 3.6 cm	見込み蛇の目釉剥ぎ 高台周辺露胎	唐津 25% 17c末～18c後
第41図-40 図版27-40	染付皿	白磁	口径 (22.6) cm 器高 7.4 cm 高台径 6.1 cm	内面体部花文 見込み蛇の目釉剥ぎ 離れ砂付着 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 60%	

表19 第181次調査遺物観察表(2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK4	第41図-41 図版27-41	染付皿	白磁	口径 (12.8) cm 器高 3.7 cm 高台径 7.9 cm	内面体部梅樹文 見込みコンニャク印判五弁花 高台内圏線有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 50% 二次焼成 受ける 18c前半
	第41図-42 図版27-42	染付皿	白磁	口径 13.7 cm 器高 3.8 cm 高台径 7.7 cm	口縁部輪花 内面体部松竹文 見込み手描き五 弁花 高台内二重方形枠の渦福と圏線 ハリ支 え痕1ヶ所有り 高台量付露胎	肥前 60% 18c前半
	第41図-43	染付皿	白磁	口径 (11.2) cm 器高 3.5 cm 高台径 3.3 cm	内面体部松葉文 見込み蛇の目釉剥ぎ 高台周 辺露胎	肥前 35% 17c末～ 18c前
	第41図-44 図版27-44	染付皿	白磁	口径 19.1 cm 器高 4.1 cm 高台径 10.1 cm	内面体部扇面花文 見込みコンニャク印判五弁 花、蛇の目釉剥ぎ 薄いアルミナ塗布 高台量 付露胎、離れ砂付着	肥前 60% 17c末～ 18c前
	第41図-45 図版27-45	染付皿	白磁	口径 (17.4) cm 器高 3.2 cm 高台径 11.2 cm	内面体部墨弾き文有り 見込みコンニャク印判 文有り 高台内圏線有り ハリ支え痕1ヶ所残 存	肥前 30% 17c末～ 18c前
	第41図-46	染付小杯	白磁	口径 (7.1) cm 器高 3.4 cm 高台径 2.4 cm	内外面捻花文 高台量付露胎	肥前 25% 18c前半
	第41図-47 図版27-47	染付碗	白磁	口径 (9.4) cm 器高 5.3 cm 高台径 5.7 cm	外面体部草花文 高台内「大明年製」銘か 圏 線有り 高台量付露胎	肥前 25% 18c前半
	第41図-48 図版28-48	染付碗	白磁	口径 (9.5) cm 器高 5.2 cm 高台径 3.9 cm	外面体部梅花文 高台内銘有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 50% 18c前半
	第41図-49 図版28-49	染付碗	白磁	口径 (9.4) cm 器高 5.4 cm 高台径 4.4 cm	外面体部コンニャク印判桐文 高台量付露胎	肥前 50% 18c前半
	第41図-50	染付合子蓋	白磁	口径 6.2 cm 器高 2.0 cm	外面丸文 口縁部露胎	肥前 98% 17c末～ 18c後
	第41図-51	染付花瓶	白磁		型押し成形 竹形 外面に笹文 底部内外面に 布目跡有り	肥前
	第42図-52 図版28-52	鬼瓦	瓦	縦 19.5 cm 瓦当厚 1.6 cm	牡丹文	瓦当面のみ70%
	第42図-53 図版28-53	軒丸瓦	瓦	径 (14.7) cm 周縁厚 2.3 cm 瓦当厚 1.6 cm	左巻き三つ巴文 朱文数12個 巴の尾部はつな がり圏線状を成す	80%
	第42図-54	銭	銅	径 2.5 cm 厚み 0.1 cm	熙寧元宝 真書体	一部欠損 熙寧元年 (1068)初鑄 北宋
SK5	第42図-55	受皿	陶器	口径 (6.2) cm 器高 1.2 cm 高台径 2.2 cm	灰釉 外面体部から底部露胎 受端部露胎	伊賀・信楽 40% 19c
	第42図-56	焙烙	素焼き	口径 (28.2) cm	底部外型成形 把手貼り付け 把手に孔あり(貫通) 内面口縁から底部ヨコナデ	10% 胎土に金雲母多 く含む 外面に煤付着
	第42図-57	染付碗蓋	白磁	口径 (10.7) cm 器高 3.0 cm つまみ径 6.2 cm	外面体部草花文と蝶文 つまみ内草花文 内面 口縁部二重圏線有り 見込み文様と有り	肥前 40% 18c末～ 19c前
	第42図-58	染付碗蓋	青磁	口径 10.0 cm 器高 3.3 cm つまみ径 4.2 cm	外面青磁釉 つまみ内二重方形枠の渦福有り 口縁部内面四方禪文 見込み花三菱文と二重圏 線有り つまみ量付露胎 離れ砂付着	肥前 40% 18c中～ 18c後
	第42図-59	染付碗	白磁	口径 (9.5) cm 器高 5.4 cm 高台径 3.7 cm	外面体部笹文とコンニャク印判文併用 高台内 「大明年製」銘か 圏線有り 高台量付露胎	肥前 45% 17c末～ 18c前
	第42図-60	染付碗	白磁	口径 (10.0) cm 器高 5.7 cm 高台径 4.0 cm	外面体部雪輪梅樹文 高台内銘有り 高台量付 露胎 離れ砂付着	肥前 45% 18c

表20 第181次調査遺物観察表(3)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK6	第42図-61 図版28-61	土師皿	素焼き	口径 (10.4) cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 底部中心付近に孔有り	在地 60% 口縁煤付着
	第42図-62	焙烙	素焼き	口径 (25.2) cm	底部外型成形 内外面口縁部から体部ヨコナデ	5% 底部内外面煤付着
	第42図-63	焙烙	素焼き	口径 (31.6) cm	底部外型成形 内外面口縁部から体部ヨコナデ 把手に孔有り(貫通せず)	5% 外面煤付着
	第42図-64 図版28-64	鉢	陶器	口径 (23.6) cm 器高 11.2 cm 高台径 10.4 cm	外面体部上位に白化粧でヨコハケ 体部下位に 鉄漿を施す 外面体部中位から内面にかけて長 石釉を施す 高台露胎 片口鉢か	肥前 40%
	第42図-65 図版28-65	碗	陶器	高台径 4.0 cm	内外面巻刷毛目 見込み蛇の目釉剥ぎ 高台量 付露胎 離れ砂付着	唐津 35% 18c前半
	第42図-66	火入れ	陶器	口径 (11.4) cm 器高 5.6 cm	内外面口縁部から体部ヨコナデ	丹波 30% 外面灰被り
	第42図-67 図版28-67	染付碗	白磁	口径 (9.8) cm 器高 5.8 cm 高台径 2.0 cm	外面体部源氏車文か 高台内渦福有り 高台量 付露胎	肥前 50% 18c前半
	第42図-68 図版28-68	染付碗	白磁	口径 (10.9) cm 器高 5.6 cm 高台径 4.0 cm	外面体部松竹文 高台内「大明年製」銘か 圏線 有り 高台量付露胎	肥前 40% 18c前半
SK10	第43図-69	土師皿	素焼き	口径 (9.6) cm 器高 1.8 cm	手捏ね成形 内外面ナデ	在地 40%
	第43図-70	十能	素焼き	最大厚 3.7 cm	底部型作り 離れ砂付着	30% 内外面煤付着
	第43図-71	匣鉢	陶器	口径 (16.4) cm 器高 11.9 cm 底径 8.6 cm	灰釉 内面と底部は露胎	丹波か 35%
	第43図-72 図版29-72	皿	白磁	口径 8.8 cm 器高 2.5 cm 高台径 3.4 cm	見込み蛇の目釉剥ぎ、アルミナ砂塗布 高台周 辺露胎	肥前 98% 18c
	第43図-73	染付小杯	白磁	口径 (7.1) cm 器高 3.8 cm 高台径 2.8 cm	外面体部笹文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 40% 17c末～ 18c前
	第43図-74	染付碗	白磁	口径 (9.8) cm 器高 5.5 cm 高台径 3.7 cm	外面体部梅樹文 高台内簡略化した「大明年製」 銘か 圏線有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 45%
	第43図-75 図版29-75	染付碗	白磁	口径 8.6 cm 器高 5.2 cm 高台径 3.2 cm	外面体部花唐草文 高台内圏線有り 高台量付 露胎 離れ砂付着	肥前 55% 18c前半
	第43図-76 図版29-76	染付碗	白磁	口径 9.6 cm 器高 5.1 cm 高台径 4.0 cm	外面体部コンニャク印判鶴文 高台内崩れた渦 福有り 高台量付露胎	肥前 60% 18c前半
SK13	第43図-77 図版29-77	土師皿	素焼き	口径 6.7 cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形	在地 100% 口縁部 周辺煤けている
	第43図-78	焙烙	素焼き	口径 (28.4) cm	底部外型成形 内外面口縁部から体部ヨコナデ 内面口縁部に段有り	5% 底部煤付着
	第43図-79	蓋	陶器	口径 (12.2) cm 器高 2.0 cm 底径 5.5 cm	灰釉 外面口縁部から底部露胎 底部糸切り底	伊賀・信楽 60%
	第43図-80	色絵碗	陶器	口径 (10.6) cm 器高 4.9 cm 高台径 4.3 cm	外面体部松文 高台内円刻有り 高台周辺露胎	伊賀・信楽 40%

表21 第181次調査遺物観察表(4)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK13	第43図-81	甕	陶器	口径 (13.0) cm 器高 16.2 cm 底径 11.8 cm	内面口縁部周辺から外面底部まで塗り土を施す 内面口縁部周辺から外面肩部まで灰釉を施す 口口目有り	丹波 60% 灰被り
	第43図-82 図版29-82	染付碗	白磁	口径 (8.0) cm 器高 5.3 cm 高台径 3.0 cm	外面草花文 高台量付露胎	肥前 50%
	第43図-83	染付碗	白磁	口径 9.4 cm 器高 4.9 cm 高台径 4.1 cm	外面牡丹唐草文 高台量付露胎	肥前 70% 二次焼成 受ける 18c前
	第43図-84	仏飯具	白磁	口径 (7.3) cm 器高 5.5 cm 高台径 4.1 cm	高台周辺露胎	肥前 40% 二次焼成 受ける 17c末～18c 後
	第43図-85 図版29-85	紅皿	白磁	口径 3.9 cm 器高 1.6 cm 高台径 1.7 cm	型押し成形 草花文と貝殻状	肥前 80%
SK15	第43図-86 図版29-86	土師皿	素焼き	口径 5.7 cm 器高 1.1 cm	口口成形 底部糸切り痕有り(左巻き) 口 縁から体部ヨコナデ	在地 100% 口縁部 煤付着
	第43図-87 図版29-87	皿	軟質施釉 陶器	口径 5.8 cm 器高 1.1 cm 底径 2.0 cm	柿釉 口口成形 外面体部から底部露胎 底 部糸切り	100% 口縁部から内 面にかけて煤付着
	第43図-88 図版29-88	受皿	軟質施釉 陶器	口径 5.9 cm 器高 1.1 cm 底径 2.6 cm	柿釉 口口成形 外面体部から底部露胎 底 部糸切り痕有り(左巻き)	100%
	第43図-89 図版29-89	皿	軟質施釉 陶器	口径 9.0 cm 器高 1.9 cm 底径 3.5 cm	柿釉 口口成形 外面体部から底部露胎 底 部糸切り痕有り	80%
	第43図-90	土師皿	素焼き	口径 (14.0) cm 器高 3.0 cm	手捏ね成形 内外面口縁部から体部ヨコナデ 見込み一方向のナデ 底部指頭圧痕とナデ	在地 50%
	第43図-91	焙烙	素焼き	口径 (32.4) cm	底部外型成形 内外面口縁部から体部ヨコナデ 把手有り	5% 内外面煤付着
	第43図-92	焙烙	素焼き	口径 (32.0) cm	底部外型成形 離れ砂付着 内外面口縁部から 体部ヨコナデ 把手有り	10% 内外面煤付着
	第43図-93	ミニチュア製品	素焼き	径 4.2 cm 高さ 1.9 cm	独楽 型押し成形 雲母粉付着 中心に孔有り (貫通せず)	100%
	第43図-94	ミニチュア製品	素焼き	幅 2.0 cm 高さ 2.4 cm 厚み 0.8 cm	箱庭(城) 型押し成形 中心に孔有り(貫通)	98%
	第43図-95	ミニチュア製品	素焼き	縦幅 3.7 cm (2.8) cm 厚み 1.5 cm	面子(太鼓) 型押し成形	98%
	第44図-96	皿	陶器	口径 (6.7) cm 器高 1.5 cm 底径 3.0 cm	灰釉 外面体部から底部露胎 体部に溶着痕有 り 内面口縁部円形の粘土貼り付け 見込み4 条の斜格子状のクシ目有り 目跡3ヶ所有り	伊賀・信楽 50%
	第44図-97	皿	陶器	口径 11.1 cm 器高 2.3 cm 底径 4.2 cm	外面体部から底部露胎 内面口縁部菊花状の粘 土貼り付け 見込み4条の斜格子状のクシ目有 り 目跡3ヶ所有り	伊賀・信楽 100% 外面口縁部周辺煤付着 19c前半
	第44図-98	皿	陶器	口径 (7.5) cm 器高 1.2 cm 底径 3.1 cm	灰釉 外面体部から底部露胎 内面口縁部円形 の粘土貼り付け 見込み3条の平行クシ目有り 体部に重ね焼き痕あり	伊賀・信楽 50% 19c前半
	第44図-99 図版29-99	土瓶	陶器	口径 11.2 cm 器高 3.4 cm 底径 7.5 cm	外面底部周辺露胎 脚2ヶ所残存 見込み目跡2 ヶ所残存 土瓶蓋：灰釉 外面露胎 つまみ有り	伊賀・信楽 80% 外 面底部煤付着 19c前半
	第44図-100	碗	陶器	口径 9.0 cm 器高 5.3 cm 高台径 3.3 cm	高台周辺露胎	伊賀・信楽 70% 二 次焼成受ける 19c前半

表22 第181次調査遺物観察表(5)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK15	第44図-101 図版30-101	碗	陶器	口径 8.5 cm 器高 5.4 cm 高台径 3.1 cm	外面体部退化した若松文を鉄絵で描く 高台周辺露胎	伊賀・信楽 80% 19c前半
	第44図-102	埴	陶器	口径 18.5 cm 器高 7.4 cm 底径 6.6 cm	鉄釉 把手1ヶ所残存 脚2ヶ所残存 見込み目跡2ヶ所残存 底部周辺露胎	伊賀・信楽 80% 底部煤付着
	第44図-103 図版30-103	碗	陶器	口径 9.1 cm 器高 5.6 cm 高台径 3.7 cm	灰釉 口縁部周辺に緑釉を施す 高台周辺露胎 高台内回転ヘラ切り痕有り	80%
	第44図-104 図版30-104	水注	陶器	口径 4.4 cm 器高 9.9 cm 高台径 6.4 cm	灰釉 高台周辺露胎	美濃 90% 二次焼成受ける 17c末～18c初
	第44図-105 図版30-105	染付皿	白磁	口径 12.5 cm 器高 3.4 cm 高台径 5.2 cm	内面体部宝文 見込み蛇の目軸剥ぎ アルミナ塗布 高台量付露胎	肥前 70% 18c中頃
	第44図-106	染付碗蓋	白磁	口径 8.5 cm 器高 5.5 cm つまみ径 3.0 cm	外面体部とつまみ内山水文 内面見込み岩波文 つまみ量付露胎	肥前 70% 18c末～19c前
	第44図-107 図版30-107	染付碗蓋	白磁	口径 11.3 cm 器高 3.6 cm つまみ径 6.5 cm	内面体部松文と菊文 内面口縁部二重圏線有り 見込み十字花文と圏線有り つまみ量付露胎	肥前 90% 焼き継ぎ痕有り 18c末～19c前
	第44図-108 図版30-108	染付碗	白磁	口径 8.5 cm 器高 5.5 cm 高台径 3.0 cm	外面体部垣根文と羊歯文 内面口縁部二重圏線有り 見込み文様と圏線有り 高台量付露胎	肥前 50% 18c末～19c前
	第44図-109 図版30-109	染付碗	白磁	口径 6.8 cm 器高 5.4 cm 高台径 3.4 cm	筒形 体部四分割にして菊花文と幾何学文を施す 内面口縁部四方禪文 見込みコンニャク印判五弁花と圏線有り 高台量付露胎	肥前 70% 18c後～19c初
	第44図-110 図版30-110	染付碗	白磁	口径 11.9 cm 器高 6.0 cm 高台径 4.7 cm	外面丸文 高台内銘と圏線有り 内面口縁部二重圏線有り 見込みコンニャク印判五弁花と二重圏線有り 高台量付露胎	肥前 95% 18c後～19c前
	第44図-111	染付碗	青磁	口径 11.1 cm 器高 6.6 cm 高台径 4.1 cm	外面体部青磁釉 内面口縁部四方禪文 見込み手描き五弁花と二重圏線有り 高台内二重方形枠に簡略化した渦福有り 高台量付露胎	肥前 95% 18c後半
	第44図-112 図版30-112	染付碗	白磁	口径 9.5 cm 器高 5.3 cm 高台径 3.5 cm	外面梅樹文 内面口縁部圏線有り 見込み寿字文と圏線有り 高台量付露胎	肥前 90% 18c後半
	第44図-113	錦絵合子蓋	白磁	口径 (3.6) cm 器高 0.9 cm	外面梅樹文 口縁端部露胎	肥前 50%
	第44図-114	色絵鉢	白磁	口径 (15.1) cm	外面体部唐人を施す 輪郭は黒で洋服等は色絵を使う 背景は赤を施す	肥前 30% 焼き継ぎ痕有り
	第44図-115 図版30-115	染付蕎麦猪口	陶胎	口径 8.4 cm 器高 6.0 cm 高台径 4.2 cm	外面体部草花文 高台量付露胎	肥前 98% 18c前半
	第44図-116 図版30-116	軒丸瓦	瓦	径 13.8 cm 周縁厚 2.2 cm 瓦当厚 1.6 cm	左巻き三つ巴文 朱文16個 瓦当部と丸瓦との接合部に右側は縦方向、左側は左上がりのカキメ有り	瓦当のみ98%
	第44図-117	銭	銅	径 2.6 cm 厚み 0.1 cm	寛永通寶	100% 緑青付着「寶」の字判読難
SK18	第45図-118 図版31-118	受皿	軟質施釉陶器	口径 5.1 cm 器高 0.9 cm 底径 2.1 cm	柿釉 ロク口成形 底部糸切り痕有り	80% 口縁煤付着
	第45図-119 図版31-119	皿	軟質施釉陶器	口径 9.5 cm 器高 1.7 cm 底径 4.0 cm	柿釉 ロク口成形 底部糸切り痕有り 見込みに刻印有り	75%
	第45図-120	小杯	陶器	口径 (6.2) cm 器高 5.0 cm 高台径 2.9 cm	青緑色釉 高台露胎	30%

表23 第181次調査遺物観察表(6)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK18	第45図-121	碗	陶器	口径 8.4 cm 器高 4.5 cm 高台径 2.9 cm	口縁部端反り 灰釉 底部周辺露胎	伊賀・信楽 80% 内外面貫入 19c前半
	第45図-122 図版31-122	徳利	陶器	口径 2.3 cm 器高 14.3 cm 底径 5.4 cm	内面口縁部から外面底部まで黒色釉を施す	丹波 100% 灰被り
	第45図-123 図版31-123	染付皿	白磁	口径 (17.7) cm 器高 2.6 cm 高台径 (8.8) cm	内面山水文 高台内「〇〇年製」銘有り 高台量付露胎	肥前 40% 内外面口縁部貫入
	第45図-124 図版31-124	染付碗蓋	白磁	口径 10.5 cm 器高 2.8 cm つまみ径 4.2 cm	外面花鳥文 内面口縁部に帯状に丸文を施す 見込み手描き五弁花と二重圏線有り	肥前 50% 焼き継ぎ痕有り 18c後半
	第45図-125	染付碗蓋	白磁	口径 9.4 cm 器高 3.0 cm つまみ径 3.8 cm	外面大小6区画に草花文 つまみ内銘と圏線有り 内面口縁部雷文帯 見込み丸文と圏線有り	肥前 50% 19c前半
	第45図-126	染付碗	白磁	口径 (7.8) cm 器高 3.8 cm 高台径 3.0 cm	外面体部3区画に草花文 見込み文様と二重圏線有り 高台量付露胎	瀬戸 45% 19c前半
	第45図-127	染付碗	白磁	口径 (10.6) cm 器高 5.9 cm 高台径 4.2 cm	口縁部端反り 外面4ヶ所窓に松梅文 窓絵の間に菊文 内面口縁部に菊花文 見込みに梅花文と二重圏線 高台量付露胎	肥前 45% 19c前半
	第45図-128 図版31-128	色絵碗	白磁	口径 9.8 cm 器高 5.5 cm 高台径 3.9 cm	口縁部若干端反り 外面体部に鳳凰文 見込み雲文と圏線有り 高台量付露胎	肥前 75% 焼き継ぎ痕有り
SK21	第45図-129 図版31-129	皿	軟質施釉陶器	口径 7.0 cm 器高 1.2 cm 底径 3.3 cm	柿釉 ロクロ成形 外面体部から底部にかけて露胎 底部糸切り痕有り(左巻き)	90% 口縁煤付着
	第45図-130 図版31-130	皿	軟質施釉陶器	口径 5.5 cm 器高 0.9 cm 底径 3.8 cm	柿釉 ロクロ成形 外面体部から底部にかけて露胎 底部糸切り痕有り(左巻き)	90%
	第45図-131	皿	陶器	口径 10.7 cm 器高 2.1 cm 底径 4.1 cm	灰釉 内面4条の平行クシ目有り 見込み目跡3ヶ所有り 外面体部から底部露胎	伊賀・信楽 80% 口縁部周辺煤付着 19c前半
	第45図-132 図版31-132	染付小杯	白磁	口径 7.2 cm 器高 3.3 cm 高台径 2.7 cm	外面口縁部笹文 高台量付露胎	肥前 70%
SK22	第45図-133	土師皿	素焼き	口径 7.4 cm 器高 1.8 cm	手握ね成形 外面指頭圧痕とナデ 内面ナデ	在地 95% 口縁煤付着
	第45図-134	焙烙	素焼き	口径 (32.0) cm	底部外型成形 内外面口縁から体部ヨコナデ 把手貼り付け	口縁部50% 外面煤付着 胎土に金雲母含む
	第45図-135	焙烙	素焼き	口径 (32.6) cm	底部外型成形 内外面口縁部から体部ヨコナデ 把手貼り付け	口縁部20% 外面煤付着
	第45図-136	片口鉢	陶器	口径 16.0 cm 器高 6.9 cm 底径 9.8 cm	灰釉 外面露胎	丹波 25% 灰被り
	第45図-137	染付碗	白磁	口径 9.8 cm 器高 5.5 cm 高台径 3.6 cm	外面二重網目文 高台量付露胎	肥前 40% 18c後半
	第45図-138 図版31-138	染付小碗	白磁	口径 8.5 cm 器高 4.1 cm 高台径 3.4 cm	外面草花文と山水文 高台量付露胎	肥前 50% 二次焼成受ける
	第45図-139 図版31-139	染付碗	青磁	口径 12.9 cm 器高 6.8 cm 高台径 5.5 cm	外面青磁釉 内面と高台内白磁釉 内面口縁部四方禪文 見込み環状松竹梅文と二重圏線有り 高台内方形椀に渦福有り 高台量付露胎	肥前 70% 18c後半
	第45図-140 図版31-140	染付碗	白磁	口径 7.0 cm 器高 6.2 cm 高台径 3.9 cm	筒形 外面体部丸文 内面口縁部四方禪文 見込み手描き五弁花と二重圏線有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 70% 18c後～19c初

表24 第181次調査遺物観察表(7)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK25	第45図-141	色絵皿	陶器	口径 (9.4) cm 器高 2.2 cm 高台径 5.4 cm	内面体部花唐草文 見込み花文と圏線有り 外面宝文 文様は朱、緑、黒の三色で描く 高台 畳付露胎	肥前 45%
	第45図-142	染付皿	白磁	口径 (14.6) cm 器高 2.9 cm 高台径 8.4 cm	見込み牡丹文 高台畳付露胎 高台内ハリ支え 痕1ヶ所残存	肥前 30% 17c後半

表25 第181次調査遺物観察表(8)

第7節 第184次調査

所在地 伊丹市宮ノ前2丁目169-3他

調査期間 平成9年1月20日～3月19日

調査面積 350㎡

担当者 藤原直人・岩田明広

1. 遺跡の概要

有岡城跡・伊丹郷町遺跡は猪名川右岸の段丘面に位置する中世から近世にかけての遺跡である。今回は遺跡の中央部北側の部分について調査を行った。

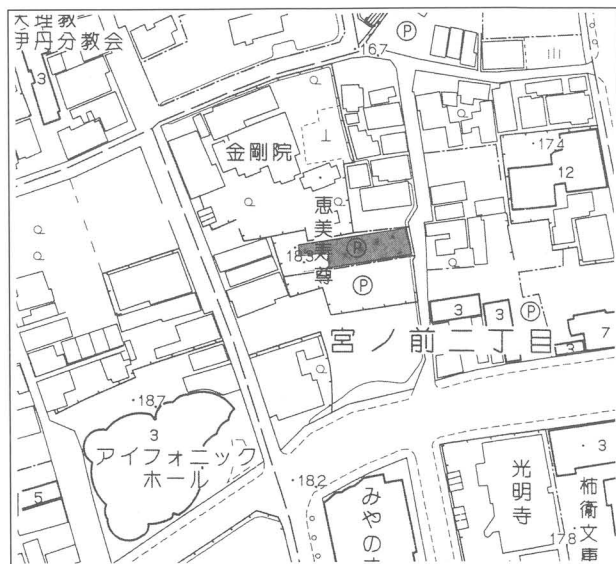
2. 調査の概要

調査範囲内は、戦前から戦後にかけて住宅建築。廃棄物埋納処理による激しい攪乱を受けていた。江戸時代前半期以降、連綿と続く遺構の構築のため、調査範囲全体が遺構の重複によって覆われており、明瞭な遺構面を捉えることはできなかった。このため、明治時代以降の堆積土及び廃棄物を含む層位が検出できる層位以下について、人力による掘削を行った。

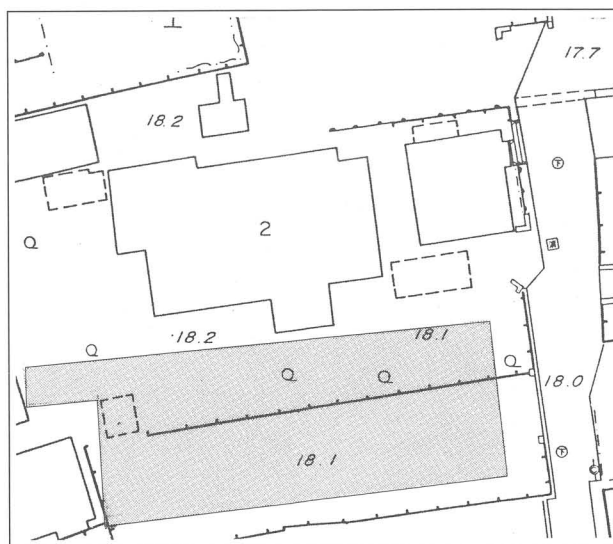
調査範囲には国土座標に基づく5mグリッドを設定して測量等を行った。平面図および断面図を1/20、他に状況に応じて個別遺構図を1/10で作成した。

基本層序

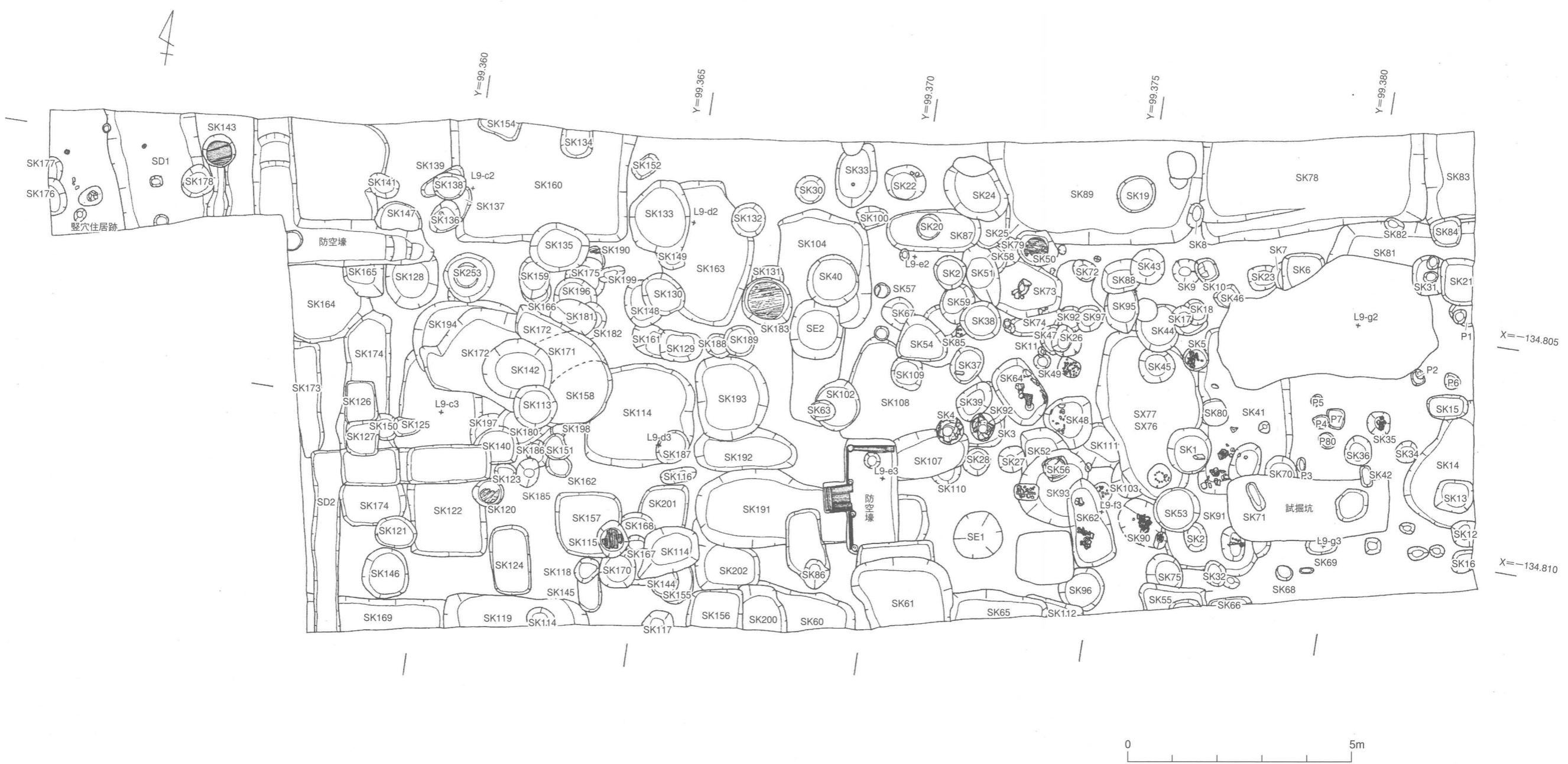
調査範囲内は段丘面にあたり、現在の市街地をのせる地層は、伊丹礫層と、この上面の黄褐色粘土を基盤におよそ3層の堆積物からなっている。I層は現代の建物跡等にもなう整地・盛土層である。II層は近代・現代の廃棄物を多量に含む整地層で、調査地の下層には多量の炭化物と焼土を含む整地層が認められた。部分的に残ったIII層は、シルト質中砂からなる堆積層で、18世紀前半の出土遺物を含む。III層をはさんで上位には18世紀半ば～後半の遺物を含む遺構群が、下位には17世紀後半～18世紀前半の遺物を含む遺構群が認められたが、断面の一部で確認できたに過ぎず、ほとんどの遺構は切り合いによる相対的な時期差を把握できたにとどまる。調査時には、基盤層をなす黄褐色の粘土層を、IV層と呼んだ。



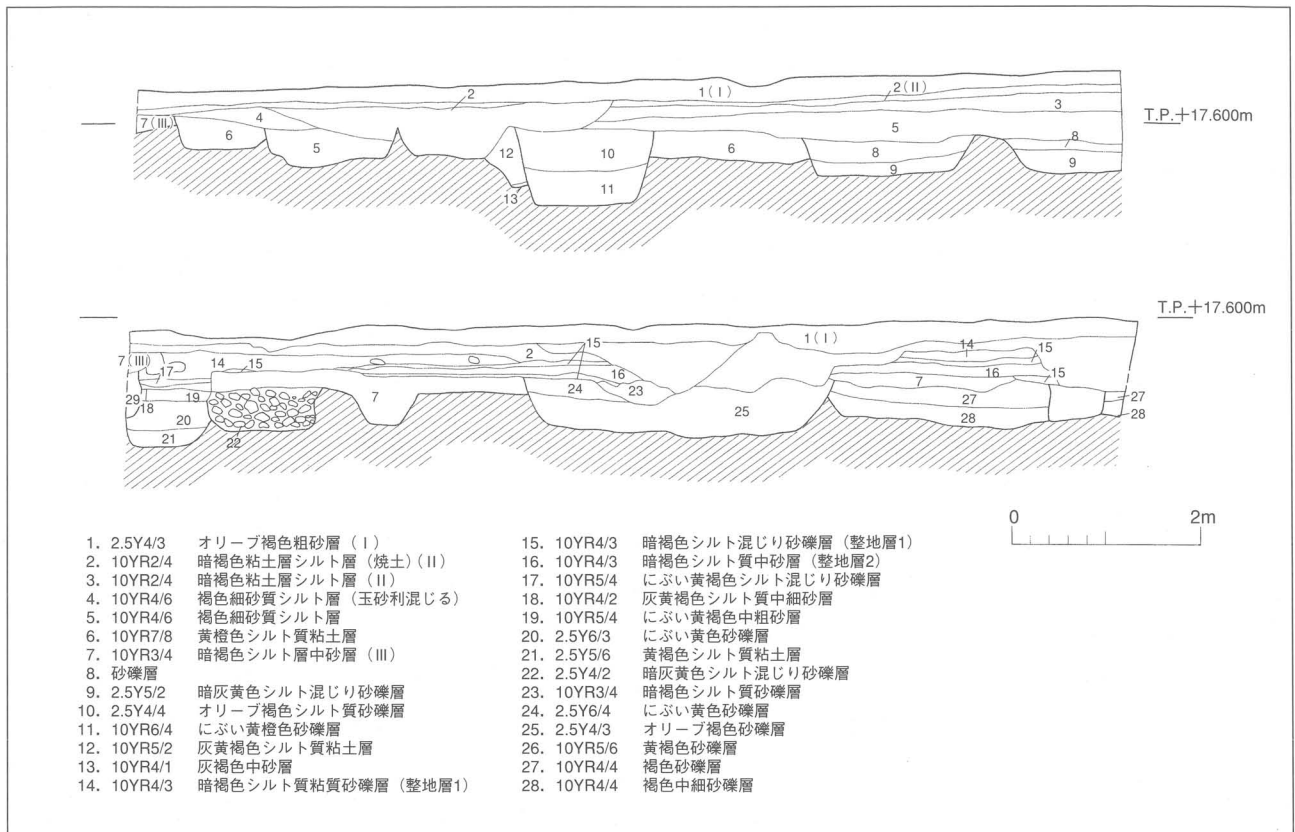
第46図 第184次調査調査区位置図 (1/2,500)



第47図 第184次調査調査区設定図 (1/500)



第48図 第184次調査全体図 (1/100)



第49図 第184次調査土層断面図 (南壁) (1/80)

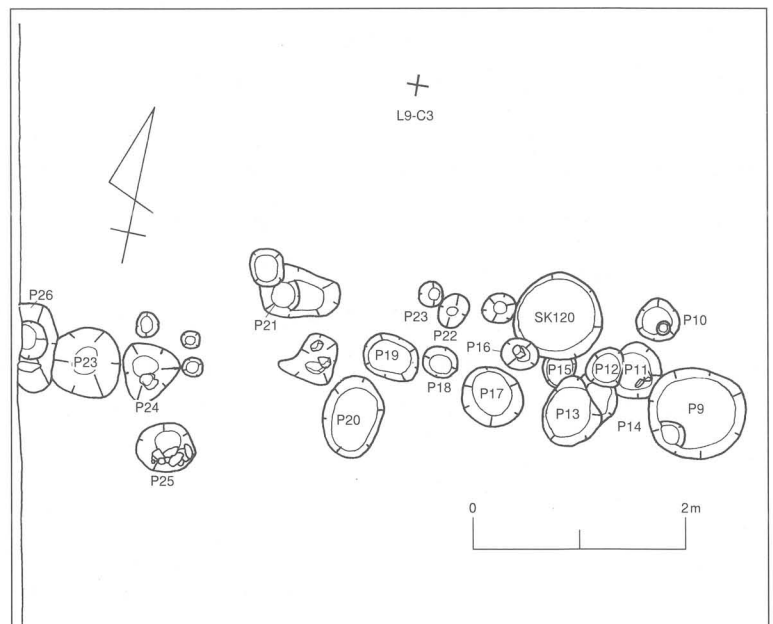
遺構面

前述したように、近世以後の遺構を確認できる明確な遺構面を検出することはできなかった。しかし、便宜上近代以後の遺物を包含する土層を取り除いた面を、第1遺構面と呼ぶことにした。整地・掘削は、基盤層をなすとみられるIV層上面にも認められ、III層はIV層から連続的に堆積したものと考える根拠は得られなかった。IV層上面には、初期の律令様式の須恵器を包含する遺構群が認められ、調査時にはこれを第2遺構面と呼ぶことにしたが、これらの遺構は粘性の高いシルト質細砂で埋没

しており、8世紀から近世に至る期間に遺跡全体が包括されるような面的削平をともなう堆積環境の大きな変化があったことがわかる。

3. 調査成果

今回の調査で検出した遺構は、第1遺構面で上坑202基、溝跡2条、柱穴8基、井戸跡1基、第2遺



第50図 第184次調査奈良時代の遺構平面図 (1/60)

構面で竪穴住居跡の痕跡とみられるものが1ヶ所、掘立柱建物跡1棟、柱穴を含むピット22基である。なお、この他伊丹市教育委員会からの要望で太平洋戦争時の防空壕跡2基、昭和30年代～40年代にかかるトイレに使用した埋甕4基を調査した。

第1遺構面

第1遺構面で検出した土坑は、大きく4つのグループに分けられる。

第1のグループは、瓦・磁器・陶器・焙烙・土師皿等を多量に含む廃棄用の土坑で、長径1m程度の不均整な楕円形か長辺2m程度の長方形をなしていた。配列等に特別な規則性を見出すことはできなかった。出土遺物では、焙烙が多いことが注目でき、完形に近い個体が多く認められた。ほとんどが18世紀から19世紀代の遺物である。

第2のグループは、底板の径を90cm、60cm、30cmとする埋桶で、底板・側板をよく残すものも認められた。底板は法量にかかわらず3枚の檜板からなり、側板は幅10cm程度の檜板を曲加工して用いている。底板上には例外なく淘汰のよい細砂が堆積しており、時期の遅れるものではこの細砂だけで埋没しているものもあった。細砂内には完形の土師皿が認められる場合があった。一般に細砂上にはIV層およびシルト・ブロックを主体とし、多量の磁器・陶器を含んだ土層が堆積しており、埋め戻されたものと判断した。掘り方は底板よりも10cm前後、大きく掘り込まれる場合があるほか、隙間なく掘り込む場合があった。多くの埋桶が規模を同じくして再構築されており、埋桶同士のはげしい重複が認められた。建物および生活様式の上で、変更の利かない行動様式があったことがわかる。埋桶の用途は不明であるが、底板上の砂の堆積状況からみて水を汲みおいたことがうかがえる。シルトの堆積はなく、伊丹礫層から汲み上げた水を溜めていた可能性が高い。時期的には18世紀前半～19世紀後半の幅広い遺物が得られており、決定するのは難しい。

第3のグループは焼土・炭化物のブロックとシルト・ブロックを主体とした覆土で埋め戻された一群である。多くは、少量の磁器・陶器・焙烙を包含していた。下層には砂礫層が認められる場合もあった。幅約2mのもの1mのものがあり、長さはいずれも3～4m程度、深さ20cm程度であった。元禄の大火との関連が問われることが多いが、今回の調査では、出土遺物の年代にも幅があること、周辺の整地層等に焼けた痕跡が全く認められないことなどから、関連を明らかにすることはできなかった。出土遺物は18世紀前半代を中心としているとみられる。

第4のグループは、砂礫層で埋没した大型の土坑群で、調査範囲南側の境界および北側の境界にかかって検出されるものが中心であった。例外なく長方形を呈しており、短辺1m前後、長辺2～3m程度、深さ40cm程度であった。上部にはⅢ層の堆積が認められ、第1～3のグループの土坑に先んじるものであることがわかる。出土遺物は少量の磁器・陶器が認められる程度で、明瞭に遺構に伴うものとは断定できないが、17世紀代にはいるものも認められた。他に検出した2条の溝跡のうち1方は、建物跡にともなう雨落溝の可能性はあるが、主体となる建物跡を明らかにすることはできなかった。また、ピットおよび拳大の玉石を込めた土坑も検出したが、これらの配列によって建物跡と断定できるものはなかった。

第2遺構面

第2遺構面では、初期の律令様式期にあたる遺物群が出土する遺構群を検出した。調査範囲の西側に突出した部分に土器の集中地点が認められた。土器の周囲には円形に焼土の分布範囲が認められ、IV層中に掘り込みをもつシルト質細砂で埋没した柱穴が認められたことなどから、住居跡床面の一部を検出した可能性があるが、調査範囲限界および近世の溝跡との重複によって断定する根拠を得ることはできなかった。

他に26基のピットからなるピット群を検出した。これらは調査範囲南西角付近に集中しており、ほぼ東西の列状に検出できた。ピットは長径50cm程度の掘り方をもち、径15cm程度および2.4mを柱間とする掘立柱建物跡を構成するものがあつた。小型の柱穴には、径30cm、深さ20cm程度のものが認められたが、明瞭な配列を検出することはできなかった。内部から須恵器杯・甕片等が出土した。8世紀前半～後半のものと考えられる。

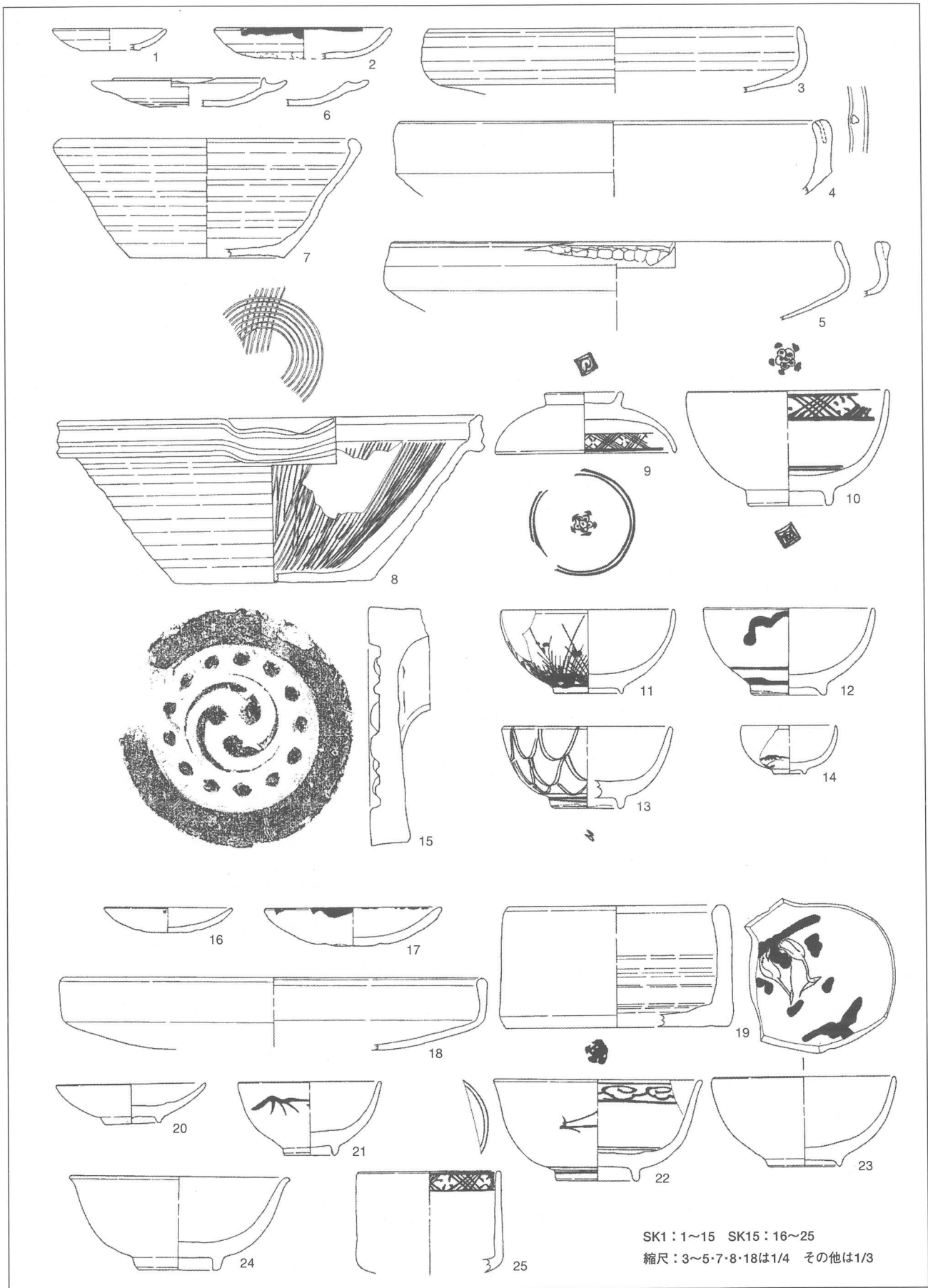
4. まとめ

今回の調査では200基を超える近世の土坑を検出したが、このうち80基以上が埋桶であつたことは注目できる。埋桶の配列に明確な規則性は認められなかったものの、多くが重複して再構築されていることからみて、調査範囲が長期にわたり特定の用途をなす空間として用いられたことは疑えない。調査区南側の隣接地では、酒蔵関連の遺構が出土しているが、今後の調査成果、それらとの関係を追求める必要もあるだろう。また、多数の土坑で磁器・陶器と在地産焙烙・土師皿が廃棄という行為のもとに相伴しており、記年銘をもつ磁器の存在から、当調査の成果が、今後、当地での在地土器の編年研究に重要な位置を占めるものと予想できる。

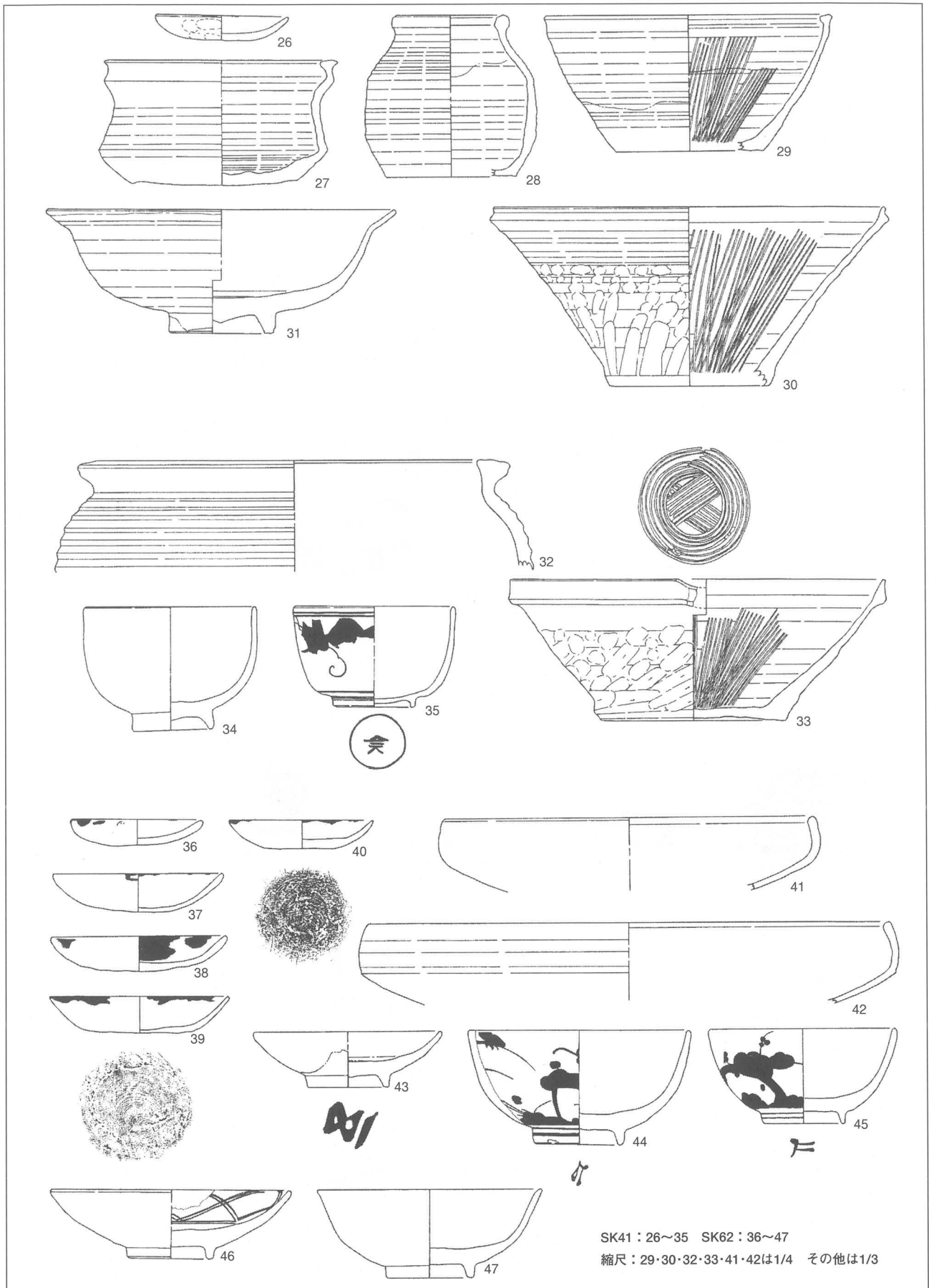
律令様式期の遺構については、遺構群の偏りから、遺跡の東端を抑えたものと理解できる。隣接地でも同様の遺構が検出されており、結果の総合が必要である。(藤原・岩田)

遺構名	挿図番号	遺構の性格	遺構の規模			主な出土遺物	年代
			東西	南北	最深		
SK1	第51図 1~15	埋桶	1.0	1.05	0.5	柿釉受皿 丹波焼播鉢 肥前白磁染付碗	18c後半
SK15	第51図 16~25	土坑	1.05	0.6	0.35	土師皿 焙烙 備前焼匣鉢 肥前白磁染付碗	19c前半
SK41	第52図 26~35	土坑	2.05以上	3.6以上	0.15	土師皿 丹波焼播鉢 肥前白磁染付碗	17c後半
SK53		埋桶	1.3	1.3	0.6	焙烙 堺・明石焼播鉢 肥前白磁染付碗・青磁碗	18c中頃
SK62	第52図 36~47	土坑	1.0	1.85	0.4	土師皿 焙烙 肥前白磁染付碗	18c前半
SK73		土坑	2.2以上	1.3以上	0.3	土師皿 焙烙 丹波焼播鉢 肥前白磁染付碗	18c中頃
SK113		埋桶	1.0	0.9	0.3	土師皿 堺・明石焼播鉢 肥前白磁染付碗	18c後半
SK115	第53図 66~73	埋桶	0.7	0.4	0.2	土師皿 焙烙 丹波焼鉢 肥前白磁染付碗	18c前半
SK122	第54図 98・99	土坑	1.7	4.45以上	0.15	須恵器杯身・甕	
SK160	第54図 74~88	土坑	4.2	2.6以上	0.2	土師皿 焙烙 丹波焼播鉢 肥前白磁染付碗	17c後半
井戸1		井戸	1.4	1.4		堺・明石焼播鉢 肥前白磁染付端反碗 三田青磁	19c後半以降
P16	第54図 92	柱穴	0.3	0.25	0.15	須恵器杯身	
P21	第54図 94・95	柱穴	0.6	0.4	0.3	須恵器杯身	
P26	第54図 96・97	柱穴	0.3	0.7	0.35	須恵器杯蓋・甕	
竪穴 住居跡	第54図 89~91		1.65以上	1.85以上		土師器高杯・甕	
掘立柱 建物跡			2間 5.0	1間 1.65			

表26 第184次調査主要遺構観察表

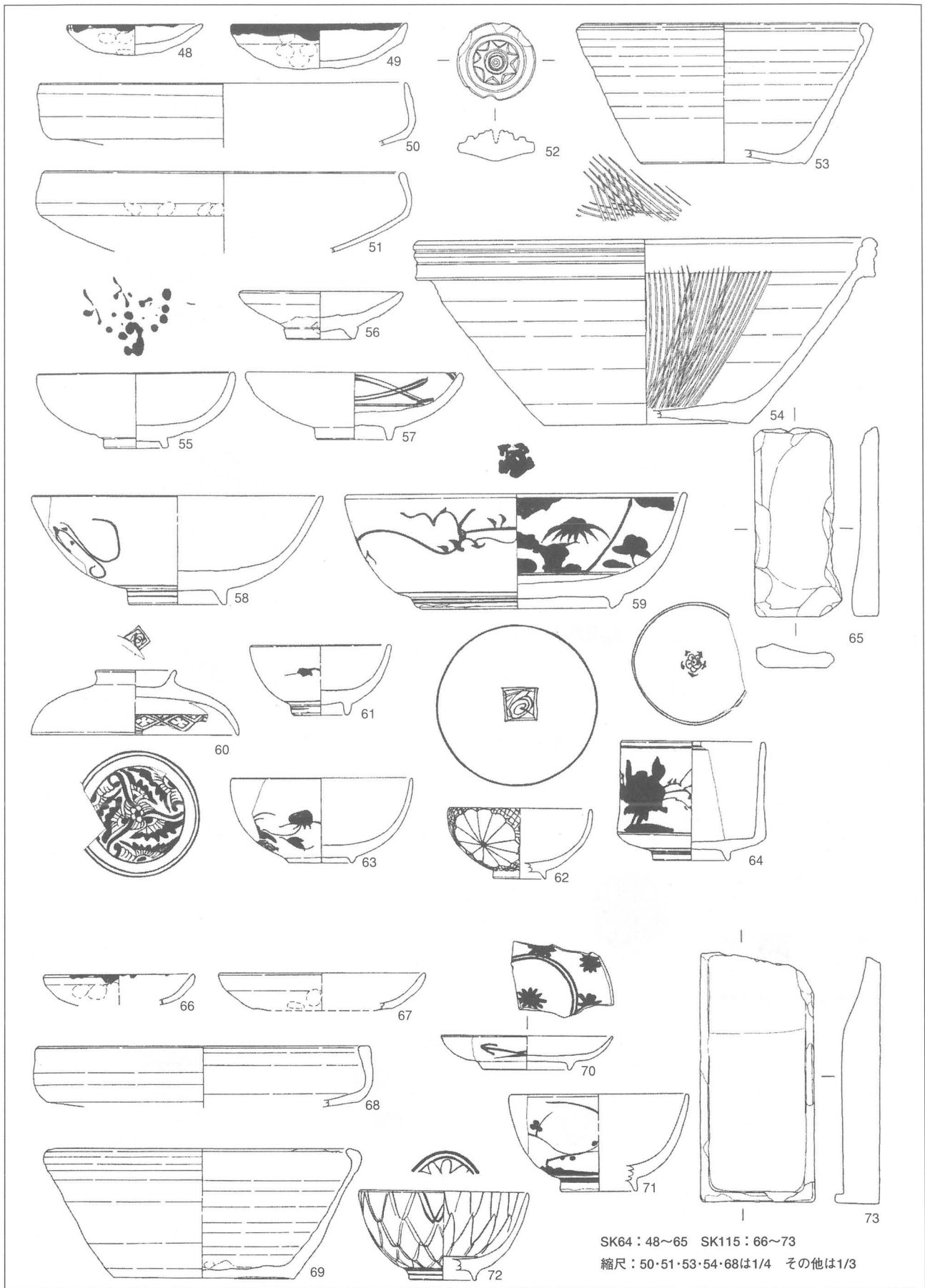


第51図 第184次調査出土遺物実測図(1)

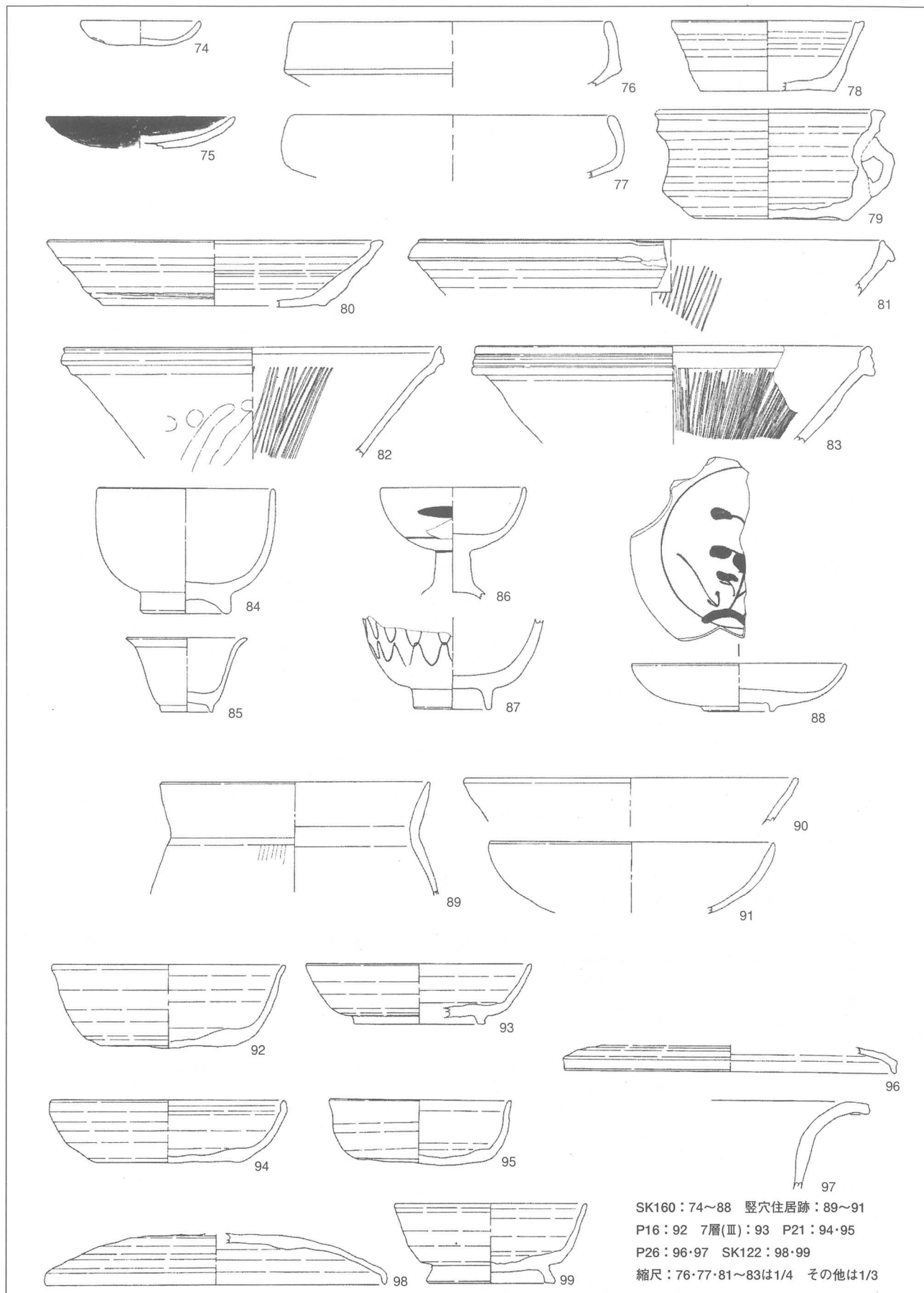


SK41 : 26~35 SK62 : 36~47
縮尺 : 29・30・32・33・41・42は1/4 その他は1/3

第52図 第184次調査出土遺物実測図 (2)



第53図 第184次調査出土遺物実測図 (3)



第54図 第184次調査出土遺物実測図(4)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK1	第51図-1	土師皿	素焼き	口径 (6.5) cm 器高 1.3 cm 底径 (3.4) cm	ロクロ成形 内外面ナデ	在地 20%
	第51図-2	土師皿	素焼き	口径 (10.0) cm 器高 1.8 cm	手捏ね成形 外面底部指頭圧痕 外面体部、内面ナデ	在地 15% 口縁煤付着
	第51図-3 図版35-3	焙烙	素焼き	口径 (28.4) cm	底部外型成形 内外面口縁から体部ヨコナデ	在地 30% 外面底部煤けている
	第51図-4 図版35-4	焙烙	素焼き	口径 (32.6) cm	底部外型成形 口縁から体部ヨコナデ 口縁上部に孔あり(貫通せず)	在地 30% 外面煤けている
	第51図-5 図版35-5	焙烙	素焼き	口径 (34.0) cm	底部外型成形 口縁から体部ヨコナデ 底部ナデ 把手有り	在地 40% 内外面煤けている
	第51図-6	受皿	軟質施釉陶器	口径 (11.2) cm 器高 1.7 cm 底径 (4.4) cm	柿釉 ロクロ成形 受部に1ヶ所切り込みあり 内面から外面体部中位ヨコナデ 中位から底部ヘラケズリ	35% 受部と口縁部に煤付着
	第51図-7 図版35-7	鉢	陶器	口径 (22.1) cm 器高 9.2 cm 底径 (6.8) cm	灰釉 外面露胎 底部に砂目2ヶ所残存 見込みに胎土目2ヶ所残存	丹波 40% 灰被り 18c後~19c初
	第51図-8	擂鉢	陶器	口径 (32.1) cm 器高 12.6 cm 底径 15.2 cm	クシ目一単位7本 底部に胎土目有り	丹波 40% 18c中頃
	第51図-9	染付碗蓋	青磁	口径 10.2 cm 器高 3.3 cm つまみ径 4.2 cm	外面青磁釉 内面とつまみ内白磁釉 口縁部四方襷文 見込み手描き五弁花と二重圍線 つまみ内二重方形枠の渦福 壘付露胎	肥前 80% 18c後半
	第51図-10	染付碗	青磁	口径 (11.4) cm 器高 6.6 cm 高台径 4.5 cm	外面青磁釉 内面と高台内白磁釉 内面口縁部四方襷文 見込み手描き五弁花と二重圍線 高台内二重方形枠の渦福 壘付露胎	肥前 60% 18c後半
	第51図-11 図版35-11	染付碗	白磁	口径 9.8 cm 器高 4.8 cm 高台径 3.8 cm	外面檜垣文 高台壘付露胎	肥前 80% 18c前半
	第51図-12 図版35-12	染付碗	陶器	口径 9.7 cm 器高 5.0 cm 高台径 4.0 cm	外面体部草花文か 高台壘付露胎	瀬戸・美濃 80% 貫入
	第51図-13 図版35-13	染付碗	白磁	口径 (9.5) cm 器高 4.7 cm 高台径 (3.7) cm	外面二重網目文 高台内銘有り 壘付露胎	肥前 40% 18c後半
	第51図-14	染付紅猪口	白磁	口径 (5.4) cm 器高 2.8 cm 高台径 1.8 cm	外面竹梅文 高台壘付露胎	肥前 45% 18c前半
	第51図-15 図版35-15	軒丸瓦	瓦	径 13.7 cm 周縁厚 2.3 cm 瓦当厚 1.6 cm	左巻き三つ巴文 珠文数13個	一部銀化現象
SK15	第51図-16	土師皿	素焼き	口径 (7.3) cm 器高 1.4 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内外面口縁部ヨコナデ	在地 40% 口縁部煤付着
	第51図-17	土師皿	素焼き	口径 (9.9) cm 器高 2.2 cm	手捏ね成形 外面底部指頭圧痕 内外面口縁部ナデ 内面ナデ	在地 50% 口縁部煤付着
	第51図-18	焙烙	素焼き	口径 (32.0) cm	底部外型成形 内外面口縁から体部ヨコナデ	在地 20% 内外面底部煤付着
	第51図-19	匣鉢	陶器	口径 (12.0) cm 器高 7.0 cm 底径 (12.8) cm	ロクロ成形	備前 20%
	第51図-20 図版35-20	小皿	白磁	口径 8.4 cm 器高 2.3 cm 高台径 3.1 cm	見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ砂塗布 高台露胎	肥前 85% 18c後~19c中

表27 第184次調査遺物観察表(1)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK15	第51図-21 図版35-21	染付小碗	白磁	口径 (8.0) cm 器高 4.2 cm 高台径 2.9 cm	外面に笹文 高台畳付露胎 離れ砂付着	肥前 55%
	第51図-22	染付碗	白磁	口径 (11.8) cm 器高 5.8 cm 高台径 4.6 cm	端反り 外面に折れ松葉文 内面口縁部連弧文 見込みコンニャク印判五弁花と二重圏線 蛇の目釉剥ぎ 高台畳付露胎 離れ砂付着	肥前 60% 18c末～19c前
	第51図-23	染付碗	青磁	口径 (10.3) cm 器高 5.2 cm 高台径 4.0 cm	外面青磁釉 内面と高台内白磁釉 内面鷲文 高台畳付露胎	肥前 60% 18c前半
	第51図-24 図版35-24	碗	白磁	口径 (12.4) cm 器高 5.4 cm 高台径 4.2 cm	端反り 見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ塗布 高台畳付露胎	肥前 50% 18c末～19c前
	第51図-25	染付碗	青磁	口径 8.0 cm	筒形 外面青磁釉 内面白磁釉 内面口縁部四方襷文 見込み二重圏線有り	肥前 50% 18c後半
SK41	第52図-26	土師皿	素焼き	口径 7.4 cm 器高 1.4 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 95% 口縁煤付着
	第52図-27 図版36-27	火入れ	陶器	口径 (12.6) cm 器高 7.1 cm 底径 9.3 cm	内外面塗り土を施す	丹波 50% 口縁部に敲打痕あり
	第52図-28	壺	陶器	口径 6.0 cm 器高 9.2 cm 底径 (7.4) cm	内面頸部から底部塗り土を施す 外面底部周皿露胎	丹波 30% 内面に鉄分付着
	第52図-29	播鉢	陶器	口径 (21.5) cm 器高 10.3 cm 底径 (11.2) cm	クシ目一単位7本 内面口縁部付近から外面上半部にかけて塗り土を施す	丹波 20%
	第52図-30	播鉢	陶器	口径 (29.5) cm 器高 13.5 cm 底径 (12.2) cm	クシ目一単位7本 外面体部上半口クロナデ 下半ナデアゲ 底部付近ヘラケズリ	丹波 25% 17c後半
	第52図-31	鉢	陶器	口径 (19.6) cm 器高 7.0 cm 高台径 5.7 cm	掛け分け 内面銅緑釉 外面長石釉 高台露胎 目跡有り 見込み蛇の目釉剥ぎ	肥前 50% 二次焼成を受ける 17c後半
	第52図-32	甕	陶器	口径 (28.2) cm	塗り土を施す	丹波 5%
	第52図-33 図版36-33	播鉢	陶器	口径 (28.1) cm 器高 10.7 cm 底径 14.0 cm	クシ目一単位7本 外面口縁部周辺口クロナデ 体部ナデアゲ 底部周辺ヘラケズリ	丹波 70% 17c後半
	第52図-34 図版36-34	碗	陶器	口径 9.5 cm 器高 7.0 cm 高台径 4.4 cm	呉器手 高台畳付露胎	肥前 70% 内面煤付着 外面二次焼成 全体に貫入 17c後半
	第52図-35 図版36-35	染付碗	白磁	口径 (8.9) cm 器高 5.7 cm 高台径 4.6 cm	外面葡萄蔓草文 高台内に文様と圏線有り 高台畳付露胎 離れ砂付着	肥前 60% 17c後半
SK62	第52図-36 図版36-36	土師皿	素焼き	口径 7.3 cm 器高 1.5 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ 内外面口縁部ヨコナデ	在地 100% 口縁煤付着
	第52図-37 図版36-37	土師皿	素焼き	口径 9.5 cm 器高 2.2 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内外面口縁部ヨコナデ 内面ナデ	在地 98% 口縁煤付着
	第52図-38 図版36-38	土師皿	素焼き	口径 9.8 cm 器高 2.0 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内外面口縁部ヨコナデ 内面ナデ	在地 100% 口縁煤付着
	第52図-39	土師皿	素焼き	口径 10.0 cm 器高 2.1 cm 底径 4.2 cm	ロクロ成形 底部糸切り痕有り(左巻き)	在地 95% 口縁煤付着
	第52図-40	土師皿	素焼き	口径 8.1 cm 器高 1.6 cm 底径 3.0 cm	ロクロ成形 底部糸切り痕有り(左巻き)	在地 95% 口縁煤付着

表28 第184次調査遺物観察表(2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK62	第52図-41	焙烙	素焼き	口径 (27.8) cm	底部外型成形 口縁から体部ヨコナデ	5% 内外面底部焼けている
	第52図-42	焙烙	素焼き	口径 (39.2) cm	底部外型成形 口縁から体部ヨコナデ	5% 外面と内面底部焼けている
	第52図-43	皿	白磁	口径 (10.6) cm 器高 3.2 cm 高台径 (4.5) cm	見込み蛇の目釉剥ぎ 高台付近露胎	肥前 30% 高台内墨書有り
	第52図-44	染付碗	白磁	口径 12.4 cm 器高 6.5 cm 高台径 4.8 cm	外面竹梅文 高台内銘有り 量付露胎	肥前 50% 18c前半
	第52図-45 図版36-45	染付碗	白磁	口径 10.4 cm 器高 5.4 cm 高台径 4.4 cm	外面雪輪草花文 高台内銘有り 量付露胎	肥前 80% 18c前半
	第52図-46	染付皿	白磁	口径 13.4 cm 器高 3.9 cm 高台径 4.5 cm	内面二重斜格子文 見込み蛇の目釉剥ぎ 二重 圏線有り 高台量付露胎	肥前 60% 18c
	第52図-47	碗	白磁	口径 12.6 cm 器高 5.0 cm 高台径 4.7 cm	口縁端反り 見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ塗 布 高台量付け露胎	肥前 60% 18c末～ 19c前
SK64	第53図-48 図版36-48	土師皿	素焼き	口径 7.7 cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 100% 口縁煤付 着
	第53図-49 図版36-49	土師皿	素焼き	口径 10.0 cm 器高 2.5 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内外面口縁部ヨコ ナデ 内面ナデ	在地 100% 口縁煤付 着
	第53図-50 図版36-50	焙烙	素焼き	口径 27.8 cm	底部外型成形 口縁から体部ヨコナデ	在地 50% 外面体部 焼けている
	第53図-51	焙烙	素焼き	口径 (27.2) cm	底部外型成形 口縁から体部ヨコナデ	在地 25% 外面焼けて いる
	第53図-52	ミニチュア製品	素焼き	径 4.4 cm 器高 1.8 cm	独楽 中心に孔有り 表面に雲母粉付着	95%
	第53図-53 図版37-53	鉢	陶器	口径 21.3 cm 器高 10.6 cm 底径 (12.4) cm	灰釉 内外面口縁部と外面露胎	丹波 40% 灰被り
	第53図-54 図版37-54	挿鉢	陶器	口径 (34.4) cm 器高 14.0 cm 底径 15.6 cm	クシ目一単位9本 見込み焼き台の痕跡あり 底部重ね焼き台の痕跡有り	堺・明石 40% 18c 後半
	第53図-55 図版37-55	皿	陶器	口径 11.1 cm 器高 4.3 cm 高台径 3.5 cm	見込み錆絵染付の梅文有り 高台周辺露胎	瀬戸 55% 18c後
	第53図-56	皿	白磁	口径 9.1 cm 器高 2.7 cm 高台径 3.4 cm	見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ砂塗布 高台周 辺露胎	肥前 90% 18c後～ 19c中
	第53図-57 図版37-57	染付皿	白磁	口径 12.1 cm 器高 3.9 cm 高台径 4.2 cm	内面二重斜格子文 見込み蛇の目釉剥ぎ アル ミナ塗布 二重圏線有り 高台量付露胎	肥前 98% 18c
	第53図-58 図版37-58	染付鉢	白磁	口径 (16.4) cm 器高 6.2 cm 高台径 5.4 cm	外面草花文 見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ砂 塗布 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 45% 18c中～ 後
	第53図-59 図版37-59	染付鉢	白磁	口径 19.0 cm 器高 6.5 cm 高台径 10.7 cm	外面唐草文 内面を4箇所に区画し岩笹文と牡 丹文を描く 見込みコンニャク印判五弁花 高 台内二重方形枠渦福と圏線 高台量付露胎	肥前 90% 18c
	第53図-60	染付碗蓋	青磁	口径 (11.7) cm 器高 3.7 cm つまみ径 4.5 cm	外面青磁釉 内面とつまみ内白磁 内面口縁部 四方襷文 見込み花文と二重圏線有り つまみ 内二重方形枠の渦福 つまみ量付露胎	肥前 55% 18c後半

表29 第184次調査遺物観察表(3)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK64	第53図-61 図版37-61	染付小碗	白磁	口径 7.7 cm 器高 4.0 cm 高台径 2.9 cm	外面草花文か 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 50%
	第53図-62 図版37-62	染付小碗	白磁	口径 (8.0) cm 器高 4.0 cm 高台径 (2.9) cm	外面氷裂菊花文 高台量付露胎	肥前 50% 18c前半
	第53図-63 図版37-63	染付碗	白磁	口径 10.2 cm 器高 4.8 cm 高台径 3.6 cm	外面牡丹文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 70% 18c前半
	第53図-64 図版37-64	染付碗	白磁	口径 8.0 cm 器高 6.8 cm 高台径 4.2 cm	筒形 外面牡丹文 見込み手描き五弁花と二重 圏線有り	肥前 70% 18c後半
	第53図-65	砥石	石	縦 10.8 cm 横 4.4 cm 厚み 1.4 cm	粘板岩	85%
SK115	第53図-66	土師皿	素焼き	口径 (8.4) cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 25% 口縁煤付着
	第53図-67	土師皿	素焼き	口径 (11.6) cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 20%
	第53図-68	焙烙	素焼き	口径 (25.0) cm	底部外型成形 内外面口縁から体部ヨコナデ	在地 10% 二次焼成 受ける 体部煤けてい る
	第53図-69 図版38-69	鉢	陶器	口径 (16.6) cm 器高 7.4 cm 底径 10.3 cm	灰釉 外面と底部露胎	丹波 60% 灰被り
	第53図-70	染付皿	白磁	口径 (9.6) cm 器高 1.9 cm 高台径 (5.0) cm	外面折れ松葉文 内面コンニャク印判菊文 見 込み二重圏線とコンニャク印判文菊文 高台量 付露胎 離れ砂付着	肥前 25% 18c前半
	第53図-71	染付碗	白磁	口径 (10.0) cm 器高 5.5 cm 高台径 (4.3) cm	外面草花文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 20% 18c前半
	第53図-72	染付碗	白磁	口径 (9.4) cm 器高 5.4 cm 高台径 (3.6) cm	外面二重網目文 内面網目文 見込み二重圏線 と菊文 高台量付露胎	肥前 35% 18c前半
	第53図-73	硯	石	幅 6.5 cm 厚み 2.5 cm		80% 二次焼成受ける
SK160	第54図-74	土師皿	素焼き	口径 (6.8) cm 器高 1.4 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 40%
	第54図-75	土師皿	素焼き	口径 10.6 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ 内外面 口縁ヨコナデ	在地 35% 内外面煤 付着
	第54図-76	焙烙	素焼き	口径 (24.0) cm	底部外型成形 口縁端部強いナデ 体部ヨコナ デ 腰部ヘラケズリ	在地 10% 外面煤付 着
	第54図-77	焙烙	素焼き	口径 (24.0) cm	底部外型成形 口縁部から体部はヨコナデ 腰 部ヘラケズリ	在地 15% 外面煤付 着
	第54図-78 図版38-78	鉢	陶器	口径 (10.8) cm 器高 4.0 cm 底径 (7.6) cm	ロクロ成形 内外面口縁部に灰釉を施す	丹波 40% 一部灰被 り
	第54図-79 図版38-79	火入れ	陶器	口径 (12.4) cm 器高 6.2 cm 高台径 (8.4) cm	口縁周辺に鉄釉掛かる 把手1カ所有り	丹波 80% 敲打痕有 り
	第54図-80	平鉢	陶器	口径 (18.6) cm 器高 3.7 cm 底径 (12.6) cm	内面と外面体部塗り土(赤土部釉) 外面底部灰 釉	丹波 30%

表30 第184次調査遺物観察表(4)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK160	第54図-81	播鉢	陶器	口 径 (35.0) cm	クシ目一単位6本か 口縁部周辺ロクロナデ	丹波 5% 17c中～後
	第54図-82	播鉢	陶器	口 径 (28.4) cm	クシ目一単位7本 内外面口縁部周辺ロクロナデ 外面体部ナデアゲ	丹波 10% 17c中～後 灰被り
	第54図-83	播鉢	陶器	口 径 (29.5) cm	クシ目一単位8本 内外面口縁部周辺ロクロナデ	丹波 10% 18c前半
	第54図-84 図版38-84	碗	陶器	口 径 (9.8) cm 器 高 7.1 cm 高台径 4.7 cm	呉器手 高台量付露胎	肥前 60% 全体に貫入する 二次焼成受ける 17c後半
	第54図-85 図版38-85	小杯	白磁	口 径 (6.6) cm 器 高 4.2 cm 高台径 2.8 cm	口縁部端反り 高台量付露胎	肥前 30% 内外面貫入有り 二次焼成受ける 17c後半
	第54図-86	染付仏飯具	白磁	口 径 8.0 cm	外面文様有り	肥前 30% 二次焼成受ける 17c後半
	第54図-87	染付碗	白磁	高台径 (4.1) cm	外面網目文 高台量付露胎	肥前 40% 二次焼成受ける 17c中頃
	第54図-88	染付皿	白磁	口 径 (12.0) cm 器 高 2.7 cm 高台径 (4.0) cm	見込み草花文と圏線有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 35% 17c中頃
竪穴住居跡	第54図-89 図版38-89	甕	土師器	口 径 (15.0) cm	外面縦方向のハケメ 表面磨耗著しく調整不明	5%
	第54図-90 図版38-90	高杯	土師器	口 径 (16.0) cm	表面磨耗が著しく調整不明	5%
	第54図-91 図版38-91	甕	土師器	口 径 (18.6) cm	表面磨耗が著しく調整不明	5%
P16	第54図-92 図版38-92	杯身	須恵器	口 径 (13.0) cm 器 高 4.7 cm 底 径 7.7 cm	ロクロ水引き成形(左回転)	40% 8c前～中
7層(Ⅲ)	第54図-93 図版38-93	杯身	須恵器	口 径 (12.6) cm 器 高 3.4 cm 底 径 (7.3) cm	ロクロ水引き成形(右回転) 貼り付け高台	30%
	P21	第54図-94 図版38-94	杯身	須恵器	口 径 (13.0) cm 器 高 3.5 cm 底 径 8.0 cm	ロクロ水引き成形(右回転)
第54図-95 図版38-95		杯身	須恵器	口 径 10.1 cm 器 高 3.6 cm 底 径 7.5 cm	ロクロ水引き成形(左回転)	40%
P26	第54図-96 図版38-96	杯蓋	須恵器	口 径 (18.6) cm	ロクロ水引き成形(右回転)	10%
	第54図-97 図版38-97	甕	土師器		表面磨耗が激しく調整不明	5%
SK122	第54図-98 図版38-98	杯蓋	須恵器	口 径 (19.0) cm	ロクロ水引き成形(左回転) 天井部ヘラケズリつまみは欠損	40% 7c末～8c初
	第54図-99	杯身	須恵器	口 径 (10.7) cm 器 高 4.5 cm 底 径 (7.0) cm	ロクロ水引き成形(右回転) 貼り付け高台	40% 7c末～8c初

表31 第184次調査遺物観察表(5)

第8節 第186次調査

所在地 伊丹市宮ノ前1丁目85-1、88-2

調査面積 57㎡

調査期間 平成8年12月3日～12月20日

担当者 小長谷正治

1. 遺跡の概要

第186次調査地点は、有岡城主郭部から直線で北西へ670mほどの距離にあり、北へ150m行くと有岡城岸の砦、現在の猪名野神社がある。江戸時代には昆陽口村に属している。これまでの発掘調査では、この近辺には有岡城当時の遺構や遺物が検出されることは少なく、江戸時代の中期以降にならないと遺跡の痕跡は認められていない。

2. 調査の概要

震災により被災した個人住宅の建替え工事に伴う発掘調査。敷地内の、工事によって遺跡に影響が出る範囲について全面調査を実施した。調査に際し、表土などは重機によって機械掘削を行ったが、約40～50cm掘り下げたところで地山面が現れたため、重機掘削はここで止め、人力による遺構検出に切り替えた。遺構面は、この地山面の1面のみである。

3. 調査成果

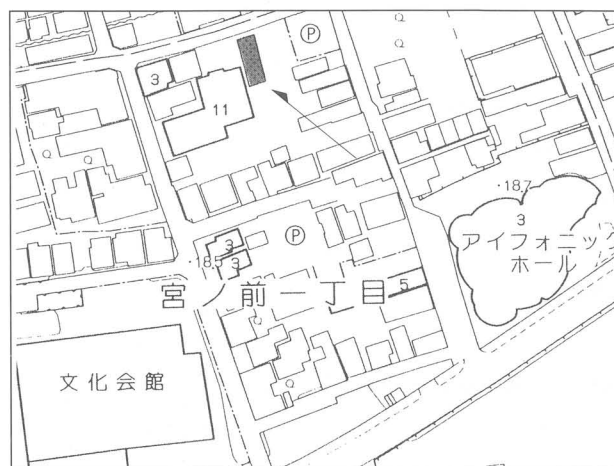
検出した遺構は、土坑16基、ピット24基、埋桶2基、水琴窟2基である。検出した遺構は、敷地の奥側（南側）に集中する傾向が顕著で、敷地の前面の遺構は僅かであった。これは、検出した遺構が主に陶磁器などを棄てた廃棄土坑であることから、家屋の裏側に多く掘られたものと推測される。また、便所遺構と考えられる埋桶、庭園遺構である水琴窟も敷地奥側に位置している。

SK1

調査区北側に位置し、遺構の北側は調査区外に延びている。規模は、東西1.54m、深さ8.5cmを測る。出土遺物は陶磁器片が少量出土している。

SK2（第59図、図版39）

調査区北側に位置する。規模は、長軸1.71m、短軸95cm、深さ22.1cmを測る。出土遺物には肥前



第55図 第186次調査調査区位置図（1/2,500）



第56図 第186次調査調査区設定図（1/500）

磁器皿（5）などが出土している。

SK 3（図版39）

調査区の北側に位置し、遺構の西側は調査区外に延びている。規模は、東西2.16m、幅1.27m、深さ5~10cmを測る。出土遺物には、肥前白磁、京焼風陶器碗、唐津焼鉢などがある。

SK 4（第59図、図版41）

東壁中央部に位置し、遺構の東側は遺構外へ延びている。規模は、南北72cm、深さ13.8cmを測る。小規模な土坑ながら多くの遺物（6~12）が出土した。

SK 6（第59図、図版40・41）

調査区の西壁に一部がかかっている。直径70cmの円形で、底は平坦面を成している。深さは、22.2cm。木質部は残っていなかったが、SK 7と組み合わせとなる埋桶と考えられる。遺物には、灯明具（13）のほか銭などが出土した。

SK 8（第59図、図版40・41）

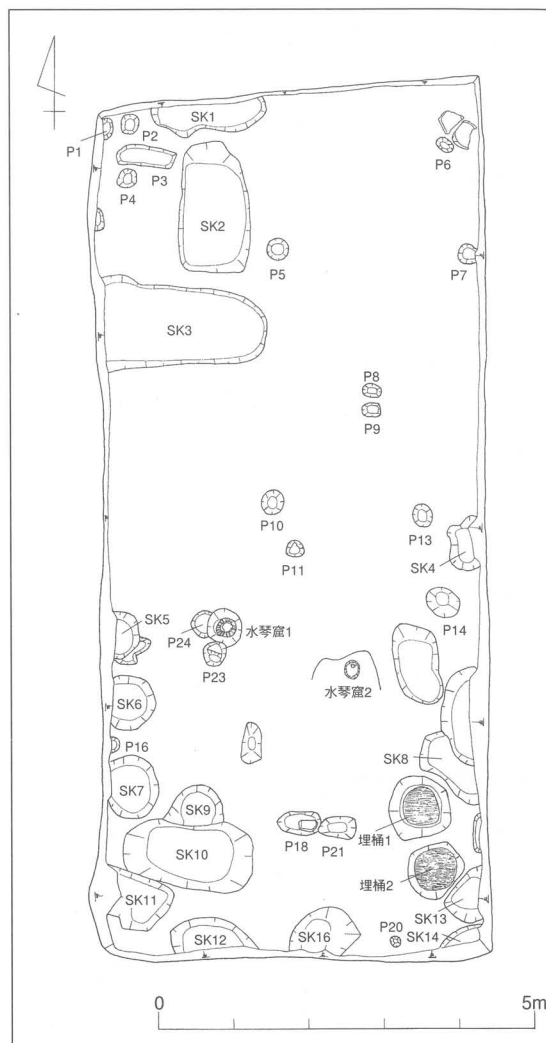
東壁際に位置し、遺構の大半が調査区外となっている。遺構の規模は、南北方向に1.27m、深さ34.1cmを測る。内部から多くの肥前磁器（14~25）などが出土した。

SK10

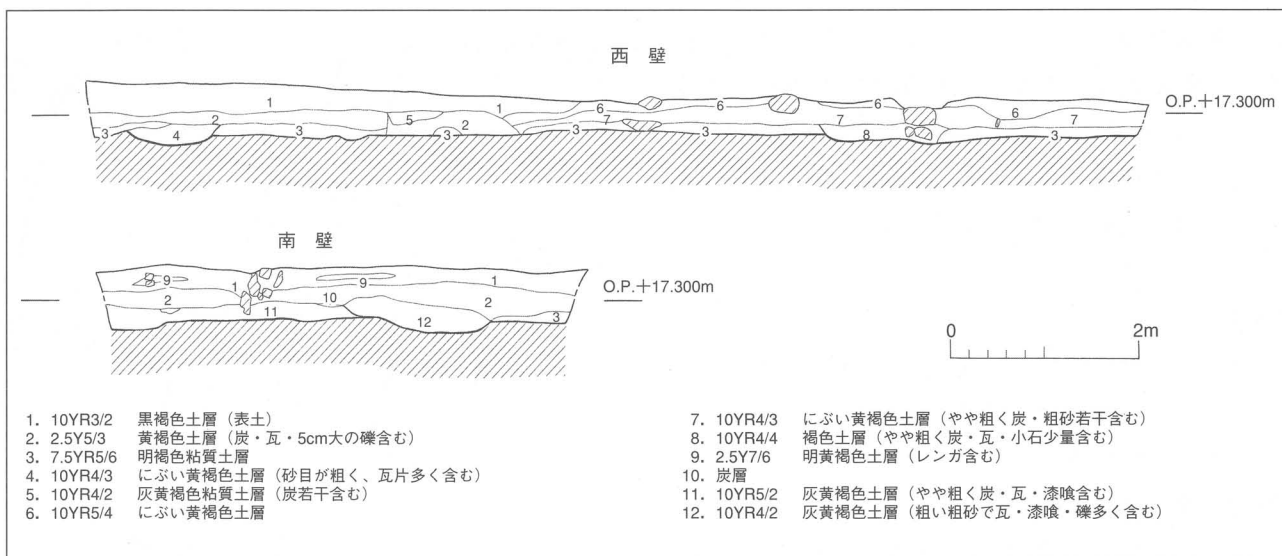
調査区の南側に位置する隅丸方形の土坑である。規模は長軸1.72m、短軸93cm、深さ39.5cmを測る。埋土から陶磁器の出土があった。

SK11（第60図、図版41）

西壁際に位置し、遺構の東側部分は調査区外となっている。規模は、検出長1m、深さ18.6cmを測る。



第57図 第186次調査全体図（1/100）



第58図 第186次調査土層断面図（西壁・南壁）（1/80）

出土遺物には、丹波焼の匣鉢（26）などがある。

SK12（第60図）

調査区の南壁際に位置し、遺構の一部が調査区外となっている。遺構の規模は、東西方向が1.1m、深さ10cmを測る。出土遺物には、肥前染付蓋・碗（28・29）、同染付皿（27）などがある。

SK16（第60図）

南壁際に位置し、遺構の南側が調査区外となっている。深さは、最深45.9cmを測る。出土遺物には、焼き継ぎされた肥前染付磁器大皿（31）がある。

埋桶1・2（第59図、図版40・41）

調査区の南側に2基並んで検出された。埋桶1・2ともに、直径60cmの桶を埋め込んだもので、底板と側板の木質部が若干遺存していた。掘り方の規模は、直径75～80cm、深さは、埋桶1が34cm、埋桶2が40.7cmを測る。埋桶1から型紙刷りの肥前染付磁器皿（1）などが出土している。

水琴窟1・2（第59図、図版40・41）

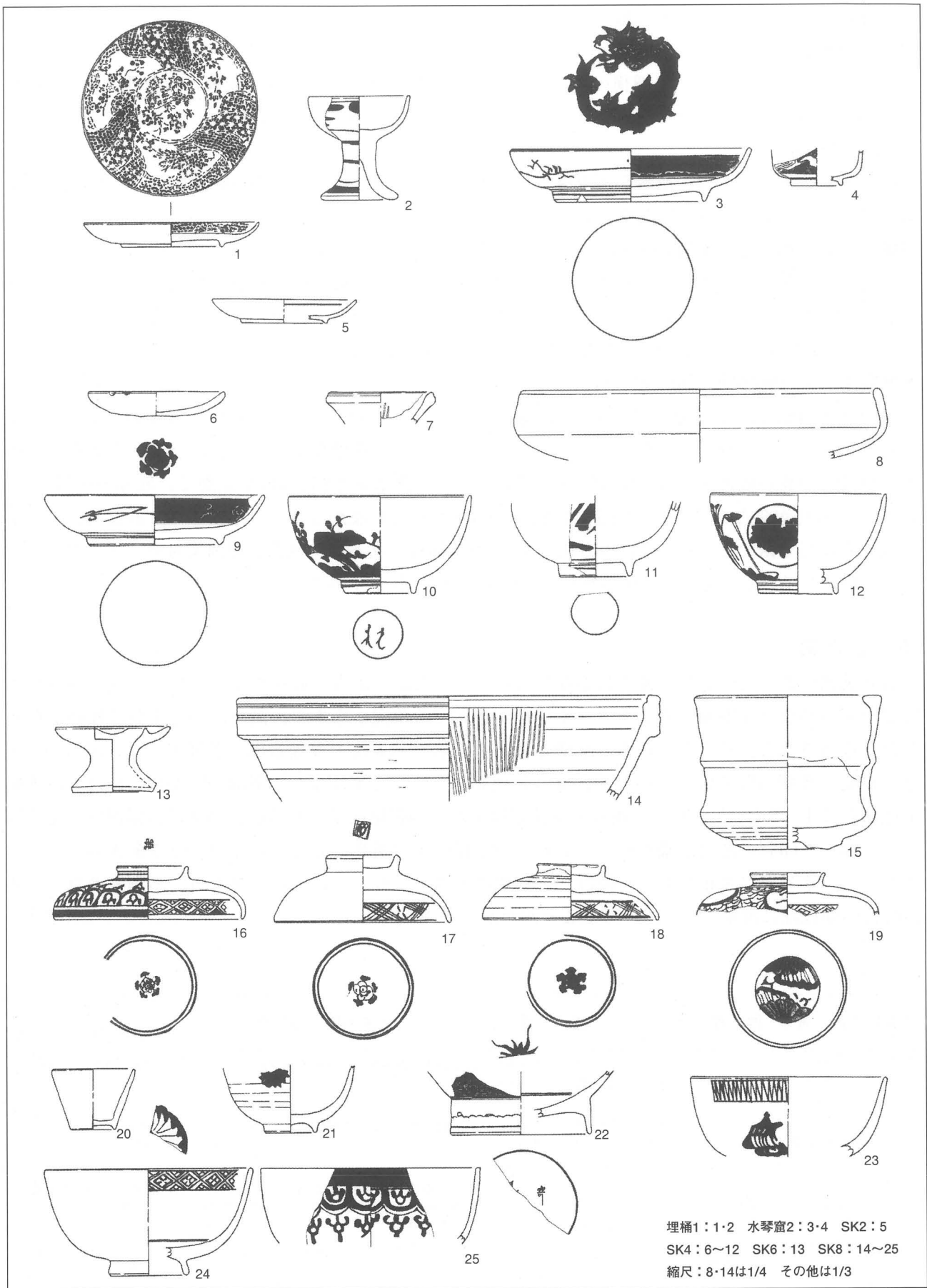
調査区の南側に約1.7m離れて2基の水琴窟が発見された。両方とも上部の構造は失われており、甕の底も水琴窟1は一部が、水琴窟2は大きく欠損していた。水琴窟1は、直径50cmの円形の掘り方中央に丹波焼の甕が底部を上にして設置されていた。この甕は高さ25.2cmの小型甕で、底部中央部には、直径3.5cmの孔が穿たれていた。内部には皿などは置かれていなかった。水琴窟2は、直径35cmの円形の掘り方に甕を据えている。設置の方法は水琴窟1と同様であるが、内部に肥前染付皿（3）が、上を向けて置かれていた。甕は丹波焼の小型のもので、水琴窟1より小さい。

4 まとめ

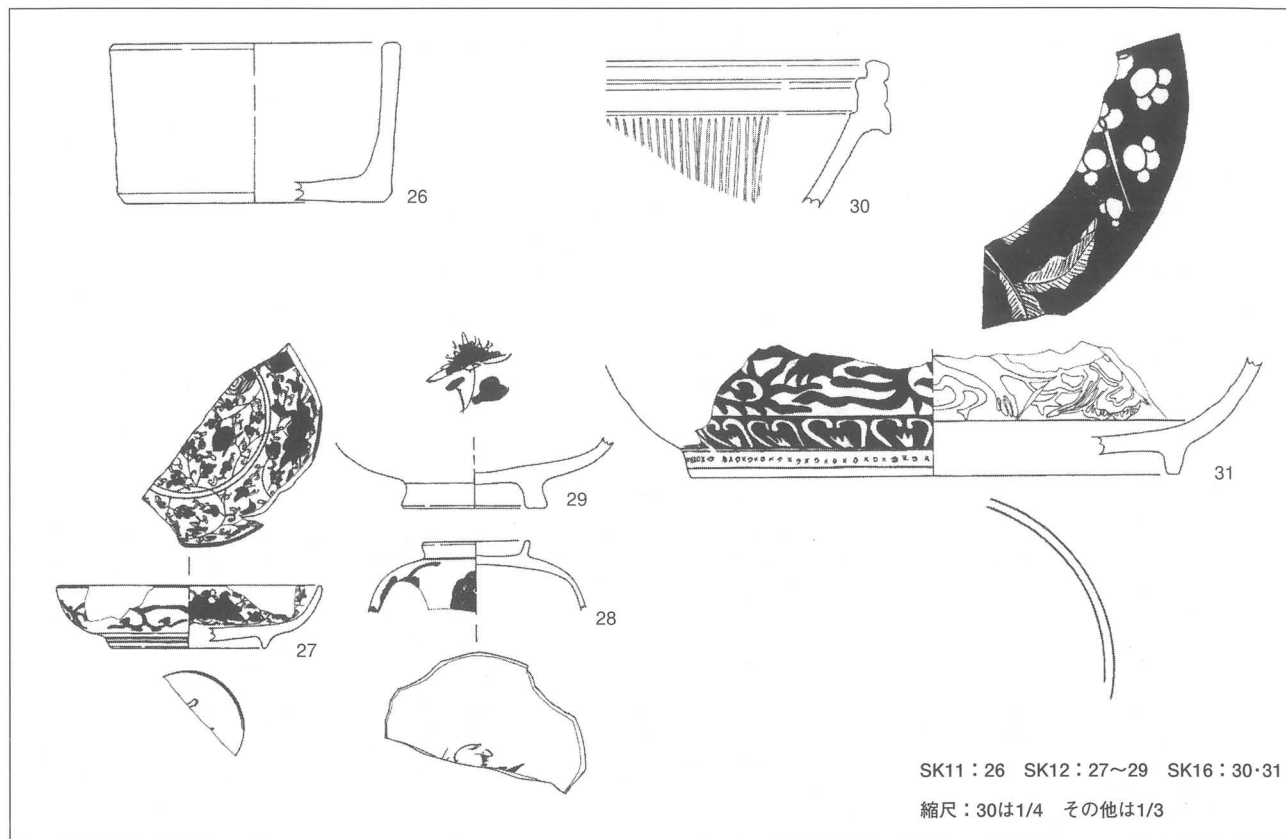
調査範囲において、建物の礎石は遺存していなかったが、調査区の中央やや南側から屋外施設の水琴窟や陶磁器などを廃棄したゴミ穴（土坑）が分布する状況からみて、調査区の北半分には建物が存在したと推測される。そう考えると、便所と考えられる2基並んだ埋桶遺構（埋桶1・2、SK6・7）は、建物の裏側に取り付いていたか、屋外に独立していたことになる。遺構の時期は、SK4が18世紀中頃から後半、SK8がそれより遅れて18世紀後半から19世紀前半、水琴窟2の染付磁器皿は、見込みにコンニャク印判の龍文が描かれていおり、18世紀前半の所産と考えられるが、焼き継ぎの痕が残ることから、水琴窟に使用された時期は19世紀以降と考えられる。以上の結果から、本調査地点は、江戸時代中期以降に町家となっていったことがわかった。（小長谷）

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
埋桶1	第59図-1 図版41-1	染付皿	白磁	口径 9.9 cm 器高 1.4 cm 高台径 5.7 cm	内面銅版の型紙刷り 高台量付露胎	肥前 100% 19c後半
	第59図-2 図版41-2	色絵仏飯具	白磁	口径 (5.6) cm 器高 5.9 cm 高台径 3.8 cm	外面緑と赤で花文 底部露胎	瀬戸・美濃 60% 19c後半
水琴窟2	第59図-3 図版41-3	染付皿	白磁	口径 13.5 cm 器高 3.1 cm 高台径 8.4 cm	外面唐草文 内面墨弾きの波文 見込みコンニャク印判龍文 高台内圍線とハリ支え痕1ヶ所有り 高台量付露胎	肥前 99% 焼き継ぎ痕有り 17c末～18c前
	第59図-4	ミチュア製品	白磁	高台径 2.8 cm	色絵碗 外面黒と赤で文様を描く 高台量付露胎	肥前 20% 焼き継ぎ痕有り

表32 第186次調査遺物観察表(1)



第59図 第186次調査出土遺物実測図(1)



第60図 第186次調査出土遺物実測図(2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
水琴窟2	図版41-33	甕	陶器	口径 18.6 cm	外面鉄釉 肩部より灰釉を流し掛け 内面灰釉	丹波 80%
水琴窟1	図版41-32	甕	陶器	最大径 25.1 cm 器高 27.1 cm 底径 12.6 cm	外面鉄釉 肩部より灰釉流し掛け 外面底部環状に離れ砂付着 底部中央に孔有り	丹波 95% 口縁部歪み著しい
SK2	第59図-5	色絵小皿	白磁	口径 (8.1) cm 器高 1.4 cm 高台径 (4.9) cm	内面黒で上絵付け 高台量付露胎	10%
SK4	第59図-6	土師皿	素焼き	口径 7.6 cm 器高 1.4 cm	手捏ね成形 外面指頭圧調整の後ナデ 内面ナデ	在地 40% 口縁部煤付着
	第59図-7	播鉢	軟質施釉陶器	口径 (5.8) cm	柿釉 ロク口成形 外面露胎 内面に2条の播り目有り	10%
	第59図-8	焙烙	素焼き	口径 (27.0) cm	底部外型成形 内外面口縁部から体部ヨコナデ	在地 10%
	第59図-9	染付皿	白磁	口径 12.3 cm 器高 2.9 cm 高台径 7.3 cm	外面折れ松葉文 内面墨弾きで花文 見込み手描き五弁花 高台内ハリ支え痕1ヶ所と圏線有り 高台量付露胎	肥前 70% 内外面に貫入 17c末~18c前
	第59図-10 図版41-10	染付碗	白磁	口径 (10.2) cm 器高 5.6 cm 高台径 3.7 cm	外面雪輪草花文 高台内銘と圏線有り 高台量付露胎	肥前 55% 18c前半
	第59図-11	染付碗	白磁	高台径 (3.8) cm	外面文様有り 高台内圏線有り 高台量付露胎	肥前 30% 内面に赤色の付着物有り 18c前半

表33 第186次調査遺物観察表(2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK4	第59図-12	染付碗	白磁	口径 (9.8) cm 器高 5.7 cm 高台径 (4.3) cm	外面コンニャク印判桐文と草花文 高台量付露胎	肥前 40% 17c末～18c前半
SK6	第59図-13 図版41-13	受台	陶器	口径 6.4 cm 器高 3.7 cm 底径 4.6 cm	灰釉 受端部露胎 受部に切り込み1ヶ所有り 底部露胎	伊賀・信楽 80% 19c前半
SK8	第59図-14	播鉢	陶器	口径 (30.6) cm	クシ目一単位8本 外面体部ヘラケズリ	堺・明石 10% 18c中頃
	第59図-15	香炉	青磁	口径 (10.6) cm 器高 (8.8) cm つまみ径 (4.8) cm	内面体部下半から底部露胎 高台量付露胎	肥前 20%
	第59図-16 図版41-16	染付碗蓋	白磁	口径 (10.6) cm 器高 3.0 cm つまみ径 3.9 cm	外面瓔珞文 内面口縁四方禪文 見込み手描き五弁花と二重圏線有り つまみ内銘有り つまみ量付露胎	肥前 70% 18c後半
	第59図-17	染付碗蓋	青磁	口径 (9.9) cm 器高 3.8 cm つまみ径 (3.8) cm	外面青磁釉 内面と高台内白磁釉 口縁四方禪文 見込み手描き五弁花と二重圏線有り つまみ内二重方形枠の渦福有り つまみ量付露胎	肥前 45% 18c後半
	第59図-18 図版41-18	染付碗蓋	青磁	口径 9.8 cm 器高 3.1 cm つまみ径 3.7 cm	外面青磁釉 内面と高台内白磁釉 内面口縁四方禪文 見込みコンニャク印判五弁花と二重圏線有り つまみ量付露胎	肥前 80% 18c後半
	第59図-19	染付碗蓋	白磁	つまみ径 4.1 cm	外面窓に宝珠文 内面口縁四方禪文 見込み花文と二重圏線 つまみ量付露胎	肥前 70% 18c後半
	第59図-20 図版41-20	猪口	白磁	口径 (4.6) cm 器高 3.5 cm 高台径 2.4 cm	高台量付露胎	肥前 50%
	第59図-21	染付小碗	白磁	高台径 2.8 cm	外面コンニャク印判菊文 高台量付露胎、離れ砂付着	肥前 80%
	第59図-22	染付碗	白磁	高台径 (7.8) cm	広東形 外面文様有り 見込み火焰宝珠文と二重圏線有り 高台内銘(「奇玉珍元」か)と圏線有り 高台量付露胎	肥前 15% 18c末～19c前
	第59図-23	染付碗	白磁	口径 (11.0) cm	外面口縁に網目文、体部にコンニャク印判舟文	肥前 15% 17c末～18c前
	第59図-24	染付碗	青磁	口径 (11.6) cm 器高 6.1 cm 高台径 (4.3) cm	外面青磁釉 内面と高台内白磁釉 内面口縁四方禪文 見込み花文と二重圏線 高台量付露胎	肥前 30% 内外面貫入 18c後半
	第59図-25	染付碗	白磁	口径 (12.4) cm	内外面瓔珞文	肥前 10%
SK11	第60図-26 図版41-26	匣鉢	陶器	口径 (11.3) cm 器高 6.4 cm 底径 (10.4) cm	内面口縁部より下塗り土が施される	40%
SK12	第60図-27	染付皿	白磁	口径 (10.4) cm 器高 2.5 cm 高台径 (6.1) cm	口縁口錆 外面唐草文 内面牡丹唐草文 高台内銘と圏線有り 高台量付露胎	肥前 45% 内外面に貫入
	第60図-28	染付碗蓋	白磁	つまみ径 4.1 cm	外面獅子文 内面鷲文 つまみ量付露胎	肥前 30% 焼き継ぎ痕有り
	第60図-29	染付皿	白磁	高台径 5.6 cm	内面花文 高台量付露胎 アルミナ砂塗布	肥前 20% 18c末～19c前
SK16	第60図-30	播鉢	陶器		クシ目一単位9本	堺・明石 5%
	第60図-31	染付大皿	白磁	高台径 (19.4) cm	内面陽刻文 見込み花文 外面唐草文 高台側面に○×文 高台内二重圏線有り 高台量付露胎	肥前 10% 焼き継ぎ痕有り 18c

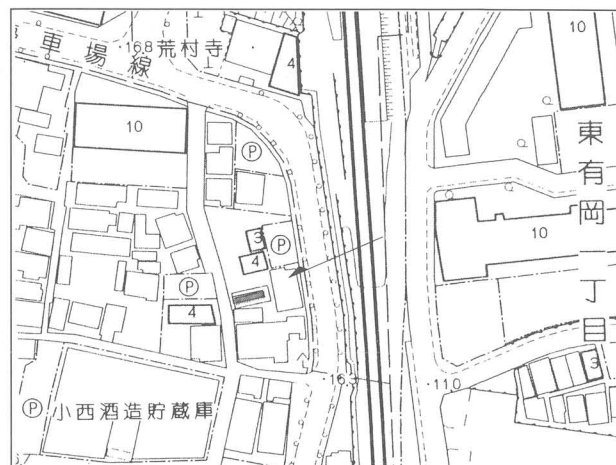
表34 第186次調査遺物観察表(3)

第9節 第189次調査

所在地 伊丹市伊丹3丁目609-9
 調査面積 30㎡
 調査期間 平成9年3月13日～3月31日
 担当者 小長谷正治・細川佳子

1. 遺跡の概要

本調査地点は、有岡城本丸から南に約180mの地点に位置し、侍町の中でも比較的本丸に近い場所である。伊丹郷町が描かれた絵図のうち、『文禄伊丹之図』や『寛文九年伊丹郷町絵図』（註1）をみると、当地点の周囲は空地となっていて、家並は描かれていない。これは天正7年（1579）の有岡城落城の際、織田信長により侍町を焼き払われた結果、空地となっていて、江戸時代前期には家並はみられない。当地点は伊丹郷町では大手町に属し、大手町は江戸時代中期の元禄年間（1688～1704）までに成立した町である。



第61図 第189次調査調査区位置図（1/2,500）

これまでの周辺の調査では、当地点から北へ約70mの地点で実施した第120次調査（註2）があげられる。この調査では15世紀代に遡る溝や井戸等の遺構が発見された。溝は平面形がL字形で検出され、屋敷の周辺に巡らした溝と考えられる。発見された溝や井戸等の遺構から伊丹城期における侍町の存在が明らかになった。その他、江戸時代前期の遺構はみられないが、中期には火災跡遺構、後期には酒蔵跡遺構等がある。また、古墳時代中期に遡る遺構も発見された。

2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴う発掘調査で、阪神・淡路大震災の被災地での共同住宅の建設は「災害救助法適用地域において被災住民に住宅を供給する事業」に該当するため、震災復旧・復興事業の適用を受け、国庫補助事業として実施したものである。

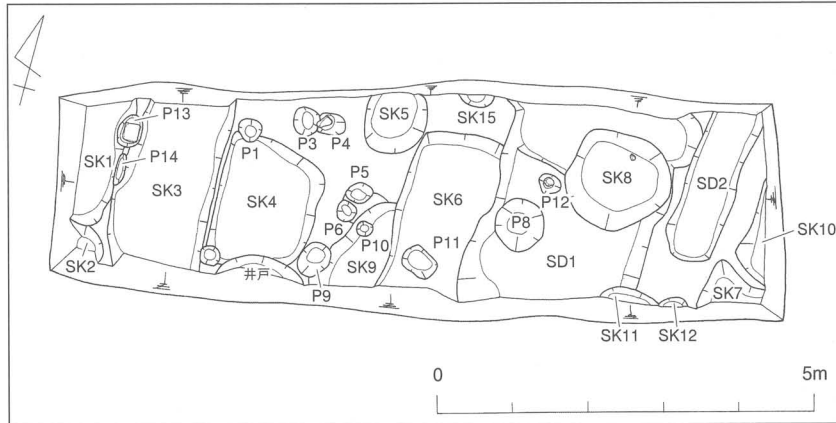
敷地内に東西10m、南北3mの調査区を設定した。重機により表土を取り除き、以後、人力に切り替えて調査を実施し、すべての遺構は地山面で検出した。



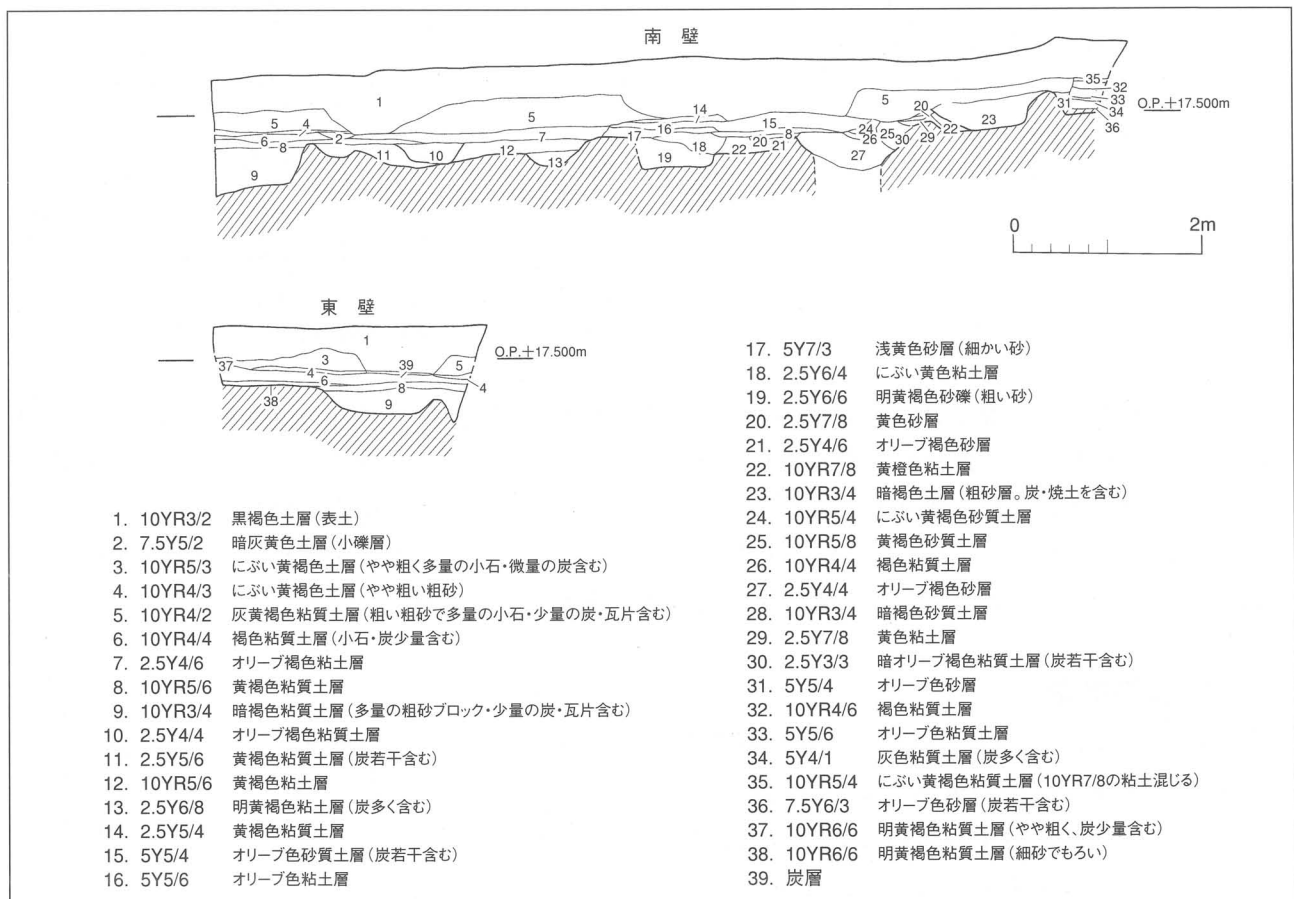
第62図 第189次調査調査区設定図（1/500）

3. 調査成果

基本的な層序は、地山の上に黄褐色粘質土層



第63図 第189次調査全体図 (1/100)



第64図 第189次調査土層断面図 (南壁・東壁) (1/80)

(第8層)が5cm程度堆積し、その上にオリーブ褐色粘土層(第7層)が10~15cm堆積し、その上に灰黄褐色粘質土層(第5層)が20~30cm堆積し、その上に表土が30~40cm堆積している。第7層と第8層は整地層である。表土から地山までは調査区の東側では約60cm、道路側の西側では約50cmを測る。

地山面1面のみで調査を実施し、検出した遺構は、井戸跡1基、溝跡2条、土坑12基、小穴15基である。検出した遺構の時期は、江戸時代のものがほとんどなく、伊丹城期から有岡城期と考えられる。出土遺物は遺物整理箱1箱である。

主な遺構について説明することにする。

SD 1 (第65図、図版42)

調査区の東側、敷地の奥側に位置し、南北方向に走る溝である。幅2.2～2.5m、深さは西側で40cm、東側で50cmを測る。底面は平坦で、北側でさらに一段落ち、平坦面を成す。西側の方が緩やかに外傾しながら立ち上がる。下層が褐色粘質土層、上層がにぶい黄褐色粘質土層である。

出土遺物は土師皿(1)、瓦質羽釜(2)等がある。2の口縁部は内傾し、鰐が短い。他に二次焼成を受けている瓦等が出土している。

SD 2

調査区に東側に位置し、SD 1の東側で、SD 1と同一方向である。南北検出長2.1m、幅70cm、深さ25cmを測る。底面は平坦で外傾しながら立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土層で5cm大の礫を多く含む。

遺物は二次焼成を受けた肥前白磁染付碗、土師皿の小片等が出土している。

SK 1

調査区の西端、道路側に位置する。東西検出長72cm、南北検出長1.6m、深さ35cmを測る。底面は平坦で、南側の立ち上がりは内傾気味である。埋土は暗褐色土層で、下層が礫を多く、炭を少量含む、上層が礫・炭を少量含む。平瓦が出土している。

SK 3 (第65図)

調査区の西側に位置する。東西1.35m、深さ30cmを測る。底面はやや傾斜して、東側が西側よりやや低くなっている。立ち上がりは西側も緩やかであるが東側の方が西側よりさらに緩やかに外傾する。埋土はSK 1の上層と同じにぶい黄褐色粘質土層である。

出土遺物では、土師皿(5)は薄手で黄橙色を呈し、口径が小さい。他に丹波焼甕等の小片が出土している。

SK 5 (第65図、図版42)

調査区の中央部に位置する。円形を呈し、径86cm、深さ25cmを測る。底面は平坦で、立ち上がりは外傾し、東側は西側よりも緩やかに立ち上がる。埋土は下層が粗砂と炭を少量含む暗褐色粘質土層、上層が黄褐色土層である。

出土遺物は、瀬戸・美濃焼灰釉皿(6)の口縁部で、他に土師皿等が出土している。

SK 6

調査区の中央部に位置し、東側をSD 1に切られている。東西検出長1.2m、南北検出長2.2m、深さ30cmを測る。底面は平坦で、西側は緩やかに外傾して立ち上がる。埋土は明黄褐色砂礫層で、粗い砂が混じる。

SK 8 (図版42)

調査区の東側に位置し、SD 1を切っている。ほぼ円形を呈し、径1.42m、深さ40cmを測る。上面では杭が2箇所検出された。底面はやや傾斜し、東側が西側よりも低くなっている。立ち上がりは緩やかに外傾する。埋土は下層が瓦を含む灰オリーブ粘土層、上層が明黄褐色粘土層である。平瓦が出土している。

SK 9

調査区の中央部に位置する。東側をSK 6に切られている。東西検出長80cm、南北検出長1.2m、深さ20cmを測る。底面は平坦で、外傾して立ち上がる。埋土は黄褐色粘土層である。丸瓦が出土している。

P 4 (第65図、図版42)

調査区の中央部、SK 5 の西側に位置する。楕円形を呈し、東西35cm、南北28cm、深さ10cmを測る。埋土は炭を少量含む褐色粘質土層である。底から15~20cmの石が検出された。P 13の底にも25cm大の方形の石が検出され、P 4とP 13は礎石建物の一部と考えられる。

P 4からは土師皿(3・4)等が出土した。4は口縁部に煤が若干付着し、底部は欠損しているが、器形からみると、両方ともヘソ皿であり、灰白色である。

遺構外出土遺物(第65図)

肥前白磁染付碗蓋(7)・碗(8)、8はくらわんか手で外面には丸文が施され、見込にはコンニャク印判で五弁花が施されている。また、土師皿(9・10)は厚手である。7・8は表土から出土し、9・10は西側の精査時に出土した。

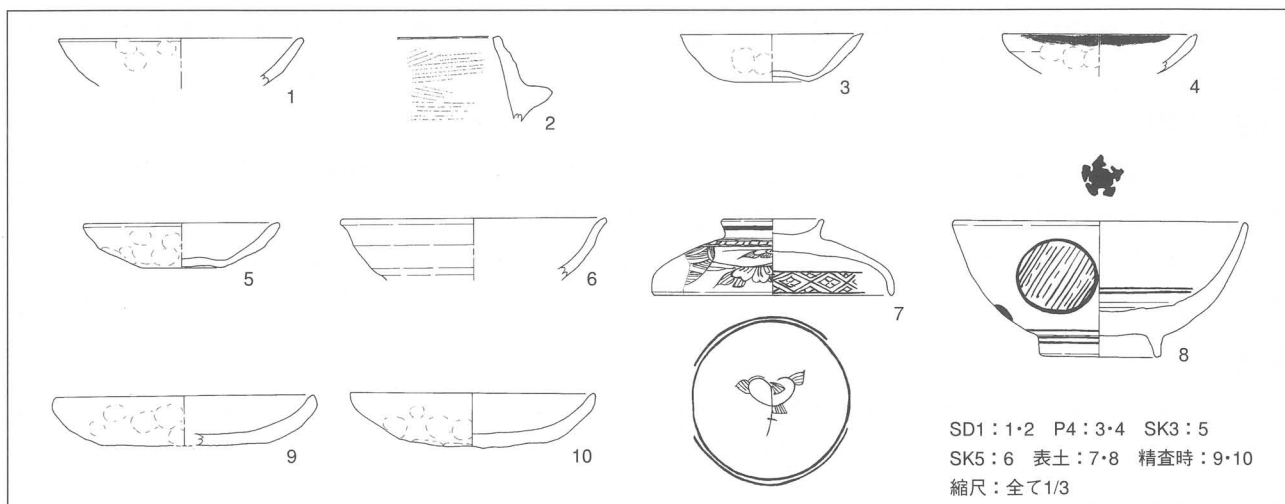
4. まとめ

当地点は有岡城の侍町にあたり、侍町の中でも比較的本丸に近いところで、有岡城期には侍町として古くから存在したと考えられる。当地点は、天正7年(1579)の有岡城の落城の際、織田信長により侍町が焼き払われた結果、空地となっていたところである。『文禄伊丹之図』や『寛文九年(1669)伊丹郷町絵図』(註3)をみても、当地点は空地となっていて、家並は描かれていない。江戸時代前期、17世紀代の遺構は検出されていない。しかし、当地点から北西へ約100mの県道の調査(第204次)(註4)では江戸時代前期、17世紀代の遺構が検出された。第204次調査の周辺では町家が有岡城廃城後すぐに形成され始めたことがうかがえる。

当地点の遺跡の年代は16世紀代と18世紀後半以降と考えられる。16世紀代の遺構としては、P 3・P 4・P 13・SD 1・SK 3・SK 5等である。調査区が狭小であるために明確には言えないが、P 3・P 4・P 13は礎石建物の一部と考えられる。また、18世紀後半以降としては遺構外から出土した遺物があげられる。

周辺の調査例と合わせて、有岡城期の侍町の様相を考えていきたい。

(細川)



第65図 第189次調査出土遺物実測図

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SD1	第65図-1	土師皿	素焼き	口径 (9.8) cm	手捏ね成形 外面ナデと指頭圧痕 内面ナデ	在地 10%
	第65図-2	羽釜	瓦質		外面ヨコナデか 内面ハケメ有り 内外面共に 磨耗している	5%以下 二次焼成受ける
P4	第65図-3	土師皿	素焼き	口径 (7.4) cm 器高 1.9 cm	ヘソ皿 手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 30%
	第65図-4	土師皿	素焼き	口径 (7.8) cm	手捏ね成形 内外面ナデ	在地 20%
SK3	第65図-5	土師皿	素焼き	口径 (7.8) cm 器高 1.8 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ 口縁部 ヨコナデ	在地 50%
SK5	第65図-6	皿	陶器	口径 (10.6) cm	口縁端反り 灰釉	瀬戸・美濃 10% 15c末～16c初
表土	第65図-7	染付碗蓋	白磁	口径 (9.6) cm 器高 3.1 cm つまみ径 4.0 cm	外面丸文と梅文 内面口縁部四方襷文 見込み 文様と二重圏線有り つまみ畳付露胎	肥前 50% 19c前半
	第65図-8	染付碗	白磁	口径 11.7 cm 器高 5.4 cm 高台径 4.4 cm	外面体部丸文 内面見込みコンニャク印判五弁 花と二重圏線 蛇の目釉剥ぎ アルミナ塗布 離れ砂付着	肥前 95% 18c後～ 19c前
精査時	第65図-9	土師皿	素焼き	口径 (10.4) cm 器高 2.0 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ 口縁部 ヨコナデ	在地 50%
	第65図-10	土師皿	素焼き	口径 9.8 cm 器高 2.2 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ 口縁部 ヨコナデ	在地 95%

表35 第189次調査遺物観察表

註1 八木哲浩編『伊丹古絵図集成』伊丹資料叢書6 伊丹市立博物館 1982年

註2 伊丹市教育委員会『有岡城跡第120次調査調査現地説明会資料』1993年

註3 前掲註1

註4 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成9年度 年報』1998年

第10節 第194次調査

所在地 伊丹市中央2丁目444-2他

調査面積 100㎡

調査期間 平成9年6月18日～7月25日

担当者 深谷憲二・渋谷 格

1. 遺跡の概要

当該地は古くから『摂州川辺郡伊丹郷文禄年間之図』などで、有岡城跡・伊丹郷町遺跡の西端に位置していることが知られていた。これまでの調査でも周辺から、有岡城の堀跡や文書記録にある江戸時代文禄年間の大火の跡等が確認されており、古地図に描かれている町並みの広がりが見らかとなっている。その場所に阪神・淡路大震災の復興事業として、店舗付住宅が建設されることになり、伊丹市教育委員会の支援要請を受け、兵庫県教育委員会が調査を実施した。



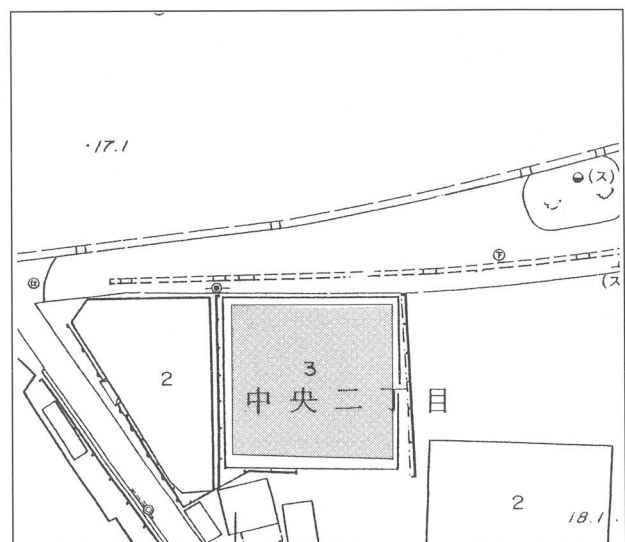
第66図 第194次調査調査区位置図 (1/2,500)

2. 調査の概要

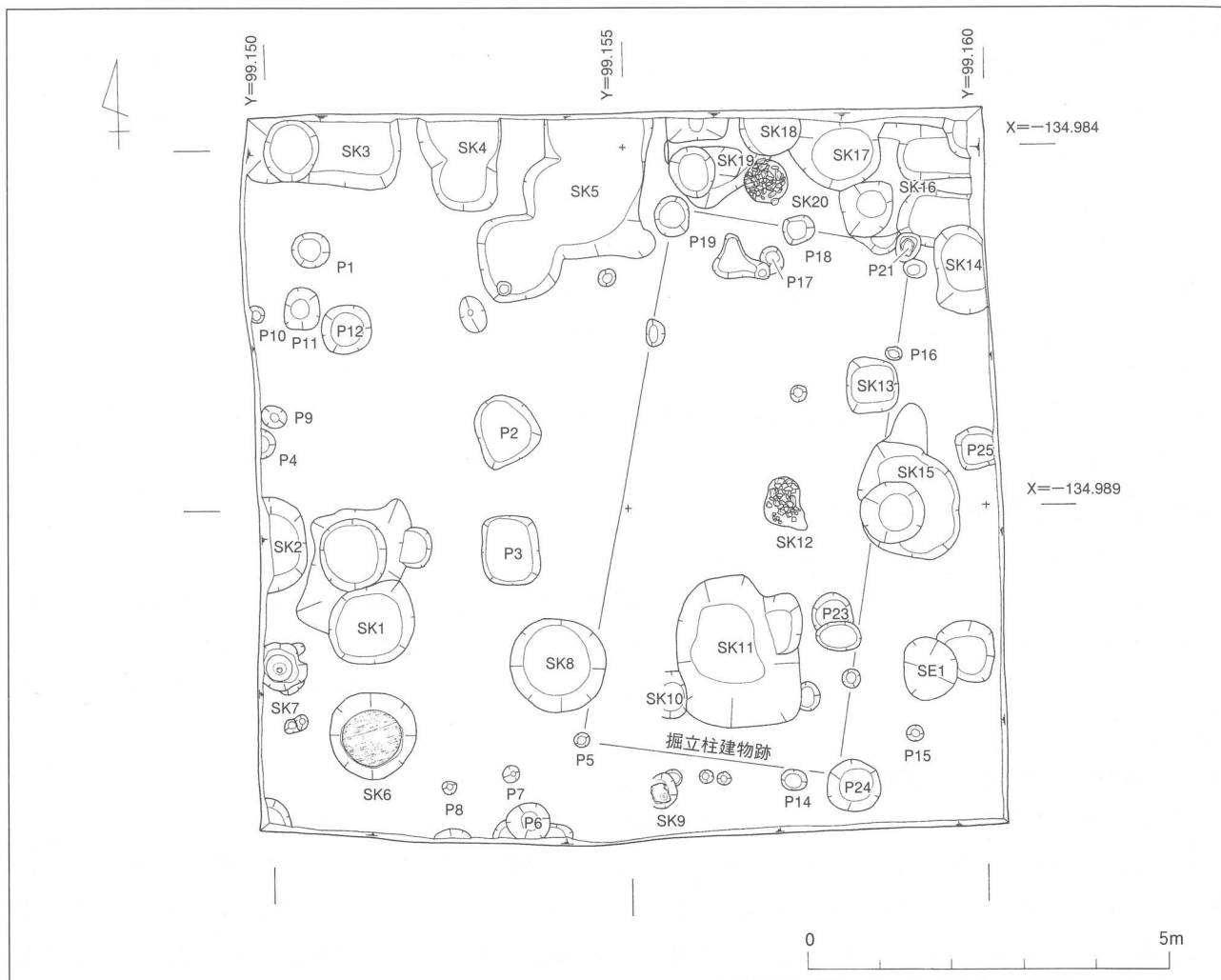
調査は、事業予定地の隣接地で新築家屋の建設が進行中であり、その工事の進捗の関係から調査区を東西に2分割して実施した。

調査の結果、確認した遺構面は伊丹礫層をベースとした1面であった。これらは調査区の南西部では現地表面から50cm、最も浅い北東部では25cmで遺構面に達していた。従って、遺構の残存状況は必ずしも良好ではない。

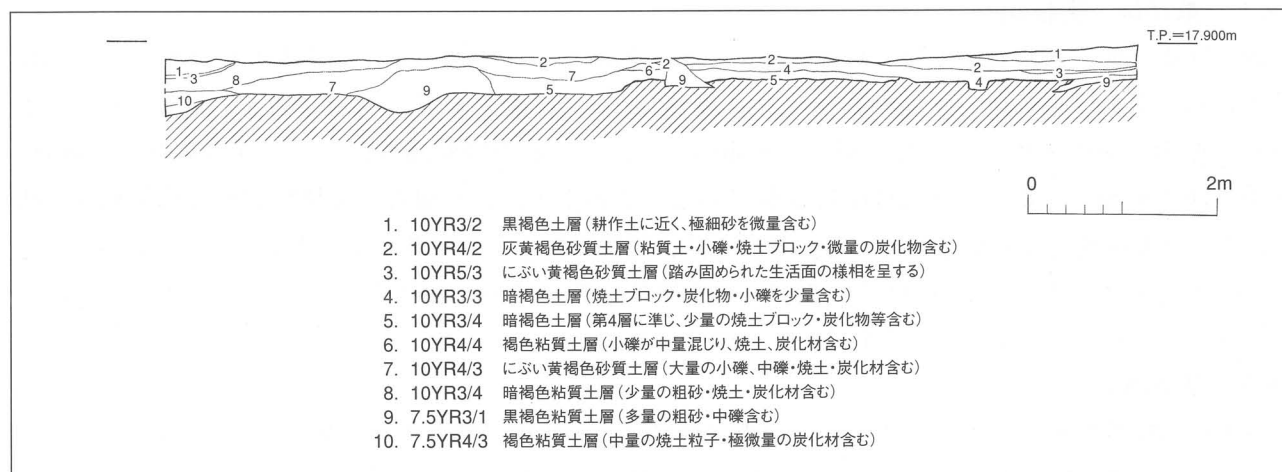
検出した遺構は、素掘りの井戸1基、水琴窟1基、便槽と考えられる大小2基の土坑を連結したものや木桶を埋設したと思われるもの、周壁を漆喰で補強した土坑18基と掘立柱建物跡の可能性のある柱穴群も検出した。これらの遺構は出土している肥前陶磁器、丹波焼播鉢や土師質土器などから、およそ18世紀から19世紀前半のものと考えられ、有岡城期や江戸時代初期にまで遡る遺構や遺物は確認されなかった。出土している遺物は、17世紀後半から19世紀前半と考えられるもので肥前陶磁器、青磁染付碗、丹波焼播鉢や堺・明石焼播鉢、瀬戸・美濃焼鉢、伊賀・信楽焼碗、焙烙、土師皿等が出土している。



第67図 第194次調査調査区設定図 (1/500)



第68図 第194次調査全体図 (1/100)



第69図 第194次調査土層断面図 (西壁) (1/80)

3. 調査成果

今回の調査において検出された遺構は、井戸1基、水琴窟1基、埋桶1基、土坑18基である。ここでは主な遺構を取り上げ説明しておきたい。

掘立柱建物

調査区の東側に位置する。北側の3基の柱穴が、ほぼ等間隔で並んでいることから建物跡を想定したが、不明な点が多く確実ではない。梁行は2間(3.44m)確認でき、北東隅の柱穴には根石が遺存している。桁行は5間(7.6m)と、平面図上では調査区南端までとしているが、南辺中央の柱穴が小さいことから、南に更に延びている可能性が高い。

SE1 (図版44)

調査区南東側に位置する。平面は長径0.85m、短径0.75mの不整楕円形である。検出状況から、井戸上部は攪乱を受け削平されていると考えられる。検出面から約1.2m掘り下げたが、完掘していない。素掘りの井戸で、壁面は伊丹礫層からなる。

埋土上層から、肥前染付碗、焙烙、唐津焼碗が出土しているが、細片であるため図示できなかった。出土遺物を概観すると、18世紀以降と考えられる。

SK7 (水琴窟) (第70図、図版44・45)

調査区西壁南寄りに位置する。掘り方の平面は径70cmの円形で、深さは約40cm、断面は緩やかなU字状を呈する。底面に丹波焼甕(2)が倒立して設置されていた。使用されていた丹波焼甕は、口縁部から胴部上半部にかけてゆがみが著しく、底部中央から若干外側に径8cmの穿孔がある。

甕の内部から、伊賀・信楽焼土瓶(1)が出土している。出土遺物を概観すると、19世紀代と考えられる。

SK6 (埋桶) (第70図、図版44)

調査区南西に位置する。掘り方の平面は径1.2mの円形を呈し、深さは40cm、壁面は外傾して立ち上がる。底面に木桶の底板(径0.85cm)が遺存している。便槽の可能性はある。埋土から、焙烙(12)、陶器ミニチュア甕(13)、伊賀・信楽焼蓋(14)、肥前陶胎染付香炉(15)、肥前青磁染付蓋(16)、肥前染付碗(17・18・19)が出土している。その他に、肥前磁器碗、仏飯具、唐津焼碗、播鉢、土師皿などが出土している。出土遺物を概観すると、18世紀後半と考えられる。

土坑

SK1 (第70図、図版44)

調査区南西側、水琴窟の北東に位置する。底面の形状から大小2つの土坑を南北に連ねたものと推定される。南側のものは、平面が長径1.2m、短径1.05mの隅丸方形で、深さは60cmを測る。底面は平坦で、壁面はやや外傾して立ち上がる。北側のものは、平面が径80cmの円形で、深さは60cmを測る。底面はゆるやかに凸状で、上部は攪乱されている。この土坑は、平面形や堆積状況から内部施設を抜き取り、2基同時に埋め戻されていると考えられ、便槽であると推定される。埋土から、土師皿(3)、瀬戸・美濃焼鉢(4)、肥前染付碗(5・6)、仏飯具(7)、播鉢、銭が出土している。出土遺物から概観すると、18世紀後半と考えられる。

SK2 (第70図)

調査区西壁際中央に位置し、西半部は調査区外にある。平面は隅丸方形と推定され、南北軸65cmで、深さ55cmである。底面はほぼ平坦で、壁面はやや外傾して立ち上がる。

埋土から、土師皿(8)、肥前染付碗、瓦が出土している。出土遺物から概観すると、18世紀後半以降と考えられる。

SK3 (第70図、図版44)

調査区北西隅に位置する。調査区外に広がっているため、全体の形状は不明である。径85cmの円形の土坑と、一辺2.2mほどの長方形の土坑が連なっている。

埋土から、土師皿（9）、肥前染付碗（10）・仏飯具・青磁染付碗、丹波焼播鉢・甕が出土している。出土遺物から概観すると、18世紀後半と考えられる。

SK 4（第70図）

調査区北壁際の西寄りに位置する。平面は大小2基の円形の土坑が連なった形状を呈する。北側のものは平面が径1.2m、南側のものが径90cmである。底面は両者同一レベルに平坦で、深さ1mを測る。

埋土から、肥前染付仏飯具（11）・染付碗、唐津焼碗、丹波焼播鉢、瓦が出土している。

SK 8（第71図）

調査区南側のほぼ中央に位置する。平面は径1.3mの円形で、深さは60cmを測る。底面は平坦で、壁面は南側で外傾し、北側ではほぼ垂直に立ち上がり、断面は円筒形に近い。

埋土から、肥前染付碗（20）、焙烙、土師皿が出土している。出土遺物から概観すると、18世紀後半と考えられる。

SK 9（第71図、図版44）

調査区南側のほぼ中央に位置する。平面は長径50cm、短径推定40cmの不整楕円形で、断面は緩やかなU字状を呈する。底部に径4cmの穿孔がある丹波焼甕（21）が北に傾いた状態で埋置している。

他に出土遺物はない。19世紀前半と考えられる。

SK10（第71図、図版44）

調査区南側のほぼ中央に位置し、SK11に切られている。平面は一辺約60cmの隅丸方形と推定される。底面はU字状を呈し、壁面は外傾して立ち上がる。深さは30cmを測る。焼土をわずかに含んだ炭化物で埋められている。

埋土から、土師皿（22）、肥前染付碗、丹波焼播鉢が出土している。出土遺物を概観すると、18世紀後半と考えられる。

SK11（第71図、図版44・45）

調査区南東に位置する。平面が長径2.0m、短径1.7mの不整楕円形である。底面は緩やかなU字状を呈し、北壁は階段状に立ち上がり、他の壁面はかなり緩やかに外傾する。深さは30cmを測る。底面付近から遺物がまとまって出土した。

土師皿（23）・焙烙（24・25）、丹波焼播鉢（26）、唐津焼碗（27）、肥前染付碗・白磁合子蓋・仏飯具、陶器碗、瓦などが出土している。出土遺物を概観すると、18世紀後半と考えられる。

SK12

調査区中央の東寄りに位置する。平面は長径70cm、短径45cmの不整形を呈する。底面はやや凹凸が見られ、深さは15cmである。埋土上層には10～30cm大の礫が集積する。

出土遺物はなかった。

SK14（第71図）

調査区の北東、東壁に接し位置する。平面は長径1.25m、短径推定約80cmの不整楕円形と推測される。深さは40cmを測る。底面は南がやや低くなり、壁面は外傾して立ち上がる。埋土最上層から焙烙（28）が出土している。

焙烙は難波氏分類G類に当る。他に、肥前青磁碗・色絵碗が出土している。出土遺物を概観すると、19世紀前半と考えられる。

SK15

調査区東側のほぼ中央に位置する。2段掘りと考えられる。平面一辺1.5mほどの不整形にまず掘りこみ、さらに南寄りに径80cmの円形に掘りこむ。底面は平坦で、深さは検出面から80cmを測る。壁

面は外傾して、緩やかに立ち上がる。

埋土から、肥前染付碗、唐津焼皿が出土している。

SK20

調査区北側の東寄りに位置する。平面は径60cmの円形で、深さは45cmを測る。断面は円筒状で、壁面は漆喰を塗り固めている。底面は平坦で、漆喰の一部が残存する。埋土最上層には大小の礫が土坑をふさぐように敷き詰められている。性格は不明である。

埋土（最上層）から、瀬戸・美濃焼陶器碗、肥前染付碗・色絵などが出土している。出土遺物を概観すると、18世紀後半と考えられる。

その他の遺物（第71図）

表土から、土師皿（29）、肥前染付紅猪口（30）・染付皿（31）・染付段重（32）・染付碗（33・34・35）などが出土している。

4. まとめ

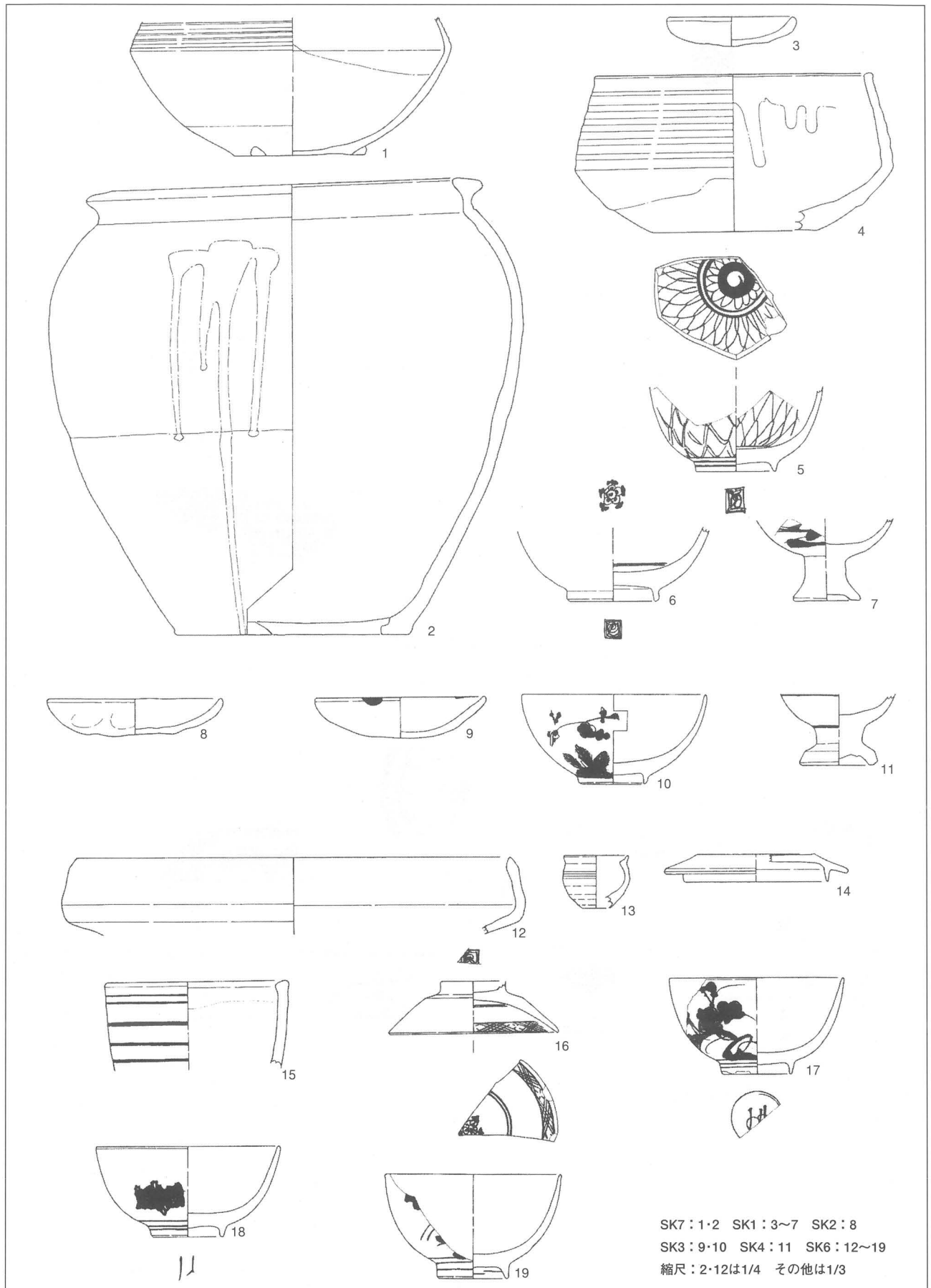
第194次調査では、井戸、水琴窟などが検出された。時期は水琴窟、埋甕（SK9）が19世紀代、その他のものは17世紀末～18世紀後半のものがほとんどであると考えられる。出土遺物のうち、陶磁器は大橋編年Ⅳ期のものが大部分を占め、焙烙も17世紀後半～18世紀代のものが殆どである。

ところで、伊丹郷町には数多くの絵図が残されており、江戸時代の様子を伝えている。それによると、本調査区は昆陽街道筋に面した伊丹郷町の最も西側にあたる。『寛文九年伊丹郷町絵図』では空白であるが、『延宝五年伊丹郷町地味委細絵図』には町屋が描かれている。また、『元禄七年柳沢吉保領伊丹郷町絵図』には長屋となっており、1670年代には町屋となっていたと考えられる。ところが、『天保十五年伊丹郷町分間絵図』ではかなり不規則な屋敷地となっており、北少路村、両中少路村、昆陽口村の入組地となっている。

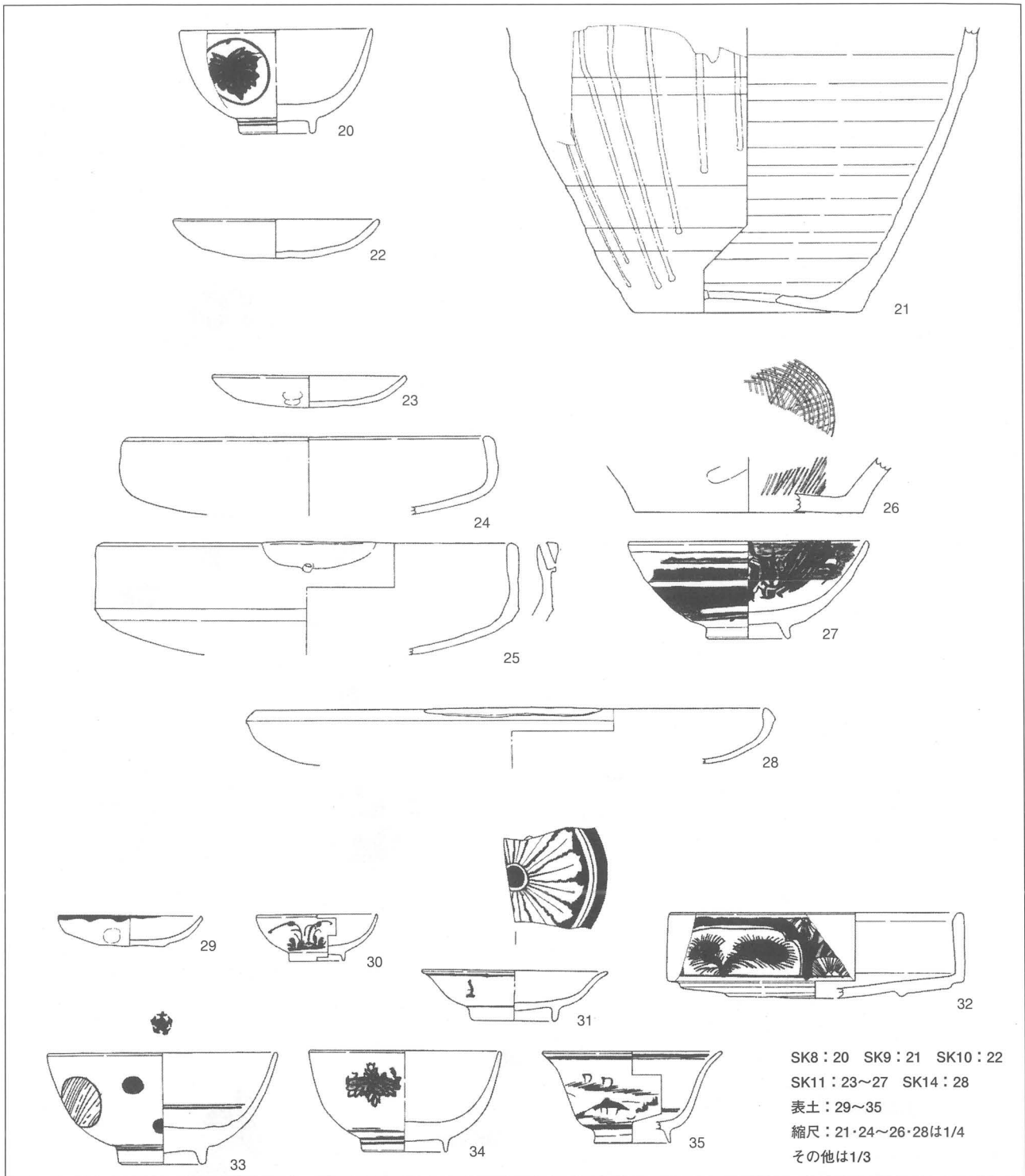
また、伊丹郷町のこれまでの発掘調査によって、18世紀後半～末に石組みの区画溝が整備されるなど大規模な盛土整地が行われていることが明らかにされている。したがって、長屋から分間絵図に描かれた屋敷地に変化するのには18世紀後半～末の大規模な整地に伴うものの可能性があることを示している。

そこで、本調査区の状況を見てみると、検出された土坑の時期は18世紀後半までのものが大部分で、これらが18世紀後半～末の可能性もある。また、出土遺物には図示していないが肥前京焼風陶器や、肥前陶器刷毛目文碗・銅緑釉皿などが出土しており、町屋が進出した時期を示す間接的な証拠となるものと考えられる。このような状況に対して、他の調査区では数多く出土しているⅤ期の肥前磁器は遺構から出土したものの中には見られず、19世紀前半に盛行する柿釉陶器も細片が少量しか出土していない。このことは、18世紀末～19世紀前半に調査区の部分が積極的に利用されていないことを示唆しているものと考えられる。なお、19世紀代の水琴窟や埋甕は、調査区の南側にあたると推定される『天保十五年伊丹郷町分間絵図』に記されている扇町に属する屋敷地の裏庭に設置されたものの可能性がある。

このように、今回の調査では古絵図にみられる状況や変化をある程度示すような調査成果が得られたと考えられる。有岡城跡・伊丹郷町遺跡の本格的調査は、1976年の第1次調査から今回で実に194回を数える。これらの調査によって徐々に伊丹郷町の実態が知られるようになった。市街地の中の調査で制限が多いにもかかわらず、継続して調査を行うことによって近世の郷町の状況が明らかとなった貴重な遺跡であり、今後も地道な調査が行われることを期待するものである。（深谷・渋谷）



第70図 第194次調査出土遺物実測図(1)



第71図 第194次調査出土遺物実測図 (2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK7	第70図-1	土瓶	陶器	底径 6.6 cm	内外面に灰釉 底部周辺露胎 底部に脚3ヶ所有り 見込みに目跡3ヶ所有り	伊賀・信楽 30% 19c前半
	第70図-2 図版45-2	甕	陶器	口径 26.0 cm 器高 34.5 cm 底径 17.6 cm	外面口縁部直下から体部鉄釉 肩部から4ヶ所に灰釉を流し掛け 外面口縁から内面灰釉 底部塗り土、外周に砂付着	丹波 90% 底部中心に孔あり 口縁部から胴部上半に歪み著しい
SK1	第70図-3	土師皿	素焼き	口径 (6.9) cm 器高 1.7 cm	外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 50%
	第70図-4 図版45-4	鉢	陶器	口径 (15.4) cm 器高 8.9 cm 底径 (4.7) cm	外面口縁部周辺から体部下半に灰釉 内面体部から底部に長石釉 底部周辺露胎	瀬戸 30% 18c中頃
	第70図-5	染付碗	白磁	高台径 4.5 cm	外面二重網目文 内面網目文 見込み二重圏線と花文有り 高台内二重方形枠の渦福有り 高台量付露胎	肥前 20% 18c前半
	第70図-6	染付碗	青磁	高台径 4.9 cm	外面体部青磁釉 内面と高台内白磁釉 内面見込み手描き五弁花と二重圏線 高台内二重方形枠の渦福か 高台量付露胎	肥前 25% 18c後半
	第70図-7	染付仏飯具	白磁	高台径 3.6 cm	外面体部文様有り 高台量付露胎、離れ砂付着	肥前 40% 二次焼成受ける 17c末~18c後
SK2	第70図-8 図版45-8	土師皿	素焼き	口径 9.7 cm 器高 2.1 cm	手握ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ 内外面口縁部ヨコナデ	在地 80% 全体に煤けている
SK3	第70図-9 図版45-9	土師皿	素焼き	口径 9.4 cm 器高 2.3 cm	手握ね成形 外面指頭圧痕 内外面口縁部周辺ヨコナデ 内面ナデ	在地 95% 口縁煤付着
	第70図-10 図版45-10	染付碗	白磁	口径 10.3 cm 器高 5.1 cm 高台径 3.6 cm	外面若松文 高台量付露胎	肥前 80% 18c前半
SK4	第70図-11	染付仏飯具	白磁	高台径 4.0 cm	外面文様有り 高台内と量付露胎	肥前 30% 二次焼成受ける
SK6	第70図-12	焙烙	素焼き	口径 (32.7) cm	底部外型成形 外面口縁部から体部ヨコナデ 内面ヨコナデ	15%
	第70図-13	ミチュア製品	陶器	口径 3.6 cm 器高 3.0 cm	甕 ロク口成形 内外面に塗り土を施す	50%
	第70図-14	蓋物蓋	陶器	口径 (8.0) cm 器高 1.5 cm	外面上部に灰釉を施釉	伊賀・信楽 25% 19c前半
	第70図-15	染付香炉	陶胎	口径 (10.0) cm	外面横縞模様 内面体部露胎	肥前 20%
	第70図-16	染付碗蓋	青磁	口径 (9.5) cm 器高 3.0 cm つまみ径 (3.6) cm	外面体部青磁釉 内面口縁部四方襷文 見込み手描き五弁花と二重圏線有り つまみ内二重方形枠の渦福有り	肥前 30% 18c後半
	第70図-17	染付碗	白磁	口径 (9.7) cm 器高 5.4 cm 高台径 3.8 cm	外面体部梅花文 高台内銘と圏線有り 高台量付露胎	肥前 40% 18c前半
	第70図-18	染付碗	白磁	口径 (10.2) cm 器高 5.1 cm 高台径 3.9 cm	外面コンニャク印判桐文 高台内銘有り 高台量付露胎	肥前 40% 18c前半
	第70図-19	染付碗	白磁	口径 (9.8) cm 器高 5.9 cm 高台径 3.8 cm	外面文様有り 高台内圏線有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 40% 17c末~18c前
	SK8	第71図-20	染付碗	白磁	口径 (9.7) cm 器高 5.3 cm 高台径 (3.5) cm	外面体部丸文の中にコンニャク印判桐文 高台量付露胎

表36 第194次調査遺物観察表(1)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK9	第71図-21	甕	陶器	底径 15.0 cm	外面鉄釉 上から灰釉を流し掛け底部環状に離れ砂付着 内面体部に溶着痕有り内面灰釉を施す 底部に砂目跡付着	丹波 40%
SK10	第71図-22	土師皿	素焼き	口径 (10.4) cm 器高 2.0 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ 内外面口縁部ヨコナデ	在地 25%
SK11	第71図-23	土師皿	素焼き	口径 9.7 cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面口縁部ヨコナデ 内面ナデ	在地 30%
	第71図-24	焙烙	素焼き	口径 (24.5) cm	底部外型成形 内外面口縁部から体部ヨコナデ	10%
	第71図-25	焙烙	素焼き	口径 (27.7) cm	底部外型成形 内外面口縁部から体部ヨコナデ 把手に孔1ヶ所有り(貫通)	5%
	第71図-26	播鉢	陶器	底径 (15.5) cm	クシ目一単位7本 外面ナデアゲとヨコナデ	丹波 5%
	第71図-27 図版45-27	碗	陶器	口径 12.0 cm 器高 5.0 cm 高台径 4.0 cm	外面巻刷毛目 内面打刷毛目 見込み蛇の目釉剥ぎ、離れ砂付着 高台量付露胎、離れ砂付着	唐津 35% 18c前半
	SK14	第71図-28	焙烙	素焼き	口径 (34.9) cm	底部外型成形 内外面口縁部から体部ヨコナデ
表土	第71図-29	土師皿	素焼き	口径 7.2 cm 器高 1.6 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 80% 口縁煤付着
	第71図-30	染付紅猪口	白磁	口径 (6.0) cm 器高 2.4 cm 高台径 (2.8) cm	外面草花文 高台量付露胎	肥前 50%
	第71図-31	染付皿	白磁	口径 (9.3) cm 器高 2.6 cm 高台径 (4.1) cm	内面菊花文 外面文様有り 高台量付露胎	瀬戸・美濃 40% 19c前半
	第71図-32	染付段重	白磁	口径 (14.8) cm 器高 4.4 cm 高台径 (8.8) cm	外面窓絵の中に松文 口縁端部露胎 腰部露胎	肥前 30%
	第71図-33	染付碗	白磁	口径 11.6 cm 器高 5.7 cm 高台径 4.1 cm	外面丸文 内面見込みコンニャク印判五弁花と二重圏線 蛇の目釉剥ぎ、アルミナ塗布 高台量付露胎	肥前 80% 18c後～ 19c前
	第71図-34	染付碗	白磁	口径 (9.6) cm 器高 5.2 cm 高台径 (4.2) cm	外面コンニャク印判桐文 高台量付露胎	肥前 40% 二次焼成 受けるか 18c前半
	第71図-35	染付碗	白磁	口径 (9.0) cm 器高 4.7 cm 高台径 (3.8) cm	口縁部端反り 外面山水文 内面口縁部圏線有り 見込み二重圏線有り 高台量付露胎	瀬戸・美濃 40% 19c前半

表37 第194次調査遺物観察表(2)

第11節 第195次調査

所在地 伊丹市伊丹4丁目724-14、15

調査面積 25㎡

調査期間 平成9年6月24日～6月30日

担当者 小長谷正治・細川佳子

1. 遺跡の概要

本調査地点は、有岡城惣構えの南西部に位置し、惣構えの輪郭部から東へ20mのところである。当地点の東側を北東から南西へ向かう道路は、伊丹郷町が描かれた『文禄伊丹之図』や『文化改正伊丹之図』（註1）等の絵図をみると、大坂道（東側の南北道）から御願塚道（東西道）へ至る道である。当地点から北へ約80mに位置する正覚寺は円正寺村に属し、開基を文明年間（1469～86）とされている（註2）。また、江戸時代このあたりは円正寺村に属していた。円正寺村は伊丹郷町を構成する村の一つで、伊丹村や南側の古野田村・植松村と同様に寛文元年（1661）より江戸時代を通して近衛家領であった。

これまでの周辺の調査では、有岡城跡の南側は北側よりも調査件数が少ないが、当地点の東側の道を北東へ30mの第90次調査（註3）では江戸時代中期頃の火災跡が発見された。また、当地点から北東へ80mから100mの第223次調査でも江戸時代中期以降の火災跡が発見され、同調査では江戸時代後期以降の酒蔵跡も発見された。

2. 調査の概要

今回の調査は、阪神・淡路大震災により被災した店舗付き個人住宅の再建に伴うもので、これは、「個人被災者が自ら所有及び使用する目的で行う店舗・住宅の設置」に該当するため、震災復旧・復興事業の適用を受け、国庫補助事業として実施した。

敷地内の建物予定範囲に25㎡の調査区を設定して、表土は重機により除去し、すべての遺構は地山面上で検出した。

3. 調査成果

基本的な層序は、にぶい黄色砂礫層（第9層）の地山の上にオリブ黄色粘質土層（第5層）



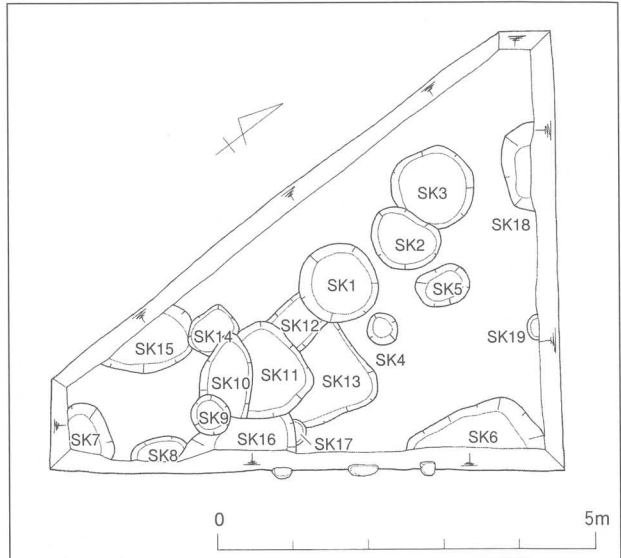
第72図 第195次調査調査区位置図（1/2,500）



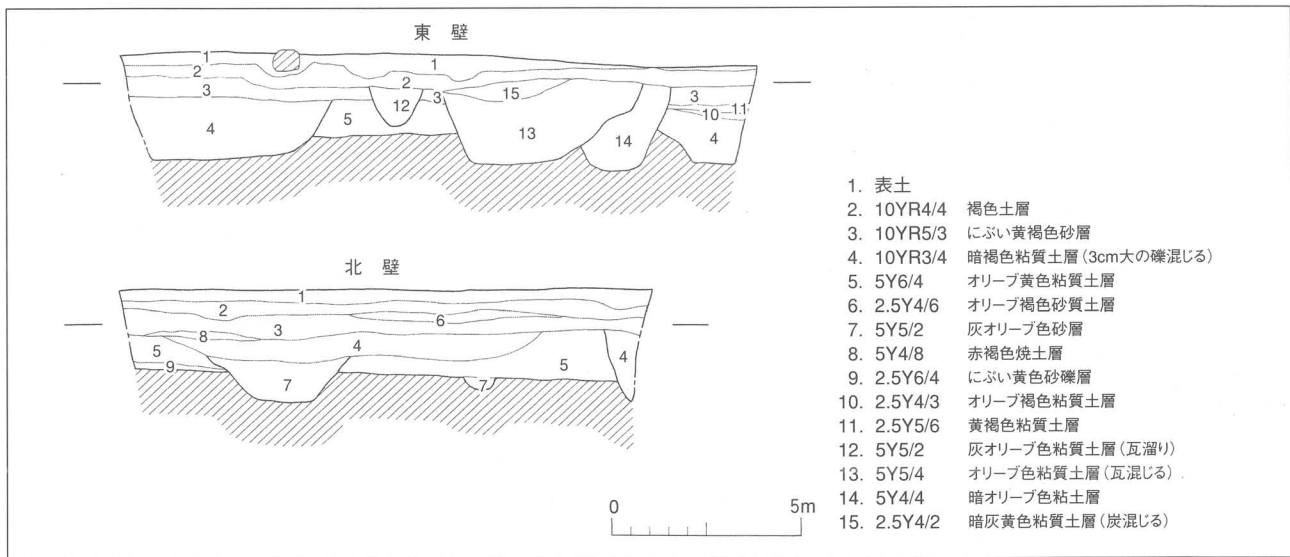
第73図 第195次調査調査区設定図（1/500）

が30cm前後の厚さで堆積し、その上ににぶい黄褐色砂層（第3層）が20～25cm堆積し、その上に褐色土層（第2層）が10～20cm堆積し、さらにその上に表土（第1層）が10～20cm堆積している。第5層の上に部分的に焼土層や炭層が確認された。表土から地山までの深さは75～90cmである。地山面1面のみで調査を実施し、土坑19基を検出した。井戸等の性格のわかる遺構は検出されなかった。検出した遺構の時期は概ね江戸時代後期と考えられる。出土遺物は遺物整理箱に1箱である。

各遺構の説明をすることにする。



第74図 第195次調査全体図（1/100）



第75図 第195次調査土層断面図（東壁・北壁）（1/80）

SK 1（第76図、図版46）

調査区のほぼ中央に位置する。円形を呈し、径は1.05m、深さは35cmを測る。平坦な底面から外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色シルト層であり、炭、瓦片、2～5cm大の礫を含む。

遺物には、堺・明石焼播鉢（1）があり、口縁部内面に凸帯が巡る。他に肥前白磁小碗、土師皿等が出土している。

SK 2（図版46）

調査区の中央、SK1の北側に位置する。ほぼ円形を呈し、径は80cm、深さは15cmを測る。平坦な底面から外傾して立ち上がる。埋土は褐色粗砂混シルト層であり、瓦片、2～4cm大の礫を含む。

遺物は土師皿、肥前白磁染付碗、軒平瓦等の破片が出土している。

SK 3（図版46）

SK2の北側に位置し、南側をSK2に切られている。ほぼ円形を呈し、径は1.05m、深さは15cmを測る。底面は傾斜していて北側がやや深くなっている。外傾して立ち上がる。埋土は灰オリーブ色砂層

で、1～10cm大の礫を多量に含む。

SK 4

調査区の中央、SK1の東側に位置する。円形を呈し、径は45cm、深さ12cmを測る。平坦な底面から外傾して立ち上がる。埋土は黄灰色シルト層で、2～5cm大の礫を少量含む。

SK 5

SK4の北側に位置する。楕円形を呈し、東西55cm、南北70cm、深さ25cmを測る。平坦な底面から外傾して立ち上がる。埋土は黄褐色粗砂混シルト層で、3～5cm大の礫を多量に含む。

SK 6

調査区の東端に位置する。東西検出長80cm、南北検出長1.85m、深さ20cmを測り、平坦な底面から緩やかに外傾しながら立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土層で3cm大の礫が混じる。

SK 7

調査区の南端に位置する。形状は不明である。東西検出長90cm、南北検出長65cm、深さ30cmを測る。平坦な底面から緩やかに外傾しながら立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土層で3cm大の礫が混じる。層序関係からSK16よりも古い遺構ということがわかる。

SK 8 (第76図)

調査区の南東側に位置し、北側をSK16に切られている。形状は不明である。東西検出長40cm、南北検出長1.6m、深さ38cmを測る。底面は緩やかなU字形を呈し立ち上がる。埋土は暗オリーブ色粘土層である。

出土遺物は肥前白磁染付皿(2)・碗(3)である。3は薄手で外面に竹文が施され、高台畳付けは露胎である。この他に土人形が出土している。

SK 9

調査区の南側に位置する。円形を呈する。径は55cm、深さは23cmである。底面は緩やかなU字形を呈しながら立ち上がる。埋土は下層が暗灰色シルト層で、炭・礫を含み、上層がオリーブ褐色土層である。

遺物は土師皿片が出土している。

SK10 (図版46)

南側をSK9に切られていて、不整形である。東西1.1m、南北70cm、深さ26cmを測る。平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がる。埋土は灰オリーブ色シルト層で、炭・少量の礫を含む。

遺物は丹波焼火入れ、陶器の蓋、瓦等が出土している。

SK11

南側をSK10に切られていて、形状は不明である。東西1.3m、南北検出長70cm、深さ45cmを測る。平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がる。埋土は下層が暗灰黄色シルト層、上層がオリーブ褐色粗砂混シルト層で多量の礫を含む。

遺物は肥前白磁染付碗・皿、肥前青磁染付碗、土師皿、伊賀・信楽焼鍋の底部等の小片が出土している。

SK12

南側をSK11に、北側をSK1に切られている。形状は不明である。東西60cm、南北検出長55cm、深さ11cmを測る。平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がる。埋土は暗灰黄色土層で粗砂・小礫少量を含む。

SK13

SK1・11・12・16・17に切られていて、形状は不明である。東西検出長1.15m、南北検出長1.25m、

深さ30cmを測る。平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がる。埋土は暗灰黄色粗砂混シルト層で2～10cm大の礫を少量含む。

SK14

SK10に切られている。ほぼ円形を呈する。径は65cm、深さは6cmを測る。平坦な底面からほぼ垂直に立ち上がる。埋土はオリーブ褐色土層で3～7cm大の礫を含む。

SK15

西壁際に位置し、SK14に切られていて、形状は不明である。東西検出長65cm、南北検出長1.25m、深さ15cmを測る。平坦な底面から緩やかに外傾しながら立ち上がる。埋土はオリーブ褐色砂質土層である。

SK16

東壁際に位置し、SK9・10・11・13・17に切られていて、形状は不明である。東西検出長50cm、南北検出長1.6m、深さ27cmを測る。平坦な底面から緩やかに外傾しながら立ち上がる。埋土はオリーブ色褐砂質土層で瓦が混じる。

出土遺物は肥前白磁染付小碗の小片がある。

SK17

SK16の北側に位置し、SK16に切られている。円形と考えられる。径は35cm、深さ7cmを測る。埋土は灰オリーブ色土層で粗砂・小円礫を含む。

SK18

北壁際に位置する。形状は不明である。東西検出長1.18m、南北検出長40cm、深さ25cmを測る。平坦な底面から播鉢状に大きく開きながら立ち上がる。埋土は灰オリーブ色砂層である。

SK19

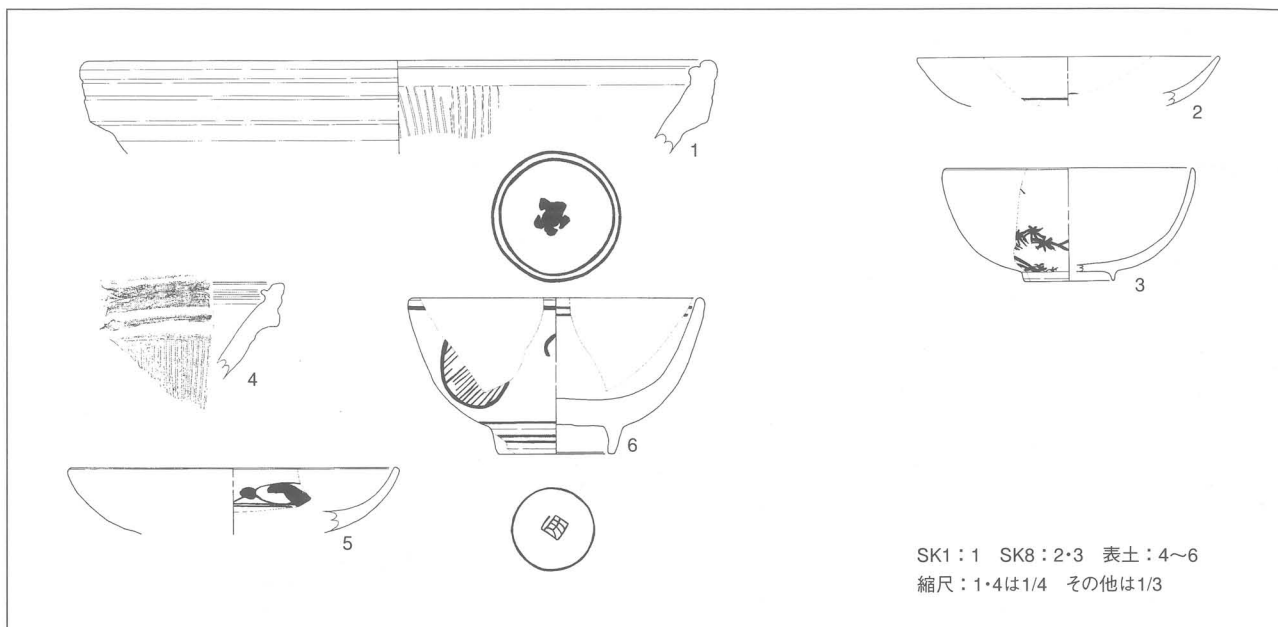
北壁際に位置し、北壁に切られている。円形と考えられる。径は32cm、深さ7cmを測る。断面はU字形を呈する。埋土は灰オリーブ色砂層である。

遺構外（第76図）

遺構外から出土した遺物では、堺・明石焼播鉢（4）、肥前白磁染付皿（5）・碗（6）は共にくわんか手で、6は外面には丸文が施され、見込みに二重圏線の中にコンニャク印判で五弁花が施されている。これらは機械掘削時に表土から取り上げられた遺物である。

4. まとめ

今回の調査範囲は狭小であったため、遺跡の性格が把握できるような井戸跡・溝跡・建物跡等の遺構は検出されなかった。また、江戸時代前期や有岡城期に遡る遺構も検出されなかった。しかし、18世紀後半以降の遺物が出土し、多数の土坑が切り合って検出されたことから、このあたりに18世紀後半の段階から町家が存在していたと考えられる。検出された土坑はゴミ穴と考えられる。有岡城の惣構えの中でも北側に比べると南側、今回の調査地点周辺ではあまり調査がされていない。今後、周辺の調査成果と合わせ江戸時代後半の町家の様相を明らかにしていきたい。（細川）



第76図 第195次調査出土遺物実測図

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK1	第76図-1	擂鉢	陶器	口径 (33.8) cm	クシ目一単位9本	堺・明石 5% 内面煤付着
SK8	第76図-2	染付皿	白磁	口径 (12.1) cm	外面文様有り	肥前 5%
	第76図-3	染付碗	白磁	口径 (9.9) cm 器高 4.6 cm 高台径 (3.6) cm	外面竹文 高台畳付露胎	肥前 10% 18c前半
表土	第76図-4	擂鉢	陶器		クシ目一単位8本か	堺・明石 10%
	第76図-5	染付皿	白磁	口径 (13.0) cm	内面唐草文 見込み蛇の目釉剥ぎ	肥前 10%
	第76図-6	染付碗	白磁	口径 (11.6) cm 器高 6.3 cm 高台径 4.7 cm	外面丸文 見込みコンニャク印判五弁花と二重 圏線有り 高台内銘と圏線有り 高台畳付露胎 離れ砂付着	肥前 50% 18c後～ 19c前

表38 第195次調査遺物観察表

註1 八木哲浩編『伊丹古絵図集成』伊丹資料叢書6 伊丹市立博物館 1982年

註2 古野将盈『丹丘寺院開基年考』伊丹市史第4巻所収 伊丹市役所 1968年

註3 伊丹市教育委員会『伊丹市埋蔵文化財調査概報Ⅳ 有岡城跡・伊丹郷町遺跡の調査』1995年

第12節 第197次調査

所在地 伊丹市宮ノ前1丁目154-1他

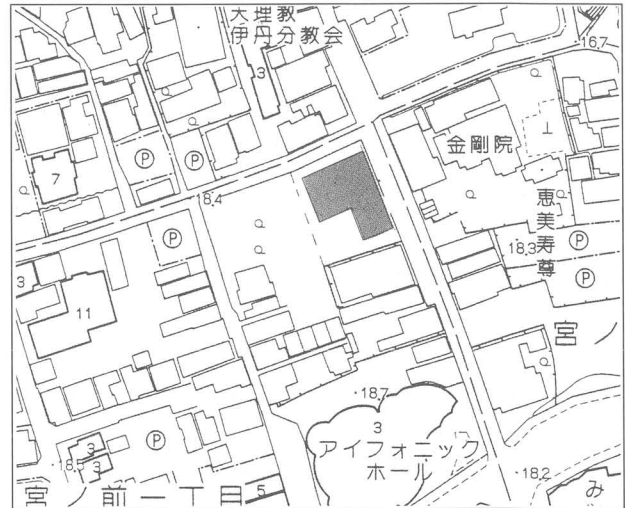
調査面積 420㎡

調査期間 平成9年8月29日～11月5日

担当者 岡本敏行・奈良康正

1. 遺跡の概要

本調査地点は、有岡城跡・伊丹郷町遺跡の北側に位置する。調査地北150mには有岡城期の「岸の砦」の面影を残す猪名野神社が所在する。本地点はその門前に広がる北少路村に属し、神社正面から南北に通る道筋（現在の宮ノ前通り）に面する。『天保七年写文禄伊丹之図』には通りに面して町屋が、『寛文九年伊丹郷町絵図』には瓦屋根かと思われる町屋が描かれている。『元禄七年柳沢吉保領伊丹郷町絵図』では本調査地敷地が3区画に区切られ、住居人はそれぞれ清右衛門（本百姓）・太郎右衛門（同）・与左衛門（職業記載なし）となっている。『天保十五年伊丹郷町分間絵図』では2区画に変わっている。



第77図 第197次調査調査区位置図 (1/2,500)

2. 調査概要

今回の調査は、個人住宅建設に伴う事前発掘調査として実施したものである。当該地は有岡城跡・伊丹郷町遺跡の範囲に含まれており、近隣地で行われた調査においても、当該期の遺構・遺物が多数検出されている。これらの成果を鑑みた結果、全面調査が必要と判断されるに至った。市教育委員会の要請により、震災復旧・復興の市町支援として、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班が現地調査を担当した。

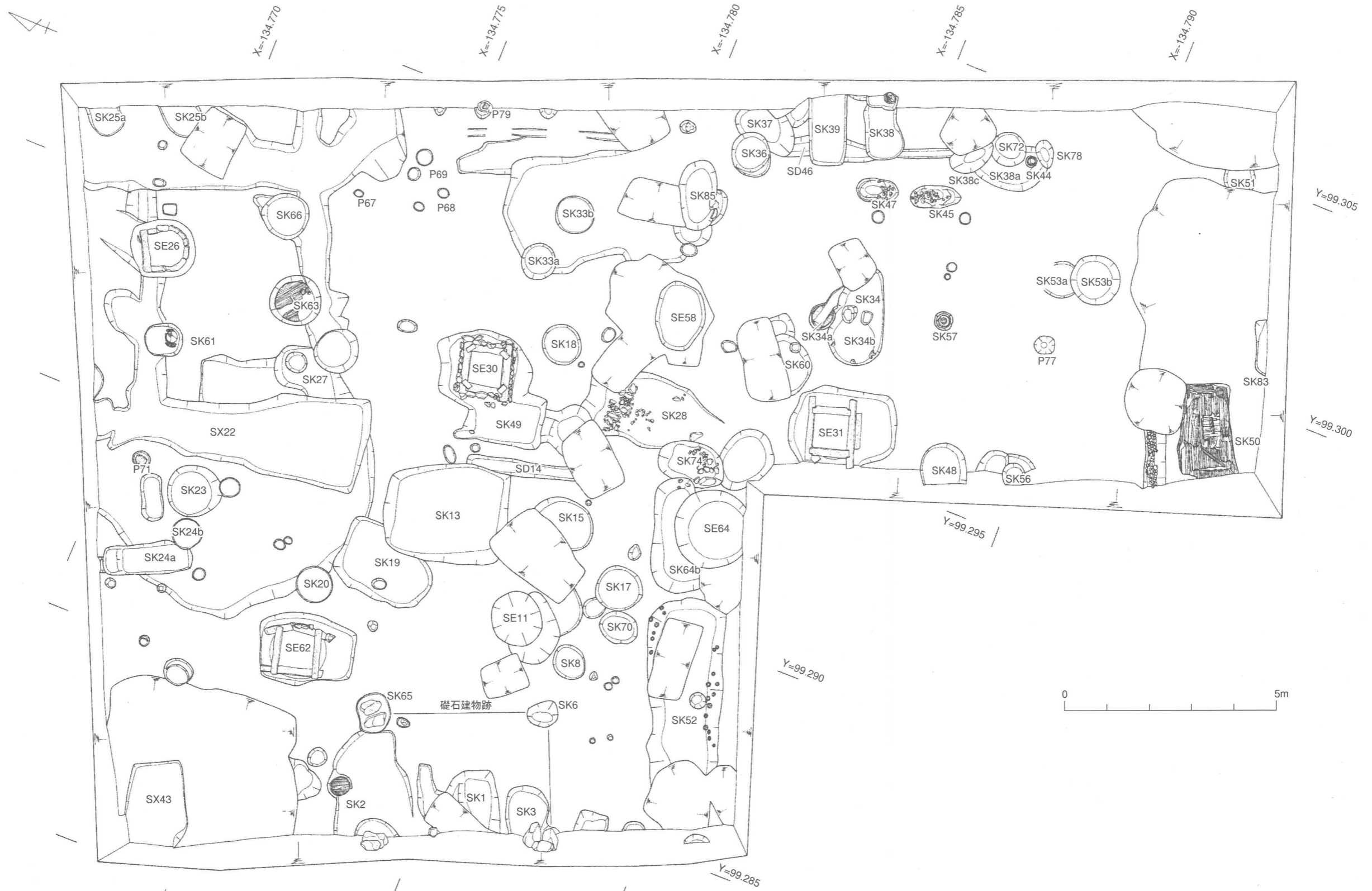
調査は、重機による盛土、及び表土掘削を行った後、人力により遺構の検出、掘削を行った。基本層序は、上層より、盛土・旧表土・整地土・地山となっており、遺構は地山面上で検出された。遺構面は一面のみであった。遺構には検出した順に通し番号をつけ、調査の進展に伴い遺構でないと判断した場合には欠番とした。

3. 調査成果

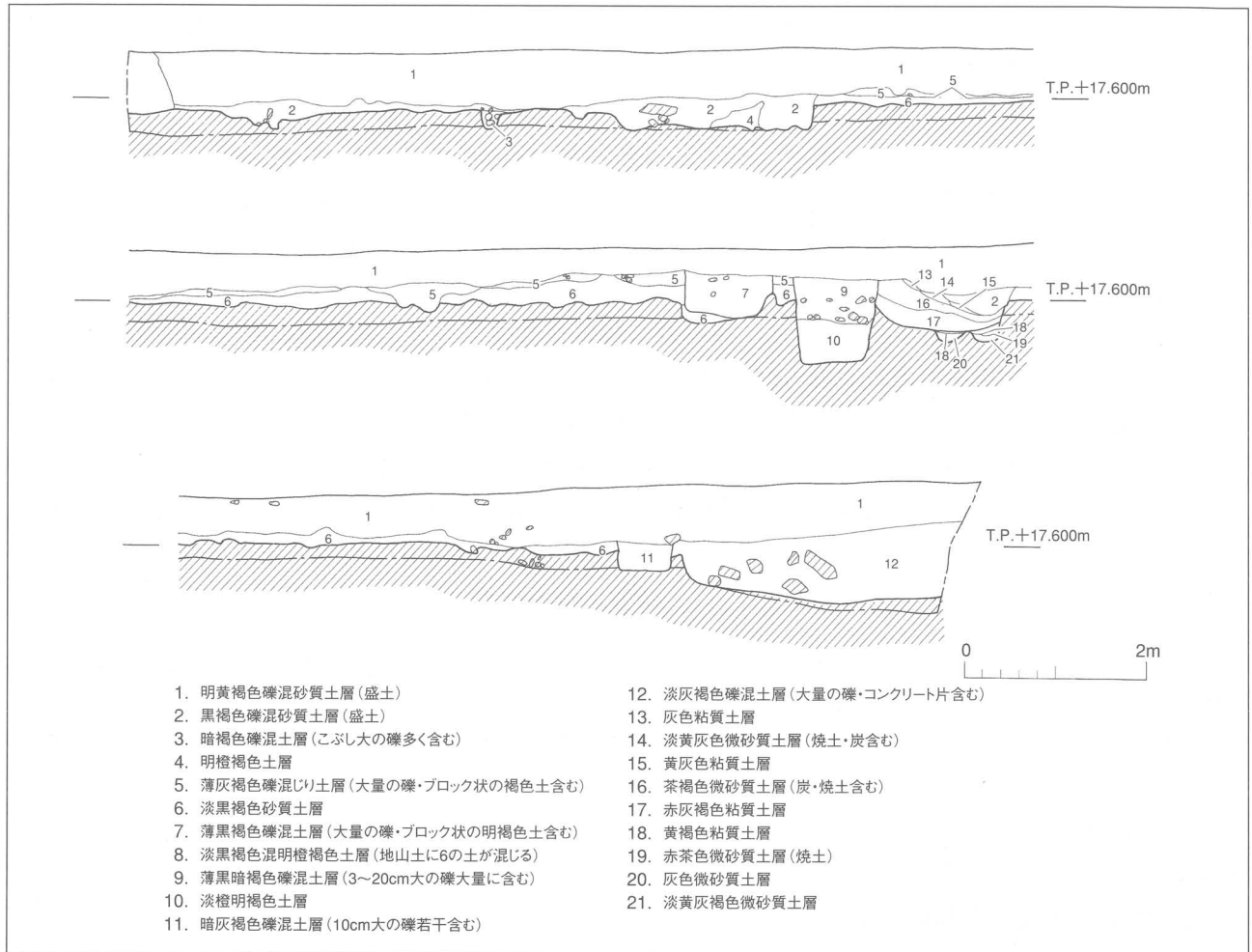
検出した遺構は、土坑51基、ピット10基、井戸7基、溝6条、竈3基、落ち込み状遺構2ヶ



第78図 第197次調査調査区設定図 (1/1,000)



第79図 第197次調査上層全体図 (1/100)



第80図 第197次調査土層断面図(東壁)(1/80)

所、集石遺構1ヶ所、礎石建物跡1棟、防空壕2基などである。

礎石建物(第81図、図版48)

調査区西壁際で検出した。南半部が調査区外に続いているため全容は明らかにしえないが、南北1間、東西1間以上の礎石建物で、南北柱間4.2m、東西柱間3.2mを測る。南東の石材は既に失われていた。

埋土(SK3)から、肥前染付皿(1)・染付碗(2・3・4・5)などが出土している。

井戸

井戸は7基検出したが、3基(SE30・31・62)は「井」字形に石材を組み合わせたもの、2基(SE58・64)は上部構造が既に失われており不明、1基(SE26)は北辺を棒状の石材で直線的に造り、南辺は弧を描くもの、そしてもう1基は円形のコンクリート枠を有するものである。

SE31(第81図、図版49)

調査区中央西壁際で検出した。掘り方は長辺2.5m、推定短辺2mを測る隅丸方形の土坑である。井戸枠は幅20cmの石材を「井」字形に組み合わせたもので、東西1.5m(長辺)、南北90cm(短辺)の長さを測り、南側には長さ80cmの石材が配されている。

掘り方埋土から、灯明皿(6)、肥前染付碗(7・8)などが出土している。

SE64(第81図、図版50)

調査区中央南壁際で検出した。南端は調査区外に続いているため、全容は明らかにしえない。掘り

方は径1.8mのほぼ円形の土坑である。上部構造は既に失われており不明であるが、検出面-60cmのところから径1.3mの円形に掘りこまれている。検出面から約1m掘り下げたが、完掘していない。

埋土から、丹波焼播鉢（9）、肥前染付碗（10・11）・白磁紅皿（12）などが出土している。

竈

SK34 a・b（第81図、図版49・50）

調査区中央やや南寄りで検出された。大小2基の竈が隣接しており、南側の大きいものは、本体部は直径約1.3m、深さ40cm程を測る。焚き口部は、幅1.1m、長さ1.3mを測り、東に向かって開いている。また、軸線は北へ13度程振れている。東端部に攪乱を受けている。本体部と焚き口部の境界には、主軸に対して対象に楕円形の坑が掘られており、共に、長軸40cm、短軸30cmを測る。また、本体部には、壁体として張り付けられた粘土が一部だが残存しており、高熱によって酸化、還元している。中央部も同様に楕円形に酸化、還元しており、堅く焼き締まっている。北側の小規模のものは、本体部は直径約70cm、深さ約15cmを測り、「コ」字状に板状の石材を配置している。焚き口部は、幅25cm、長さ50cmを測り、東に向かって開いている。また、軸線は南へ16度程ふれている。

埋土から、瓦質盤（13）、肥前染付碗（14）、伊賀・信楽焼碗（15）、寛永通宝（16・17）などが出土している。

SK83

調査区南壁際で検出した。南半部が調査区外に続いているため全容は不明であるが、東西1.3m以上、南北20cm以上を測る竈である。

出土遺物はなかった。

水琴窟

SK57（第81・82図、図版49・50）

調査区南側で検出した。直径約45cmを測る正円形の土坑である。検出時には上部が既に削平により消失しており、深さも20cm程を残すのみであった。土坑底部は倒立させた丹波焼甕（18）の口径とほぼ同じ大きさで、中央には平瓦（20）を水平に置き、その上に肥前青磁染付皿（19）が置かれていた。水琴窟と考えられる。

埋桶

調査区内では、少なからず埋桶が検出されており、その大きさには、60cm、80cm、1mと3種類が認められる。大きさの違いは機能の違いに由来するものと考えられる。

SK 2（第82図）

調査区西壁際で検出した。直径約60cm、深さ約10cmを測る正円形の土坑で、木桶の底板が出土している。側板は削平されてそのほとんどが失われているが、最下部のタガ付近がかりょうじて残っていた。底板は5枚の板材で構成されており、厚さはそれぞれ1cmである。

埋土から、焙烙（38）、肥前染付碗（39）などが出土している。

SK63（第83図）

調査区北寄りで検出した。直径約1.2m、深さ約30cmを測る正円形の土坑である。南端は溝状の遺構に切られていた。土坑底部より木桶が出土しているが、側板は一切残存していなかった。底板も半分ほどが残るだけであったが、本来は6枚で構成されていたものと思われ、厚さは1cm程を測る。

埋土から、土師皿（56）、瓦質火鉢、丹波焼甕・徳利などが出土している。

胞衣壺

SK44（第83図）

調査区南寄りの東壁際で検出した。直径約30cm、深さ約10cmを測る正円形のピットである。上部は削平を受けておりほとんど失われていたが、土師質壺（54）を灰白色粗砂で埋めており、壺内面には黒色炭化物が薄くこびり付いていた。類例より胞衣壺と考えられる。

他に出土した遺物はなかった。

土坑

SK1（第82図、図版50・51）

調査区西壁際で検出した。北側は攪乱を受けており、西半部は調査区外に続いているため全容は不明であるが、東西1.5m以上、南北1.2m以上を測る隅丸方形の土坑である。深さは30cmを測る。

埋土から、柿釉灯明皿（21）、焙焙（22・23・24・25）、美濃焼陶器碗（26）・蓋（29）、伊賀・信楽焼碗（27・33）、肥前染付皿（28）・染付碗（30・31・35）・小碗（32）・青磁染付碗（34）・瓶（37）・青磁仏花瓶（36）などが出土している。

SK18（第83図、図版48・51）

調査区ほぼ中央で検出した。直径1mを測る円形の土坑である。深さは30cmを測る。

埋土から、丹波焼小甕（40）・片口鉢（41）、美濃焼有耳壺（42）・小皿（43）、肥前白磁蓋（44）・染付蓋（45）・染付蕎麦猪口（46）・染付碗（47）などが出土している。

SK20（第83図）

調査区北寄りで検出した。直径約80cm、深さ約1.1mを測るほぼ正円形の土坑である。上層より淡緑灰色砂礫、明褐色粘質シルト、黄褐色砂質土、暗灰色粘土と堆積しており、淡緑灰色砂礫より18世紀初頭の丹波焼播鉢（48）が出土している。

埋土から、肥前染付碗（49）・青磁碗（50）などが出土している。

SK28

調査区のほぼ中央で検出した集石遺構である。北側で2ヶ所攪乱を受け、南端をSK74に切られているが、東西約1.7m、南北約3mを測る。北へ向かって徐々に深くなっており、最深部に人頭大から拳大の石が残存していた。

埋土から、遺物は出土しているが、細片のため図示できなかった。

SK38（第83図、図版48・51）

調査区東壁際で検出した。長軸1.5m以上、短軸約90cmを測る隅丸長方形の土坑である。東側は調査区外へと続いており、上部にも攪乱を受けている。

埋土から、土師皿（51）・焙焙（52）、丹波焼播鉢（53）などが出土している。

SK51（第83図、図版49）

調査区南端で検出した。東西両端を攪乱により失っていたが、直径約70cm、深さ20～40cmを測るほぼ正円形の土坑である。

埋土から、土師皿（55）などが出土している。

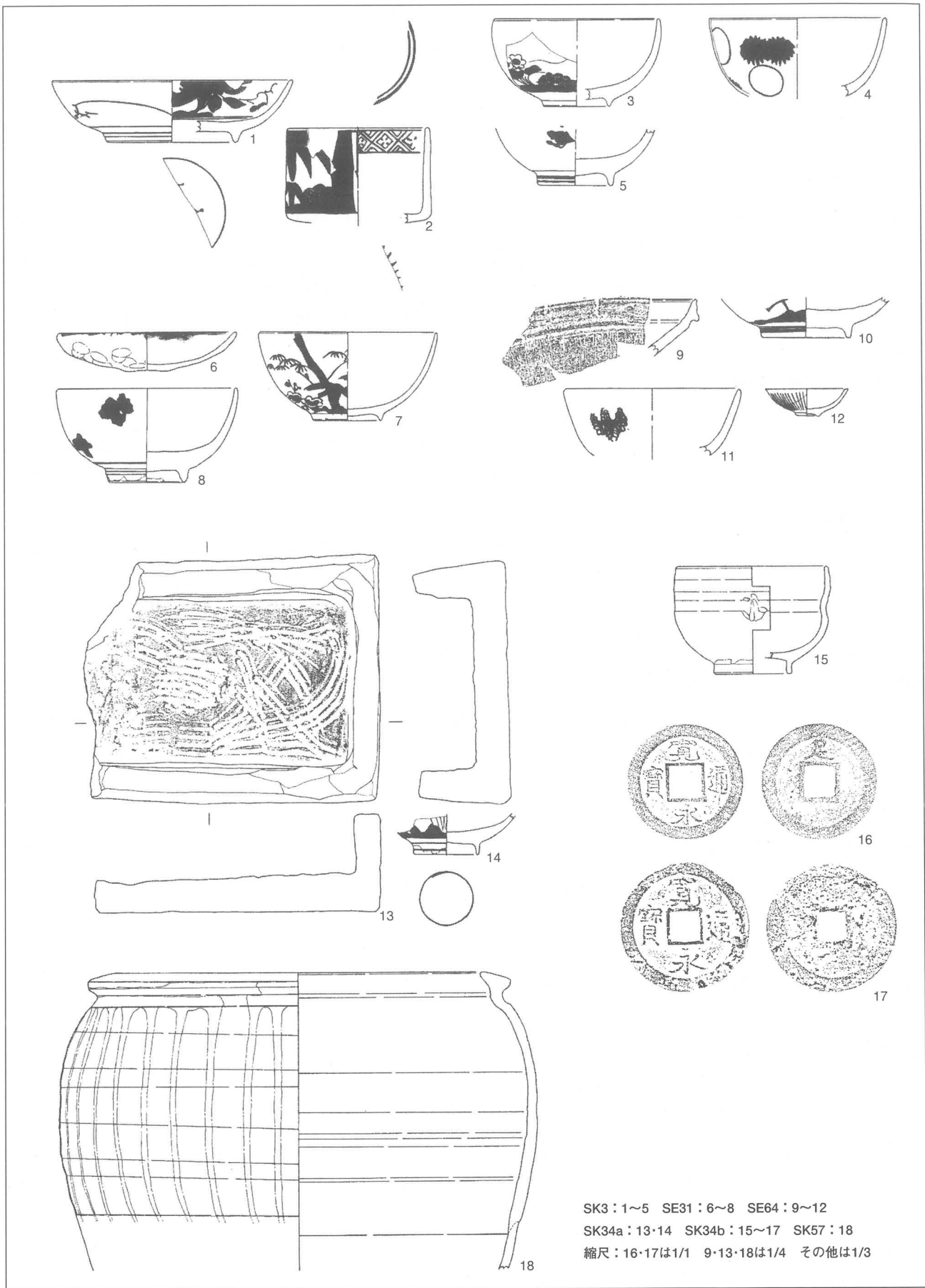
SK61（第83図、図版49・51）

調査区北端で検出した。直径約80cm、深さ約20cmを測る隅丸方形の土坑である。南側寄りのやや偏った位置から、完形の瓦質瓦燈身（58）が倒立した状態で出土した。また瓦燈の下部には木質が遺存しており、本来は木桶が埋置されており、その中に落ちこんだものと考えられる。

埋土から、肥前染付碗（57）などが出土している。

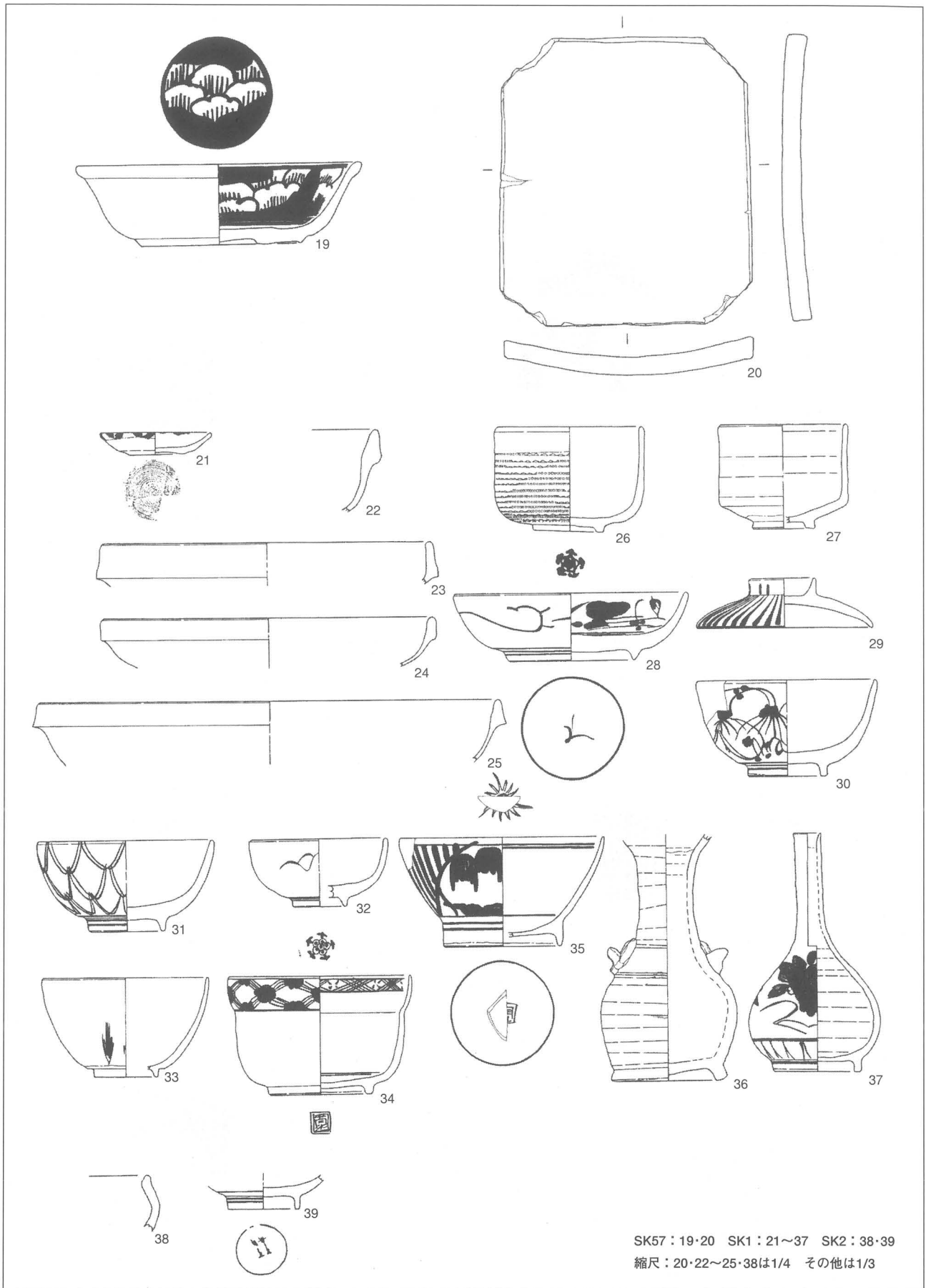
SK72（第83図）

調査区南寄り東壁際で検出した。直径約80cm、深さ約30cmを測るほぼ円形の土坑である。上層より

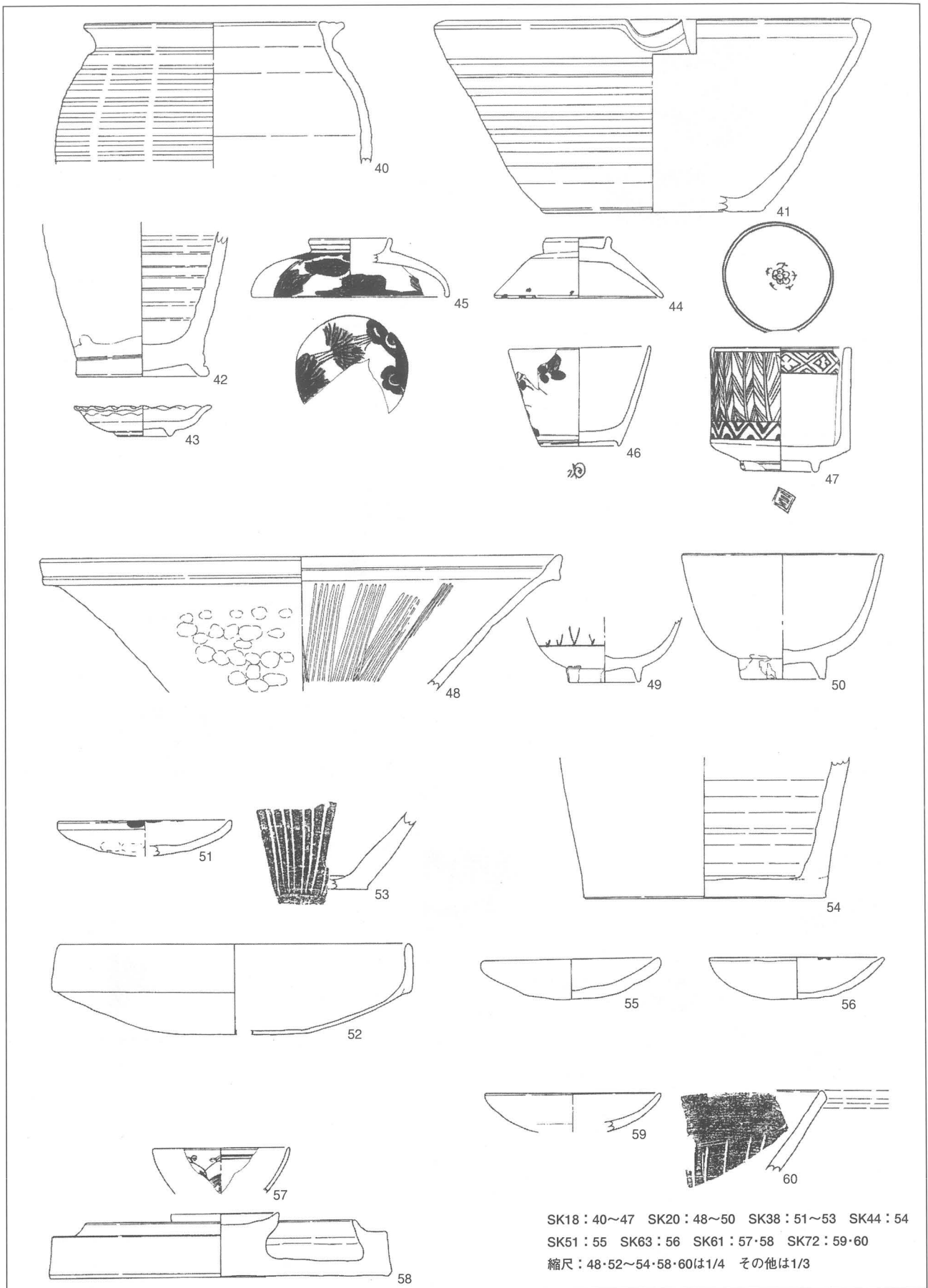


SK3:1~5 SE31:6~8 SE64:9~12
 SK34a:13·14 SK34b:15~17 SK57:18
 縮尺:16·17は1/1 9·13·18は1/4 その他は1/3

第81図 第197次調査出土遺物実測図(1)



第82図 第197次調査出土遺物実測図(2)



第83図 第197次調査出土遺物実測図 (3)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK3	第81図-1	染付皿	白磁	口径 (13.5) cm 器高 3.5 cm 高台径 (6.2) cm	内面樹木文 見込み二重圏線 外面唐草文 高台内銘と圏線有り 高台畳付露胎	肥前 25% 18c前半
	第81図-2	染付碗	白磁	口径 7.8 cm	筒形 外面竹文 内面口縁部四方襷文 見込み二重圏線有り	肥前 25% 18c後半
	第81図-3	染付碗	白磁	口径 (9.3) cm 器高 5.0 cm 高台径 (3.2) cm	外面草花文 高台畳付露胎	肥前 25% 18c前半
	第81図-4	染付碗	白磁	口径 (10.0) cm	外面コンニャク印判で丸文と菊文	肥前 20% 18c前半
	第81図-5	染付碗	白磁	高台径 4.2 cm	外面コンニャク印判文 高台畳付露胎	肥前 30% 18c前半
SE31 堀り方	第81図-6 図版50-6	土師皿	素焼き	口径 10.0 cm 器高 2.2 cm	手捏ね成形 内外面口縁部ヨコナデ 外面底部指頭圧痕 内面ナデ	在地 90% 口縁部煤付着
	第81図-7 図版50-7	染付碗	白磁	口径 (10.0) cm 器高 5.0 cm 高台径 3.8 cm	外面竹梅文 高台畳付露胎	肥前 40% 18c前半
	第81図-8 図版50-8	染付碗	白磁	口径 10.1 cm 器高 5.4 cm 高台径 4.2 cm	外面コンニャク印判桐文 高台畳付露胎	肥前 70% 二次焼成を受ける 18c前半
SE64	第81図-9	播鉢	陶器	口径 35.4 cm	クシ目一単位6本	丹波 2% 17c後半
	第81図-10	染付碗	白磁	高台径 5.0 cm	外面文様有り 見込み蛇の目軸剥ぎ 高台畳付露胎	肥前 20% 18c前半
	第81図-11	染付碗	白磁	口径 (9.8) cm	外面コンニャク印判桐文	肥前 20% 18c前半
	第81図-12 図版50-12	紅皿	白磁	口径 4.6 cm 器高 1.6 cm 高台径 1.3 cm	型押し成形 外面下半部露胎	肥前 100% 18c中～後
	SK34	第81図-13 図版50-13	盤	瓦質	短辺 18.5 cm 器高 7.4 cm	内面底部クシ状工具による掻き取り痕有り 外面体部、底部ミガキ
第81図-14		染付碗	白磁	高台径 3.7 cm	外面文様有り 高台内圏線有り 高台畳付露胎 離れ砂付着	肥前 20% 18c前半
第81図-15		碗	陶器	口径 (8.4) cm 器高 6.2 cm 高台径 (4.3) cm	灰釉 高台周辺露胎	15%
第81図-16		銭	銅	径 2.2 cm 厚み 0.1 cm	寛永通寶 背文「足」	下野国足尾銭 寛保元年(1741)初鑄
第81図-17		銭	銅	径 2.5 cm 厚み 0.1 cm	寛永通寶	
SK57	第81図-18 図版50-18	甕	陶器	口径 36.4 cm	外面鉄釉 口縁部直下から灰釉を流し掛け 内面灰釉	丹波 40%
	第82図-19 図版50-19	染付皿	青磁	口径 16.2 cm 器高 4.6 cm 高台径 9.1 cm	外面青磁 内面花文様 見込み花文様と二重圏線有り 蛇の目凹型高台	肥前 100% 19c前半
	第82図-20	平瓦	瓦	全長 20.9 cm 幅 18.9 cm 厚さ 1.4 cm	凹面丁寧なナデ 凸面ナデ 平行の横筋残る(コビキB) 三側面丁寧なナデ 端部上下共に面取りをする	90%

表39 第197次調査遺物観察表(1)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代	
SK1	第82図-21	皿	軟質施釉陶器	口径 6.2 cm 器高 1.2 cm 底径 3.1 cm	柿釉 ロク口成形 底部糸切り痕有り(左巻き) 外面体部から底部露胎	80% 口縁に煤付着	
	第82図-22	焙烙	素焼き		底部外型成形 内外面口縁部から体部ヨコナデ 把手一部残存	3% 外面底部煤付着	
	第82図-23	焙烙	素焼き	口径 (24.6) cm	底部外型成形 内外面口縁部から体部ヨコナデ	在地 3%	
	第82図-24	焙烙	素焼き	口径 (25.0) cm	底部外型成形 内外面口縁部から体部ヨコナデ	3%	
	第82図-25	焙烙	素焼き	口径 (34.8) cm	底部外型成形 内外面口縁部から体部ヨコナデ	5% 内外面底部煤付着	
	第82図-26 図版50-26	碗	陶器	口径 8.1 cm 器高 6.0 cm 高台径 4.0 cm	鎧湯のみ碗 外面回転体施文具の螺旋状の連続 文様あり 内面から外面口縁にかけて鉄釉 外 面体部から高台まで鉛釉 高台量付露胎	美濃 70% 18c後半	
	第82図-27	碗	陶器	口径 (7.0) cm 器高 6.0 cm 高台径 (3.4) cm	筒形 高台周辺露胎	伊賀・信楽 40% 19c前半	
	第82図-28 図版50-28	染付皿	白磁	口径 13.1 cm 器高 3.9 cm 高台径 7.0 cm	外面唐草文 内面草花文 見込みコンニャク印 判五弁花と二重圏線有り 高台内銘と圏線有り 高台量付露胎	肥前 98% 18c後半	
	第82図-29 図版50-29	碗蓋	陶器	口径 10.0 cm 器高 2.3 cm つまみ径 3.8 cm	麦藁手風 口縁口錆 外面鉄釉と呉須で交互に 条線を施す つまみ量付露胎	瀬戸・美濃 80% 19c前半	
	第82図-30	染付碗	白磁	口径 (10.0) cm 器高 5.5 cm 高台径 4.3 cm	外面梅笹文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 40% 18c	
	第82図-31	染付碗	白磁	口径 (9.8) cm 器高 5.7 cm 高台径 4.0 cm	外面二重網目文 高台量付露胎	肥前 50% 18c後半	
	第82図-32 図版50-32	染付小碗	白磁	口径 (7.6) cm 器高 4.9 cm 高台径 (2.8) cm	外面鳥文 高台量付露胎	肥前 50%	
	第82図-33 図版50-33	碗	陶器	口径 9.3 cm 器高 5.6 cm 高台径 3.6 cm	外面若松文 高台露胎	伊賀・信楽 70% 19c前半	
	第82図-34 図版51-34	染付碗	青磁	口径 10.2 cm 器高 6.7 cm 高台径 5.7 cm	外面体部青磁 外面口縁部格子文 内面口縁部 四方禪文 見込み手描き五弁花と二重圏線 高 台内銘有り 高台量付露胎	肥前 60% 18c	
	第82図-35 図版51-35	染付碗	白磁	口径 11.5 cm 器高 6.2 cm 高台径 6.4 cm	広東形 外面柳文 見込み火焰宝珠文と圏線有 り 高台内銘と圏線有り 高台量付露胎	肥前 80% 18c末～ 19c前	
	第82図-36 図版51-36	瓶	青磁	高台径 5.5 cm	耳2ヶ所有り 内面露胎 高台量付露胎	肥前 80% 18c	
	第82図-37 図版51-37	瓶	白磁	口径 1.5 cm 器高 13.5 cm 高台径 4.8 cm	鶴首 外面牡丹文 内面口縁より下露胎 高台 量付露胎、離れ砂付着	肥前 95% 18c	
	SK2	第82図-38	焙烙	素焼き		内外面口縁部ヨコナデ	3% 外面煤付着
		第82図-39	染付碗	白磁	高台径 (4.0) cm	高台内大明年製銘か、圏線有り 高台量付露胎	肥前 5%
	SK18	第83図-40	甕	陶器	口径 (14.6) cm	内外面鉄釉	丹波 5%

表40 第197次調査遺物観察表(2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK18	第83図-41	片口鉢	陶器	口径 (24.5) cm 器高 10.7 cm 底径 (12.2) cm	内面に灰釉 口縁から外面にかけて露胎	丹波 20% 18c後半 灰被り
	第83図-42	有耳壺	陶器	高台径 7.3 cm	黄瀬戸釉 内面と高台周辺露胎	美濃 20% 18c中頃 二次焼成受ける
	第83図-43 図版51-43	小皿	陶器	口径 7.6 cm 器高 1.7 cm 高台径 3.1 cm	口縁部輪花 灰釉 高台量付露胎	美濃 100% 18c中頃
	第83図-44 図版51-44	碗蓋	白磁	口径 9.4 cm 器高 3.5 cm つまみ径 3.6 cm	見込みに浅い円刻有り つまみ量付露胎	肥前 95% 18c後半 口縁煤付着
	第83図-45	染付碗蓋	白磁	口径 11.0 cm 器高 3.4 cm つまみ径 4.6 cm	外面岩竹文 内面口縁部に笹文 見込み岩竹文を描き圏線で囲む つまみ量付露胎	肥前 45% 18c後半
	第83図-46 図版51-46	染付蕎麦猪口	白磁	口径 8.0 cm 器高 5.6 cm 高台径 4.3 cm	外面草花文 高台内渦福か 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 85% 18c前半
	第83図-47 図版51-47	染付碗	白磁	口径 7.9 cm 器高 7.1 cm 高台径 4.0 cm	筒形 外面矢羽根文 内面口縁四方禪文 見込み手描き五弁花と二重圏線有り 高台内銘有り 高台量付露胎	肥前 90% 二次焼成受ける 18c後半
SK20	第83図-48	擂鉢	陶器	口径 (39.2) cm	クシ目一単位6本 口縁部周辺ヨコナデ 外面体部指頭圧痕	丹波 20% 17c後半 外面口縁から内面灰被り
	第83図-49	染付碗	白磁	高台径 (4.2) cm	外面網目文 高台露胎	肥前 30% 17c中頃
	第83図-50	碗	青磁	口径 (11.2) cm 器高 7.2 cm 高台径 4.7 cm	高台露胎	肥前 50% 貫入 17c中頃
SK38	第83図-51	土師皿	素焼き	口径 (9.8) cm 器高 2.0 cm	手握ね成形 内外面口縁部ヨコナデ 外面底部指頭圧調整の後ナデ	在地 25% 口縁に煤付着
	第83図-52 図版51-52	焙烙	素焼き	口径 6.8 cm 器高 6.9 cm	底部外型成形 内外面口縁部から体部ヨコナデ	60% 外面煤けている
	第83図-53	擂鉢	陶器		擂目ヘラ描き	丹波 3%
SK44	第83図-54	壺	素焼き	底径 18.4 cm	外面強いヨコナデ 内面ヨコナデ	20%
SK51	第83図-55	土師皿	素焼き	口径 9.8 cm 器高 2.3 cm	手握ね成形 内外面口縁部ヨコナデ 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 85%
SK63	第83図-56	土師皿	素焼き	口径 9.7 cm 器高 2.4 cm	手握ね成形 内外面口縁部ヨコナデ 外面底部指頭圧痕 内面ナデ	在地 70% 口縁煤付着
SK61	第83図-57	染付碗	白磁	口径 (7.7) cm	外面に草花文	肥前 5% 貫入 19c前半
	第83図-58 図版51-58	瓦燈(身)	瓦質	口径 20.2 cm 器高 4.9 cm 高台径 25.5 cm	内部中央に皿型の突起あり(径8.2cm) 外面体部丁寧なヘラミガキ 底部型作り 体部回転台成形ヘラミガキ 皿部手握ね成形	100%
SK72	第83図-59	皿	陶器	口径 (9.9) cm	灰釉か 外面下半部露胎	唐津 5%
	第83図-60	擂鉢	陶器		擂目ヘラ描き 内外面口縁部ヨコナデ 外面口縁より下ナデ	丹波 3% 16c末～ 17c初

表41 第197次調査遺物観察表(3)

茶褐色砂質土、明茶褐色砂質土が堆積している。

埋土から、丹波焼播鉢（60）、唐津焼皿（59）などが出土している。

4. まとめ

遺構より出土した遺物は、17世紀から現代にかけてのもので、コンテナ箱にしておよそ10箱分であった。中には16世紀にまで遡るものも僅かであるが含まれていたが、主体となるのは18世紀のものである。

今調査地点において検出されたのは、有岡城期にまで遡る可能性のある遺構は小規模な土坑1基と、18世紀を中心とする一連の遺構群である。調査区は現在の猪名野神社から南へ延びる道に面しており、この道は18世紀当時も機能していたと考えられ、在郷町の往時の姿を考察し、町屋の構造を窺う上で貴重な資料を得ることができた。

（岡本・奈良）

第13節 第206次調査

所在地 伊丹市北本町1丁目23～29

調査面積 150㎡

調査期間 平成10年4月30日～6月18日

担当者 小長谷正治・細川佳子

1. 遺跡の概要

本調査地点は、有岡城の惣構えの北東部に位置し、西側は本町筋（現産業道路）に面したところであり、商人たちが住んでいた城下町側にあたる。江戸時代、このあたりは、伊丹村藁屋町（後の綿屋町）に属していて、この町が成立したのは文禄年間（1592～96）のことである（註1）。江戸時代の伊丹郷町を表わした絵図の中で『寛文九年伊丹郷町絵図』（註2）をみると、調査地点にはすでに家並みが描かれているので、寛文9年（1669）の頃、すなわち江戸時代前期から当地点には家が建っていたことがうかがえる。

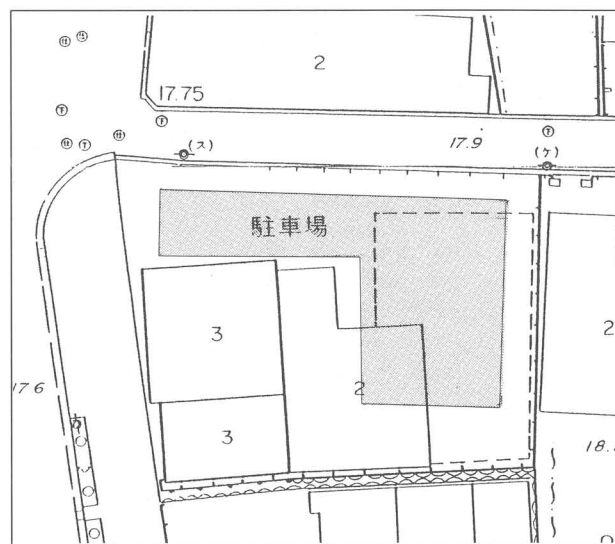
これまでの周辺の調査は、当地点の西側の南北道路を挟んだ第65次・第219次調査では弥生時代の遺構・遺物が発見された。当地点より東へ約100mの第17次調査（註3）では、16世紀代の方形区画の溝が発見され、この溝は伊丹城の侍町の遺構と考えられる。当地点より東へ約80mの第91次調査、当地点より南東へ約100mの第88次調査（註4）で、瓦器碗や土師皿等の小片の遺物が出土し、掘立柱建物跡や柱穴が検出された。これらの遺物・遺構は伊丹城の頃のものと考えられ、第17次調査と同様に伊丹城の侍町の遺構と推定される。また、掘立柱建物跡の方向が現在の道路と直交するので、現在の区画と変わっていないことがわかる。当地点より南へ約70mの萬徳寺境内の第165次調査（註5）では、中世の遺物・遺構が発見され、このあたりに中世の遺跡が広がっていたのではないかと考えられる。第165次調査（註5）では江戸時代の火災跡遺構も発見された。

2. 調査の概要

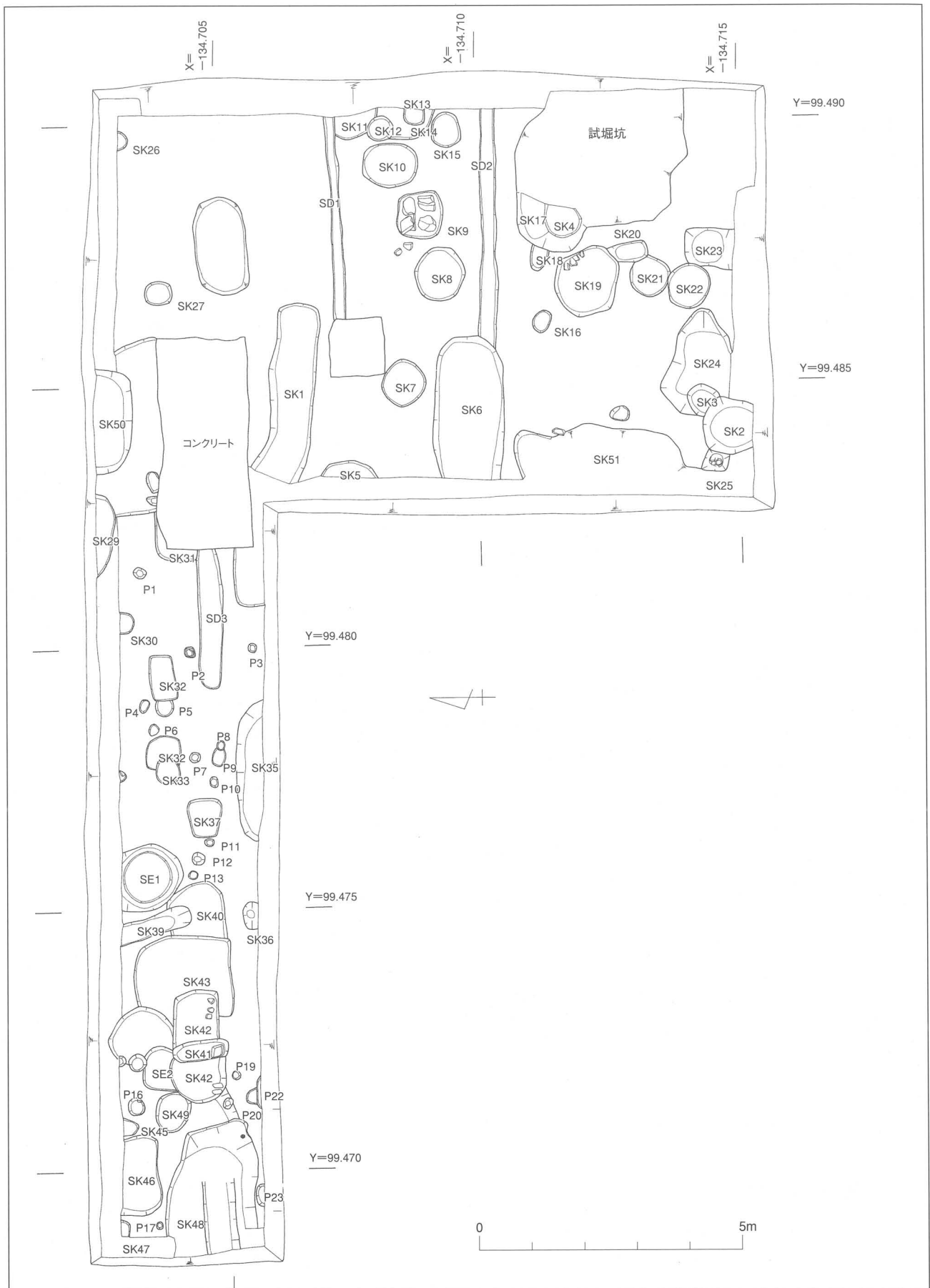
今回の調査は、共同住宅建設に伴う発掘調査で、阪神・淡路大震災の被災地での共同住宅の建設は「災害救助法適用地域において被災住民に住宅を供給する事業」に該当するため、震災復旧・復興



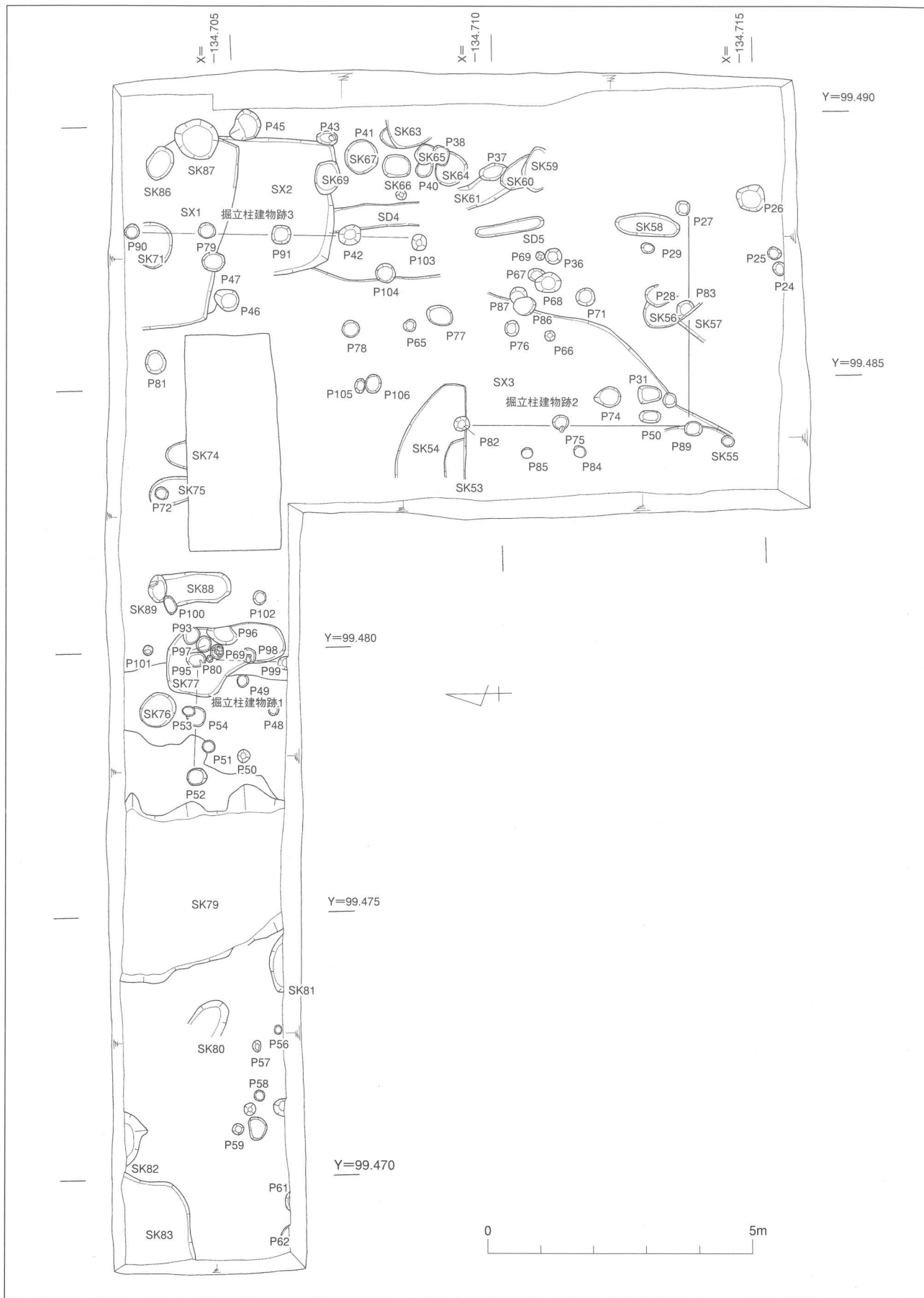
第84図 第206次調査調査区位置図（1/2,500）



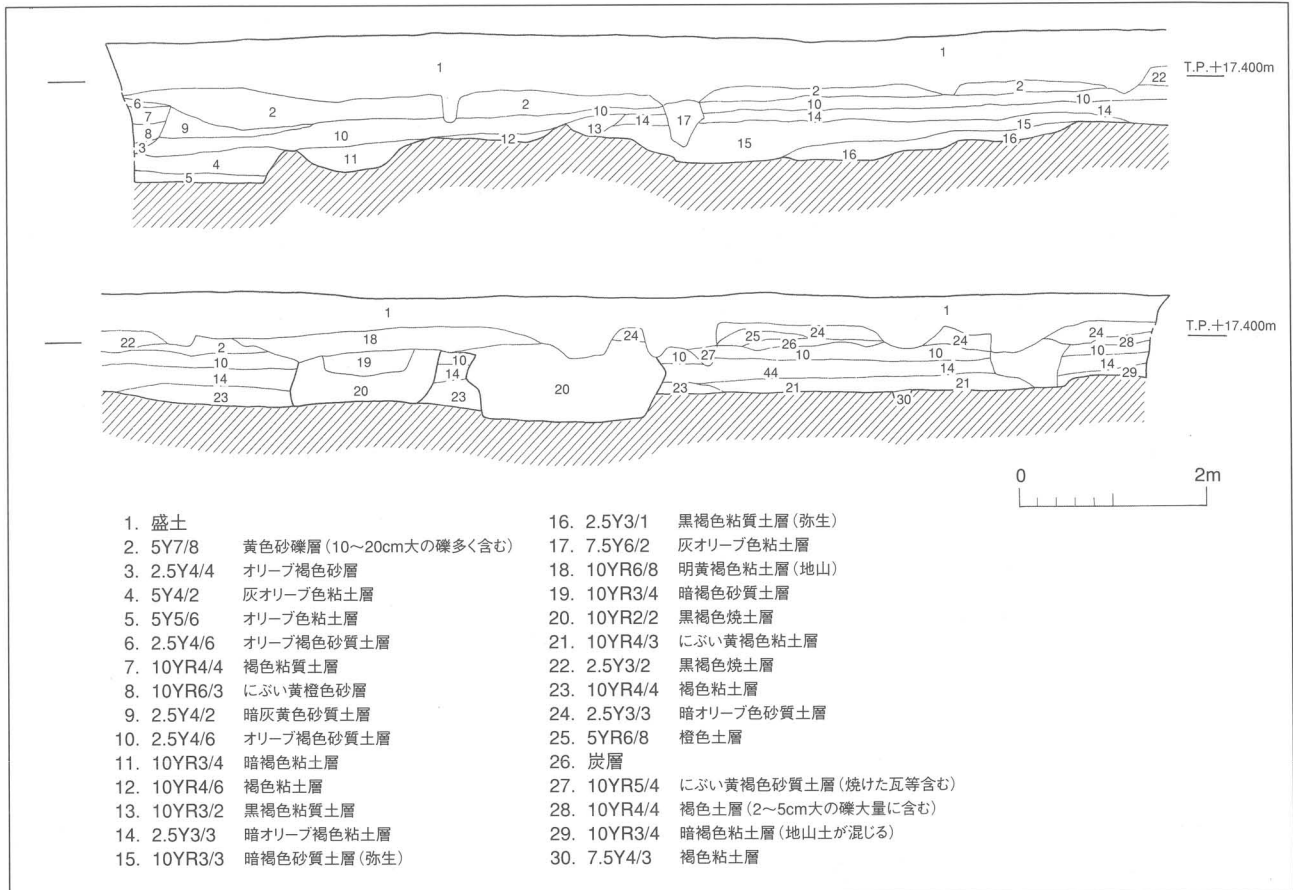
第85図 第206次調査調査区設定図（1/500）



第86図 第206次調査第1遺構面全体図 (1/100)



第87図 第206次調査第2遺構面全体図 (1/100)



第88図 第206次調査土層断面図(北壁)(1/80)

事業の適用を受け、国庫補助事業として実施したものである。

事前の確認調査の結果、表土から40~60cmは攪乱を受けていて、表土より80cm下で地山面が検出された。このため、地山面とその上面の2面で調査を行うことにした。

敷地内に以前立っていた建物の基礎で攪乱を受けているところを除いて、建物建設予定範囲に150㎡の調査区を設定し、現況面から約50cmの表土は重機により除去した。調査区に側溝を入れ、土層の堆積状況を確認した。この結果、表土から65~80cm下のオリーブ褐色砂質土層(第10層)上面と、表土から約1m下の地山面で調査をすることにした。人力掘削により第10層上面まで落とし、その後、遺構検出を行った。これを第1遺構面とし、第2遺構面は地山面で遺構検出を行った。

3. 調査成果

基本的な層序は、明黄褐色粘土層の地山の上に暗オリーブ褐色粘土層(第14層)が10~25cm堆積し、その上にオリーブ褐色砂質土層(第10層)が10~25cm堆積し、その上に黄色砂礫層(第2層)が10~40cm堆積し、西側では厚く、中央部では薄くなり、東側では消滅している。さらにその上に表土(第1層)が40~60cm堆積している。表土から地山までの深さは1m前後を測る。

第10層のオリーブ褐色砂質土層の上面を第1遺構面とし、地山面を第2遺構面とした。第1遺構面は江戸時代前期から中期の時期で、第2遺構面はそれ以前、中世に遡る時期である。また、さらに遡る弥生時代後期の時期の遺構も発見された。出土遺物は遺物整理箱に6箱である。

主な遺構について説明することにする。

第1 遺構面

第1 遺構面で検出した遺構は、溝跡3条、井戸跡2基、焼土処理土坑3基、土坑48基、小穴23基である。本町筋に面した西側の方で多くの遺構が検出され、東側では江戸時代中期から後期の土坑等の遺構が検出された。

SE 2 (第89図、図版54・55)

調査区の北西側に位置する。素掘りの井戸である。焼土処理土坑(SK42)に南半分を切られているが、円形であることがわかる。径90cm、検出面から深さは1mまで掘削し、ほぼ垂直に落ちる。埋土は主に砂層である。

出土遺物では、丹波焼播鉢(3)、唐津焼砂目積皿(4)、肥前白磁染付網目文碗(7)、丸瓦、平瓦等があり、17世紀後半の時期の遺構である。

SK34 (第89図、図版54)

北側の中央部に位置する。西側をSK33に切られている。ほぼ方形を呈し、一辺65cm、深さ22cmを測る。底面は平坦でほぼ垂直に立ち上がる。埋土はオリーブ褐色砂質土層である。

出土遺物は僅かで、焙烙(8)は左上がりの掻き上げの後回転ナデを施し、難波洋三氏の分類(註6)のC類に属する。肥前白磁染付網目文碗(10)、肥前白磁小杯(9)等から17世紀後半の遺構と考えられる。

SK40 (第89図、54・55)

調査区の北西側に位置する。西側をSK43に、北側の一部をSK39に切られている。平面形は方形か長方形と考えられる。東西検出長1m、南北1.08m、深さ22cmを測る。底面は平坦で外傾しながら立ち上がる。埋土は黒褐色土層である。

焙烙(11)は外面に右上がりのタタキの後横ナデを施す。難波氏分類のA類に属する。唐津焼皿(13)は砂目が見込みと高台にそれぞれ3個所ずつ残る。肥前白磁染付皿(14)の高台は断面が三角形で、豊付けは露胎で離れ砂が付着している。これらの遺物から17世紀中頃の遺構と考えられる。

SK42 (焼土処理土坑) (第89図、図版54)

SE 2と同様に調査区の北西側に位置する。長方形を呈し、東西2.18m、南北90cm、深さ30cmを測る。底面はほぼ平坦で外傾しながら立ち上がる。埋土は炭・焼土・瓦・礫を含む暗オリーブ褐色土層である。南東側の底面に10~12cm大の石が3個東西に並ぶ。この石の上面は平らで同じ高さである。

出土遺物は二次焼成を受けているもの(19・22)もあり、肥前白磁染付では網目文碗(23)や、皿(20)は高台豊付けが露胎で離れ砂が付着している。肥前陶器碗(19)は呉器手である。SK42はSE 2を切っており、SE 2が17世紀後半であるから、SK42は17世紀末あるいは18世紀初頭の遺構と考えられる。

この他にも調査区東側の北壁際にはSK28、SK29が東西に並んで位置する。埋土は2基とも炭を多く含む黒褐色焼土層であり、これらも焼土処理土坑である。出土遺物は少量であるが、同時期であると考えられる。

SK43 (第89・90図、図版55)

調査区の北西側に位置する。SK40の西側で、SK42を切っている。長方形を呈し、東西1.56m、南北1.86m、深さ25~37cmである。底面のほぼ中央部で10cm程度深くなっていて、外傾しながら立ち上がる。埋土は黒褐色土層で瓦を多く含み、炭、4cm大の礫を含む。

出土遺物の量は多い。伊賀・信楽焼皿(26)は見込みに梅樹文、花は白色釉、枝と蕾は鉄釉で描かれている。肥前白磁染付碗(29)は外面には二重網目文、内面には網目文、見込には菊花文が施され

ている。三島唐津大鉢（25）、肥前白磁合子の身（27）、その他図示していないが、二彩唐津大鉢、砥石等もあり、18世紀中頃の遺構と考えられる。

SK46（第90図、図版54）

調査区の北西隅に位置する。この土坑は北壁の土層では見られないため、南北の大きさは北壁までは達しないで、東西方向に長辺をもつ長方形と考えられる。東西1.56m、南北検出長77cm、深さ24cmを測る。底面は平坦で、西側の方が東側より緩やかに外傾して立ち上がる。埋土はオリブ褐色砂質土層で、3～5cm大の礫を多く含む。

焙烙（30）は外面に右上がりのタタキの後横ナデを施し難波氏分類のA2類に属する。唐津焼碗（31）、陶器碗（32）は二次焼成を受けている。肥前白磁染付碗（33）も二次焼成を受けていて、外面は寿字文が描かれている。この他、瀬戸・美濃焼天目碗等が出土し、17世紀中頃の遺構と考えられる。

SK49（第90図、図版54・55・56）

調査区の北西部に位置する。東側の一部ではSK42を切っている。楕円形を呈し、東西1.56m、南北1.2m、深さ15cmである。底面は平坦で、外傾しながら立ち上がる。埋土は黒褐色砂質土層で、3～4cm大の礫を多く含み、陶磁器も多く含む。

出土遺物の量は多い。焙烙（34・35）は底部外型成形の難波氏分類のG類に属する。34は把手が付いている。伊賀・信楽焼土瓶蓋（37）と土瓶（38）でセットである。堺・明石焼播鉢（36）は、外縁帯の張りが大きく、口縁部内面に凸帯が巡りクシ目の単位が9本である。肥前青磁染付筒形碗（42）、伊賀・信楽焼丸碗（39）、他に肥前白磁染付広東碗等が出土し、19世紀前半の遺構と考えられる。

第2遺構面

第2遺構面で検出した遺構は、溝跡2条、土坑43基、小穴82基、落ち込み状遺構3基である。多数の小穴を検出したが、その中で柱穴と考えられるものもあり、調査区の中央から東側に集中していて、柱穴の並び方等から掘立柱建物跡3棟の存在の可能性が考えられる。

掘立柱建物跡1（P52・P54・P80・P98・P99）

調査区の中央に位置する。柱穴は5基あると考えられる。東西2間（2.3m）以上、南北2間（1.8m）以上の規模の建物であると考えられる。柱間の距離はほぼ等間隔である。柱穴はほぼ円形を呈し、径30cm前後を測る。各柱穴の底面のレベルがP54を除いてほぼ同じである。埋土はオリブ褐色粘土層であり、P80とP98には5～15cm大の石が根石として残っている。

掘立柱建物跡2（P82・P75・P89・P83・P27）

調査区の南東側に位置する。柱穴は5基考えられる。東西2間（4.2m）以上、南北2間（4.4m）以上の規模の建物であると考えられる。東西の柱穴間の距離は、P89とP83の間は2.2m、P83とP27の間は2mである。南北の柱穴間の距離は、P82とP75の間は1.8m、P75とP89の間は2.6mでそれぞれ等間隔ではない。柱穴はほぼ円形を呈し、径30cm前後を測る。各柱穴の底面のレベルは、P27を除いてほぼ一定である。埋土は暗褐色粘土層で、P88（南東隅のP89の南側）は掘立柱建物跡2の柱穴の埋土（暗褐色粘土層）と同じであり、同時期の遺構と考えられる。P88からは瓦器碗が出土したが、細片であるため時期はわからない。

掘立柱建物跡3（P90・P79・P91・P42・P103）

調査区の東側に位置する。柱穴は南北に一行、5基が確認されている。南北4間（5.5m）あるいはそれ以上の規模の建物であると考えられる。各柱間の距離は南側のP42とP103の間は1.3mで、それ以外は1.4mで等間隔である。柱穴はほぼ円形を呈し、径30～40cm前後を測る。柱穴の底面のレベルはほ

ば一定である。埋土は暗褐色粘土層である。

このように3棟の掘立柱建物跡が考えられる。掘立柱建物跡2・3は同じ方向に建てられていて、柱穴の埋土が同じであることから、同じ時期であると考えられる。また、掘立柱建物跡1は若干方向が違う方向であることから、掘立柱建物跡2・3とは時期差があると考えられる。

SD4（第90図、図版56）

調査区の東側に位置し、南北方向の溝である。北側をSX2（落ち込み状遺構2）に切られていて、南側を第1遺構面のSK9に切られている。幅50cm、検出長1.7m、深さ8～13cmである。底面は平坦で、立ち上がりは逆台形に広がる。埋土は褐色粘質土層で少量の炭を含む。

出土遺物は口縁部が大きく開く土師質埴の口縁部片（43）、口径が小さい瓦質土器羽釜（44・45）等がある。44・45は、口縁部が直立し、肩部に幅の狭い鏝を巡らすタイプで撰津型と考えられる（註7）。

SK75（第91図、図版54・55）

調査区の北側の中央部に位置する。南側をコンクリートの構築物に切られている。南北に長い長円形を呈し、検出長70cm、幅55cm、深さ15～25cmである。底面は東側が浅く、西側が深くなっていて、傾斜している。埋土は3～10cmの礫を含む褐色粘質土層である。瓦器椀（46・47）は和泉型である。46は内面に連続圏線状のミガキが施されている。47は内外面とも磨耗が著しく、低く小さい断面三角形の高台が貼り付けてある。瓦器椀の、尾上実氏の編年（註8）のⅣ-1期に相当する。瓦質土器三足釜（48）は、口縁部が大きく内傾して、そのすぐ下に短い鏝が巡る。出土遺物より13世紀中頃の遺構と考えられる。

SX3（落ち込み状遺構SK73）（第91図、図版56）

調査区の中央から東側一帯に広がった浅く大きな落ち込み状遺構である。不整形を呈し、北側を北壁に、東側をSX1・SX2（落ち込み状遺構1・2）に切られている。東西検出長が8.5m、南北の検出長が11.5m、深さ15cm程度である。埋土は粘性・しまりの強い褐色粘土層で、瓦器椀や土師皿等が少量出土した。

瓦器椀（52・53）は和泉型で、低く小さい断面三角形の高台が貼り付けてある。52は摩滅が著しい。内面に連続圏線状のミガキと、見込みに平行線状のミガキを施してある。53は内面に圏線状のミガキと、見込みに平行状のミガキを施してある。出土遺物より13世紀代中頃の遺構と考えられる。

SK79（第91図、図版54・55）

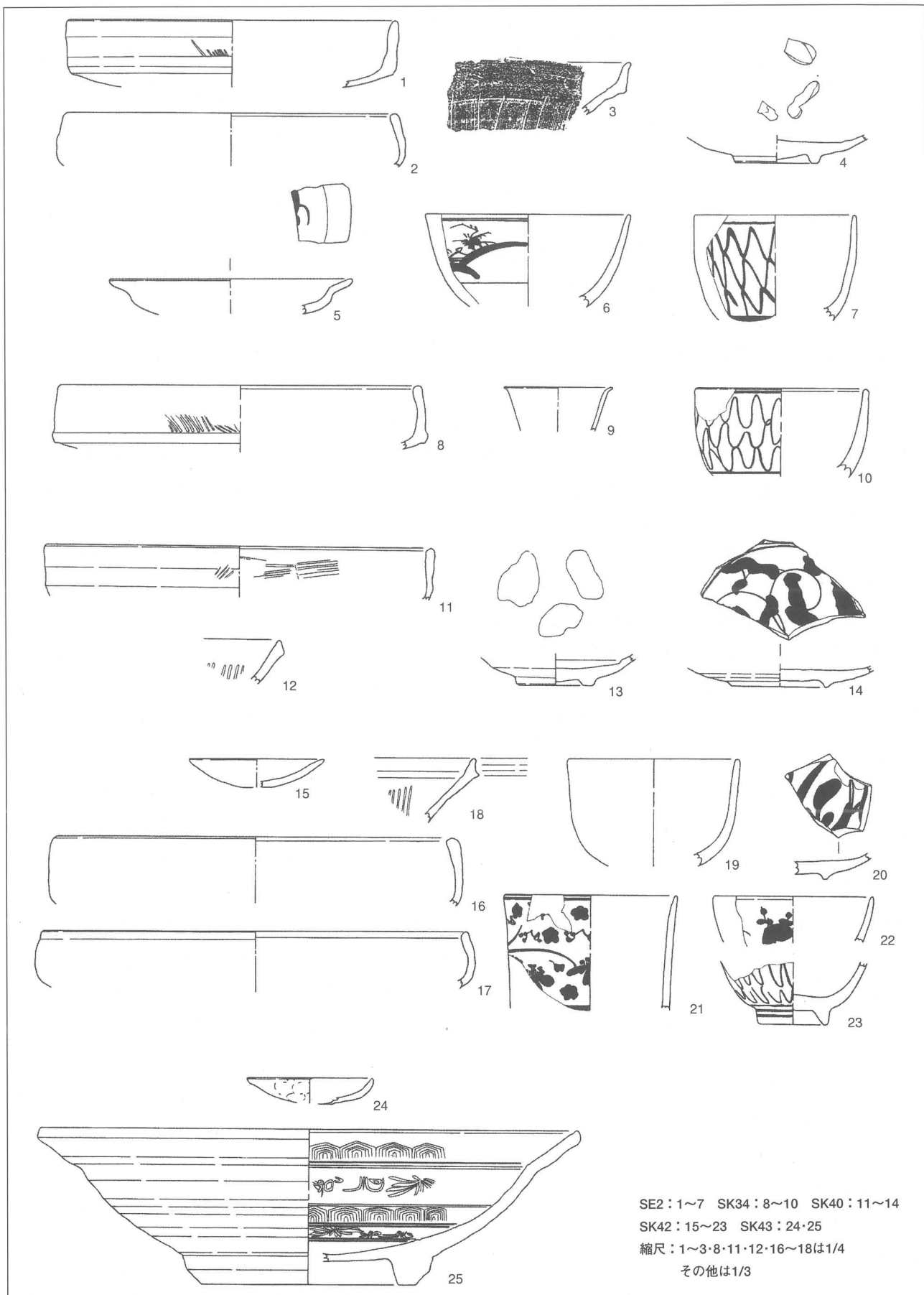
調査区の西側に位置する。平面は不整形をしていて、幅は北側が広く4.77m、南側がやや狭く3.6m、深さは最深部で42cmである。底面は平坦で、西側は緩やかに立ち上がる。東側は緩やかに立ち上がり、一旦平坦面を作ってからまた立ち上がる。面が東西2～3m程度で、傾斜角度約10度で緩やかに立ち上がる。埋土は、下層は黒褐色粘質土層が15～20cm堆積し、上層は暗褐色砂質土層が20～40cm堆積している。下層から弥生土器が数点出土した。

出土遺物は少量の弥生土器、高杯の底部（49）、甕の底部（50・51）等で、弥生土器の第Ⅴ様式に相当し、弥生時代後期と考えられる。

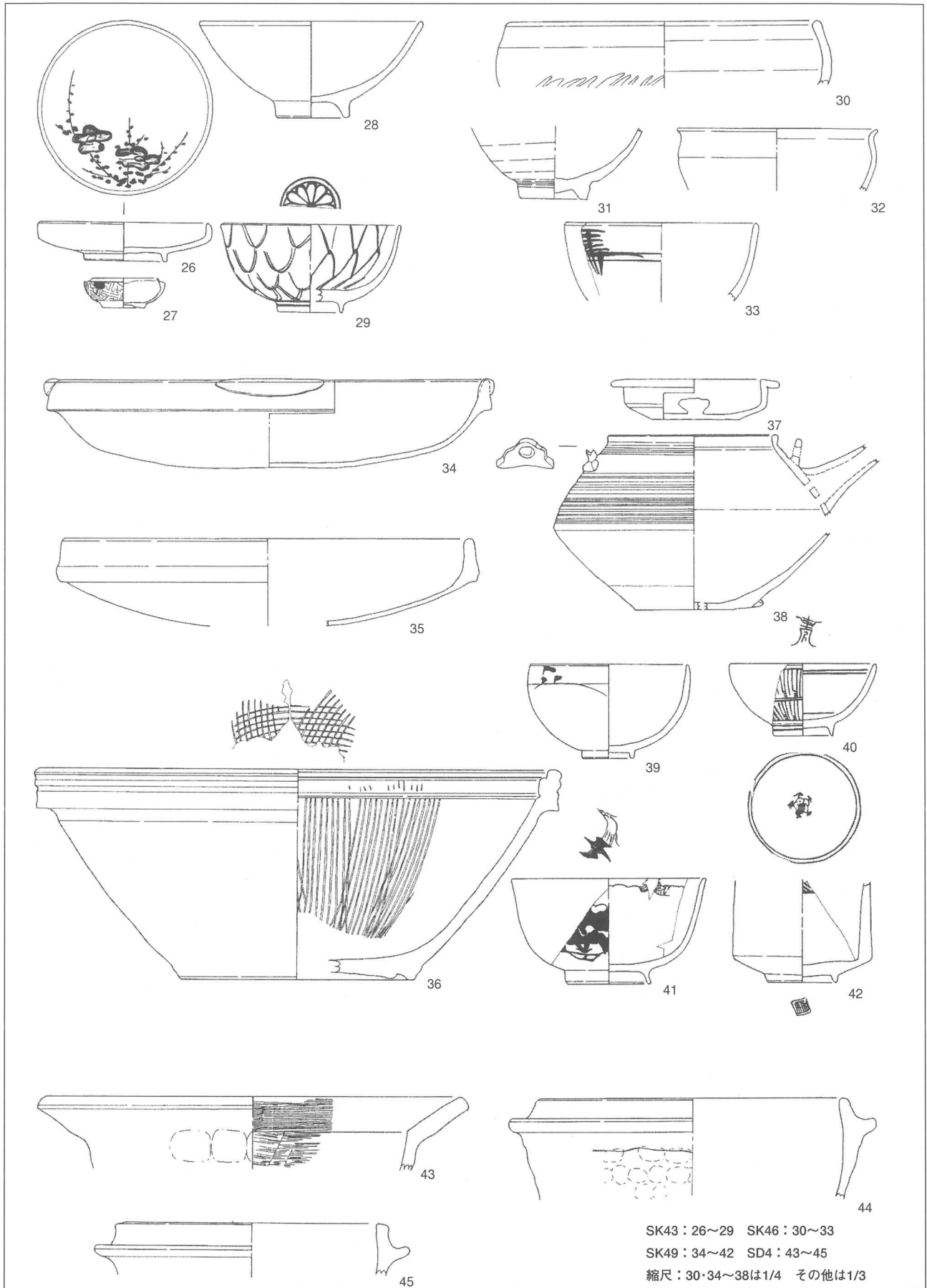
3. まとめ

今回の調査で発見された遺構の時期は、弥生時代後期、中世、江戸時代の3時代にわたっている。

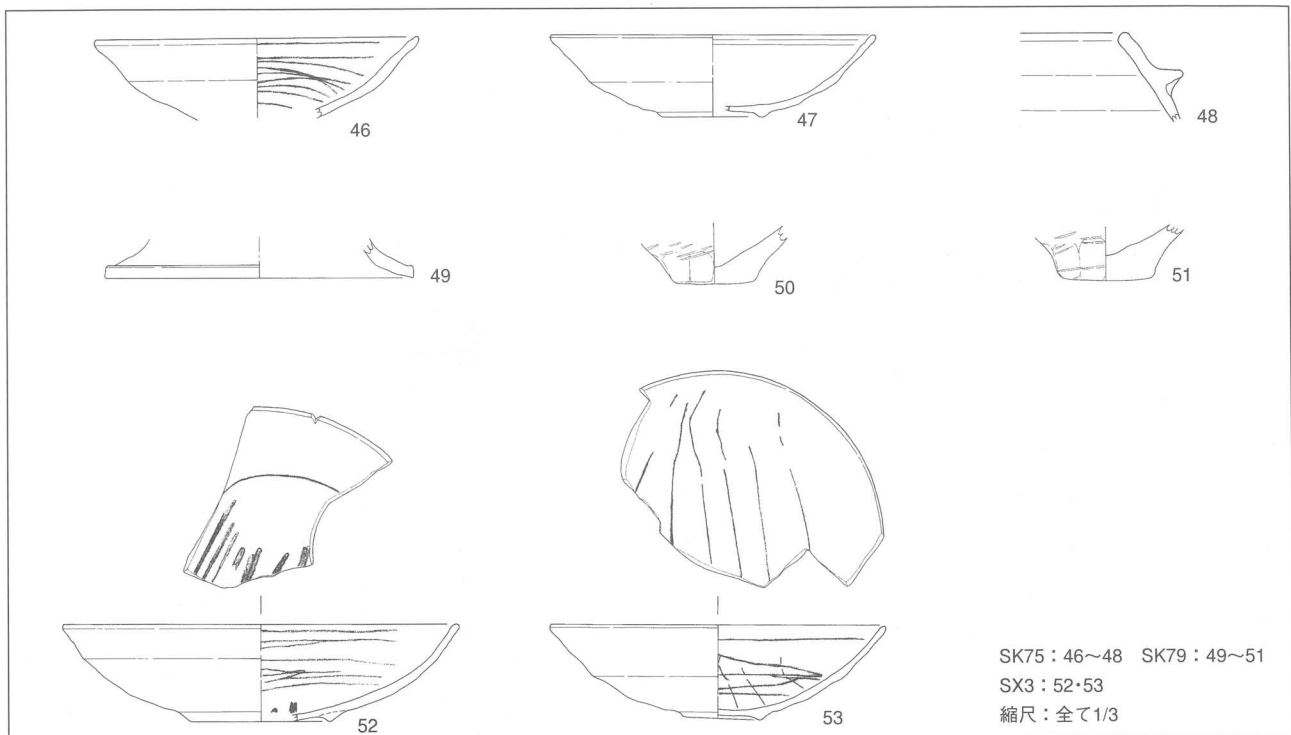
最も古い時代の弥生時代後期の遺構（SK79）から高杯や甕の底部が出土し、これは弥生土器の第Ⅴ様式に相当する。有岡城跡のこれまでの調査で、弥生時代の遺構が発見されたところは、当地点西側の南北道路を挟んだ第65次調査・第219次調査、第65次調査から南へ約200mの地点の第66次調査地点



第89図 第206次調査出土遺物実測図(1)



第90図 第206次調査出土遺物実測図(2)



第91図 第206次調査出土遺物実測図（3）

がある。いずれも弥生時代中期の遺物が出土している。このことから当地点を含む弥生時代の遺構が発見されたところは有岡城跡の北東側、伊丹台地の東縁部にあたり、この周辺で弥生時代の遺跡が広がっていることがわかる。しかし住居跡等の性格のわかる遺構は発見されていないので、遺跡の性格は明らかではない。

中世の遺構は第2遺構面で検出した。多数の柱穴があり、掘立柱建物跡3棟の存在が考えられる。また、溝、土坑、落ち込み状遺構等が検出され、その中から、和泉型の瓦器椀、瓦質羽釜、土師質埴等が出土し、これらは13世紀代の遺物である。これまでの調査では、当地点より南東へ約250m、台地の縁辺部の第109次調査では、道状遺構より13世紀中頃の瓦器椀、石鍋等が出土した。当地点から南へ約70mの萬徳寺境内の第165次調査（註9）で13世紀中頃の掘立柱建物跡等が検出された。また、主郭部やそのすぐ西側の第203・217・231次の調査でもこの頃の遺物が出土している。このことより中世の遺構は有岡城跡の主郭部から惣構えの北東部に広がっていることがいえる。

第1遺構面の江戸時代の遺構では、焼土処理土坑が3基（SK28・SK29・SK42）検出された。これらの遺構からは17世紀後半の遺物が出土している。この中には二次焼成を受けているものもある。焼土処理土坑（第173次調査でも記したが）は、火災の後、残滓を処理するために掘られた土坑である。伊丹郷町では記録（註10）によると元禄年間に3度大火があった。そのうち火事の方向性からみると、元禄15年（1704）の中少路村より出火し北之口町まで439軒焼けるという火事に該当するのではないかと考えられる。これは遺構の年代とも一致する。また、萬徳寺境内の第165次調査（註11）でも焼土処理土坑は発見されており、火事の広がりや時期等をみていく上で重要な遺構と考えられる。（細川）

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SE2	第89図-1	焙烙	素焼き	口 径 (24.8) cm	底部外型成形 外面体部に左斜め上がりの掻き上げの後ヨコナデ 内面口縁部から体部ヨコナデ	5% 外面煤付着
	第89図-2 図版55-2	焙烙	素焼き	口 径 (25.0) cm	内面口縁部から体部ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ	15% 外面煤付着
	第89図-3	擂鉢	陶器		クシ目一単位8本	丹波 3% 17c後半
	第89図-4 図版55-4	皿	陶器	高台径 (2.3) cm	灰釉を全釉 見込みに砂目有り 高台量付に砂目有り	唐津 30% 17c前半
	第89図-5 図版55-5	染付皿	白磁	口 径 (13.8) cm	内面見込み文様有り	肥前 5%
	第89図-6	染付碗	白磁	口 径 (11.4) cm	外面山水文	肥前 15% 17c中頃
	第89図-7	染付碗	白磁	口 径 (9.0) cm	外面網目文	肥前 15% 17c中頃
SK34	第89図-8	焙烙	素焼き	口 径 (27.0) cm	底部外型成形 外面左斜め上がりの掻き上げ痕有り 口縁部周辺、内面ヨコナデ 腰部へラケズリを施す	5% 胎土に金雲母含む
	第89図-9	小杯	白磁	口 径 (6.0) cm	口縁部端反り	肥前 10% 17c中頃
	第89図-10	染付碗	白磁	口 径 (9.6) cm	外面網目文	肥前 30% 17c中頃
SK40	第89図-11	焙烙	素焼き	口 径 (29.0) cm	外面右上がりのタタキの後ヨコナデ 内面ヨコナデ	5% 内外面煤付着
	第89図-12 図版55-12	擂鉢	陶器		クシ目	丹波 5%以下 17c前半
	第89図-13 図版55-13	皿	陶器	高台径 4.2 cm	灰釉を全釉 見込みに砂目3ヶ所有り 高台周辺に砂目3ヶ所有り	唐津 30% 17c前半
	第89図-14 図版55-14	染付皿	白磁	高台径 (5.4) cm	見込み唐草文と二重圏線有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 15% 17c中頃
SK42	第89図-15	土師皿	素焼き	口 径 (7.6) cm	手捏ね成形 外面指頭圧調整の後ナデ 内面ナデ	在地 10%
	第89図-16	焙烙	素焼き	口 径 (26.0) cm	内面口縁部から体部ヨコナデ 外面ナデ	5% 外面煤付着
	第89図-17	焙烙	素焼き	口 径 (31.8) cm	内面口縁部から体部ヨコナデ 外面口縁部ヨコナデ	10% 外面煤付着
	第89図-18	擂鉢	陶器		クシ目単位不明	丹波 5%以下 17c中頃
	第89図-19	碗	陶器	口 径 (9.6) cm	呉器手	肥前 20% 二次焼成受ける
	第89図-20	染付皿	白磁		見込み花文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 5% 17c中頃

表42 第206次調査遺物観察表(1)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK42	第89図-21	染付蓋物	白磁	口径 (9.6) cm	外面梅花文 内面口縁部露胎	肥前 10%
	第89図-22	染付碗	白磁	口径 (8.9) cm	外面草花文	肥前 5% 二次焼成受ける
	第89図-23	染付碗	白磁	高台径 (3.7) cm	外面網目文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 25% 17c後半
SK43	第89図-24	土師皿	素焼き	口径 7.0 cm 器高 1.4 cm	手握ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 40% 口縁部煤付着
	第89図-25 図版55-25	鉢	陶器	口径 (30.0) cm 器高 12.0 cm 高台径 8.8 cm	三島手 外面体部下半に鉄釉 体部中位から内面にかけて長石釉を施す 見込み環状に砂目有り 高台露胎	肥前 25% 17c末～18c後
	第90図-26	皿	陶器	口径 9.5 cm 器高 2.2 cm 高台径 4.6 cm	内面梅樹文 白色釉と鉄釉で描く 高台周辺露胎 高台内浅い縁刻有り	伊賀・信楽 98% 内外面貫入 18c前半
	第90図-27 図版55-27	合子(身)	白磁	口径 3.6 cm 器高 1.7 cm 高台径 2.4 cm	外面型押し成形による陽刻文と呉須の丸文 口縁部露胎 底部周辺露胎	肥前 75%
	第90図-28 図版55-28	碗	陶器	口径 12.5 cm 器高 5.5 cm 高台径 3.9 cm	灰釉 高台量付露胎	肥前 90% 内外面貫入
	第90図-29	染付碗	白磁	口径 (10.0) cm 器高 5.0 cm 高台径 3.6 cm	外面二重網目文 内面網目文 見込み菊花文と二重圏線有り 高台量付露胎	肥前 35% 18c前半
	SK46	第90図-30	焙烙	素焼き	口径 (23.2) cm	外面腰部に右上がりの平行タタキ有り 内面口縁部から体部ヨコナデ
第90図-31		碗	陶器	高台径 (3.3) cm	灰釉 底部周辺露胎	唐津 30% 17c前半
第90図-32		碗	陶器	口径 (11.2) cm	口縁部端反り 灰釉	5% 二次焼成受ける
第90図-33		染付碗	白磁	口径 (10.7) cm	外面寿字文	肥前 5% 内外面に粗い貫入 17c中頃
SK49	第90図-34 図版55-34	焙烙	素焼き	口径 (33.2) cm 器高 6.6 cm	底部外型成形 内面ヨコナデ 外面口縁部から体部ヨコナデ	40% 内外面底部煤付着
	第90図-35 図版55-35	焙烙	素焼き	口径 (31.0) cm	底部外型成形 内面ヨコナデ 外面口縁部から体部ヨコナデ	35% 内外面底部煤付着
	第90図-36	擂鉢	陶器	口径 (39.2) cm 器高 (15.9) cm 高台径 17.6 cm	クシ目一単位9本 見込み一単位9本 底部高台風に一部削る	堺 40% 18c中～後
	第90図-37 図版55-37	蓋	陶器	口径 12.8 cm 器高 3.0 cm つまみ径 6.6 cm	灰釉 外面露胎 つまみは菊花形	伊賀・信楽 85% 19c前半
	第90図-38 図版55-38	土瓶	陶器	口径 12.7 cm 器高 13.1 cm 高台径 8.9 cm	灰釉 口縁部周辺露胎 高台周辺露胎 底部に脚2ヶ所残存	伊賀・信楽 85% 19c前半
	第90図-39 図版56-39	碗	陶器	口径 8.9 cm 器高 5.4 cm 高台径 2.9 cm	外面鉄絵有り 高台周辺露胎	伊賀・信楽 80% 18c中頃
	第90図-40 図版56-40	染付碗	白磁	口径 8.2 cm 器高 4.1 cm 高台径 3.2 cm	外面暦文 内面口縁部二重圏線有り 見込み寿字文と圏線有り 高台量付露胎	肥前 60% 18c後半

表43 第206次調査遺物観察表(2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK49	第90図-41	染付碗	白磁	口径 (8.9) cm 器高 5.4 cm 高台径 2.9 cm	外面牡丹文と蝙蝠文か 内面口縁部に文様有り 見込み鷲文 高台置付露胎	肥前 40% 19c前半
	第90図-42	染付碗	青磁	高台径 (3.8) cm	筒形 外面体部青磁釉 内面口縁部四方禪文 見込み手描き五弁花と二重圈線 高台置付露胎 離れ砂付着 高台内銘有り	肥前 50% 18c後半
SD4	第90図-43 図版56-43	埴	土師質	口径 (23.4) cm	内面口縁部刷毛目 体部ヨコナデ	5%以下
	第90図-44 図版56-44	羽釜	瓦質	口径 (17.1) cm	外面ヨコナデ 内面磨耗が著しく調整不明	5%
	第90図-45 図版56-45	羽釜	瓦質	口径 (14.2) cm	外面ヨコナデ 内面磨耗が著しく調整不明	5%
SK75	第91図-46 図版56-46	椀	瓦器	口径 (13.0) cm	外面ヨコナデと指押さえ 内面連続圈線状ミガキ有り	和泉型 30% 13c第2四半期
	第91図-47 図版56-47	椀	瓦器	口径 (13.0) cm 器高 3.2 cm 高台径 4.0 cm	外面貼り付け高台 内面口縁部直下に沈線有り	和泉型 20% 内外面磨耗著しい 13c第2四半期
	第91図-48	三足羽釜	瓦質		外面ヨコナデとナデ 内面ヨコナデ	1%以下
SK79	第91図-49 図版56-49	高杯	土師器	底径 (12.4) cm	内外面磨耗のため調整は不明	1%
	第91図-50 図版56-50	甕	弥生土器	底径 3.1 cm	外面タタキ成形か	5% 弥生時代後期
	第91図-51 図版56-51	甕	弥生土器	底径 3.7 cm	外面タタキ成形か 内面ナデか	5% 弥生時代後期
SX3	第91図-52 図版56-52	椀	瓦器	口径 (16.0) cm 器高 3.9 cm 高台径 5.6 cm	外面高台貼り付け 内面ヨコナデ 平行線状ミガキ有り	和泉型 内外面少し磨耗している 25% 13c第1四半期
	第91図-53 図版56-53	椀	瓦器	口径 (13.4) cm 器高 3.8 cm 高台径 3.0 cm	外面指押さえの痕有り 貼り付け高台 内面連続圈線状ミガキと平行線状ミガキを施す	和泉型 40% 内外面少し磨耗している 13c第2四半期

表44 第206次調査遺物観察表(3)

註1 梶曲阜『有岡古統語 坤の巻』伊丹の伝説所収 伊丹市教育委員会 1993年

註2 八木哲浩編『伊丹古絵図集成』伊丹資料叢書6 伊丹市立博物館 1982年

註3 大手前女子学園有岡城跡調査委員会『有岡城跡・伊丹郷町I』1987年

註4 伊丹市教育委員会『伊丹市埋蔵文化財調査事概報Ⅳ 有岡城跡・伊丹郷町遺跡の調査』1995年

註5 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成7年度 年報』1996年

註6 難波洋三「徳川氏大坂城期出土の炮烙」『難波宮址の研究第九』(財)大阪市文化財協会 1992年

註7 菅原正明「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告第19集』

国立歴史民俗博物館 1989年

註8 尾上実「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古記念古文化論叢』1983年

註9 前掲註5

註10 古野将盈『有岡庄年代秘記』伊丹市史第4巻所収 伊丹市役所 1968年

註11 前掲註5

第14節 第207次調査

所在地 伊丹市中央2丁目442-1

調査面積 62㎡

調査期間 平成10年4月30日～5月30日

担当者 小長谷正治・中畔明日香

1. 遺跡の概要

本調査地点は、有岡城跡・伊丹郷町遺跡の北西に位置する。昆陽口通りに面し、本遺跡の最西端に当たる。有岡城期における当地の使用状況は定かではない。伊丹郷町期に入り、『寛文九年伊丹郷町絵図』では空白地である。しかし、『延宝五年伊丹郷町地味委細絵図』では町屋が描かれ、『元禄七年柳沢吉保領伊丹郷町絵図』では長屋、その後『天保十五年伊丹郷町絵図』では米屋町の屋敷地となっている。なお、享保期以降に描かれた『昆陽口村絵図』では戎町となっている。

平成9年度、本調査地西側において第194次調査（本報告書掲載分）が行われ、江戸時代中期以降の町屋跡が確認されている。

2. 調査概要

本調査は、店舗及び事務所建設に伴うもので、震災復旧・復興事業の適応を受け、国庫補助事業として実施したものである。

敷地内の建物建設予定範囲（74㎡）に62㎡の調査区を設定した。表土は重機により除去し、その後人力にて遺構検出・掘削を行った。地山面一面での調査である。地山面は現表土面より約-30cmと浅く、遺構の遺存状況は良いとはいえない。比較的厚みがある西側以外は攪乱を受け層序の識別が困難であったため、断面図の実測は西壁のみ行った。

3. 調査成果

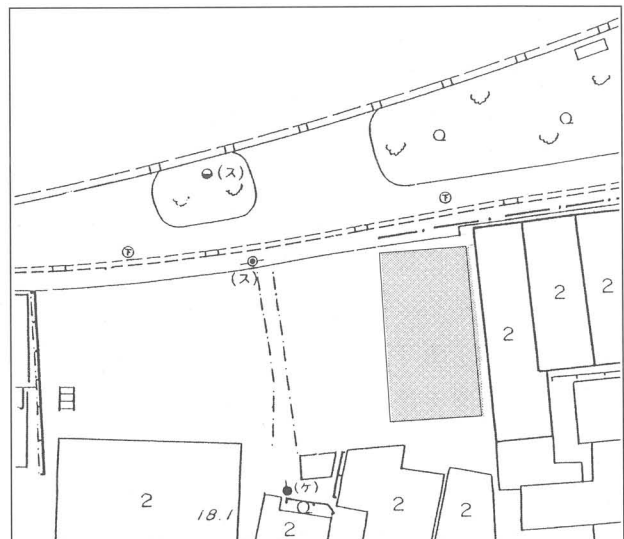
検出した遺構は、土坑54基、柱穴32基、水琴窟2基、溝2条、防空壕1基を検出した。以下、主な遺構について説明することにする。

SD1（第96図）

調査区の西壁際中央に位置し、調査区外に延びる。現全長3.4mを測る。深さは20cmとごく浅



第92図 第207次調査調査区位置図 (1/2,500)



第93図 第207次調査調査区設定図 (1/500)

い。中央に板状をした黄色の砂漆喰が残存しているが、使用方法は不明である。北から南にかけて傾斜している。

埋土から、焙烙（1・2）、肥前陶器皿（3）、肥前染付碗（4）・青磁香炉（5）などが出土している。

埋甕

埋甕1（SK1）（第96図、図版58・59）

調査区の中央西よりに位置する。掘り方の平面は径50cmの円形を呈す。深さは30cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底部は径45cmを測り、平坦である。埋土中に木桶の板木が含まれていた。

埋土から、土師皿（6・7・8）、堺・明石焼播鉢（9）、肥前皿（10・11）・蓋（12）・小碗（13・16）・染付碗（14）・小皿（15）、瓦などが出土している。

埋桶2（SK33）（第96図、図版58・59）

調査区の南西に位置する。掘り方の平面は径80cmのほぼ円形を呈す。深さは40cmを測る。壁面は外傾して立ちあがる。平坦な底部には、径55cmの木桶の底板が遺存している。便槽の可能性はある。

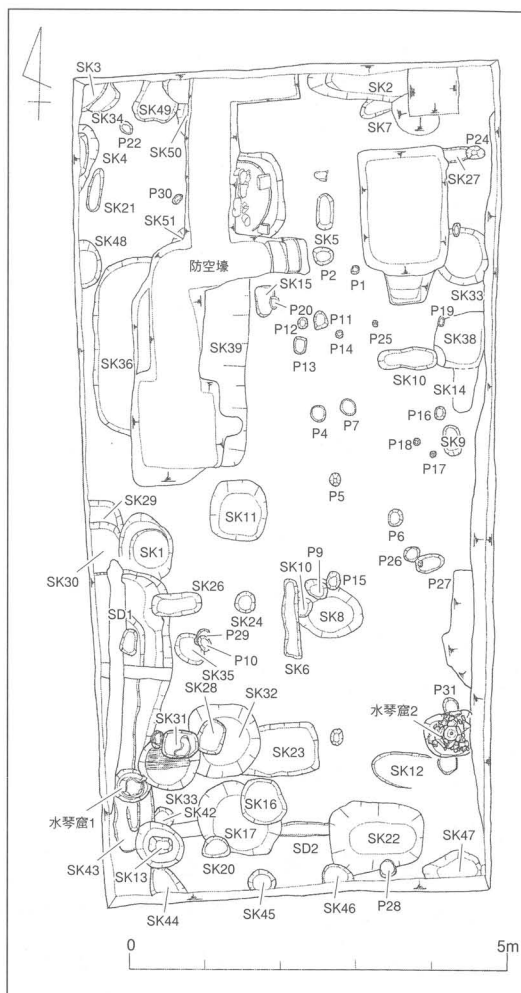
埋土から、伊賀・信楽焼カンテラ（17）、肥前染付碗（19）・色絵香炉（18）などが出土している。

土坑

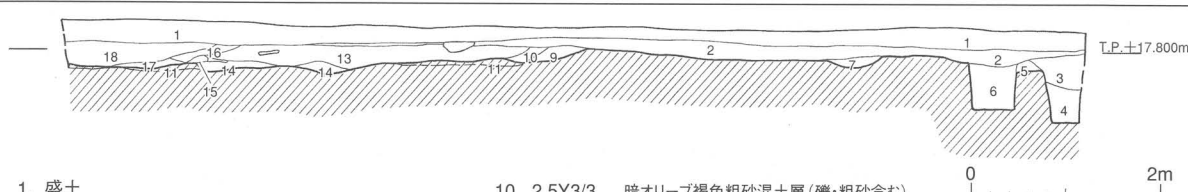
SK2（第97図、図版59）

調査区の北壁際に位置し、土坑北側は調査区外に広がり、東側は攪乱されている。平面は現全長1.4m、深さ40cmを測る。

埋土から、土師皿（29）、信楽焼小皿（30）、肥前染付蓋（31・32）・染付碗（33・34）、丹波焼甕などが出土している。



第94図 第207次調査全体図（1/100）



- | | |
|---------------------------------|---------------------------------------|
| 1. 盛土 | 10. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粗砂混土層（礫・粗砂含む） |
| 2. 2.5Y6/3 にぶい黄色土層（覆土） | 11. 7.5YR4/4 褐色土層（地山） |
| 3. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土層（丸礫含む） | 12. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土層（礫・瓦片を多く含む） |
| 4. 10YR4/6 褐色砂混粘質土層（地山土を多く含む） | 13. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土層 |
| 5. 2.5Y4/2 暗灰黄色土層（地山土をブロック状に含む） | 14. 2.5Y4/1 黄灰色土層（砂混） |
| 6. 10YR4/2 灰黄褐色土層（地山ブロック・丸礫含む） | 15. 2.5Y4/3 オリーブ褐色土層（粗砂・礫・13の粘土を多く含む） |
| 7. 2.5Y5/2 暗灰黄色土層（小礫含む） | 16. 2.5Y5/3 黄褐色土層（13の粘土を多く含む） |
| 8. 炭層 | 17. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色土層（炭・礫・粗砂含む） |
| 9. 7.5YR4/6 褐色土層 | 18. 2.5Y4/2 暗灰黄色土層（炭・礫・粗砂含む） |

第95図 第207次調査土層断面図（西壁）（1/80）

SK 8

調査区の中央南寄りに位置する。平面は径65cmのほぼ円形を呈す。深さは40cmを測る。底部はU字状で、壁面はゆるやかに立ち上がる。出土遺物はなかった。

SK11

調査区のほぼ中央に位置する。平面は一辺75cmの隅丸方形を呈す。深さは40cmを測る。壁面はゆるやかに外傾して立ち上がる。底部は平坦である。

埋土から、肥前磁器碗・小杯、伊賀・信楽焼土瓶、播鉢などが出土しているが、細片のため図示できなかった。

SK13

調査区の南西隅に位置する。平面は径55cmのほぼ円形を呈す。深さは33cmを測る。底面は凸状で、壁面はやや外傾して立ち上がる。

埋土から、丹波焼甕、瀬戸・美濃焼火鉢・磁器碗、肥前磁器油壺が出土しているが、細片のため図示できなかった。

SK17 (図版58)

調査区の南西に位置する。平面は径1mのほぼ円形を呈す。深さは40cmを測る。壁面はやや外傾して立ち上がる。底面は平坦で、径70cmの円形である。埋桶の可能性はある。

埋土から、土師皿、肥前白磁碗・皿・染付碗、伊賀・信楽焼土瓶などが出土しているが、細片のため図示できなかった。

SK23 (第97図、図版58・59)

調査区の中央南寄りに位置し、西側をSK32に切られている。平面は南北70cm、東西1.2mのほぼ長方形を呈す。深さは30cmを測る。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土から、土師皿(35)・焙烙(36)、丹波焼播鉢(37)、播鉢(38)、唐津焼蓋(39)・皿(40・41)、肥前紅皿(42)・染付碗(43)・白磁碗(44)などが出土している。

SK32 (図版58)

調査区の南西に位置する。平面は径1mのほぼ円形を呈す。深さは30cmを測る。壁面はやや外傾して立ち上がる。底部は平坦で、径60cmの円形である。埋桶の可能性はある。

埋土から、土師質焙烙、丹波焼甕、肥前染付碗・青磁染付筒形碗、伊賀・信楽焼土瓶などが出土しているが、細片のため図示できなかった。

水琴窟

水琴窟 1 (第96図、図版58・59)

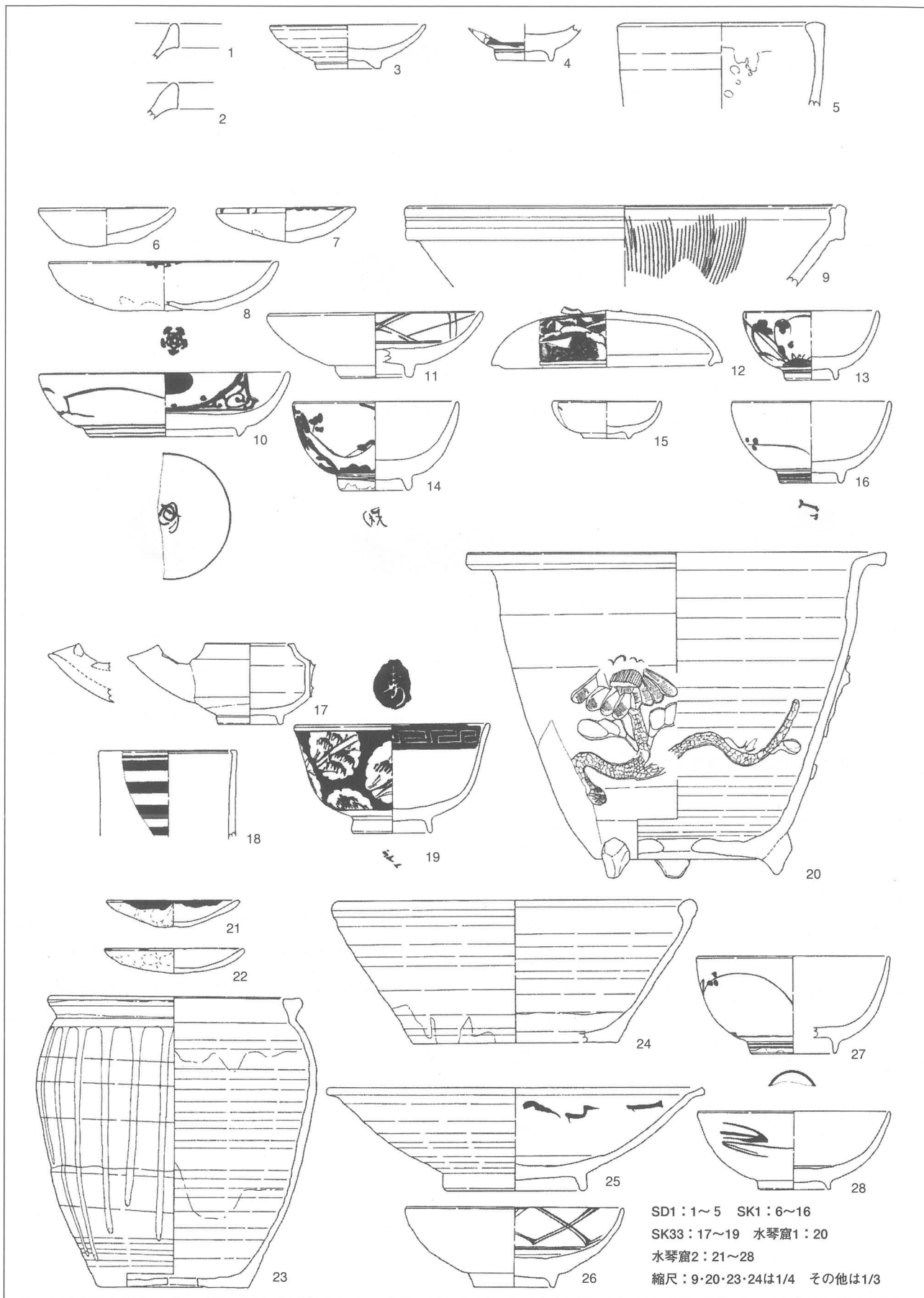
調査区の南西壁際に位置し、西側をSD 1に、東側をSK33に切られている。掘り方の平面は径65cmのほぼ円形を呈す。深さは40cmを測る。断面はゆるやかに外傾し、平坦な底面に丹波焼鉢(20)を倒立して設置している。

埋土から、平瓦、瀬戸・美濃焼陶器碗などが出土している。

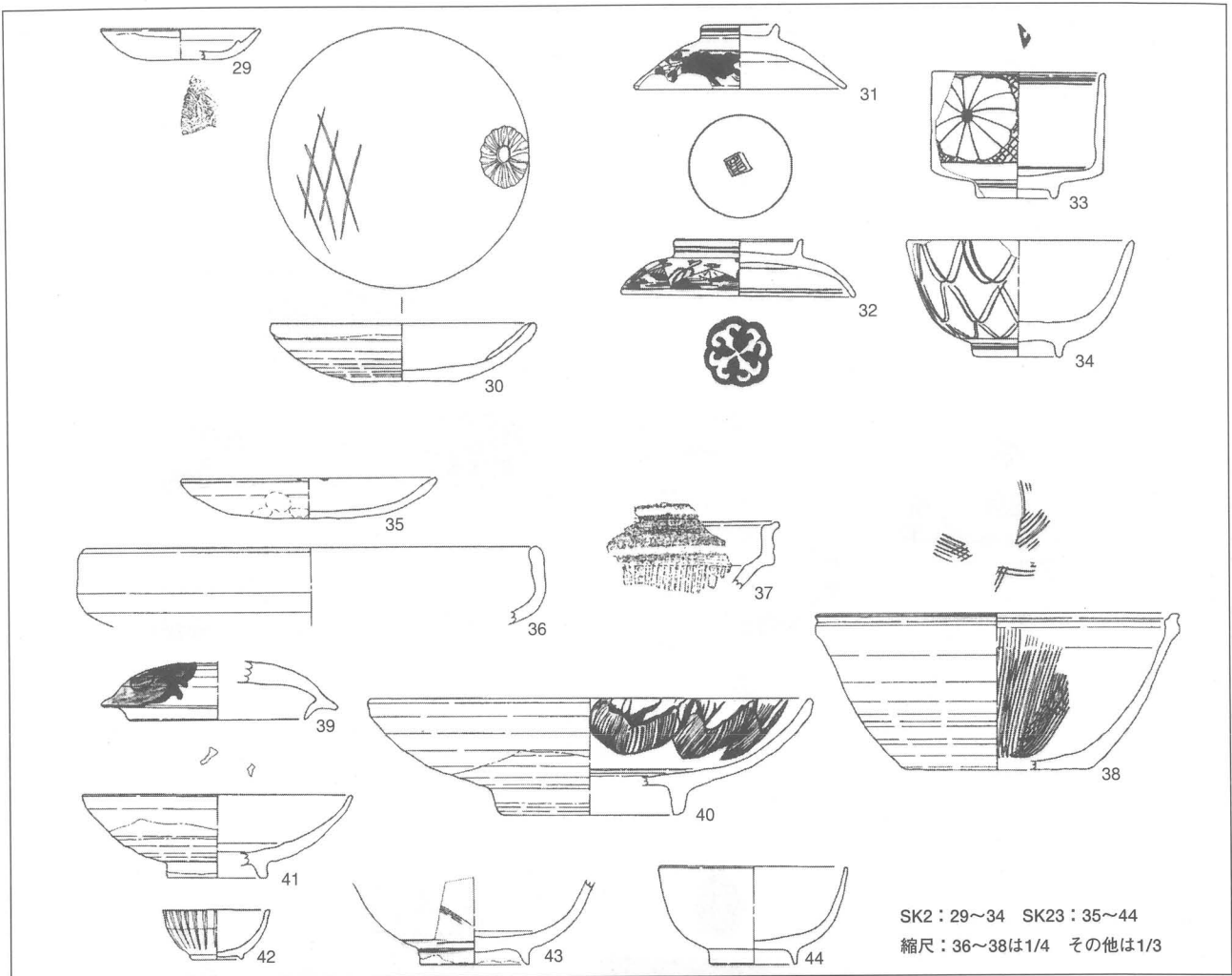
水琴窟 2 (第96図、図版58・59)

調査区の南寄り東壁際に位置する。掘り方の平面は一辺65cmの隅丸方形を呈し、深さは60cmを測る。断面はU字状で、底面に礫を敷き、その上に丹波焼甕(23)を倒立して設置している。掘り方内には甕を取り囲むように20cm大の礫が配されていた。また土坑上面(甕底上)には黄色の砂漆喰が施されていた痕跡が残る。使用されていた丹波焼甕は底部に径4cmの穿孔がある。

掘り方埋土から、土師皿(21・22)、丹波焼鉢(24)、瀬戸・美濃焼染付鉢(25)、肥前染付皿



第96図 第207次調査出土遺物実測図(1)



第97図 第207次調査出土遺物実測図(2)

(26) ・碗(27・28)などが出土している。

4. まとめ

今回の調査では、水琴窟や埋桶などの遺構が検出され、18世紀中頃～19世紀前半にかけての遺物が出土した。今回の調査において、建物の存在は確認することができなかったが、これらの遺物の出土はその時期からの町屋の存在を考える材料となった。なお、有岡城期や江戸時代初期に遡る遺構・遺物は確認されなかった。この結果は、第194次調査地点とほぼ同様の状況を表しており、今回の調査においても、18世紀後半にこの一帯が伊丹郷町の中ではやや遅れて開発されたことが考えられる。この調査成果は、現存する絵図に描かれた17世紀代の町屋の存在を否定することとなるため、これから先に行われる近隣の調査をもって改めて検証していく必要がある。(中畔)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SD1	第96図-1	焙烙	素焼き		内外面口縁部から体部ヨコナデ	1% 底部煤付着
	第96図-2	焙烙	素焼き		内外面口縁部から体部ヨコナデ	1% 底部煤付着
	第96図-3	皿	陶器	口径 (8.7) cm 器高 2.5 cm 高台径 3.6 cm	灰釉 見込み蛇の目釉剥ぎ 高台周辺露胎	肥前 40% 二次焼成受ける 口縁煤付着 17c後半
	第96図-4	染付碗	白磁	高台径 3.2 cm	外面草花文 高台量付露胎	肥前 10%
	第96図-5	香炉	青磁	口径 (10.8) cm	内面口縁より下露胎	肥前 50%
SK1	第96図-6	土師皿	素焼き	口径 (7.6) cm 器高 2.2 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 80%
	第96図-7 図版59-7	土師皿	素焼き	口径 7.7 cm 器高 1.9 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 98% 口縁煤付着
	第96図-8	土師皿	素焼き	口径 (12.8) cm 器高 2.8 cm	手捏ね成形 内外面口縁部ヨコナデ 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 35% 口縁煤付着
	第96図-9	播鉢	陶器	口径 (32.3) cm	クシ目一単位11本	堺・明石 5% 18c中～後
	第96図-10 図版59-10	染付皿	白磁	口径 (14.0) cm 器高 3.6 cm 高台径 8.4 cm	外面唐草文 内面花文の間に唐草文を施す 見込みコンニャク印判五弁花と二重圏線 高台内渦福か 圏線有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 50% 17c末～18c前
	第96図-11	染付皿	白磁	口径 11.9 cm 器高 3.7 cm 高台径 4.0 cm	内面二重斜格子文 見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ塗布 高台量付露胎	肥前 95% 18c後半
	第96図-12	染付蓋物蓋	白磁	口径 13.0 cm 器高 (3.2) cm	外面4ヶ所に区分された中に牡丹文と梅樹文を描く 口縁部露胎 つまみは貼り付け	肥前 40% 18c後半 つまみ欠損
	第96図-13	染付小碗	白磁	口径 (7.4) cm 器高 3.9 cm 高台径 2.9 cm	外面草花文 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 40% 18c前半
	第96図-14 図版59-14	染付碗	白磁	口径 9.2 cm 器高 5.0 cm 高台径 3.8 cm	外面雪輪草花文 高台内銘有り 量付露胎	肥前 90% 18c前半
	第96図-15 図版59-15	染付小皿	白磁	口径 6.0 cm 器高 2.1 cm 高台径 2.6 cm	外面笹文 高台量付露胎	肥前 45% 外面二次焼成受ける 18c前半
	第96図-16	染付小碗	白磁	口径 (8.8) cm 器高 4.7 cm 高台径 3.4 cm	外面草花文 高台内銘有り 高台量付露胎、離れ砂付着	肥前 30% 18c前半
SK33	第96図-17 図版59-17	カンテラ	陶器	口径 5.0 cm 器高 4.6 cm 高台径 3.6 cm	灰釉 口縁端部露胎 外面下半部露胎	伊賀・信楽 90% 注口に煤付着
	第96図-18	色絵香炉	白磁	口径 (7.7) cm	口縁口錆 赤絵で横縞を施す 外面口縁部に染付の圏線有り	肥前 20%
	第96図-19 図版59-19	染付碗	白磁	口径 10.8 cm 器高 6.2 cm 高台径 4.4 cm	口縁若干端反り 外面雪輪の中に竹文 見込みに墨弾きで寿の銘有り 内面口縁部墨弾きで雷文 高台量付露胎	肥前 80% 焼き継ぎ痕有り 高台内朱書き有り 19c前半
水琴窟1	第96図-20 図版59-20	鉢	陶器	口径 31.4 cm 器高 24.4 cm 高台径 12.5 cm	外面に粘土紐貼り付けによる蔓葉文 外面底部と内面底部に砂目跡有り 底部に脚2ヶ所残存 底部中心に孔有り	丹波 80% 19c前～後

表45 第207次調査遺物観察表(1)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
水琴窟2	第96図-21	土師皿	素焼き	口径 7.4 cm 器高 1.5 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 50% 口縁煤付着
	第96図-22	土師皿	素焼き	口径 7.5 cm 器高 1.4 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 90% 口縁煤付着
	第96図-23 図版59-23	甕	陶器	口径 18.4 cm 器高 21.9 cm 底径 11.5 cm	外面口縁より下に塗り土を施し、上から鉄釉を流し掛ける 口縁から内面にかけて灰釉 底部中心に孔有り	丹波 100%
	第96図-24	鉢	陶器	口径 (26.5) cm 器高 10.7 cm 底径 15.6 cm	塗り土	丹波 40%
	第96図-25	染付鉢	陶器	口径 20.9 cm 器高 5.8 cm 高台径 7.4 cm	口縁折れ縁 灰釉 見込みに蛇の目釉剥ぎ 高台露胎 内面文様有り	美濃 40% 18c中頃
	第96図-26	染付皿	白磁	口径 12.1 cm 器高 4.5 cm 高台径 4.5 cm	内面二重斜格子文 見込み二重圏線、蛇の目釉剥ぎ アルミナ塗布 離れ砂付着 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 70% 18c後半
	第96図-27	染付碗	白磁	口径 (10.7) cm 器高 5.5 cm 高台径 4.6 cm	内面草花文 高台内圏線有り 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 40% 18c前半
	第96図-28 図版59-28	染付碗	白磁	口径 (10.7) cm 器高 4.4 cm 高台径 4.1 cm	外面染付有り 見込み蛇の目釉剥ぎ 薄いアルミナ砂塗付 高台量付露胎 離れ砂付着	肥前 50% 18c
SK2	第97図-29	受皿	軟質施釉陶器	口径 (6.8) cm 器高 1.4 cm	柿釉 ロク口成形 底部糸切り底 外面口縁より下露胎	20% 口縁煤付着
	第97図-30	皿	陶器	口径 11.3 cm 器高 2.5 cm 底径 4.5 cm	灰釉 内面に菊花状の貼り付け クシ目を斜格子状に施す 外面口縁より下露胎	伊賀・信楽 80% 19c前半
	第97図-31	染付碗蓋	白磁	口径 (8.9) cm 器高 2.8 cm つまみ径 (3.1) cm	外面牡丹文 つまみ量付露胎	肥前 30% 18c後半
	第97図-32 図版59-32	染付碗蓋	白磁	口径 (10.0) cm 器高 2.5 cm つまみ径 5.4 cm	外面口縁部に扇面文が連なる 見込み花文と圏線有り つまみ内銘と圏線有り 量付露胎	肥前 60% 18c後半
	第97図-33	染付碗	白磁	口径 (7.3) cm 器高 5.5 cm 高台径 3.4 cm	筒形 外面菊花文 見込みコンニャク印判五弁花と二重圏線有り 高台量付釉剥ぎ アルミナ塗布 離れ砂付着	肥前 30% 18c後半
	第97図-34	染付碗	白磁	口径 (9.6) cm 器高 5.0 cm 高台径 (3.4) cm	外面二重網目文 高台量付露胎	肥前 40% 18c後半
SK23	第97図-35	土師皿	素焼き	口径 (11.0) cm 器高 1.7 cm	手捏ね成形 外面指頭圧痕 内面ナデ	在地 40% 口縁煤付着
	第97図-36	焙烙	素焼き	口径 (26.0) cm	底部外型成形 内外面口縁部から体部ナデ	10% 内面底部と外面煤けている
	第97図-37	擂鉢	陶器		クシ目一単位12本 内外面に塗り土を施す	丹波 1% 18c前半
	第97図-38	擂鉢	陶器	口径 20.5 cm 器高 8.9 cm 底径 10.6 cm	クシ目一単位12本 見込みのクシ目一単位8本か	60%
	第97図-39	蓋	陶器	口径 7.5 cm	外面吹刷毛目 受部にアルミナ砂塗布 返り部露胎	唐津 40% つまみ欠損
	第97図-40 図版59-40	皿	陶器	口径 (19.0) cm 器高 5.0 cm 高台径 9.2 cm	外面下半に鉄釉、中位から内面にかけて灰釉 内面口縁部打ち刷毛目を連続して施す 見込み蛇の目釉剥ぎ 高台内及び量付露胎	唐津 30%

表46 第207次調査遺物観察表(2)

遺構名	番号	器種	材質	法量	文様・技法の特徴	備考 産地・残存率・年代
SK23	第97図-41	皿	陶器	口径 (11.6) cm 器高 3.6 cm 高台径 (4.2) cm	灰釉 見込み蛇の目釉剥ぎ 外面下半部露胎	唐津 25%
	第97図-42	紅皿	白磁	口径 (4.6) cm 器高 2.1 cm 高台径 2.0 cm	型押し成形 外面体部から底部露胎	肥前 20% 細かい貫入 18c前半
	第97図-43	染付碗	白磁	高台径 4.6 cm	外面文様有り 見込み蛇の目釉剥ぎ アルミナ 砂塗布 高台量付露胎、離れ砂付着	肥前 30% 貫入 18c後半
	第97図-44	碗	白磁	口径 (10.0) cm 器高 4.2 cm 高台径 (3.5) cm	高台量付露胎	肥前 30% 細かい貫入

表47 第207次調査遺物観察表(3)

報告書抄録

ふりがな	いたみしまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	伊丹市埋蔵文化財調査報告書 第25集							
副書名	震災復旧・復興事業に伴う発掘調査			編著者名		小長谷正治		
巻次				編集機関		伊丹市教育委員会		
シリーズ名	伊丹市埋蔵文化財調査報告書			所在地		兵庫県伊丹市千僧1丁目1番地		
シリーズ番号	第25集			発行年月日		2002年3月		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ありおかじょうあと 有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第152次調査	いたみし 伊丹市 伊丹3丁目553他	28207	61	34° 46' 35"	135° 25' 20"	19950703～ 19950908	265㎡	公衆浴場建設
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第169次調査	みやまへ 宮ノ前1丁目84-3	28207	61	34° 46' 46"	135° 25' 02"	19960829～ 19961023	371㎡	共同住宅建設
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第171次調査	伊丹6丁目765	28207	61	34° 46' 15"	135° 25' 24"	19960507～ 19960712	423㎡	共同住宅建設
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第173次調査	ちゅうおう 中央2丁目428-4	28207	61	34° 46' 41"	135° 25' 04"	19960327～ 19960330	16㎡	住宅建設
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第176次調査	中央2丁目425-3	28207	61	34° 46' 40"	135° 25' 06"	19960513～ 19960531	115㎡	共同住宅建設
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第181次調査	宮ノ前3丁目他	28207	61	34° 46' 49"	135° 25' 05"	19960725～ 19960827	190㎡	共同住宅建設
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第184次調査	宮ノ前2丁目169-3他	28207	61	34° 46' 46"	135° 25' 09"	19970120～ 19970319	350㎡	共同住宅建設
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第186次調査	宮ノ前1丁目85-1他	28207	61	34° 46' 46"	135° 25' 03"	19961203～ 19961220	57㎡	個人住宅建設
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第189次調査	伊丹3丁目609-9	28207	61	34° 46' 32"	135° 25' 27"	19970313～ 19970331	30㎡	共同住宅建設
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第194次調査	中央2丁目444-2他	28207	61	34° 46' 40"	135° 25' 01"	19970618～ 19970725	100㎡	店舗付共同 住宅建設
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第195次調査	伊丹4丁目724-14	28207	61	34° 46' 24"	135° 25' 18"	19970624～ 19970630	25㎡	店舗付住宅建設
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第197次調査	宮ノ前1丁目154-1	28207	61	34° 46' 47"	135° 25' 05"	19970829～ 19971105	420㎡	個人住宅建設
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第206次調査	きたほんまち 北本町1丁目23他	28207	61	34° 46' 49"	135° 25' 14"	19980430～ 19980618	150㎡	共同住宅建設
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第207次調査	伊丹2丁目442-1	28207	61	34° 46' 40"	135° 25' 02"	19980430～ 19980530	62㎡	店舗付住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第152次調査	町家・酒蔵	中世・近世		男柱遺構 溝 井戸 土坑		陶磁器等 24箱		
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第169次調査	町家	近世		礎石建物 竈 井戸 堅穴状遺構 ピット 土坑		陶磁器等 28箱		
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第171次調査	〃	近世		溝 井戸 埋桶 ピット 土坑		陶磁器等 10箱		
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第173次調査	〃	近世		井戸 埋桶 焼土土坑 胞衣壺 土坑		陶磁器等 1箱		
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第176次調査	〃	中世・近世		井戸 ピット 土坑		陶磁器等 9箱		
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第181次調査	〃	中世・近世		堀 溝 井戸 埋桶 焼土土坑 土坑		陶磁器等 12箱		
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第184次調査	〃	奈良・近世		堅穴住居 掘立柱建物 ピット 防空壕 土坑		陶磁器等 63箱		
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第186次調査	〃	近世		埋桶 水琴窟 ピット 土坑		陶磁器等 2箱		
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第189次調査	〃	中世～近世		溝 ピット 土坑		陶磁器等 1箱		
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第194次調査	〃	近世		溝 埋桶 水琴窟 掘立柱建物 ピット 土坑		陶磁器等 9箱		
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第195次調査	〃	近世		土坑		陶磁器等 1箱		
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第197次調査	〃	中世・近世		竈 井戸 埋桶 水琴窟 礎石建物 ピット 土坑		陶磁器等 9箱		
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第206次調査	〃	弥生～近世		溝 井戸 掘立柱建物 ピット 土坑		陶磁器等 6箱		
有岡城跡・伊丹郷町遺跡 第207次調査	〃	近世		溝 埋桶 水琴窟 ピット 土坑		陶磁器等 4箱		

図版1



1 第1遺構面全景（南より）

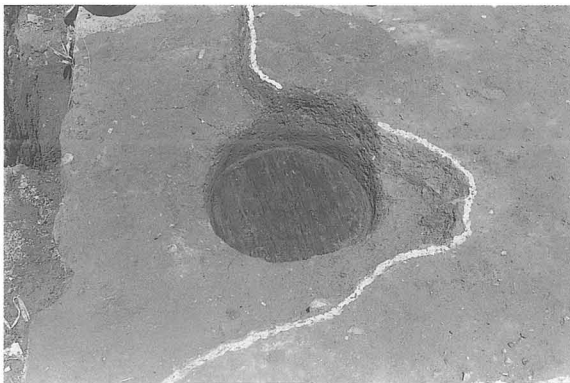


2 第2遺構面全景（南より）

図版2



3 SK127 (南より)



4 SK53



5 SK73



6 SK139

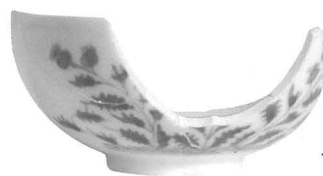


7 SK164・165・166

図版3



7



16



10



17



11



18



12



19



13



25



26

出土遺物 (1)

SK33 (7・10~13)

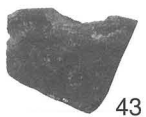
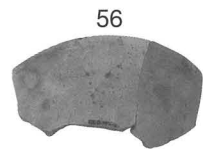
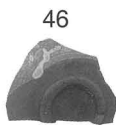
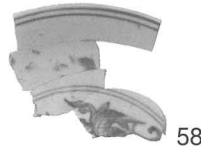
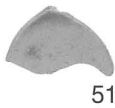
SK53 (16・17)

SK71 (18)

SK73 (19)

SK88 (25・26)

図版4



出土遺物 (2)

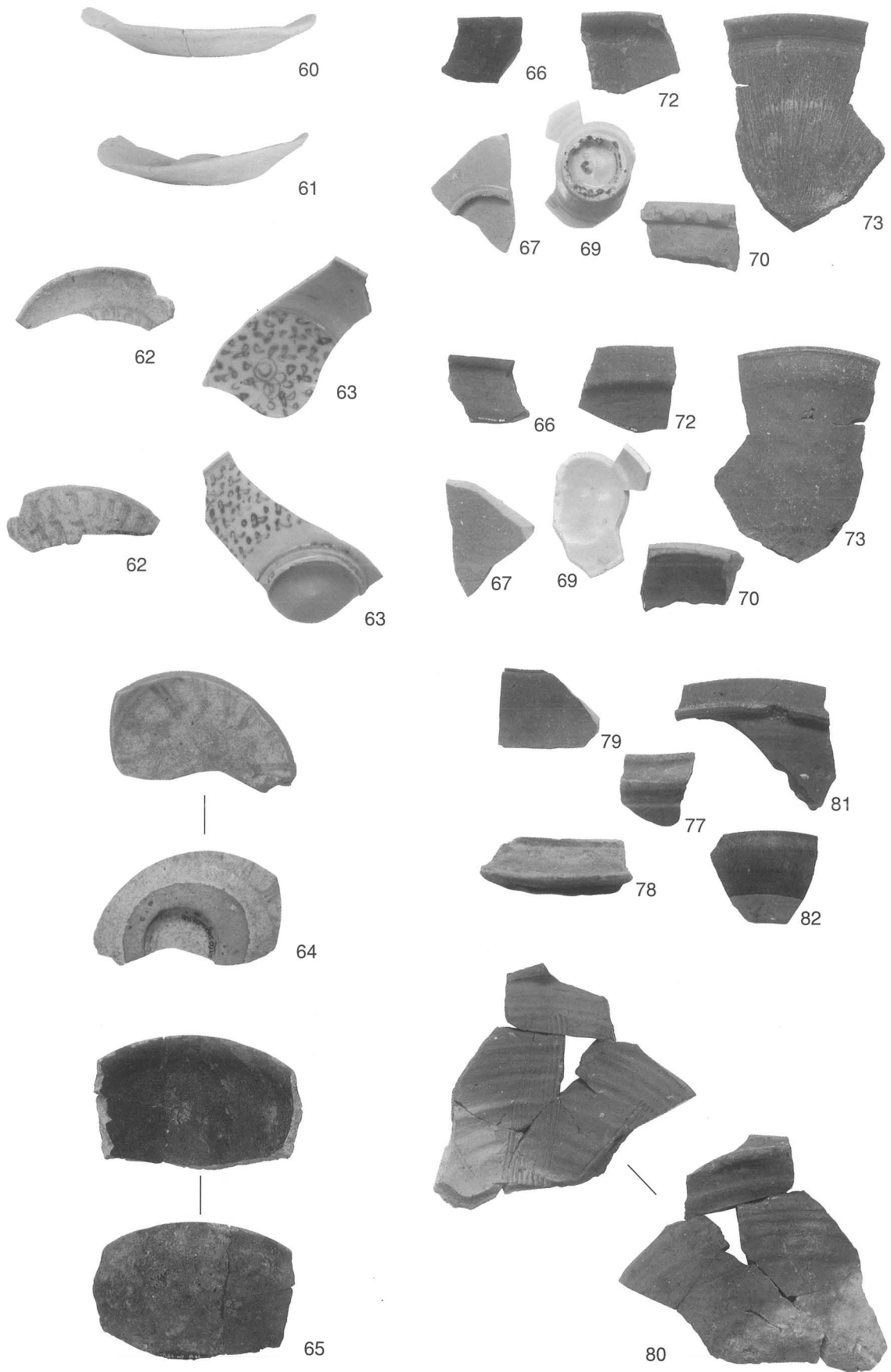
SK88 (27~29)
SE140 (54~59)

SX179 (30・32)

SD176 (33・36)

SX178 (42・43・45・46・48・51・52)

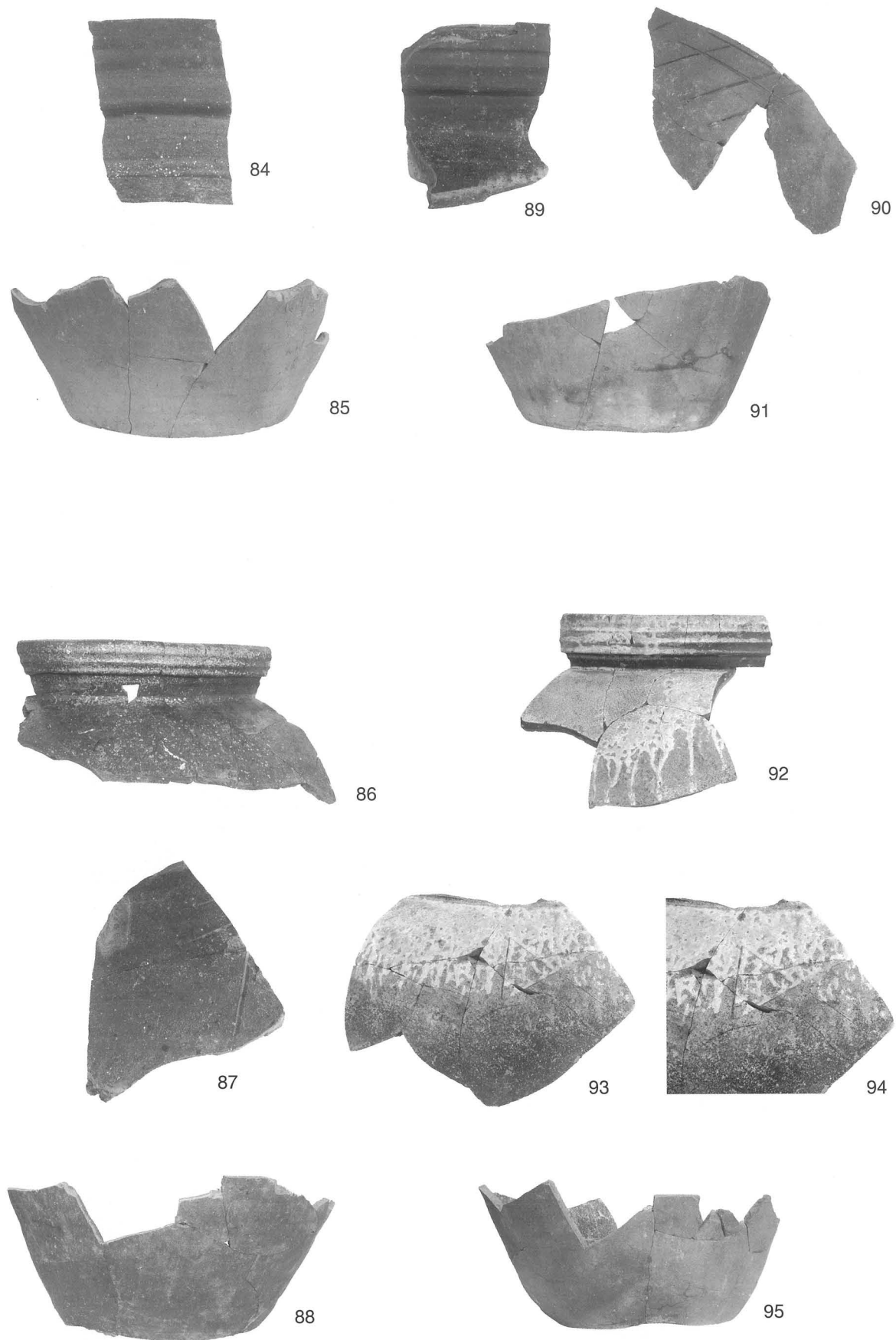
図版5



出土遺物 (3)

SK160 (60・61) SK164 (62・63) SK164 (62・63) SK165 (64) SK166 (65)
 SK183 (66・67・69・70・72・73) 包含層 (77・78・80~82)

図版6



出土遺物 (4)

SK139 (84・85)

SK164 (86~88)

SK165 (89~91)

SK166 (92~95)

図版7

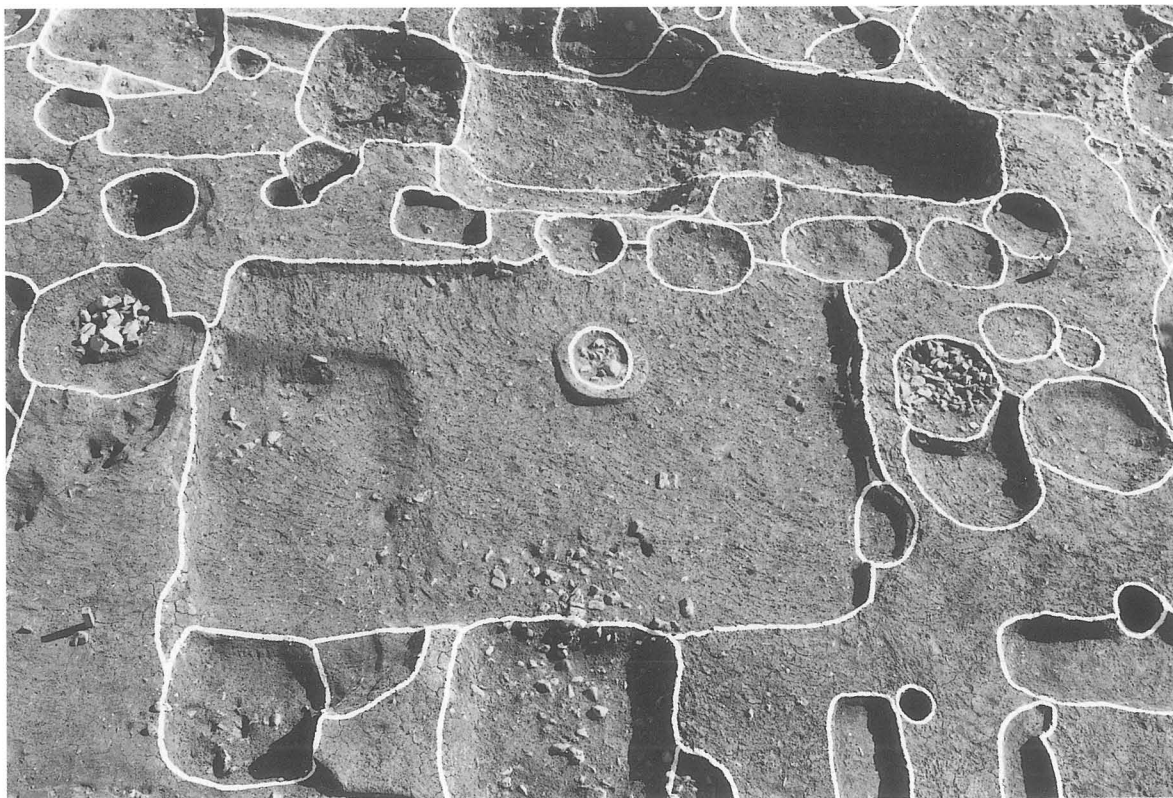


1 調査区東側全景（北より）

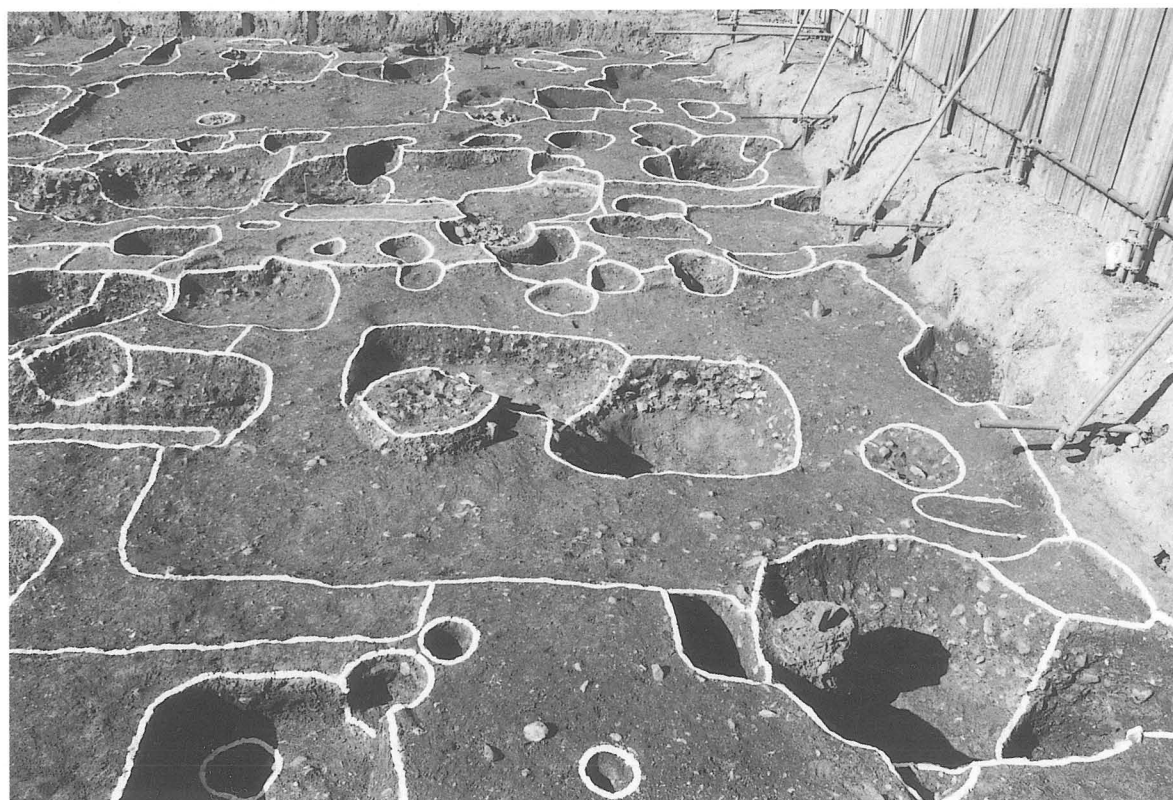


2 調査区西側（東より）

図版8



3 竪穴状遺構 1 (SK62・63) (南より)

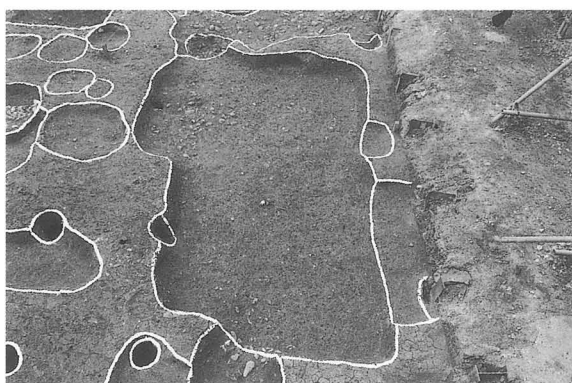


4 竪穴状遺構 3 (SK81) (北より)

図版9



5 竈2・3・4 (北より)



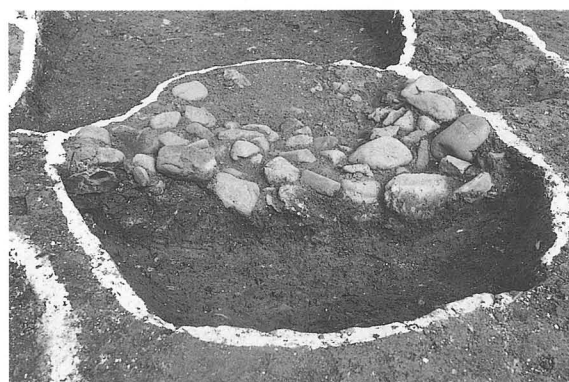
6 竈穴状遺構2 (SK176・177)



7 SK84



8 P73



9 P125

図版10



5



13



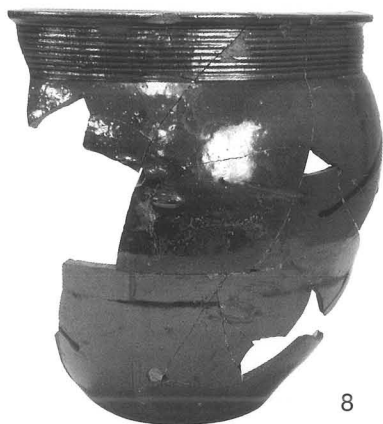
14



15



16



8



18



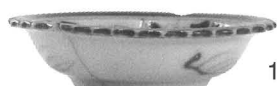
20



9



21



10



11



24

出土遺物 (1)

礎石建物 (5) SE 6 (8~11・13~15) 竈 3 (16・18・20・21) 竈 4 (24)

図版11



25



31



26



34



27



36



28



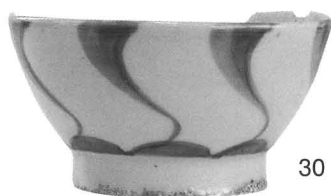
37



29



38



30



39

出土遺物 (2)

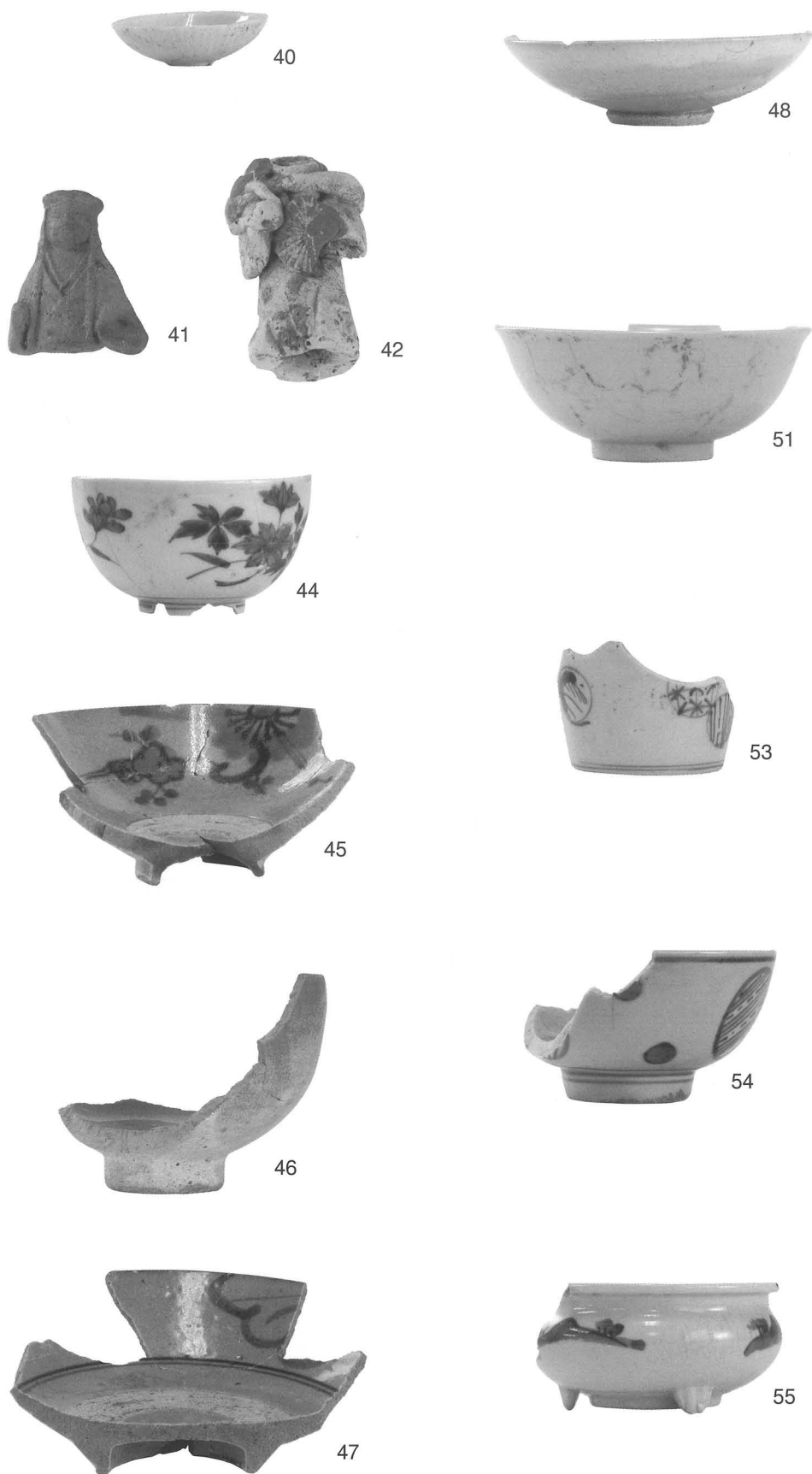
竈 4 (25・26)

SK84 (27~31)

SK43 (34・36~38)

竪穴状遺構 1 (39)

図版12



出土遺構 (3)

豎穴状遺構 1 (40)

豎穴状遺構 2 (41・42・44・45)

豎穴状遺構 3 (46~48)

SK26 (51・53~55)

図版13



1 調査区全景（東より）



2 石組溝・SK40（埋桶）・SK42（埋桶）・SK85

図版14



3 SK42 (埋桶)



4 石組溝



5 SK7

図版15



3



14



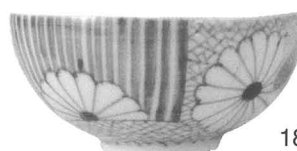
5



17



10



18



12



22



13



23

出土遺物 (1)

石組溝 (3) SK7 (5・10・12~14・17・18・22) SK11 (23)

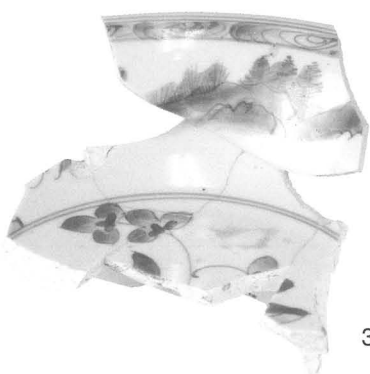
図版16



29



45



31



46



34



48



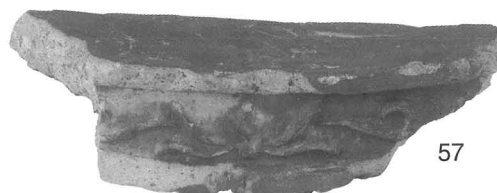
43



54



44



57

出土遺物 (2)

SK42 (29・31)

SK79 (34)

SD100 (43~46)

SE132 (48)

SK133 (54・57)

図版17



1 調査区全景（北より）



2 SE 1



3 胞衣壺

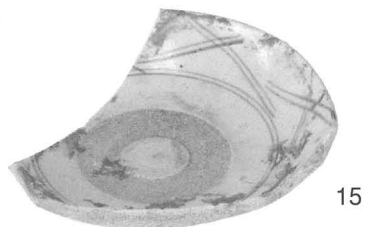
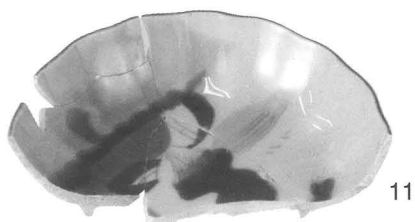
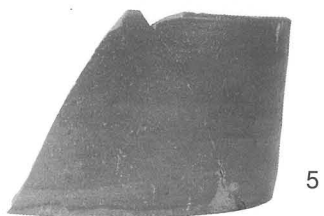


4 埋桶1・2（SK11・SK12）



5 焼土土坑

図版18



出土遺物

SE 1 (2) 焼土土坑 (5~7) SK 9 (11) SK14 (15)

図版19



1 調査区南側全景（北より）



2 調査区北側全景（東より）

図版20



3 SK3全景（北より）



4 SK4遺物出土状況



5 SK4



6 SE1・2



7 SK35

図版21



出土遺構 (1)

SK 2 (1・3・7)

SK 3 (12)

SK 7 (16)

SK10 (22~24・27・28)

SK13 (33・34)

図版22



37

38



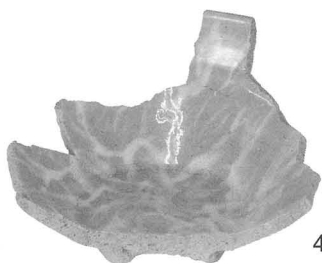
47



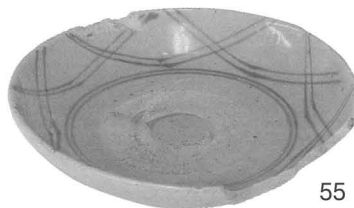
44



48



45



55



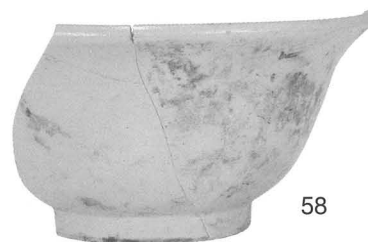
56



53



57



58

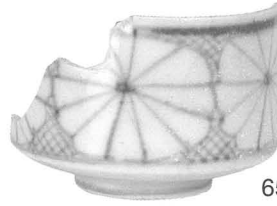
出土遺物 (2)

SK28 (37・38・44・45・47・48) SK35 (53・55~58)

図版23



60



65



61



66



62



68

出土遺物 (3)

SK35 (60~62) SK41 (65・66・68)

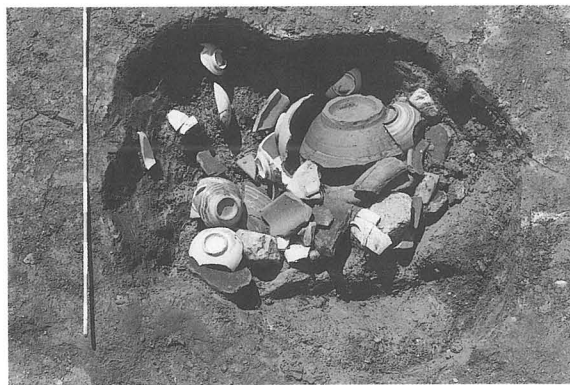
図版24



1 調査区全景（南より）



2 SK3（埋桶）断面



3 SK6（埋桶）遺物出土状況



4 SK13（井戸）

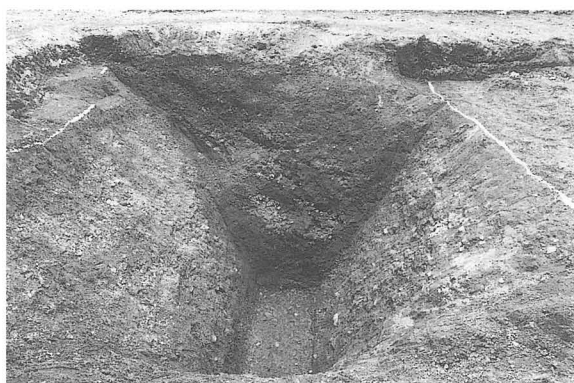


5 SK18（便所）

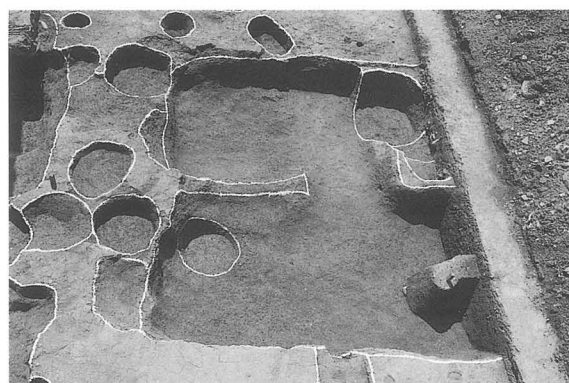
図版25



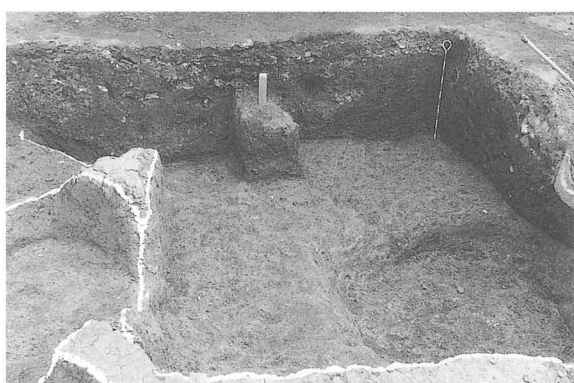
6 堀全景（北より）



7 堀西壁断面



8 SK4（焼土土坑）全景（東より）



9 SK5（焼土土坑）全景（西より）



10 SK10（焼土土坑）全景（東より）

図版26



1



9



2



11



3



17



5



23



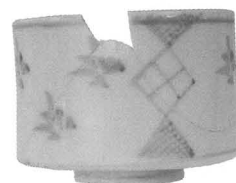
7



24



8

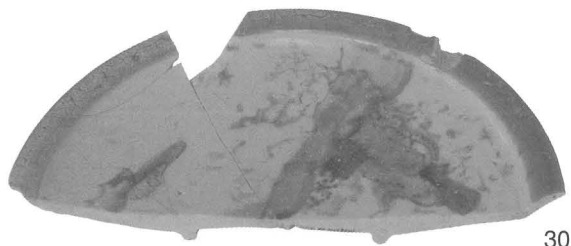


25

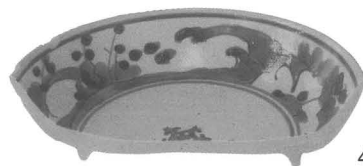
出土遺物 (1)

SD 1 (1~3) SK 7 (5) SK 8 (7~9) SK 1 (11・17) SK 2 (23~25)

図版27



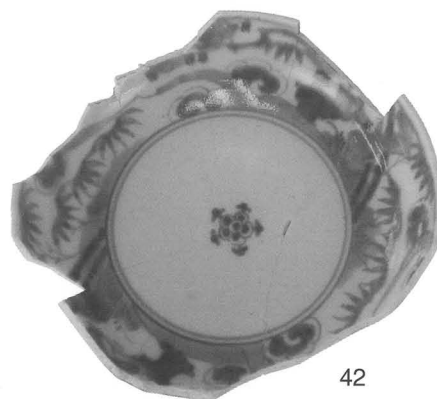
30



41



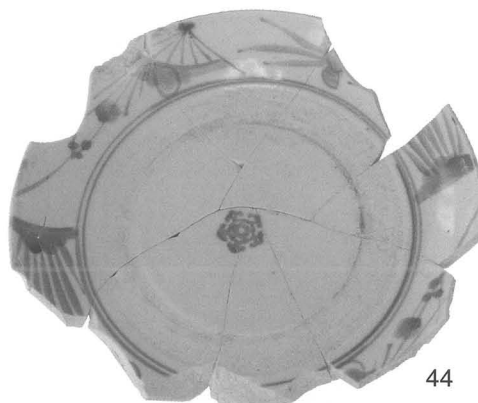
31



42



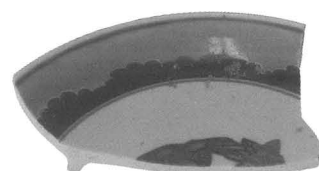
32



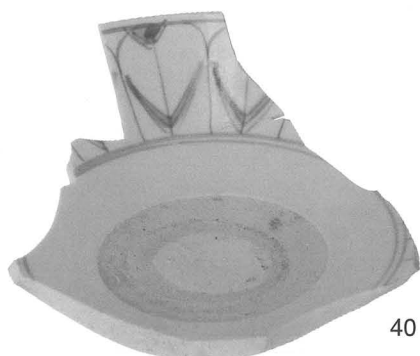
44



34



45



40

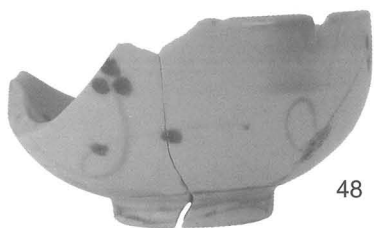


47

出土遺物 (2)

SK 3 (30) SK 4 (31・32・34・40~42・44・45・47)

図版28



出土遺物 (3)

SK 4 (48・49・52・53) SK 6 (61・64・65・67・68)

図版29



72



86



75



87



76



88



89



77



1



82



85



99

出土遺物 (4)

SK10 (72・75・76)

SK13 (77・82・85)

SK15 (86~89・99)

図版30



101



108



103



109



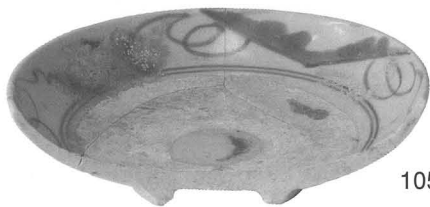
110



104



112



105



115



107



116

出土遺物 (5)

SK15 (101・103~105・107~110・112・115・116)

図版31



118



128



119



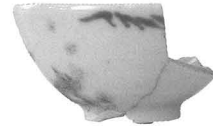
129



130



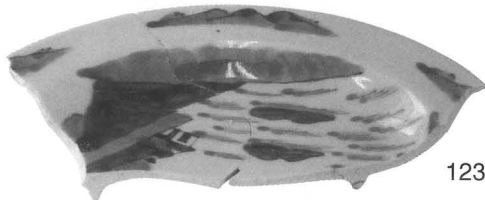
122



132



138



123



139



124



140

出土遺物 (6)

SK18 (118・119・122～124・128)

SK21 (129・130・132)

SK22 (138～140)

図版32



1 調査区東側全景（西より）



2 調査区西側全景（東より）

図版33



3 防空壕



4 SK41遺物出土状況



5 SK64遺物出土状況



6 SK115



7 SK160

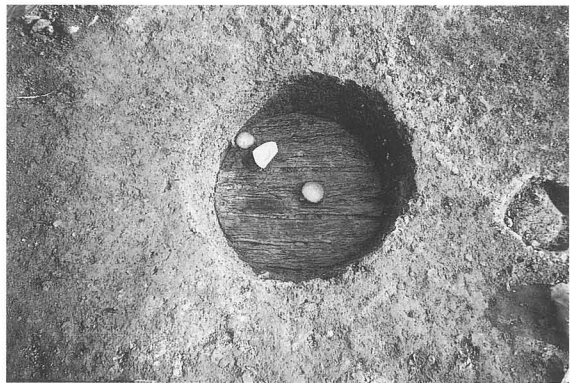
図版34



8 SK53桶底残存状況



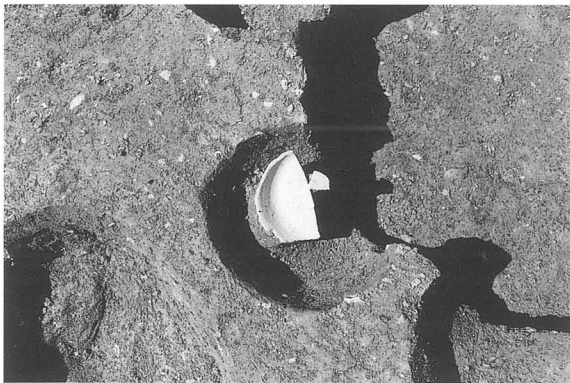
9 SK73遺物出土状況



10 SK113桶底残存状況



11 SE 1



12 P16遺物出土状況



13 P21遺物出土状況



14 P26



15 竪穴住居跡（北より）

図版35



3



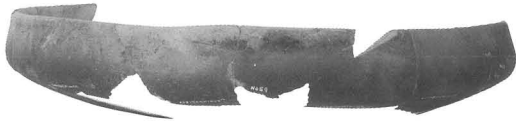
13



4



15



5



7



20



11



21



12



24

出土遺物 (1)

SK1 (3~5・7・11・~13・15) SK15 (20・21・24)

図版36



出土遺物 (2)

SK41 (27・33~35) SK62 (36~38・45) SK64 (48~50)

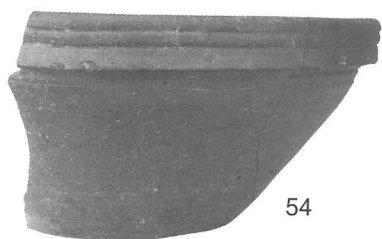
図版37



53



59



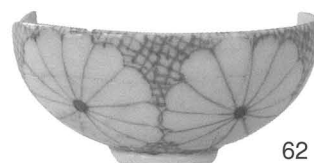
54



61



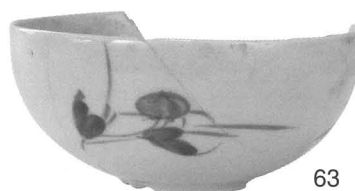
55



62



57



63



58



64

出土遺物 (3)

SK64 (53~55・57~59・61~64)

図版38



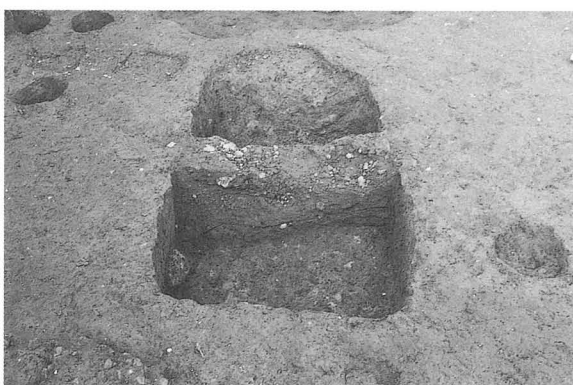
出土遺物 (4)

SK115 (69) SK160 (78・79・84・85) 竪穴住居跡 (89~91) P16 (92) 7層 (Ⅲ)(93)
P21 (94・95) P26 (96・97) SK122 (98)

図版39



1 調査区全景（北より）



2 SK 2 半掘状況



3 SK 3 半掘状況

図版40



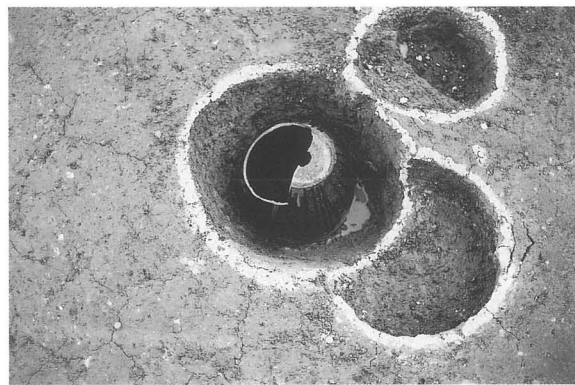
4 SK5・6



5 SK8



6 埋桶 1



7 水琴窟 1 出土状況



8 水琴窟 2 出土状況

図版41



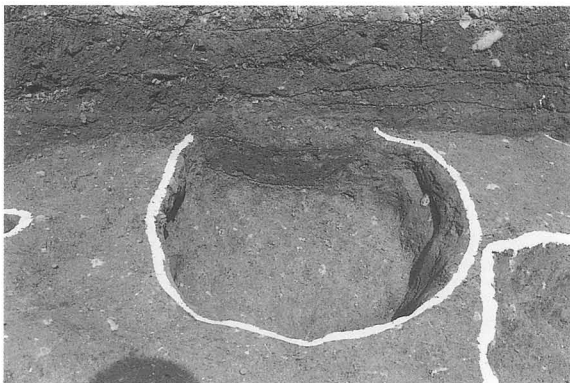
出土遺物

埋桶 1 (1・2) 水琴窟 1 (32) 水琴窟 2 (3・33) SK 4 (10) SK 6 (13)
SK 8 (16・18・20) SK 11 (26)

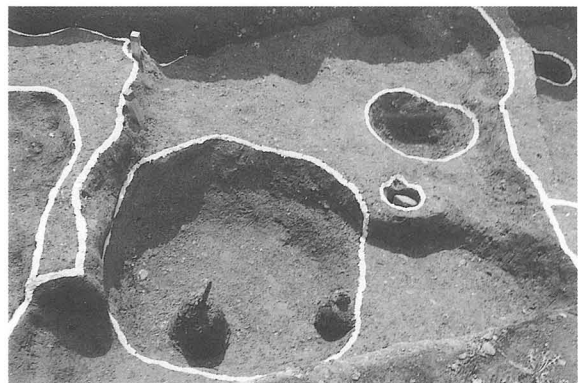
図版42



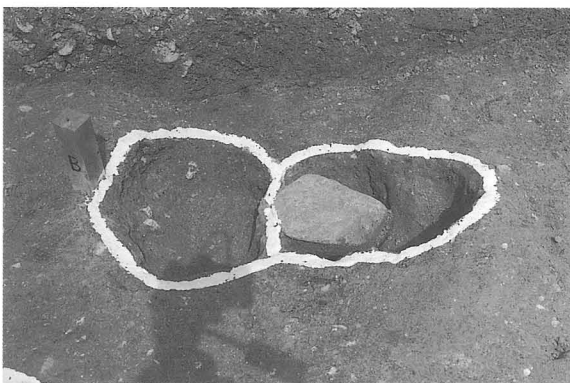
1 調査区全景（西より）



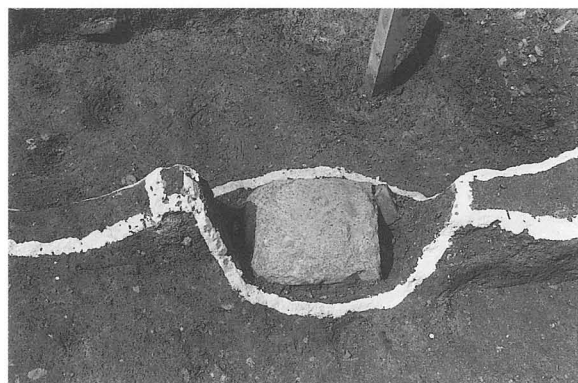
2 SK5



3 SD1・SK8



4 P3・4



5 P13

図版43



1 調査区西側全景（北より）



2 調査区東側全景（北より）

図版44



3 SK1 断面



4 SK2 断面



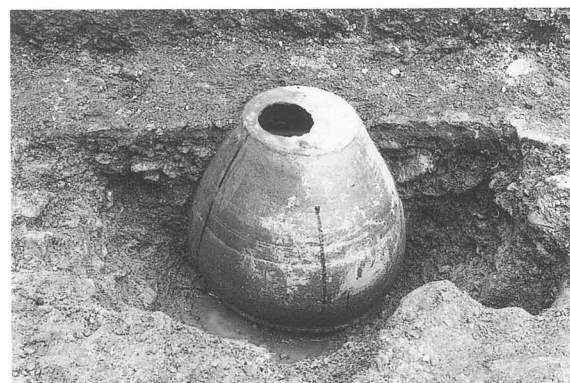
5 SK3



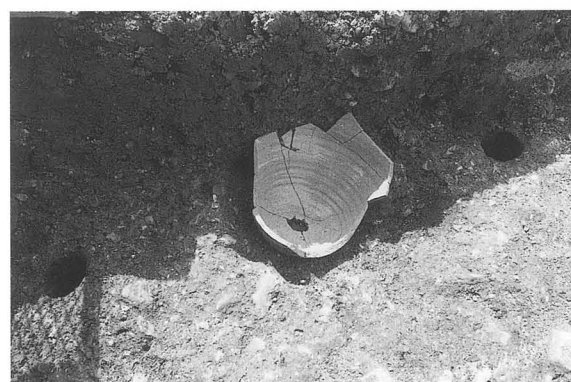
6 SK10・11断面



7 SK6 (埋桶) 桶底残存状況



8 SK7 (水琴窟) 出土状況



9 SK9 遺物出土状況



10 SE1 断面

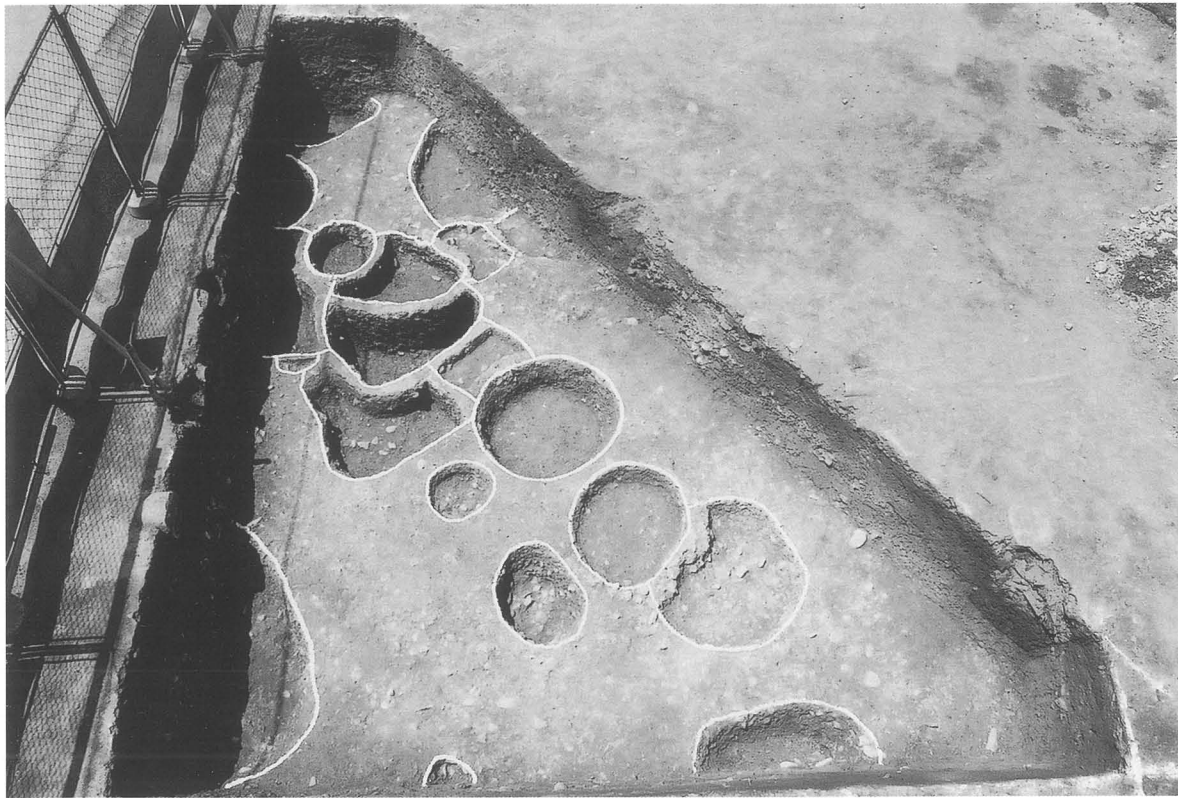
図版45



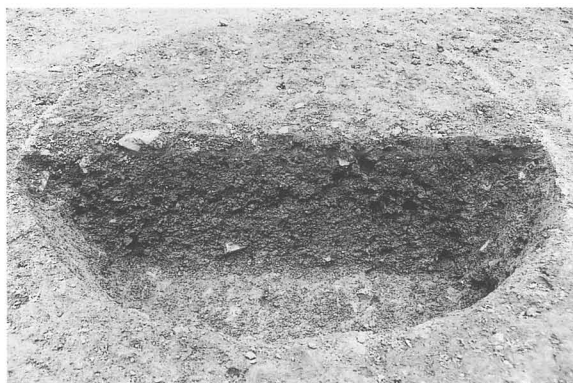
出土遺物

SK7 (2) SK1 (4) SK2 (8) SK3 (9・10) SK11 (27)

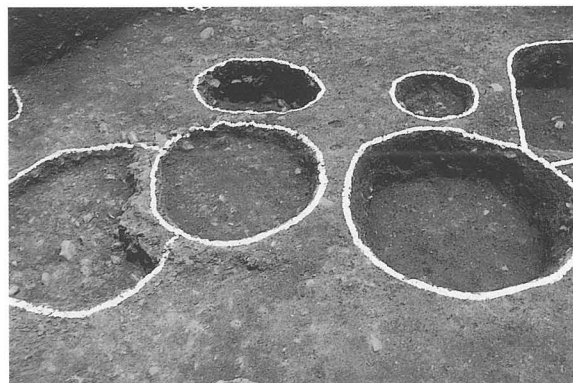
図版46



1 調査区全景（北より）



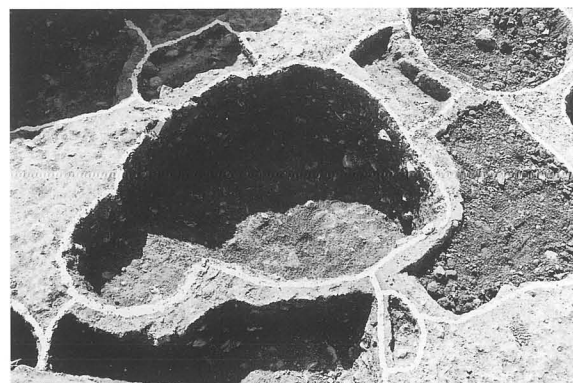
2 SK1 断面



3 SK1・2・3



4 SK10・11



5 SK11

図版47



1 調査区北側全景（南より）

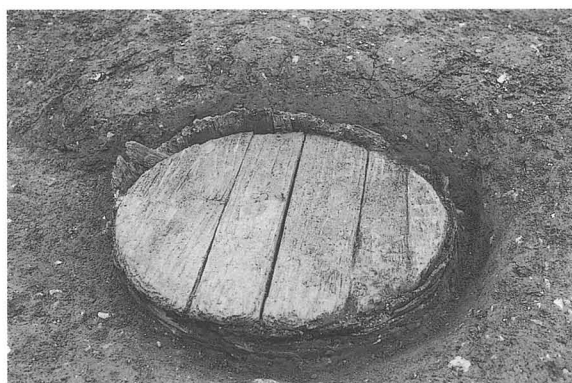


2 調査区南側全景（南より）

図版48



3 礎石建物跡（東から）



4 SK2（埋桶）桶底残存状況



5 SK3断面

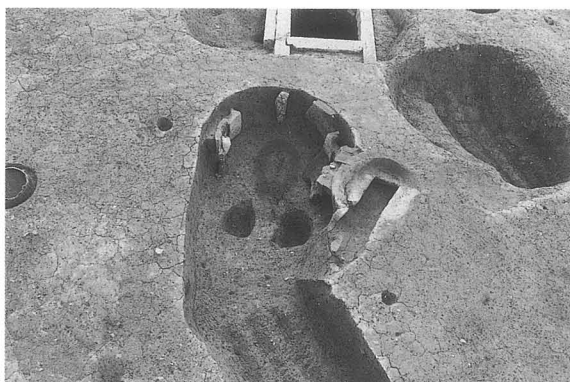


6 SK18断面

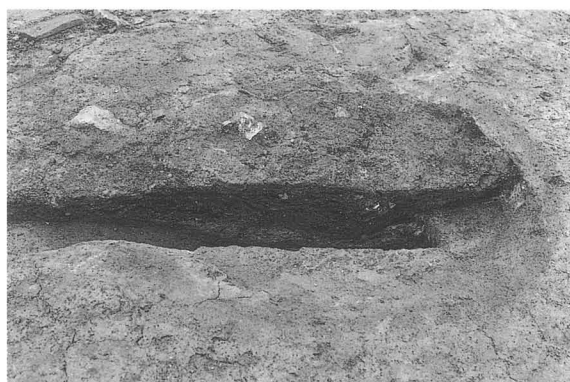


7 SK38遺物出土状況

図版49



8 SK34a・b (竈) 全景 (東より)



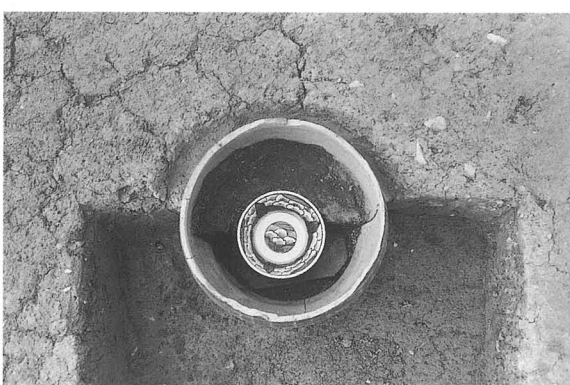
9 SK34a断面



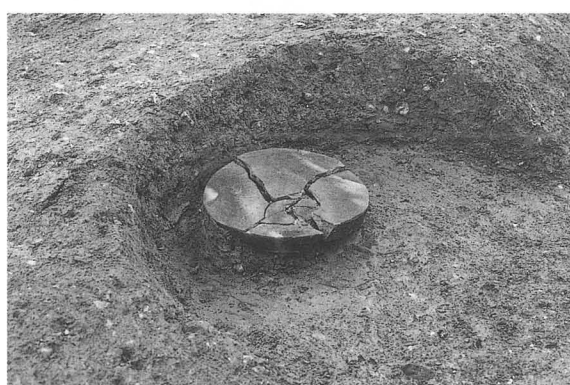
10 SK34b断面 (南より)



11 SK51断面



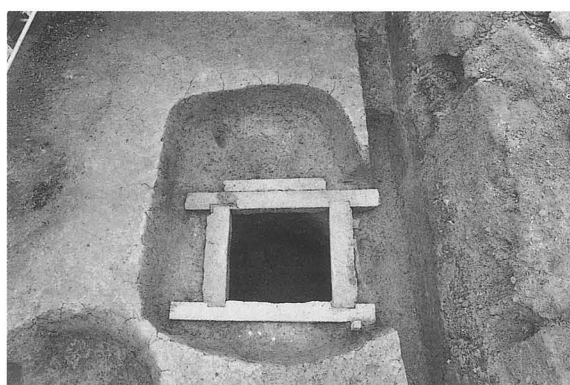
12 SK57 (水琴窟) 出土状況



13 SK61遺物出土状況



14 SK65根石検出状況



15 SE31

図版50



6



19



7



26



8



28



12



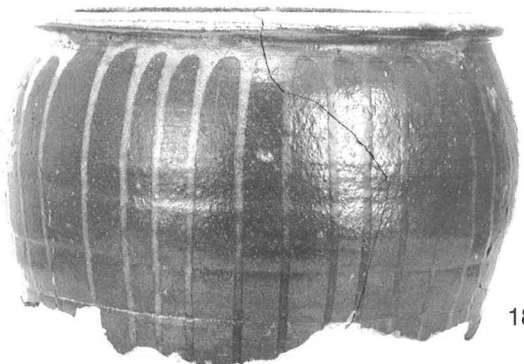
13



29



32



18



33

出土遺物 (1)

SE31 (6~8)

SE64 (12)

SK34 (13)

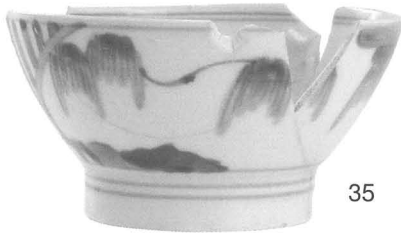
SK57 (18・19)

SK 1 (26・28・29・32・33)

図版51



34



35



36



37



43



44



46



47



52



58

出土遺物 (2)

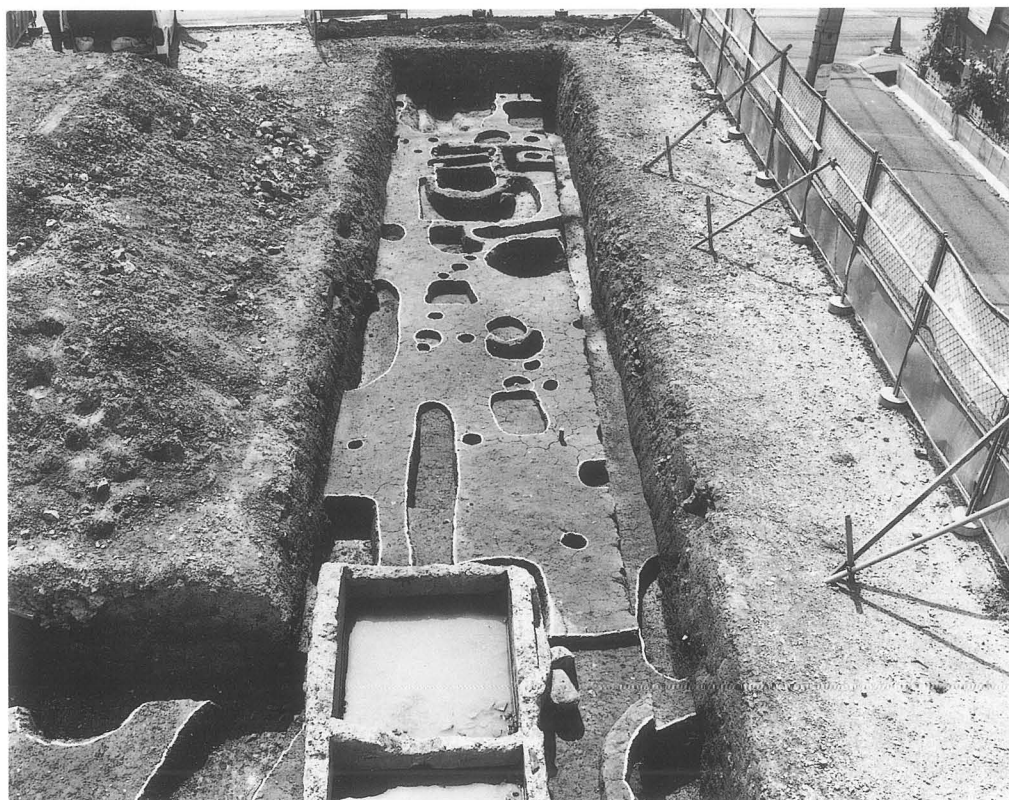
SK 1 (34~37)

SK18 (43・44・46・47)

SK38 (52)

SK61 (58)

図版52

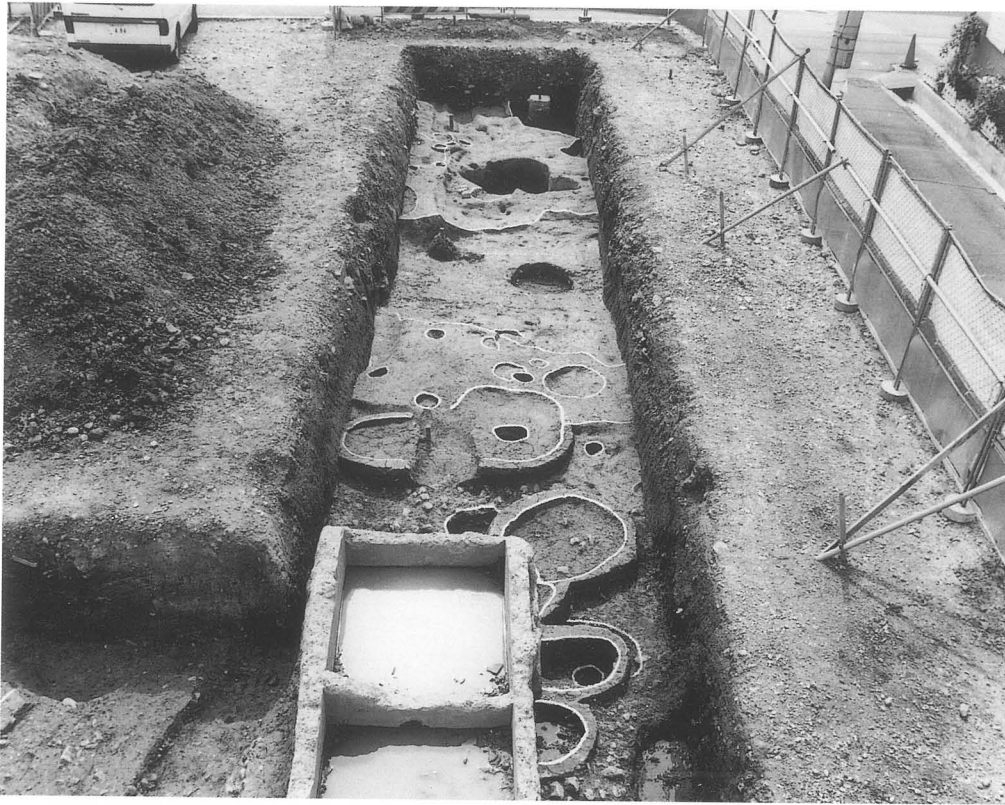


1 第1遺構面北側全景（東より）



2 第1遺構面東側全景（西より）

図版53

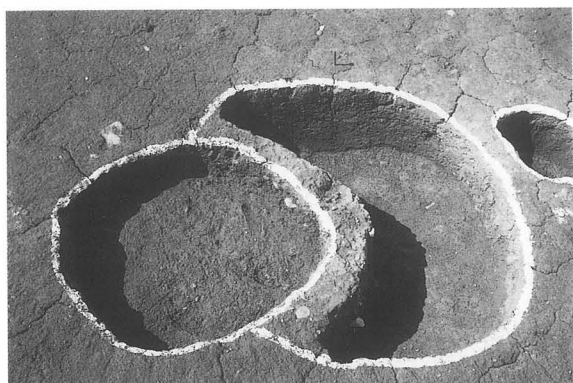


3 第2遺構面北側全景（東より）

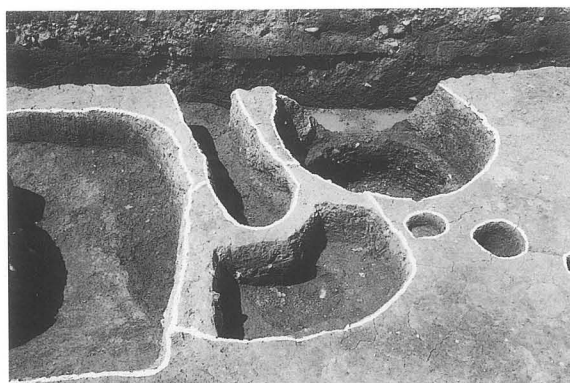


4 第2遺構面東側全景（西より）

図版54



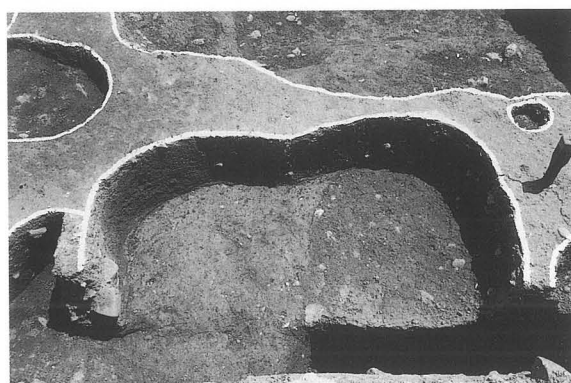
5 SK34・35



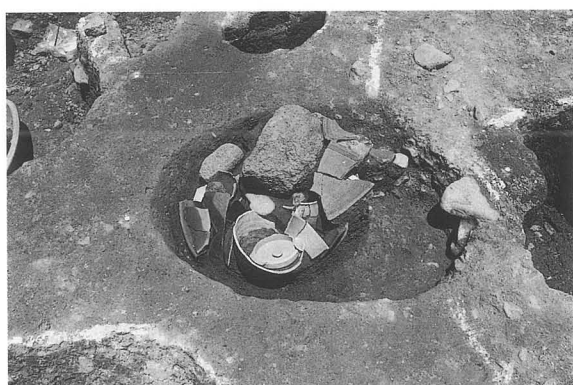
6 SK40



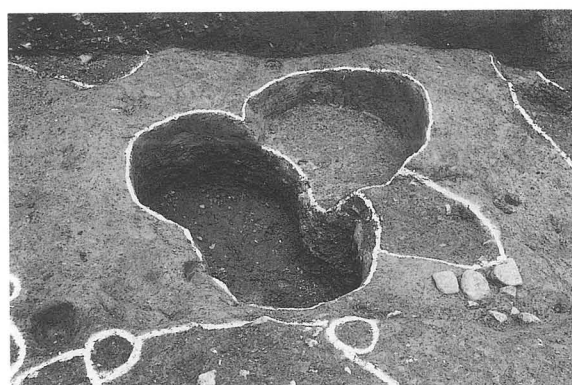
7 SK42



8 SK46



9 SK49遺物検出状況



10 SE 2

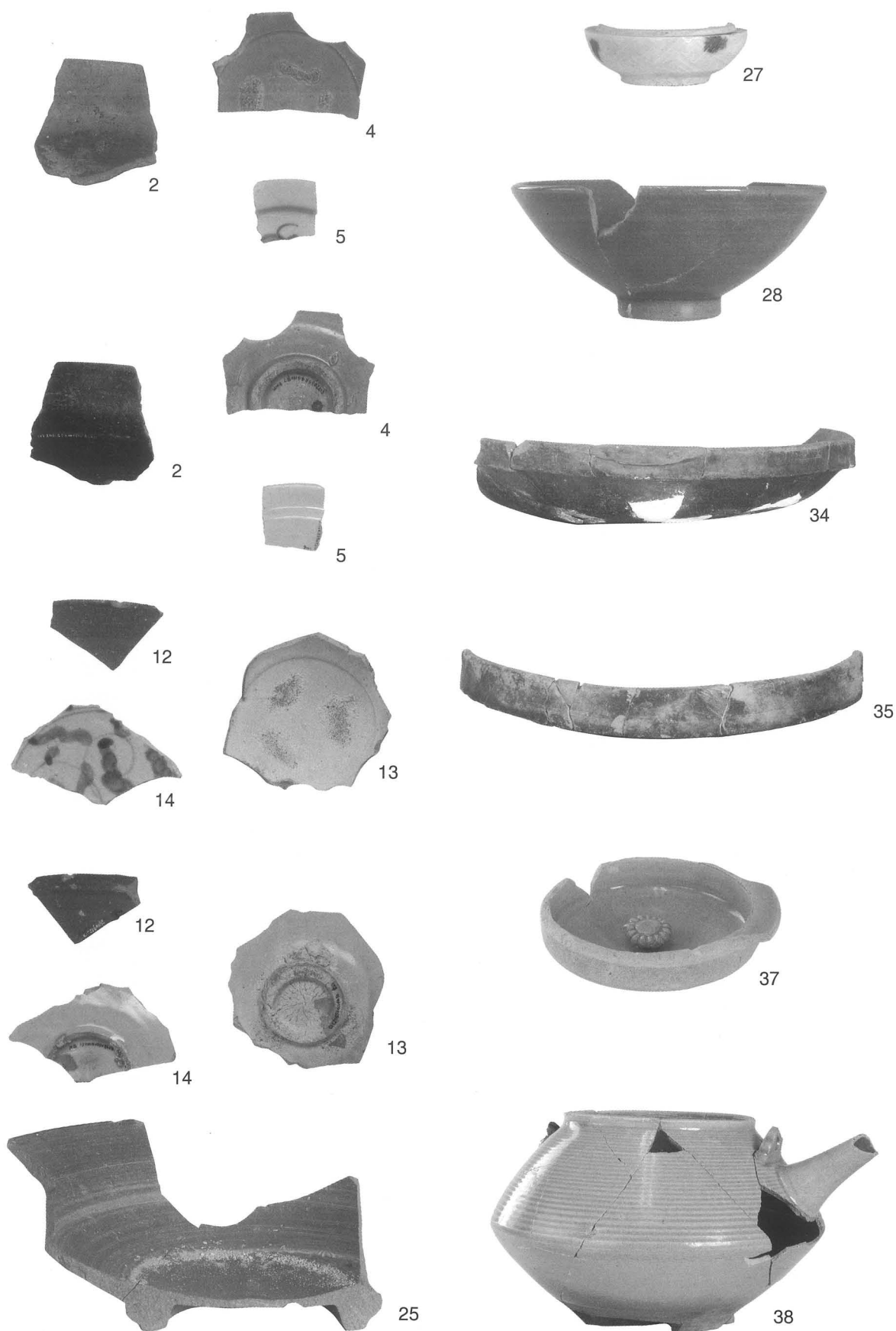


11 SK75



12 SK79断面

図版55



出土遺物 (1)

SE 2 (2・4・5) SK40 (12~14) SK43 (25・27・28) SK49 (34・35・37・38)

図版56



39



40



43



44



45



49



50



51



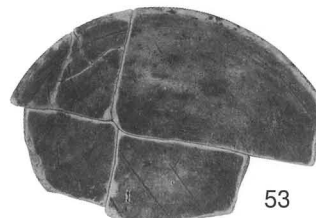
46



47



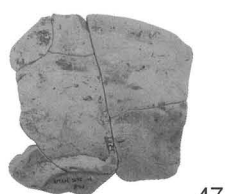
52



53



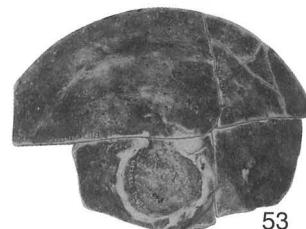
46



47



52



53

出土遺物 (2)

SK49 (39・40)

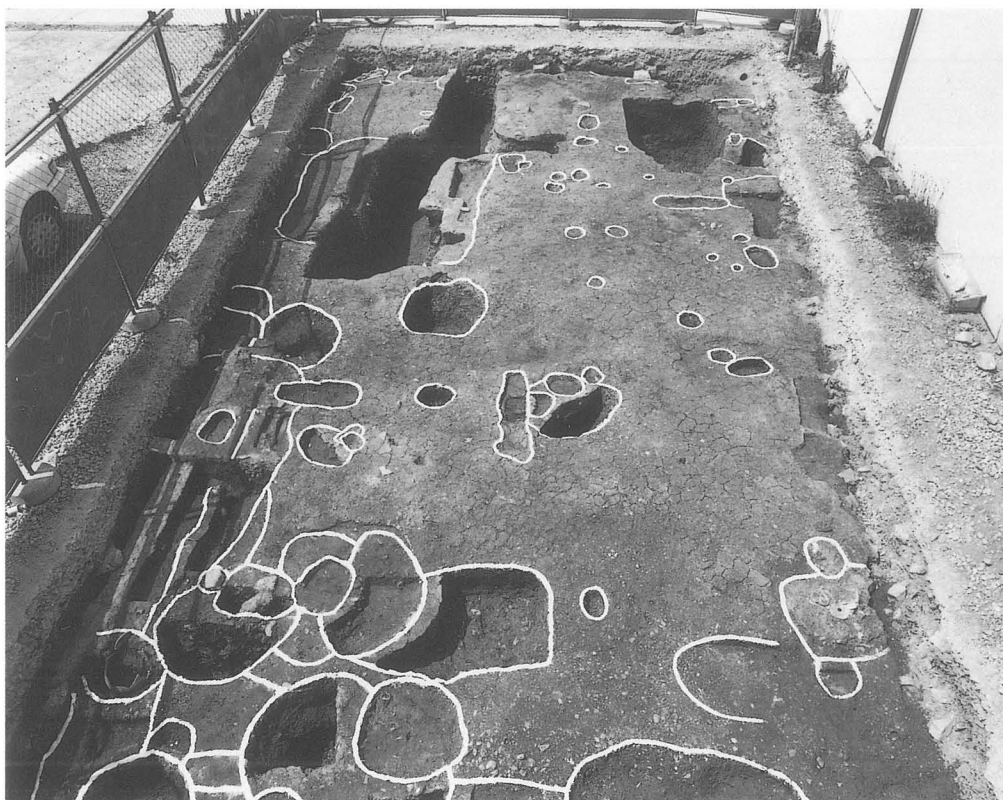
SD 4 (43~45)

SK75 (46・47)

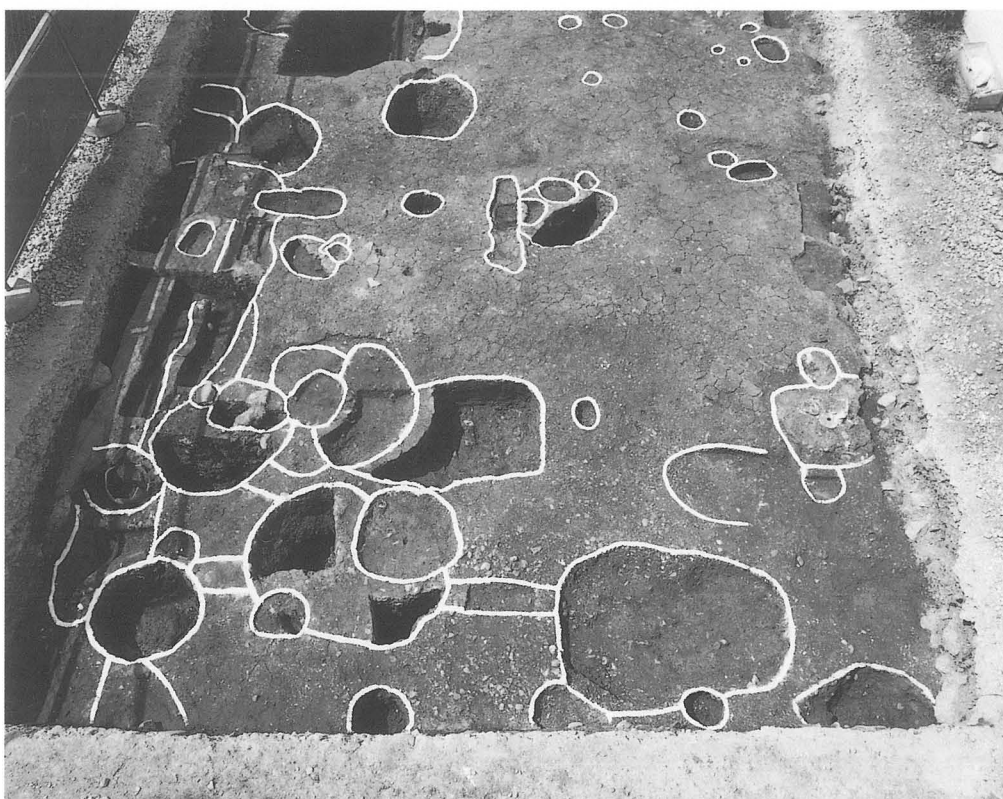
SK79 (49~51)

SX 3 (52・53)

図版57

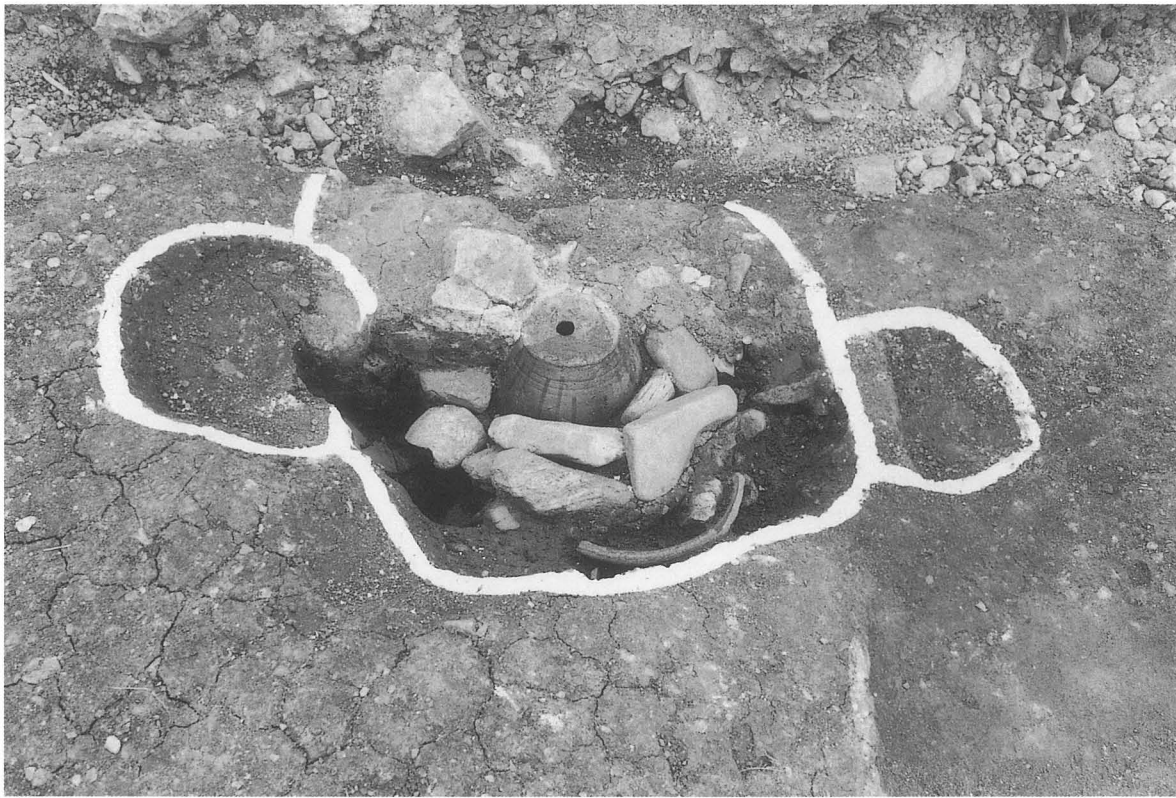


1 調査区北側全景（南より）

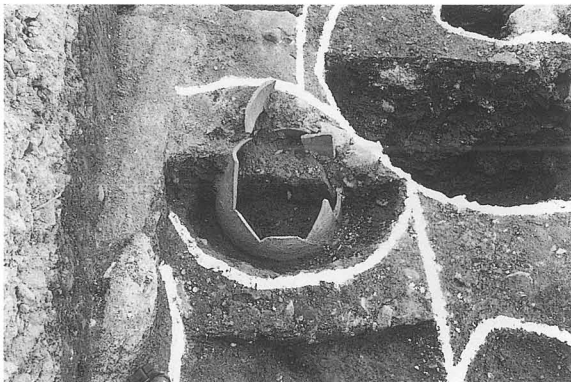


2 調査区南側全景（南より）

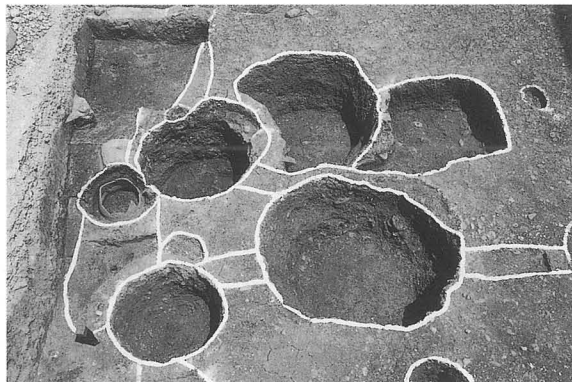
図版58



3 水琴窟 2 検出状況



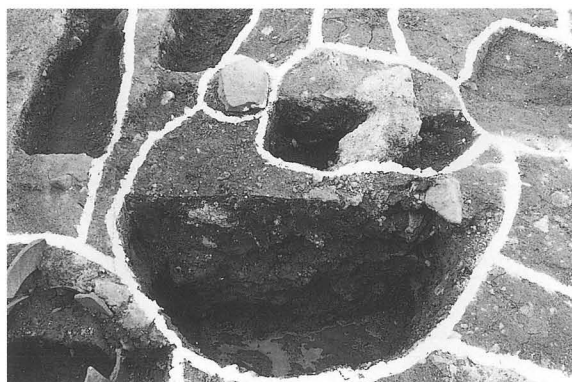
4 水琴窟 1 検出状況



5 SK17・23・32



6 SK1 (埋桶)



7 SK33 (埋桶)

図版59



出土遺物

SK1 (7・10・14・15)

SK33 (17・19)

水琴窟1 (20)

水琴窟2 (23・28)

SK2 (32)

SK23 (40)

伊丹市埋蔵文化財調査報告書 第25集

震災復旧・復興事業に伴う発掘調査

発行日 2002年3月

発行 伊丹市教育委員会
兵庫県伊丹市千僧1丁目1
TEL 0727-83-1234

印刷 関西成光株式会社

